

文部科学省

令和 7 年度国際バカロレアに関する国内推進体制の整備事業
国際バカロレアの教育効果等に関する調査研究業務【タイプ B】

令和 7（2025）年度成果報告書

国際バカロレア（IB）の教育効果等に関する調査研究チーム
研究代表者 藤田 晃之
（筑波大学人間系・教授）

※公開版

令和 7（2025）年度成果報告書

目次

第一部	3
1－1. 業務の概要	4
1) 業務の目的	4
2) 業務の内容	4
3) 研究組織の概要	4
1－2. 進捗状況	6
1) 打ち合わせの開催	6
2) 発信活動	6
3) 専門家会議の開催	8
4) 【タイプ A】 IB 教育推進コンソーシアム事務局との連携	12
第二部	13
2－1. 生徒調査	14
1) 調査の概要	14
2) 進捗報告	14
3) 今後の見通し	56
2－2. 教員調査	57
1) PYP 訪問校調査	57
◆ インタビュー結果のまとめ [管理職・PYP コーディネーター編]	62
◆ インタビュー結果のまとめ [教員編]	89
2) PYP 教員の学び合い調査	139
3) 異動した IB 教員に関する調査	160
4) EMI 調査の報告	163
2－3. 大学調査	166
1) 調査の概要	166
2) 進捗報告	169
3) 修了生インタビュープロジェクト	188
4) 今後の見通し	196
5) 筑波大学における Faculty Development (FD) 報告	198
2－4. 基礎調査（学校調査）	201
1) 調査の概要	201
2) 進捗報告	201
3) 今後の見通し	201
2－5. 基礎調査（大学調査）	202
1) 調査の概要	202
巻末資料	203

第一部

1-1. 業務の概要

1) 業務の目的

本業務の目的は、日本における国際バカロレア（以下、IB）の教育効果等に関する調査研究を行うことである。IB認定校（以下、IB校）における実態を把握しつつ、その教育効果等を分析し、調査結果を広く共有することで、日本におけるIBのさらなる導入や活用に資することを目指す。

2) 業務の内容

本研究では、「(1) 生徒調査」、「(2) 教員調査」、「(3) 大学調査」という3つの調査枠組みを設定し、それぞれの枠組みにおいて①及び②の調査内容を実施することを計画した。

(1) IB校及び生徒を対象とした調査（生徒調査）

- ①基礎調査（学校調査）…日本のIB校（一条校）に対する実態調査を行う。
- ②在学生調査…IB校在学中の生徒の教育効果を明らかにする。

(2) 教員を対象とした調査（教員調査）

- ①教員調査…IB校における教員の学びを明らかにする。
 - ・PYP訪問校調査　・PYP教員の協働的な学び　・異動したIB教員の調査
- ②英語開講（English-Medium Instruction: EMI）科目調査
…IB校において英語で開講されている科目の授業実践の特徴を明らかにする。

(3) 大学及び修了生を対象とした調査（大学調査）

- ①大学調査…日本の大学でのIBを活用した入試に関する実態調査を行う。
⇒質問紙調査による部分について、「基礎調査（大学調査）」として位置づける。
- ②修了生インタビュー調査…IB校卒業後の大学での学びやその後の進路を明らかにする。

本報告書では、生徒調査、教員調査、大学調査の進捗について述べたのち、「基礎調査（学校調査）」、「基礎調査（大学調査）」について報告を行う。

3) 研究組織の概要

本研究は、「生徒調査」を担う生徒調査班、「教員調査」を担う教員調査班、「大学調査」を担う大学調査班からなる。これら3つの調査班に分かれて調査を行うが、必要に応じて相互に連携する。2025年度では、大学調査の②修了生インタビュー調査については、班を越えたメンバーが集い、プロジェクトチームを編成した。また、基礎調査（学校調査）については、生徒調査班と教員調査班の一部のメンバーが、基礎調査（大学調査）については、大学調査班と株式会社トモノカイが主に担った。

<研究代表者>

藤田晃之（筑波大学）

<調査班統括>

生徒調査・大学調査：浜田博文（筑波大学）

教員調査：井田仁康（筑波大学）

<全体コーディネーター>

菊地かおり（筑波大学）、梅津静子（筑波大学）

ルステモヴァ・アクトルクン（筑波大学）

<IB機構との連絡調整>

キャロル・犬飼ディクソン（筑波大学）

<各調査班のメンバー>

生徒調査	◎御手洗明佳（淑徳大学）、齊藤貴浩（大阪大学）、松本暢平（千葉大学）、菅井篤（聖隷クリストファー大学）藤朱里（筑波大学）、玄在均（筑波大学）、菊地かおり、ルステモヴァ・アクトルクン
教員調査	◎梅津静子、赤塚祐哉（相模女子大学）、木村光宏（岡山理科大学）、渋谷真樹（日本赤十字看護大学）、原和久（都留文科大学）、佐々木恵美子（聖隷クリストファー小学校）、藤朱里
大学調査	◎花井渉（九州大学）、島田康行（筑波大学）、江幡知佳（大学入試センター）、岩渕和祥（名古屋大学）、井藤眞由美（関西学院大学）、ルステモヴァ・アクトルクン
IB修了生インタビュープロジェクト	◎江幡知佳、島田康行、井藤眞由美、御手洗明佳、齊藤貴浩、赤塚祐哉、木村光宏、太田知彩（筑波大学）

※◎はリーダー

<事務補佐員>

相馬未央（筑波大学）

<リサーチアシスタント（RA）>

山中拓真（筑波大学大学院）

<研究補助者>

前元功太郎（広島県立叡智学園中学・高等学校 教諭）、小山桃子、甲斐彩乃、才鷹 武也、瀬古風沙、中田愛唯、Darina Garmaeva、ENOMOTO JANINA TIEMI、TY Mary Allyson、ZHU SUCHANG（全員筑波大学大学院 学生）、浅越天真（九州大学大学院 学生）

<大学調査・調査協力>

株式会社トモノカイ

※所属は 2026 年 2 月 8 日現在。

1-2. 進捗状況

1) 打ち合わせの開催

- ・研究チーム全体での打ち合わせを 6 回実施した。
- ・文部科学省、IB 教育推進コンソーシアム事務局との三者ミーティングを計 7 回実施した。

2) 発信活動

2025 年度に行われた研究チームによる発信活動は以下の通りである。

【学会発表】

学会	発表者	題目
日本国際理解教育学会 (6月28日)	玄在均、御手洗明佳、菊地かおり	高校生はグローバルな帰属意識をどのように身につけるのか—国際バカロレアの履修経験に着目して—
日本国際バカロレア教育学会 第10回大会 (9月14日)	木村光宏、渋谷真樹、赤塚祐哉、原和久、梅津静子	日本の国際バカロレアディプロマ・プログラムにおける英語による授業—三校の公立学校における授業分析から—
日本国際バカロレア教育学会 第10回大会 (9月14日)	松本暢平、御手洗明佳、菅井篤、ルステモヴァ・アクトルクン、玄在均、菊地かおり、齊藤貴浩	国際バカロレア・ディプロマ・プログラム (IBDP) の履修生の特徴—2024年度調査における学習・家庭環境に着目して—
日本国際バカロレア教育学会 第10回大会 (9月14日)	齊藤貴浩、玄在均、御手洗明佳、菅井篤、菊地かおり、松本暢平	国際バカロレア・ディプロマ・プログラム (IBDP) 履修生のコンピテンシーの構造分析—2024年度調査のデータから—
日本国際バカロレア教育学会 第10回大会 (9月14日)	ルステモヴァ・アクトルクン、江幡知佳	国際バカロレア・ディプロマ・プログラム (IBDP) 履修生の進路選択と将来の展

		望—テキストマイニングによる記述データの分析—
日本教育社会学会第77回大会 (10月7日)	御手洗明佳、松本暢平	日本の学校に通う国際バカロレア・ディプロマ・プログラム (IBDP) 履修生の実態—教育のグローバル化はどのような生徒に支持されているのか—
Korean IB Education Research Association (11月15日)	木村光宏	The Diffusion of IB Pedagogical Practices in Japanese Public Schools: A Narrative Analysis of Teachers Who Transferred from Diploma Programme Schools
Korean IB Education Research Association (11月15日)	松本暢平	Determinants of After School Study Time for IBDP Students in Japan
Korean IB Education Research Association (11月15日)	ルステモヴァ・アクトルクン	Exploring Future Aspirations and University Choices of Japanese Students in the International Baccalaureate Diploma Program (IBDP)
Korean IB Education Research Association (11月15日)	木村光宏、藤朱里	Analysis of English Lesson Employing CEFR-based Vocabulary Level Analyzer: A Case Study in a Japanese Dual Language DP Public School
The IAFOR International Conference on Arts and Humanities in Hawaii (IICAH 2026) (1月7日：日本時間8日)	ルステモヴァ・アクトルクン、藤朱里、御手洗明佳	Understanding IB Education in Japan: Student Experiences in the First Year of the Diploma Programme
香港比較教育学会 (2月7-8日)	ルステモヴァ・アクトルクン、藤朱里、御手洗明佳	Understanding IB Education in Government-Approved Schools in Japan: Insights from the 2024 Basic Survey

【論文掲載】

国際バカロレア教育研究 (第9巻)	渋谷真樹、梅津静子、一家慶喜、原和久	国際バカロレア・ディプロマ・プログラムをめぐる教員の学びの諸相と促進要因—「教える専門家」から「学びの専門家」への転換—
International Education Journal: Comparative Perspectives	木村光宏、梅津静子	Teachers' strategies for English-medium instruction in International Baccalaureate schools: An analysis of the diploma programme in Japan

3) 専門家会議の開催

本事業に対する第三者からの助言を得るため、2025 年度は 2 回の専門家会議を開催した。2025 年度の専門家会議のメンバーは以下の通りである。

石田真理子（仙台育英学園高等学校・秀光コース教頭／国際バカロレアディプロマ・プログラム IB チーフコーディネーター） 勤務校：私立 IB 校（DP）
加藤崇英（茨城大学大学院教育学研究科・教授） 専門分野：学校経営・教育行政
関田晃（さいたま市立大宮北高等学校・校長） 勤務校：公立 IB 校（MYP・DP）
松下佳代（京都大学大学院教育学研究科・教授） 専門分野：カリキュラム・学習評価
吉田文（早稲田大学教育・総合科学学術院・教授） 専門分野：教育社会学（計量分析）

※50 音順／敬称略

(1) 第 1 回専門家会議・議事要旨

・開催日時等

日 時：2025 年 7 月 29 日（火）10:00～11:45 開催方法：オンライン（Zoom） 出席者（17 名）： 専門家会議メンバー（5 名）：石田、加藤、関田、松下、吉田 調査研究チーム（12 名）：藤田（冒頭のみ）、浜田、齊藤、原、御手洗、井藤、江幡、佐々木、ヒョン、梅津、アクトルクン、藤
--

・専門家会議にて出された主要な質問・コメント等（「→」以下は、研究チームからの回答）

〔全体〕 ・生徒、教員、大学と多方面からアプローチし、全体の繋がりがみえてきた。IB の現場にいた者として、納得感をおぼえる結果となっている。 ・IB の制度上の位置づけについて考える必要があるのではないか。もう少し制度的な整理、体系づけが必要。 ・制度と市場の関係をどう考えているか。そこに本研究が踏み込もうとしているか知りたい。 →IB というブランドの必要性の有無については今後議論する方向性のひとつとしたい。 →海外の教育市場を見ると、IB のような国境を越えて移動する生徒のための学びを取り入れないということは不平等だと感じる。日本でも、国公私立高校で IB のような学びができるということの価値はあると考える。
--

- ・ケーススタディの工夫によって、IB の特徴の表し方の工夫をしないと、国公立の区分の意味合いが感じられなくなってしまうのでは。
- 今年度の教員調査班では PYP に着目し訪問調査、学び合い調査、異動教員への調査を行っている。特に、公立は教員の異動が特徴であるため、IB 経験のある教員がどのような実践をするか、変化があるかといった点も見ていきたい。
- ・IB でつけた学力の話か、履修資格の話のどちらがメインかがわかりづらい。
- 履修資格としての価値を見たいと考えているが、日本の教育改革の流れで見ると、コンピテンシー、資質能力への注目というのがあるため、その両方を見せていかないと理解を得られるのはまだ難しいとも思っている。
- 今後対象数が増えれば定量的な側面からも特徴を把握できると考えるが、現時点では、どちらかというと能力を身に着けるカリキュラムをベースとして調査をしている。

〔生徒調査〕

- ・生徒が国内大学に進学した後に、IB の学びが生かされる様子や、周りの学習者への影響等の状況を捉えてもらいたい。
- ・国内大学では MYP に対する評価はほとんどされていないが、MYP を経験したか否かは DP 生にとって意識、DP への取り組み方にも違いが出るため、MYP の良さも認められるようになってほしい。
- ・MYP 経験者／MYP 未経験者で分けた分析をやってほしい。
- 過去に分類したことがあり、MYP 経験がある DP 生が最も資質能力や英語力といった数値は高く出る傾向にあったが、まだ今回のデータでは出せていない。
- ・パネル調査において、高校入学以前に培われている資質と、DP 教育を受けて身に着いた資質がわかると DP を受けたことの成果がよりわかるのでは。
- 今回計画を立て、紐づけ調査を行っている。

〔教員調査〕

- ・教員にとって自校内での学びに魅力を感じて取り組めることには意義がある。しかし、市の研修では IB に関する内容ができないため、このような研究の仕組みが DP ではない学校にも広がってほしい。
- ・教員の多忙化は、IB 校ではあまり問題にならないのか。
- IB 校の教員もとても忙しい。ただ、IB はオフィシャルに協働の時間を組み込まれているということは、教員が意欲的に学ぶ上での大きい要因となっている。
- ・学際的な学び、ひとつの教科に縛られない学びの広がりにも着目してほしい。
- 学際的な要素の強まりも踏まえて、学び合いに関するデータの分析を行いたい。

〔大学調査〕

- ・日本の大学を辞退した生徒が最終的にどこに行っているかを調べることは可能か。
- おそらく各大学も把握されていないことだと思われるため、調べるのは難しい。
- ・国内大学への出願のハードルの高さを感じる。それが、DP 生が国内大学へ進学後に辞退する確率の高さにもつながっているのではないか。

→特に選抜性が高い大学であれば、一般選抜で求められる共通テストの点数の割合と合わせたときに、38点、39点くらいというような設定になる。先行している大学に学んで点数を設定するというのが現状かと思う。

- ・国内大学ではフル・ディプロマを取れていないといけない大学が多いため、サーティフィケートでも認めるという方法を国内大学でも取ってほしい。

(2) 第2回専門家会議・議事要旨

- ・開催日時等

日 時：2026年2月24日（火）10:00～11:45

開催方法：オンライン（Zoom）

出席者（16名）：

専門家会議メンバー（4名）：石田、加藤、関田、吉田

調査研究チーム（12名）：藤田、浜田、井田、齊藤、原、花井、木村、松本、江幡、梅津、アクトルケン、藤

- ・専門家会議にて出された主要な質問・コメント等（「→」以下は、研究チームからの回答）

〔全体〕

- ・全体として実態に肉薄してきたと思う。

〔生徒調査〕

・DP生とnon-DP生の違いは、属性の問題か、学校で受けているIBの学習の問題か。それらはどういう関係にあるのか、その後の大学での学習にどういう形で影響していくのか。

・高校の教育は組織化されているが、大学での教育は組織化されていないのでは。IBの教育は大学進学後にどのように活かされていくのか。

→量的データから考えると、属性面で平均値の高さはDP生の特徴が際立っている。一方でnon-DP生がそうではないとは言えない。

→学習経験から考えると、属性×DPの学習経験で、大学につながる学びという学びへのレディネスが蓄積されていくと捉えることはできる。一方で、大学に失望する学生もいると考えられる。

→属性の違いを見せているのでそう捉えられた可能性もある。国際性の面では明らかに違う。一方で、金銭面等は統計的に有意ではないということもある。修了生へのインタビューからも感覚的にはそこまでnon-DP生との違いがないと考えている。

→大学調査では、属性については不明。組織化に関して、大学で英語の授業が少ない等の理由で失望に繋がるなど、大学での組織化や修了生の受け入れ体制はなかなかできていないと思われる。

→修了生インタビューより、IB生は、組織化されていない大学という場を成長の場に行っている。積極的に教員に質問したり、学会などに参加することによって、大学を成長の場として繋ぐということに長けている。DP生は、高校時代のCASで、やりたいことをどんどんやり、ス

タンダードを超えて自分の学びを深める経験をもつため、大学でも自然に自分で目標を設定し取り組む力を身につけている。

- ・国際性や英語力だけでなく、論理的思考力、批判的思考力や、自分から発信する力が DP 生の成果として出てきているのが嬉しい。大学に IB 生について理解してほしい。これまではどうしても国際性や英語力だけが注目されてきたが、それだけではなく、この調査結果のように、生徒がもっている資質、他のスキルにもつなげて IB 生を評価してほしい。

- ・高校で DP を受けて、海外留学する人の割合はどれくらいか。

→26-28% (19 校程度の基礎調査データより)。

- ・DP をやっていなくても MYP をやっていた生徒はいる。そのような生徒は、IB のコアのところを把握していると考えられるため、今後の分析の視点に入れてほしい。MYP を経験しているかどうかで、生徒の学び方に決定的に違う特徴があると思う。

→来年度、教員調査班で MYP 校を対象にインタビューを実施する予定だが、その際に生徒の学習にも着目する予定。

〔教員調査〕

- ・IB は学際性が特徴としてある。最近、課題論文 (EE) のガイドが新しくなり、学際性が求められてきており、スーパーバイザーの先生にも専門性が求められ大変になることが予想される。教員の学びや協働を明らかにする教員調査班の報告内容は、現場の知見としても重要。

- ・令和 7 年度報告書内で、研修負担や研修のハードル・財政面について記述されていたが、その点について研究チームとしてどのようにしたいと考えているのか。

- ・IB 教員のキャリアパス (研修－養成－資格) はどうなっているのか。IB の教員観も国際的であるのか。IB の経験を培ってもその先が保証されないのではないか。教員のキャリア面では、都道府県の研修等を実施する意味が重要だが、IB 教員については今後どう考えるのか。IB 教員は流動的で実力主義的なところがあると考えますが、日本のキャリアパスのイメージや雇用環境との接続がうまくいっていない印象を報告書の財政面への記述から感じた。IB 教員へのサポートが難しいのではないか。

- ・IB 校で教員の同僚性が養われるという結果は、IB の推進力にもなる。教員個人で IB のフレームワークを実現するのが難しいのに対し、IB 校には教員間の協働性や同僚性の風土がある。IB 校を経験して、non-IB 校に異動する場合、協働設計がない点は困難になるかもしれない。

→教員の異動に関して、IB 校での経験が活かしているところもある。学習面だけではなく様々な波及があると思うので、その状況を把握し、どういう後押しができるかを提言していけたらいいと思う。

- ・大学入試の際に、最終試験 (ファイナル) の見込スコアと実際のスコアを近づけるには、教員にも経験が必要。しかし、公立学校では IB のベテランの先生が育たない。長くいたとしても 10 年間で移動するため。

〔大学調査〕

- ・確定スコアが出るまで待てず、DP 生が私立を進学先に決めるという調査結果は現場の感覚とも合っている。国立大学でも同様の問題があるのかと思った。大変さが大学側に伝わる意味で本調査の役割は重要。

〔修了生インタビュー〕

・かなりの数のインタビューを実施していて、テキストデータが膨大なはずなのに、結果がコンパクトになっている。シンプルにまとめてしまっているのではないか。「IB を続けていくとこんな人間になりますよ」といった IB 生ならではの人間像があったのではないかと予測している。所要時間とページ数のリミットはあると思うが、そこをもっと思い切って出してもよいのでは。

・大学での自律性による困難の克服等の特徴があると思うが、あまり差別化されていないように見える。IB 生ならではの、というところをもっと出してもよいのでは。

→今後学会発表や論文化する中で、差別化されていないところも分析していきたい。

これらの質問・コメント等を参考に、今後の調査計画に可能な範囲で反映させていく。

4) 【タイプ A】IB 教育推進コンソーシアム事務局との連携

IB 教育推進コンソーシアム事務局とは、月に 1 度のペースでミーティングを行い、互いのプロジェクトの進捗状況の共有や、関連する事柄について意見交換を行った。とりわけ、今年度は IB 教育推進コンソーシアムのウェブサイトで研究チームの成果を発信するページを作成するという新たな試みがあり、それに関して幾度にもわたり打ち合わせを行った。最終的に以下のページが新たに設置された。このページでは、研究チームの概要、基礎調査の結果（グラフ含む）、報告書、幅広い層に読みやすいように考えられたチラシを提示している。

今後も IB 教育推進コンソーシアム事務局と協力しながら、コンテンツを充実させていく予定である。

ウェブサイト：<https://ibconsortium.mext.go.jp/researches/>

また、IB 教育推進コンソーシアム事務局が主催するイベントへの登壇も行った。登壇したイベントは以下の通りである。

・文部科学省 IB 教育推進コンソーシアム『第 11 回国際バカロレア推進シンポジウム』「2024 年度 IB の教育効果等に関する調査報告」国際バカロレア（IB）の教育効果等に関する調査研究チーム（8 月 23 日）

・文部科学省 IB 教育推進コンソーシアム『2025 年度第 3 回関係者別連絡会』「IB の教育効果等に関する調査研究チームとの情報交換」国際バカロレア（IB）の教育効果等に関する調査研究チーム（12 月 2 日）

次年度は、特に大学調査に関して IB 教育推進コンソーシアム事務局との連携を深めていく予定である。

第二部

2-1. 生徒調査

生徒調査（IB 校および生徒を対象とした調査）では、「①IB 校調査」および「②在学調査」を行う。なお、「①基礎調査（学校調査）」については、「2-4. 基礎調査（学校調査）」において詳述する。

1) 調査の概要

【文責：御手洗】

本調査は、2020～2022 年度に筑波大学を中心として実施された「IB の教育効果に関する調査研究事業」の成果および課題を踏まえ、IB ディプロマ・プログラム（以下、DP）を実施する学校に在籍する生徒を対象として実施した質問紙調査である。本調査では、先行調査で得られた知見を継承しつつ、調査の実施方法および質問項目の見直し・拡充を行い、IB 教育の効果について、生徒の成長や変化を多角的に把握することを目的としている。

先行する調査研究事業では、年度ごとに質問紙調査を実施し、その成果は、口頭発表、学術論文、シンポジウム報告等を通じて公表されてきた。これらの研究では、DP を履修する生徒（DP 生）と履修していない生徒（non-DP 生）とを比較し、コンピテンシーの習得状況（自己評価）、高校の授業での学習経験、放課後の学習時間、進路意識等の諸変数について検討が行われてきた。

当初の調査設計は、DP 生および non-DP 生の経年変化を把握することを目的としたパネル・データの構築を企図したものであった。しかし、DP 生の人数が限られていたことから、分析上の制約が生じ、結果として、クロス・セクショナル・データに基づく分析にとどまった点が課題として指摘されている。また、DP 生と比較した non-DP 生の具体的な特徴を検討することができていない点も、先行研究における課題として残されてきた。

以上の課題を踏まえ、2025 年度における本事業では、調査対象校の増加を図るとともに、探究が推進される non-DP 生も含めた教育効果をパネル・データに基づいて検証することを目指している。そのため、従来の調査項目を基盤としつつ、家庭背景や学業成績（成績に対する生徒自身の認識）等の新たな項目を追加し、調査の実施方法および質問項目の再設計を行った。これにより、IB 教育の効果をより体系的に把握することを企図している。なお、本報告書で示す分析は、現時点で回収・整理が完了しているクロス・セクショナル・データに基づくものであり、パネル分析については、次年度以降に実施予定である。

2) 進捗報告

【文責：ルステモヴァ・藤】

【打ち合わせの実施】

2025 年度は、研究期間中に打ち合わせを 12 回実施した。主な検討事項は、今年度の調査計画、調査結果の分析方法、ならびに研究成果の公表（学会発表、論文投稿）である。詳細は下記の通りである。基本的には対面（筑波大学）で打ち合わせを行い、適宜、オンライン（Zoom）およびメールを用いて調査研究に関して意思疎通を図った。

	日時	方法（場所）	検討事項
第1回	2025年4月14日 (月)10時～16時	ハイブリッド型 (対面とオンラインの併用)	・修了生調査の検討会 ・諸報告 ・高校2年生調査の因子分析について ・修了生調査の質問紙の検討 ・学会発表等の検討
第2回	2025年5月19日 (月)10時～16時	ハイブリッド型	・高校2年生調査質問紙の確定 ・修了生調査／紐づけ訪問の検討 ・学会発表等の検討 ・RAの雇用について ・高校3年生調査集計の進捗 ・基礎調査集計の進捗
第3回	2025年6月23日 (月)10時～16時	ハイブリッド型	・高校2年生調査質問紙オンライン版の確定 ・修了生調査／紐づけ訪問の検討 ・学会発表等の検討 ・AY2024年高校3年生調査のグループの分け方 ・AY2025年高校3年生調査票 ・8月23日シンポジウムのスライド ・関係者別連絡会 ・基礎調査集計の進捗状況について
第4回	2025年7月14日 (月)10時～16時	ハイブリッド型	・高校2年生調査質問紙の進捗状況について ・修了生調査／紐づけ訪問の進捗状況について ・AY2024基礎調査のIB科目履修生人数確認の進捗状況 ・AY2024年高校3年生調査DP履修あり・なしの集計結果 ・学会発表等の検討 ・AY2025年高校3年生調査票
第5回	2025年8月6日 (水)10時～16時	ハイブリッド型	・高校3年生質問紙の確認 ・専門家会議の振り返りとシンポジウムについて ・学会発表のスライド作成について ・修了生調査アンケート作成 ・高校2年生調査の進捗状況の報告

			・ 紐づけ調査の進捗状況の報告
第 6 回	2025 年 8 月 28 日 (木) 10 時～16 時	ハイブリッド型	・ 高校 3 年生質問紙の確定 ・ データ連結フォーマットの作成 ・ AY2024 高校 3 年生調査フィードバックの確認 ・ 継続調査質問紙の作成（依頼文含む） ・ 国際学会のエントリーについて
第 7 回	2025 年 9 月 22 日 (月) 10 時～16 時	ハイブリッド型	・ IB 学会の振り返り ・ 継続調査（修了生調査）質問紙の作成 ・ 令和 6 年度報告書の確認 ・ データ連結フォーマットの作成 ・ 紐付けの進捗の共有 ・ 国際学会のエントリーについて
第 8 回	2025 年 10 月 20 日 (月) 10 時～16 時	ハイブリッド型	・ 国際学会、韓国学会の相談、データの使用優先順位に関して ・ 高校 3 年生調査の英訳の確認 ・ 継続調査（修了生調査）質問紙、依頼文、倫理審査書類の確認 ・ AY2025 高校 2 年生調査の進捗状況 ・ AY2025 高校 3 年生調査の進捗状況 ・ 紐付けの進捗の共有
第 9 回	2025 年 10 月 27 日 (月) 10 時～16 時	ハイブリッド型	・ 高校 3 年生調査の英訳の確定 ・ 継続調査（修了生調査）質問紙、依頼文、倫理審査書類の確定 ・ データ連結フォーマットの作成について
第 10 回	2025 年 12 月 15 日 (月) 10 時～16 時	ハイブリッド型	・ 継続調査（修了生調査）について ・ 国際学会の内容等の相談・共有（ハワイ、香港） ・ データマージについて ・ データ連結フォーマットの作成について ・ 高校 3 年生調査、基礎調査の進捗状況 ・ 1 月の報告書作成について
第 11 回	2026 年 1 月 19 日 (月) 10 時～16 時	ハイブリッド型	・ 高校 2 年生調査の集計に関する報告 ・ 2025 年度成果報告書について ・ 2026 年度計画書について ・ 香港比較教育学会発表について ・ 2026 年度成果発表検討など ・ 高校 3 年生調査の進捗報告

			・ 基礎調査の進捗情報
第 12 回	2026 年 2 月 19 日	オンライン	・ 2026 年度計画書について ・ 2026 年度成果発表検討など ・ 高校 3 年生調査の進捗報告 ・ 基礎調査の進捗情報

【高校 2 年生調査】

2025 年 4 月～5 月に実施した。本報告書に分析結果を掲載する。

【高校 3 年生調査】

2025 年 9 月～2026 年 2 月に実施している。現在、質問紙の回収およびデータ整理を進めている段階であるため、本調査の結果については次年度の報告書に記載する。

なお、本報告書には、2024 年度に実施した高校 3 年生調査の分析結果を掲載している。

【修了生調査】

修了生調査（追跡調査）の実施に向け、調査設計の検討を行い、質問紙の作成および倫理申請に係る手続きを行った。

あわせて、高校 3 年生調査において修了生調査への協力依頼を掲載し、調査協力者の募集を行った。

【学会発表】

◆ 日本国際バカロレア教育学会 第 10 回大会（9 月 14 日）

- ・ 国際バカロレア・ディプロマ・プログラム（IBDP）の履修生の特徴—2024 年度調査における学習・家庭環境に着目して—

発表者：松本、御手洗、菅井、ルステモヴァ、玄、菊地、齊藤

- ・ 国際バカロレア・ディプロマ・プログラム（IBDP）履修生のコンピテンシーの構造分析—2024 年度調査のデータから—

発表者：齊藤、玄、御手洗、菅井、菊地、松本

- ・ 国際バカロレア・ディプロマ・プログラム（IBDP）履修生の進路選択と将来の展望—テキストマイニングによる記述データの分析—

発表者：ルステモヴァ、江幡

◆ 日本国際理解教育学会（6 月 28 日）

- ・ 高校生はグローバルな帰属意識をどのように身につけるのか—国際バカロレアの履修経験に着目して—

発表者：玄、御手洗、菊地

◆ 日本教育社会学会第 77 回大会（10 月 7 日）

- ・ 日本の学校に通う国際バカロレア・ディプロマ・プログラム（IBDP）履修生の実態—教育のグローバル化はどのような生徒に支持されているのか—

発表者：御手洗、松本

◆ 韓国 IB 学会（11 月 15 日）

- ・ Determinants of After School Study Time for IBDP Students in Japan

発表者：松本

- ・ Exploring Future Aspirations and University Choices of Japanese Students in the International Baccalaureate Diploma Program (IBDP)

発表者：ルステモヴァ

◆ The IAFOR International Conference on Arts and Humanities in Hawaii (IICAH 2026)（1 月 7 日：日本時間 8 日）

- ・ Understanding IB Education in Japan: Student Experiences in the First Year of the Diploma Programme

発表者：ルステモヴァ、藤、御手洗

◆ 香港比較教育学会（2 月 7-8 日）

- ・ Understanding IB Education in Government-Approved Schools in Japan: Insights from the 2024 Basic Survey

発表者：ルステモヴァ、藤、御手洗

- ・ A Quantitative Survey Comparing Student Competencies between the IB Diploma Programme and Traditional High School Programmes in Japan

発表者：齊藤、松本

【その他成果の発信】

- ◆ 文部科学省 IB 教育推進コンソーシアム『第 11 回国際バカロレア推進シンポジウム』「2024 年度 IB の教育効果等に関する調査報告」国際バカロレア（IB）の教育効果等に関する調査研究チーム（基礎調査報告：ルステモヴァ、生徒調査報告：御手洗、齊藤）（8 月 23 日）

- ◆ 文部科学省 IB 教育推進コンソーシアム『2025 年度第 3 回関係者別連絡会』「IB の教育効果等に関する調査研究チームとの情報交換」国際バカロレア（IB）の教育効果等に関する調査研究チーム（御手洗、松本、井藤、梅津）（12 月 2 日）

以下に、昨年度および今年度の成果報告を記す。

(1) 2024 年度実施高校 3 年生調査：調査の概要

[文責：御手洗]

本調査は、IB ディプロマ・プログラム（DP）を履修する高校 3 年生を対象として、DP 履修をほぼ完了した段階における教育効果を明らかにすることを目的として実施した。具体的には、DP 生のコンピテンシーに関する自己認識、態度や状況、学習経験、学業成績および家庭背景等を把握し、DP を履修していない生徒（non-DP 生）との比較を通じて、DP 履修の到達点としての特徴や効果を検討することを目的とした。

また、本調査は、先行研究で課題とされてきた背景要因を考慮した分析を可能にし、今後の追跡調査（修了生調査）との接続を見据えた基礎データを提供する点としても意義がある。

調査内容は、生徒の基本属性、学習態度や状況、高校の授業における学習経験、学校内外の活動状況、放課後の学習時間および学習内容、高校での成績や英語運用能力に関する資格、身につけている資質・能力、学校生活や将来に対する意識、進路希望および将来展望、家庭を中心とした学習環境等、多岐にわたる項目で構成されている。これらの項目は、先行研究における調査枠組みを踏まえつつ、生徒の学習経験や成長を総合的に把握することを目的として設定されたものである。

(2) 高校 3 年生調査：全体集計の結果

調査対象は、IB ディプロマ・プログラム（DP）を導入する高等学校（一条校）30 校に在籍する高校 3 年生 1,760 名であり、DP 生および non-DP 生を含んでいる。調査は集合調査法により実施し、調査協力校の状況に応じて、質問紙による回答および WEB（オンライン）による回答のいずれかの方法を採用した。なお、両調査方法における質問項目および内容は同一である。

調査時期は、2024 年 9 月～12 月であった。

調査方法別の回答数は、質問紙調査が、1,445 名（82.1%）、オンライン調査が 315 名（17.9%）であり、合計 1,760 名分の有効回答を得た。

<2024 年度高校 3 年生調査概要>

調査目的	本調査の目的は、日本における IB の教育効果について、生徒の成長・変化をより詳細に明らかにすることである。 また、高校生が学校内外でどのような学習活動や経験をしているかについて実態を明らかにし、生徒の学習状況や活動の多様性、またそれらが生徒の成長や進路選択にどのように影響を与えているかを把握する。
調査対象	IB のディプロマ・プログラム（DP）を導入する高等学校（一条校）に在籍する高校 3 年生（DP 生・non-DP 生）1,760 名（合計 30 校）
調査方法	集合調査法 調査協力校の要望に応じて、以下の 2 つの方法で実施した。 ①質問紙による回答 ②WEB（オンライン）による回答 ※調査票の内容は同一である。
調査時期	2024 年 9 月～12 月

<質問項目>

区分	質問項目
質問 1. 生徒自身のこと	(1)年 組 番 (2)学籍番号 (生徒番号)
	(3)性別 (4)ディプロマ・プログラム (DP) の履修
	(5)経験した学校や教育プログラム
質問 2. 態度や状況に関すること	(1)知らないことがあると、よく質問をしたり調べたりする (他、全 33 項目、各 1～5 点)
質問 3. 高校の授業での経験に関すること	(1)先生の話から知識を得る。(他、全 18 項目、各 1～5 点)
質問 4. 高校生活の中で、意欲的に参加している活動に関すること	(1)生徒会・委員会活動への参加 (他、全 7 項目、各 1～5 点)
質問 5. 放課後の学習時間と学習内容に関すること	(1)1 日あたりの放課後の学習時間
	(2)1 日あたりの放課後の学習時間の配分
質問 6. 高校の成績と英語運用能力に関する資格について	(1)現在の成績
	(2)現在取得している英語運用能力に関する資格
質問 7. 身についている資質能力に関すること	(1)興味のある対象について深く学習し、理解する姿勢 (他、全 25 項目、各 1～5 点)
質問 8. 現在や将来に関すること	(1)学校生活について (全 3 項目、各 1～5 点)
	(2)将来について (全 3 項目、各 1～5 点)
質問 9. あなたの進路と将来の展望に関すること	(1)高校卒業後の進路希望 (2)進みたい専門分野
	(3)第 1 志望校で希望する入試区分 (4)大学入試対策
	(5)高校やその後の学習を通じて、将来やりたいこと
質問 10. 周囲の環境に関すること	(1)本やインターネット環境など家で学ぶ環境が十分にある (他、全 13 項目、各 1～5 点)

(3) 高校 3 年生調査 : DP 生と non-DP 生の傾向の比較

①基本属性について [質問 1]

[文責 : 御手洗]

質問 1(4)では、IB ディプロマ・プログラム (DP) の履修状況について尋ねた【表 1-1】。回答者全体のうち、フル・ディプロマ履修生は 20.3%、科目履修生 (サーティフィケート取得を目指す者) は 2.1%であり、DP 非履修生は 77.6%を占めている。

【表1-1】 DP履修状況

履修状況	件数	割合 (%)
DP生 (フル・ディプロマ)	357	20.3
DP科目履修／サーティフィケート)	37	2.1
non-DP	1366	77.6
合計	1760	100.0

【表 1-2】は、本研究における分析区分別の回答者内訳を示している。分析では、DP の制度的影響を検討する目的から、フル・ディプロマ履修生を DP 生と定義し、科目履修生および DP 非履修生を統合して non-DP 生として扱った。その結果、分析対象者の内訳は、DP 生が 20.3%、non-DP 生が 79.7%となっている。

【表1-2】分析区分の回答者内訳

分析区分	件数	割合 (%)
DP生 (フル・ディプロマ履修)	357	20.3
non-DP生 (科目等履修+DP非履修)	1403	79.7
合計	1760	100.0

【表 1-3】は、回答者の性別構成を全体および DP 生・non-DP 生別に示したものである。全体では、男性が 44.8%、女性が 54.6%を占めている。DP 生では女性の割合が 57.8%とやや高く、non-DP 生では男性が 45.7%、女性が 53.8%であった。いずれの区分においても、性別構成に大きな偏りはみられない。

【表1-3】回答者の性別構成（全体・DP生・non-DP生）

性別	全体 n (%)		DP生 n (%)		non-DP生 n (%)	
男性	773	(44.8)	145	(41.1)	628	(45.7)
女性	942	(54.6)	204	(57.8)	738	(53.8)
その他	11	(0.6)	4	(1.1)	7	(0.5)
合計	1726	(100.0)	353	(100.0)	1373	(100.0)

②学校経験について【質問 1】

【文責：御手洗】

質問 1 (5) では、回答者がこれまでに経験した学校や教育プログラムについて尋ねた。【表 1-4】は、DP 生・non-DP 生別に示したものである。DP 生では海外の学校経験や IB 中等教育プログラム (MYP) の経験割合が相対的に高く、non-DP 生では「あてはまるものはない」とする回答が多い傾向がみられる。

【表1-4】学校・教育プログラムの経験（全体・DP生・non-DP生）

学校・教育プログラム経験	DP生 n (%)		non-DP生 n (%)	
インターナショナルスクール (日本)	38	(10.6)	69	(4.9)
インターナショナルスクール (海外)	33	(9.2)	32	(2.3)
海外の現地校	66	(18.5)	163	(11.6)
海外の日本人学校	46	(12.9)	66	(4.7)
国際バカロレア初等教育プログラム (PYP)	20	(5.6)	16	(1.1)

国際バカロレア中等教育プログラム (MYP)	190	(53.2)	206	(14.7)
あてはまるものはない	94	(26.3)	926	(66.0)
回答者合計	357		1403	

注：複数回答方式のため、割合の合計は100%を超える。割合は各区分の回答者数を分母として算出している。

③自身の態度や状況について【質問 2】

【文責：御手洗】

質問 2 では、自身の態度や行動に関する状況を尋ねた。本設問は、能力獲得に関しては、自己認識を直接的に問う質問項目（質問 7）を補完する位置づけとして、日常的な学習行動や対人行動、社会的態度など、実際の行動ベースの側面を幅広く捉えることを目的として設計されたものであり、2 年生調査でも同じ項目を設置した。回答は 5 件法（「5：とてもあてはまる」～「1：まったくあてはまらない」）で得点化し、各項目について平均値を算出した。DP 生と non-DP 生の傾向の差異を検討するため、Welch の t 検定を行った【表 1-5】。

その結果、33 項目中 23 項目において、DP 生と non-DP 生との間に統計的に有意な平均値の差が認められた。特に、DP 生は「知らないことがあると、よく質問したり調べたりする」（DP 生 $M=4.30$ 、non-DP 生 $M=4.06$ 、 $g=0.29$ ）、「問題が起きたときにはその理由を理解しようとする」（DP 生 $M=4.25$ 、non-DP 生 $M=4.01$ 、 $g=0.29$ ）、「社会のことをよく勉強している」（DP 生 $M=3.62$ 、non-DP 生 $M=3.26$ 、 $g=0.33$ ）、「自然や環境のことをよく勉強している」（DP 生 $M=3.48$ 、non-DP 生 $M=3.10$ 、 $g=0.33$ ）といった項目において、non-DP 生よりも高い平均値を示した。これらの項目はいずれも、主体的な学習態度や知的好奇心、社会的関心に関わるものであり、DP 生において、一定の傾向が確認された。

また、DP の学習経験と直接対応する行動的側面を示す項目に着目すると、「チームの中で自分の果たすべき役割を率先して行っている」（ $g=0.26$ ）、「他の人は自分と違う意見を持っていることを理解している」（ $g=0.25$ ）、「いつも新しいことに挑戦している」（ $g=0.29$ ）など、協働性、多様性理解、挑戦志向に関わる項目においても有意差が確認され、DP 生がこれらの側面において相対的に高い傾向を示していた。

一方で、「他の人の気持ちや考えを十分に理解することができている」（ $g=-0.03$ ）、「何かをするときには周囲の人を誘うことがよくある」（ $g=-0.01$ ）、「他の人たちと協力してチームで行動することができる」（ $g=0.07$ ）、「学校や社会の規則を守っている」（ $g=0.02$ ）、「自分の行動に責任をとることができる」（ $g=0.08$ ）、「健康的な生活に注意している」（ $g=-0.04$ ）を含む 10 項目については、DP 生と non-DP 生の間に有意差が認められなかった。これらの項目は、基本的な対人配慮、規範意識、生活習慣に関わる内容であり、群を問わず比較的共通した傾向として保持されている可能性がある。

以上より、DP 生は、主体的な学習行動、課題解決志向、社会的・文化的関心、変化への適応や挑戦といった側面において、non-DP 生よりも高い傾向を示す一方で、基礎的な規範意識や健康行動、対人協調の一部については両者にあまり差が見られなかった。

【表 1-5】自身の態度や状況について

	DP 生			Non-DP 生			<i>g</i>	<i>p</i>
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>		
(1) 知らないことがあると、よく質問をしたり調べたりする	4.30	0.73	354	4.06	0.85	1372	0.29	***
(2) 自分はどういう人間かを考えることがよくある	4.22	0.96	354	3.96	1.04	1371	0.25	***
(3) 社会のことをよく勉強している	3.62	0.96	353	3.26	1.12	1371	0.33	***
(4) 自然や環境のことをよく勉強している	3.48	1.05	354	3.10	1.15	1366	0.33	***
(5) 学校とは関係なく自分から勉強する習慣ができています	3.51	1.08	354	3.29	1.23	1365	0.18	***
(6) 問題が起きたときにはその理由を理解しようとする	4.25	0.75	354	4.01	0.89	1373	0.29	***
(7) 問題を解決するために自分ができるところを考える	4.23	0.73	354	4.05	0.85	1371	0.22	***
(8) 課題があれば自分で解決しようとする	4.04	0.82	354	3.94	0.91	1367	0.11	*
(9) 他の人の気持ちや考えを十分に理解することができている	3.88	0.93	354	3.91	0.98	1369	-0.03	n.s.
(10) 自分の気持ちや考えを十分に表現することができている	3.82	0.96	354	3.65	1.04	1371	0.16	**
(11) 何かをするときに周囲の人を誘うことがよくある	3.74	1.08	343	3.76	1.13	1339	-0.01	n.s.
(12) 他の人たちと協力してチームで行動することができる	4.18	0.91	343	4.12	0.92	1335	0.07	n.s.
(13) チームの中で自分の果たすべき役割を率先して行っている	4.18	0.85	342	3.94	0.93	1332	0.26	***
(14) 自ら目標を設定し、その達成のために行動することができている	3.91	0.93	342	3.76	0.98	1337	0.15	*
(15) グループの目的を示し、グループの人たちを効果的に行動させることができる	3.66	1.00	342	3.4	1.11	1336	0.21	***
(16) 学校や社会の規則を守っている	4.29	0.83	342	4.28	0.86	1332	0.02	n.s.
(17) 自分の良心や従うべきルールを持ち、それに基づいて行動している	4.41	0.73	343	4.33	0.79	1338	0.10	n.s.
(18) 自分の行動に責任をとることができる	4.12	0.86	343	4.04	0.90	1336	0.08	n.s.
(19) 他の人は自分と違う意見を持っていることを理解している	4.64	0.60	342	4.46	0.75	1337	0.25	***

(20) 世の中には色々な価値観や文化がある ことを理解している	4.72	0.57	342	4.57	0.68	1336	0.22	***
(21) 困っている人を助けることがよくある	4.01	0.86	341	3.81	0.94	1335	0.21	***
(22) いつも新しいことに挑戦している	3.71	0.99	342	3.40	1.09	1336	0.29	***
(23) いつも何か新しいことを生み出そうと している	3.43	1.14	342	3.18	1.17	1337	0.21	***
(24) 自分の能力を有効に使うことができ ている	3.79	0.91	343	3.59	1.00	1338	0.20	***
(25) 健康的な生活に注意している	3.59	1.19	342	3.64	1.17	1337	-0.04	n.s.
(26) 体力・身体づくりをしている	3.30	1.33	343	3.15	1.33	1337	0.11	n.s.
(27) 自分で計画を立て、それに従って物事 を進めることができる	3.33	1.16	342	3.21	1.19	1338	0.10	n.s.
(28) 社会や学校の一員としての義務と権利 を認識している	3.96	0.85	342	3.78	0.89	1337	0.20	***
(29) 社会、学校などの周囲をよくするため に積極的に関わっている	3.64	1.00	342	3.39	1.10	1336	0.23	***
(30) 自分の周りに変化が起きてもうまく適 応できている	3.92	0.99	342	3.71	1.01	1333	0.21	***
(31) ストレスを感じることがあっても リラ ックスして前向きにとらえることがで きている	3.48	1.23	343	3.33	1.21	1338	0.12	n.s.
(32) 自分の態度や行動の正しさを確認する ことがよくある	4.08	0.89	342	3.94	0.91	1336	0.15	*
(33) 自分の態度や行動をよりよいものにし ようと努力している	4.20	0.81	343	4.01	0.89	1338	0.22	***

***: $p < .001$, **: $p < .01$, *: $p < .05$, n.s.: not significant

M = 平均値、 SD = 標準偏差、 n = 回答数、 g = 効果量 (Hedges の補正)、 p = 有意確率

④授業中の学習経験について【質問 3】

【文責：御手洗】

質問 3 では、高校の授業において生徒がどのような学習経験をしているかについて尋ねた。具体的には、知識の獲得方法、探究的・協働的な学習活動、言語活動や表現活動の経験、学習方法の特性に関する 18 項目を設定した。回答は 5 件法（「5：いつも」～「1：まったくない」）で求め、各項目の平均値を算出した上で、DP 生と non-DP 生の差異を検討するため、Welch の t 検定を行った【表 1-6】。

その結果、全ての項目（18 項目）で DP 生・non-DP 生の間に有意な平均値の差が認められた。うち 15 項目では DP 生の平均値が有意に高く、残る 3 項目では non-DP 生の平均値が有意に高かった。

DP 生の平均値が高く、かつ効果量が大きかった項目としては「英語でかかれた情報を収集する」(DP 生 $M=4.06$ 、non-DP 生 $M=2.74$ 、 $g=1.08$)、「あるテーマについて論述文(作文・エッセイ)を書く」($g=0.91$)、「作文・エッセイ・発表などへのフィードバックを受ける」($g=0.80$)などが挙げられる。また、「本を一冊読む」($g=0.71$)、「海外で起こった出来事や課題について考える」($g=0.71$)、「探究したい課題について問いを立てる」($g=0.66$)、「プロジェクト(探究・調査・実験・発表会)の計画を立てる」($g=0.62$)、「情報を得るとき、情報源の信頼性を確認する」($g=0.51$)、「図書室を利用して資料や文献を探す」($g=0.55$)など、探究の各段階を構成する学習活動においても、DP 生の平均値が有意に高かった。

一方で、「教科書を中心に学ぶ」($g=-0.19$)、「一問一答の問題を解く」($g=-0.28$)、「用語や出来事を暗記する」($g=-0.24$)の3項目では、non-DP 生の平均値が DP 生を有意に上回った。これらの項目はいずれも知識の再生や定着を重視した学習形態を示すものであり、non-DP 生の学びにおいては、教科書中心・暗記中心の学習経験が相対的に多いことがわかる。

以上より、授業中の学習経験に関しては、すべての項目で DP 生と non-DP 生の間に一貫した差異が確認された。特に DP 生では、探究、協働、言語活動に関わる学習経験の頻度が高く、non-DP 生では、教科書や知識の定着を重視した学習経験が相対的に多い傾向がみられた。

【表1-6】授業中の学習経験について

	DP生			Non-DP生			g	p
	M	SD	n	M	SD	n		
(1) 先生の話から知識を得る	4.24	0.72	337	3.92	0.89	1271	0.37	***
(2) 教科書を中心に学ぶ	3.23	1.01	336	3.44	1.08	1269	-0.19	**
(3) 探究したい課題について問いを立てる	4.09	0.85	337	3.40	1.10	1267	0.66	***
(4) プロジェクト(探究・調査・実験・発表会)の計画を立てる	3.96	0.95	333	3.27	1.16	1270	0.62	***
(5) 図書室を利用して資料や文献を探す	3.27	1.33	336	2.58	1.25	1267	0.55	***
(6) 情報を得るとき、情報源の信頼性を確認する	4.31	0.87	336	3.80	1.05	1270	0.51	***
(7) 英語で書かれた情報を収集する	4.06	1.01	335	2.74	1.27	1269	1.08	***
(8) 自分と異なる立場や見方をもつ人の意見を聞く	4.37	0.76	336	3.96	0.95	1267	0.44	***
(9) 本を一冊読む	3.78	1.24	336	2.82	1.37	1268	0.71	***
(10) グループで協力して活動する	4.26	0.85	337	3.96	0.98	1271	0.32	***
(11) 海外で起こった出来事や課題について考える	4.08	0.85	337	3.27	1.20	1266	0.71	***
(12) あるテーマについて論述文(作文・エッセイ)を書く	4.26	0.85	336	3.16	1.27	1270	0.91	***
(13) 学習の中で多様なメディア(新聞・映像・音楽など)に触れる	4.21	0.91	337	3.64	1.13	1269	0.53	***

(14) 学習の成果を社会に発信する	3.07	1.18	336	2.60	1.22	1268	0.38	***
(15) 自分が取り組んだプロジェクト（探 究・調査・実験・発表会）のよかつ た点や課題を整理する	3.87	0.97	337	3.21	1.23	1269	0.56	***
(16) 一問一答の問題を解く	3.09	1.17	336	3.43	1.24	1270	-0.28	***
(17) 用語や出来事を暗記する	3.49	1.08	336	3.75	1.12	1268	-0.24	***
(18) 作文・エッセイ・発表などへのフィー ドバックを受ける	4.24	0.83	337	3.32	1.22	1268	0.80	***

***: $p < .001$, **: $p < .01$

M = 平均値、 SD = 標準偏差、 n = 回答数、 g = 効果量（Hedgesの補正）、 p = 有意確率

⑤課外活動について【質問 4】

【文責：御手洗】

質問 4 では、課外活動への意欲的な参加度について尋ねた。具体的には、生徒会・委員会活動、部活動・クラブ活動、学校行事への参加といった学校内の活動に加え、授業外でのプロジェクト・探究活動、ボランティア活動、海外との交流活動、留学経験など、学校内外にまたがる 7 項目を設定した。回答は 5 件法（「5：とてもあてはまる」～「1：まったくあてはまらない」）で求め、DP 生と non-DP 生の平均値の差について、Welch の t 検定を行った【表 1-7】。

その結果、7 項目中 4 項目において、DP 生と non-DP 生の間で統計的に有意な平均値の差が認められた。具体的には、「授業外でのプロジェクト・探究活動への参加」（DP 生 $M=4.04$ 、non-DP 生 $M=3.27$ 、 $g=0.58$ ）、「ボランティア活動への参加」（ $g=0.75$ ）、「海外との交流活動への参加」（ $g=0.64$ ）、「留学（短期・長期・交換等）」（ $g=0.20$ ）の 4 項目において、DP 生の平均値が non-DP 生を有意に上回った。とくに、授業外の探究活動やボランティア、海外交流といった項目では中程度以上の効果量が確認され、DP 生が学校外を含む多様な学習機会に積極的に参加している傾向が示された。

一方で、「生徒会・委員会活動への参加」、「部活動・クラブ活動への参加」、「学校行事（体育祭・文化祭等）への参加」の 3 項目については、DP 生と non-DP 生の間で統計的に有意な差は認められなかった（いずれも $ps=n.s.$ ）。これらの活動は、多くの学校において参加が制度的に保障・促進されている性格をもつことから、課程の違いによる差が生じにくい活動であると考えられる。

以上より、課外活動に関しては、学校制度の枠内で実施される全員参加型の活動では DP 生と non-DP 生の差はみられない一方で、自己選択性が高い活動ほど DP 生の参加度が高いという傾向が示された。この結果は、DP を履修する生徒は、学校内外の多様な学習機会に積極的に関わっている状況がうかがえる。

【表1-7】 課外活動について

DP 生			Non-DP 生			g	p
M	SD	n	M	SD	n		

生徒会・委員会活動への参加	3.00	1.39	346	3.02	1.45	1365	-0.01	n.s.
部活動・クラブ活動への参加	3.65	1.40	346	3.64	1.51	1364	0.01	n.s.
学校行事（体育祭・文化祭等）への参加	4.21	0.95	346	4.24	0.95	1364	-0.03	n.s.
授業外でのプロジェクト・探究活動への参加	4.04	1.05	346	3.27	1.40	1363	0.58	***
ボランティア活動への参加	3.93	1.13	346	2.88	1.47	1364	0.75	***
海外との交流活動への参加	3.38	1.37	346	2.45	1.49	1365	0.64	***
留学（短期・長期・交換等）	2.20	1.47	346	1.92	1.44	1366	0.20	**

***: $p < .001$, **: $p < .01$, n.s.: not significant

M = 平均値、 SD = 標準偏差、 n = 回答数、 g = 効果量（Hedges の補正）、 p = 有意確率

⑥放課後の学習時間と学習内容について【質問 5】

【文責：松本】

質問 5 は、学期中の平日放課後の学習時間に関して、1 日あたりの平均を質問したものである。時間は、「x 時間 y 分」のように尋ねたが、分析は分単位に換算して実施した【表 1-8】。

DP 生・non-DP 生間で平均値を Welch の t 検定によって比較したところ、全ての項目で統計的有意差がみられた。そのうち、「1 日あたりの放課後の学習時間（分）」、「①高校の授業の予習、復習、課題（問題を解くなど）」、「③調べ学習、探究・プロジェクト活動、課題論文」「⑤資格試験に向けた勉強（英検、TOEIC、漢検など）」は DP 生の平均値が non-DP 生のそれより高かった。DP 生は non-DP 生より 1 日あたりの学習時間が長い傾向にあり、その傾向は、DP 生が学校の授業のための予復習、調べ学習、プロジェクト活動や課題論文のような探究的な学習、資格試験の勉強に時間を長く充てるためであることがうかがえた。他方、「②塾・予備校の予習、復習、課題（問題を解くなど）」、「④大学受験の準備（過去問を解く、小論文を書くなど）」の 2 項目は、DP 生の平均値が non-DP 生のそれより低かった。non-DP 生は、塾や予備校での学習を含め、大学進学のための学習に時間を長く充てることがうかがえた。学習時間の違いもさることながら、DP 生と non-DP 生とを比較すると、行っている学習の目的や内容が異なることがうかがえた。

確かに、DP 生は non-DP 生よりも「⑤資格試験に向けた勉強（英検、TOEIC、漢検など）」を多く行っている。しかしこのことから直ちに、それぞれの生徒がどのような資格を取得しようとしているかはわからない。DP 生・non-DP 生の日々行う学習の目的や内容が異なっていたことをふまえれば、目的に応じて取得しようとする資格も異なることが推察され、さらに詳細な分析を行って検討する必要がある。

【表 1-8】放課後の学習時間と学習内容について

	DP 生			non-DP 生			g	p
	M	SD	n	M	SD	n		
1 日あたりの放課後の学習時間（分）	189.28	90.01	347	171.54	115.94	1378	0.16	**
①高校の授業の予習、復習、課題（問題を解くなど）	86.47	71.43	335	42.65	53.45	1281	0.76	***

②塾・予備校の予習、復習、課題（問題を解くなど）	13.07	34.11	304	48.47	76.45	1228	-0.50	***
③調べ学習、探究・プロジェクト活動、課題論文	51.36	53.30	321	15.65	44.66	1163	0.77	***
④大学受験の準備（過去問を解く、小論文を書くなど）	57.35	64.91	324	95.46	98.95	1291	-0.41	***
⑤資格試験に向けた勉強（英検、TOEIC、漢検など）	23.25	30.65	314	16.17	39.82	1168	0.19	***

***: $p < .001$, **: $p < .01$

M = 平均値、 SD = 標準偏差、 n = 回答数、 g = 効果量（Hedges の補正）、 p = 有意確率

⑦高校の成績と英語運用能力に関する資格について【質問 6】

【文責：松本・山中】

質問 6 では、まず、高校の成績に関して、各生徒がどのような位置づけにあると考えているかを、「上のほう」、「まんなか」、「下のほう」の 3 つの区分で質問した。【表 1-9】より、各区分について見ると、DP 生・non-DP 生ともに約半数が自身の成績を「まんなか」と考えていた。しかし、それぞれの生徒について、残る約半数の生徒の分布を調べると、DP 生で「上のほう」と回答する生徒（36.1%）が目立つのに対し、non-DP 生で「下のほう」と回答する生徒（24.6%）が目立っている。

このような成績の位置づけに関する認識が DP 生と non-DP 生の間で異なっているかを調べるため、DP 生であるか否かを独立変数、自身の成績が「上のほう」を 3、「まんなか」を 2、「下のほう」を 1 とする従属変数を設定し、順序ロジスティック回帰分析を実施した。その結果が【表 1-9-1】である。回帰分析の結果、DP 生は、「下のほう」ではなく「まんなか」または「上のほう」を選ぶか、もしくは「下のほう」または「まんなか」ではなく「上のほう」を選ぶ確率が、non-DP 生の 1.64 倍であることが明らかになった。独立変数が従属変数の分散のどの程度を説明できているかを判断する目安となる Nagelkerke's R^2 の値から、DP 生であるか否かは成績認識の差異の 1.2% を説明していることがわかる。以上より、DP 生は non-DP 生よりも自身の成績を相対的に高いと認識する傾向にあることが示されたといえる。DP 生と non-DP 生の成績に関する自己認識の違いは、自己肯定感等にもつながっている可能性があると考えられる。

【表 1-9】高校の成績について

	DP 生		non-DP 生	
	%	n	%	n
上のほう	36.1	125	25.3	350
まんなか	46.8	162	50.1	695
下のほう	17.1	59	24.6	341

【表 1-9-1】高校の成績について

B	$\exp(b)$	n	p
-----	-----------	---	---

DP 生	0.50	1.64	1732	***
------	------	------	------	-----

Nagelkerke's $R^2 = 0.012$

***: $p < .001$

B = 偏回帰係数、 $\exp(b)$ = オッズ比、 n = 回答数、 p = 有意確率

次に、取得している英語運用能力に関する資格について質問した。【表 1-10】より、DP 生も non-DP 生も、過半数が英検（実用英語技能検定）を取得しており、高校生にとって英検がメジャーな資格であることがうかがえた。その他の資格について、DP 生は non-DP 生より、海外大学への進学に用いられやすい TOEFL や IELTS アカデミック・モジュールの取得／受検率が目立って高かった。海外大学への進学を念頭に置き、TOEFL や IELTS アカデミック・モジュールのような資格試験の受検に DP 生は向かいやすいのだろう。TOEIC やその他についても同様の傾向がみられた。「資格は取得していない」に目を移すと、DP 生より non-DP 生でそのように回答した生徒の割合が高かった。non-DP 生の場合、英語資格の事前取得を必要としない者がおり、別途大学進学時に用いる入試区分との関連を検討しなければならないが、non-DP 生は、一般選抜のように、各大学が入試として独自に実施する試験を用いようとする生徒が DP 生より多いと考えられる。

【表 1-10】英語運用能力に関する資格を取得／受検している生徒の割合について

	DP 生		non-DP 生	
	%	n	%	n
英検（実用英語技能検定）	81.5	291	76.6	1075
TOEFL	25.8	93	3.1	43
TOEIC	5.6	20	4.5	63
IELTS アカデミック・モジュール	45.1	161	3.1	44
その他	5.0	18	4.3	61
資格は取得していない	3.1	11	14.9	209
回答者合計		357		1403

注：複数回答方式のため、割合の合計は 100%を超える。割合は各区分の回答者数を分母として算出している。

最後に、取得している英語運用能力に関する資格試験のスコアについて質問した。ただし、この質問は、回答の解釈に注意を要する。TOEFL は iBT と ITP のスコアが、TOEIC は TOEIC、TOEIC Bridge、L&R と S&W のスコアが混在していることがうかがえるためである。そのため、ここでは、英検（実用英語技能検定）、TOEFL iBT、IELTS アカデミック・モジュールに着目し、DP 生と non-DP 生の平均値を比較した。t 検定を実施するため、英検の級には、1 級に 5、準 1 級に 4、2 級に 3、準 2 級に 2、3 級以下に 1 を割り当てた。いずれの試験においても、数値が高

いほど、英語運用能力が高いことを意味している。なお、明らかに他の試験のスコアと誤っている値、その試験で発生し得ない値、0 を分析から除外した。

【表 1-11】より、DP 生・non-DP 生間で平均値を Welch の t 検定によって比較したところ、英検と IELTS アカデミック・モジュールで、DP 生が non-DP 生より高かった。TOEFL iBT については、DP 生のスコアが non-DP 生より高く、効果量も中程度に至っているが、有効回答者数が少ないため、統計的な差があるとまではいえない結果となった。

総じて DP 生は、英語運用能力に関する資格を大学進学において用いる可能性が高く、準備を行っている様子がうかがえる。また、DP の学びそのものも、内容面において英語との親和性が高いと考えられる。

【表 1-11】英語運用能力に関する資格のスコアについて

	DP 生			non-DP 生			g	p
	M	SD	n	M	SD	n		
英検（実用英語技能検定）	3.6	0.9	290	2.8	0.9	1073	0.92	***
TOEFL iBTスコア	91.2	13.8	84	83.6	18.5	27	0.51	n.s.
IELTSアカデミック・モジュールスコア	6.4	0.9	161	6.0	0.8	39	0.45	**

***: $p < .001$, **: $p < .01$, n.s.: not significant

M = 平均値、 SD = 標準偏差、 n = 回答数、 g = 効果量（Hedges の補正）、 p = 有意確率

⑧能力獲得に関する自己認識について【質問 7】

【文責：松本・山中】

質問 7 では、調査時点で身につけている能力への自己認識について質問した。これまでに継続的に調査をしてきた質問項目をベースとして、DP 生の調査対象者の増加とともに詳細な分析ができることを狙って設定した項目である。選択肢（「5：身につけている」～「1：身につけていない」）に与えられた値をポイントとみなし、DP 生・non-DP 生間で平均値を Welch の t 検定によって比較した。

【表 1-12】より、25 項目中 23 項目で平均値に統計的有意差がみられた。有意差がみられた項目のうち、1 項目を除いて、non-DP 生よりも DP 生の平均値が高かった。例えば、「グローバルな社会の一員としての自覚」や『外国語（英語等）』に関する能力で DP 生の平均値が non-DP 生を上回る一方、『国語（現代文、古典等）』に関する能力のみ、non-DP 生のほうが高い平均値を示した。なお、「自分の良心や社会の規範に沿って行動する力」と「その他の教科（芸術、体育、専門等）に関する能力」に関しては、DP 生と non-DP 生の間に有意な差が認められなかった。

以上から、DP 生が特定の能力のみ高いというよりも、複数の側面にわたって高い自己認識を持っていることが見出されたといえる。ただし、non-DP の場合もすべての項目において理論的中間値である 3 を超えるポイントを示しているため、non-DP 生の平均値が絶対的に低いわけでないことを指摘できよう。

【表 1-12】能力獲得に関する自己認識について

	DP 生			Non-DP 生			<i>g</i>	<i>p</i>
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>		
(1) 興味のある対象について深く学習し、理解する姿勢	4.38	0.75	338	4.18	0.85	1293	0.23	***
(2) 人文・社会・自然科学を横断する幅広い知識	3.87	0.95	338	3.36	1.06	1294	0.49	***
(3) 困難な課題に取り組む力	4.06	0.82	338	3.65	1.03	1293	0.42	***
(4) 他者と意思疎通をはかり人間関係を構築する能力	4.17	0.91	338	3.96	1.03	1291	0.22	***
(5) 自分の良心や社会の規範に沿って行動する力	4.22	0.79	337	4.17	0.83	1289	0.06	n.s.
(6) 人や社会によって違った考えや文化があることへの理解	4.59	0.66	338	4.35	0.78	1291	0.31	***
(7) 他者を尊重し、ともに行動する力	4.36	0.75	338	4.25	0.83	1294	0.13	*
(8) 予測不可能な事態に直面しても挑戦する姿勢	4.04	0.84	338	3.72	0.98	1292	0.34	***
(9) 自分の生活と自然や社会とのつながりの理解	3.94	0.88	338	3.64	1.00	1293	0.30	***
(10) 自分の行動を評価し、次に生かす力	4.11	0.81	338	3.79	0.95	1290	0.35	***
(11) 問題が起きたときに解決する力	4.16	0.76	338	3.86	0.89	1292	0.35	***
(12) 自ら率先して行動する力	3.98	0.95	338	3.65	1.10	1288	0.31	***
(13) 自分自身で計画を立て、それに基づいて実行する力	3.63	1.05	336	3.42	1.18	1289	0.18	**
(14) 情報を処理し、活用する力	4.04	0.87	336	3.74	0.97	1290	0.32	***
(15) 地域社会の一員としての自覚	3.64	1.02	338	3.34	1.15	1292	0.27	***
(16) 日本社会の一員としての自覚	3.69	1.04	337	3.43	1.15	1293	0.23	***
(17) グローバルな社会の一員としての自覚	3.95	1.01	338	3.38	1.17	1291	0.50	***
(18) チームで協力して行動する力	4.28	0.77	337	4.02	0.96	1292	0.29	***
(19) リーダーシップの能力	3.83	1.02	338	3.31	1.20	1291	0.45	***
(20) 「国語（現代文、古典等）」に関する能力	3.10	1.17	338	3.36	1.10	1290	-0.22	***
(21) 「社会科（歴史、地理、公民等）」に関する能力	3.55	1.07	338	3.33	1.11	1291	0.19	***
(22) 「数学」に関する能力	3.44	1.06	338	3.02	1.21	1290	0.36	***
(23) 「理科（物理、化学、生物、地学等）」に関する能力	3.51	1.06	338	3.02	1.21	1288	0.42	***
(24) 「外国語（英語等）」に関する能力	4.25	0.89	338	3.68	1.06	1290	0.55	***

(25)その他の教科（芸術、体育、専門等）に関する能力

3.86 1.01 338 3.74 1.04 1287 0.12 n.s.

***: $p < .001$, **: $p < .01$, *: $p < .05$, n.s.: not significant

M = 平均値、 SD = 標準偏差、 n = 回答数、 g = 効果量（Hedges の補正）、 p = 有意確率

⑨満足度と将来について【質問 8】

【文責：松本・山中】

質問 8 では、満足度と将来のことについて質問した。選択肢（「5：とてもそう思う」～「1：まったくそう思わない」）に与えられた値をポイントとみなし、DP 生・non-DP 生間で平均値を Welch の t 検定によって比較した。

【表 1-13】より、3 項目すべてで平均値に統計的有意差がみられた。高校での授業を含む自身の学びや能力への満足、将来展望について、DP 生が non-DP 生より平均値が大きかった。DP 生は、自身が選択した DP というプログラムの学びや、そこで身につけた能力に満足しており、教育プログラムが生徒にとって刺激的なものであることがうかがえる。

満足度に関する結果からは、DP 生が自身の学習経験や高校生活を肯定的に捉える傾向が確認された。これは、生徒自身の主観的評価ではあるものの、学習時間の質との関連を検討する上で重要な示唆を与える。

【表 1-13】満足度について

	DP 生			Non-DP 生			g	p
	M	SD	n	M	SD	n		
学校の授業などを通じた今の自分の学習に満足している	3.70	1.06	353	3.32	1.13	1393	0.34	***
これまでの学校での学習やさまざまな経験で得られた 今の自分の能力に満足している	3.56	1.15	353	3.28	1.19	1394	0.24	***
高校生活全体に満足している	3.96	1.00	352	3.84	1.06	1392	0.12	*

***: $p < .001$, *: $p < .05$

M = 平均値、 SD = 標準偏差、 n = 回答数、 g = 効果量（Hedges の補正）、 p = 有意確率

問 8 ではさらに、将来についての検討状況を尋ねた。選択肢は、「5：とてもそう思う」～「1：まったくそう思わない」の 5 件法である。

【表 1-14】は、Welch の t 検定を用いて DP 生と non-DP 生の平均値を比較した結果である。将来の学びたい分野と行きたい大学について、DP 生は non-DP 生よりも検討していると認識する傾向にあることが分かる。

【表 1-14】将来について

	DP 生			Non-DP 生			g	p
	M	SD	n	M	SD	n		

将来、学びたい分野について考えている	4.60	0.72	353	4.45	0.87	1393	0.17	**
将来、行きたい大学について考えている	4.65	0.66	352	4.50	0.86	1391	0.18	***
将来、やりたい仕事について考えている	4.29	0.97	353	4.19	1.08	1393	0.09	n.s.

***: $p < .001$, **: $p < .01$, n.s.: not significant

M = 平均値、 SD = 標準偏差、 n = 回答数、 g = 効果量 (Hedges の補正)、 p = 有意確率

⑩高校卒業後の進路と将来展望について [質問 9]

[文責：御手洗]

質問 9 では、卒業後の進路および将来の展望について質問をした。希望する卒業後の進路について DP 生・non-DP 生別の結果をまとめた。

【表 1-15】は、それぞれ第一希望・第二希望として選択された進路をまとめた結果を示している。第一希望をみると、DP 生も non-DP 生も、国内大学への進学を選択しているが、DP 生では海外大学への進学を希望する割合が、non-DP 生よりも高くなっている。例えば、海外大学への進学（私費）を第一希望として挙げた DP 生の割合は、non-DP 生の約 10 倍であり、DP 生の間では、海外進学が進路の選択肢として比較的視野に入れられていることがうかがえる。一方、non-DP 生では、海外大学への進学を希望する割合は限定的であり、国内大学への進学希望が大半を占めていた。

【表 1-15】高校卒業後の進路について

進路希望	DP 生 n (%)		non-DP 生 n (%)	
	第一希望	第二希望	第一希望	第二希望
国内大学（国公立）への進学	86 (24.9)	45 (19.6)	501 (36.7)	92 (13.6)
国内大学（私立）への進学	129 (37.4)	78 (33.9)	760 (55.7)	429 (63.3)
海外大学への進学（私費）	52 (15.1)	52 (22.6)	20 (1.5)	39 (5.8)
海外大学への進学 （奨学金等の経済支援が前提）	63 (18.3)	39 (17.0)	16 (1.2)	20 (2.9)
未定・わからない	9 (2.6)	15 (6.5)	7 (0.5)	74 (10.9)
その他	6 (1.7)	1 (0.4)	60 (4.4)	24 (3.5)
回答者数	345	230	1364	678

次に、高校卒業後に進学・進路先として希望する専門分野について、第一希望および第二希望を尋ねた。【表 1-16】は、DP 生および non-DP 生それぞれについて、各分野を第一希望、第二希望として選択した人数と割合 (%) を示している。

まず、第一希望を見ると、DP 生では「人文・社会系」が 42.0%と最も高く、次いで「理・工・農系」(20.4%)、「その他」(16.6%)が続いた。一方、non-DP 生においても「人文・社会系」が 36.7%で最も高いものの、その割合は DP 生より低く、「理・工・農系」(21.6%)や「医・歯・薬・

獣医系」(8.6%)、「看護・保健・衛生系」(5.1%) など、専門分野への志向が相対的に分散している傾向が見られた。

第二希望では、両群ともに第一希望とは異なる分野を選択する傾向が確認されたが、両群ともに、「教育・家政・福祉系」と「芸術・スポーツ系」の希望率が顕著に増加していることが分かる。

【表 1-16】卒業後に進みたい分野について

	DP生		non-DP生	
	第一希望	第二希望	第一希望	第二希望
人文・社会系	144 (42.0)	49 (30.1)	499 (36.7)	125 (24.3)
理・工・農系	70 (20.4)	27 (16.6)	294 (21.6)	86 (16.7)
医・歯・薬・獣医系	30 (8.7)	16 (9.8)	117 (8.6)	53 (10.3)
看護・保健・衛生系	6 (1.7)	3 (1.8)	69 (5.1)	26 (5.1)
教育・家政・福祉系	18 (5.2)	26 (16.0)	96 (7.1)	101 (19.6)
芸術・スポーツ系	18 (5.2)	22 (13.5)	106 (7.8)	85 (16.5)
その他	57 (16.6)	20 (12.3)	180 (13.2)	38 (7.4)
回答者合計	343	163	1361	514

⑪周囲の環境について [質問 10]

【文責：松本】

質問 10 では、生徒を取り巻く周囲の環境について質問した。選択肢（「5：とてもあてはまる」～「1：まったくあてはまらない」）に与えられた値をポイントとみなし、DP 生・non-DP 生間で平均値を Welch の t 検定によって比較した。

【表 1-17】より、DP 生・non-DP 生間で平均値に統計的有意差がみられたのは、13 項目中 9 項目であった。そのすべてで、DP 生が non-DP 生より平均値が高かった。「本やインターネット環境など家で学ぶ環境が十分にある」、「親や保護者は自分の勉強のために必要なものを買ってくれる」、「勉強のためであれば親や保護者は積極的に援助してくれる」からは、学習のための環境整備に DP 生の家庭が積極的である様子をうかがえる。「家族とよく海外の経験や国際的な時事問題を話したりする」、「親や保護者が仕事などで英語などの外国語を使っている」、「友達とよく海外の話題（SNS、音楽など）を話したりする」からは、身の回りにいる家族や友人が海外の話題に関心を持っており、英語が日常的に使われているなど、国際性の高い環境にあることを読み取れる。また、「周りの同級生は授業に熱心に取り組んでいる」「周りの同級生は普段からよく勉強を教えてくれる」からは、熱心に学習に臨み、友人を交えて学び合う姿勢もうかがえる。

ただし、これらの項目について、たしかに DP 生は non-DP 生より平均値が高いが、この結果は、non-DP 生の平均値が低いことを意味するものではない。DP 生の平均値が際立って高いと解釈すべきであろう。さらに、「普段の生活の中でお金に困っていると感じることがある」、「親や保護者は学校生活について相談に乗ってくれる」などでは統計的有意差が見られなかったことをふ

まえると、DP 生・non-DP 生とも、保護者は生徒の学習に高い意識を持ち、その支援を積極的に行っていることがうかがえる。

【表 1-17】 周囲の環境について

	DP 生			Non-DP 生			<i>g</i>	<i>p</i>
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>		
(1) 本やインターネット環境など家で学ぶ環境が十分にある	4.72	0.57	338	4.60	0.67	1268	0.18	**
(2) 親や兄姉などの家族は普段からよく勉強を教えてくれる	2.54	1.42	338	2.47	1.41	1271	0.05	n.s.
(3) 普段から家族が本や新聞を読んでいるのをよく見る	3.19	1.44	337	2.97	1.44	1268	0.16	*
(4) 親や保護者は自分の勉強のために必要なものを買ってくれる	4.66	0.66	337	4.54	0.79	1270	0.15	**
(5) 勉強のためであれば親や保護者は積極的に援助してくれる	4.65	0.74	338	4.56	0.77	1269	0.13	*
(6) 普段の生活の中でお金に困っていると感じることがある	2.24	1.32	338	2.23	1.28	1268	0.01	n.s.
(7) 親や保護者はあなたのやりたいことを応援してくれる	4.62	0.69	338	4.55	0.78	1269	0.09	n.s.
(8) 親や保護者は学校生活について相談に乗ってくれる	4.25	0.93	338	4.18	1.05	1269	0.07	n.s.
(9) 周りの同級生は授業に熱心に取り組んでいる	4.20	0.91	338	3.92	1.07	1268	0.28	***
(10) 周りの同級生は普段からよく勉強を教えてくれる	4.00	1.11	335	3.71	1.16	1269	0.26	***
(11) 家族とよく海外の経験や国際的な時事問題を話したりする	3.67	1.27	338	3.04	1.43	1266	0.45	***
(12) 親や保護者が仕事などで英語などの外国語を使っている	2.71	1.71	338	1.96	1.42	1266	0.50	***
(13) 友達とよく海外の話題（SNS、音楽など）を話したりする	3.82	1.23	338	3.23	1.44	1268	0.42	***

***: $p < .001$, **: $p < .01$, *: $p < .05$, n.s.: not significant

M = 平均値、*SD* = 標準偏差、*n* = 回答数、*g* = 効果量（Hedges の補正）、*p* = 有意確率

【高校 3 年生調査のまとめ】

【文責：御手洗】

本調査は、IB ディプロマ・プログラム（DP）を導入する一条校 30 校に在籍する高校 3 年生 1,760 名を対象に、DP 履修をほぼ完了した段階における学習経験、態度・状況、能力の自己認識、

進路希望、家庭を含む学習環境等を把握し、DP 生と non-DP 生の比較を通じて DP 履修の到達点としての特徴を検討したものである。調査は 2024 年 9 月～12 月に実施し、質問紙（82.1%）およびオンライン（17.9%）により有効回答を得た。

まず基本属性として、回答者全体に占めるフル・ディプロマ履修生（DP 生）は 20.3%であり、分析では科目履修生と DP 非履修生を統合して non-DP 生（79.7%）として扱った。性別構成は全体・群別とも大きな偏りはみられなかった。一方で、学校経験には DP 生と non-DP 生で違いがみられた。DP 生では MYP 経験や海外の学校経験の割合が相対的に高く、non-DP 生では「該当経験なし」が多数を占めた。これらは、DP 履修以前の教育経験の違いが一定程度存在することを示している。

学習に関わる態度・状況（質問 2）では、33 項目中 23 項目で DP 生が non-DP 生を有意に上回り、主体的な学習行動、課題解決志向、社会・環境への関心、挑戦志向などにおいて DP 生が高い傾向が示された。他方で、対人配慮や規範意識、健康行動等の一部では有意差がみられず、基本的な生活態度や対人面の基盤的側面は群間で共通している可能性が示唆された。

授業中の学習経験（質問 3）では、18 項目すべてで有意差が確認され、DP 課程では探究のプロセス（問いの設定、計画、情報の信頼性確認、資料探索等）や英語での情報収集、論述・エッセイ作成、フィードバック経験、読書、国際的課題の検討といった学習活動が体系的に組み込まれていることが、効果量の大きさも含めて明確に示された。一方で、教科書中心・暗記・一問一答といった再生型学習は non-DP 生で相対的に高く、教育課程上の学習経験の構造的差異が量的に確認された。

学校内外の活動（質問 4）では、学校行事や部活動等の制度的に参加が促されやすい活動では DP 生 non-DP 生で違いはみられなかった一方、授業外の探究活動、ボランティア、海外交流、留学といった自己選択性が高い活動で DP 生の参加度が有意に高かった。これは、DP 生が学校外を含む多様な学習機会に積極的に関与している傾向を示している。

放課後の学習（質問 5）では、DP 生の学習時間が有意に長い傾向が確認され、とくに学校の授業の予復習や課題、探究・プロジェクト活動、課題論文等に時間を充てる傾向が強かった。一方、non-DP 生は塾・予備校学習や大学受験対策に時間を充てる傾向が相対的に強く、学習時間の長さだけでなく、学習内容・目的の違いが示された。

学業成績と英語資格（質問 6）では、自己認識として DP 生は「成績が上のほう」の割合が相対的に高く、non-DP 生では「下のほう」が相対的に高い分布がみられた。また、英語資格は両群で英検が多数を占める一方、DP 生では TOEFL や IELTS (Academic) など海外進学で用いられやすい資格の取得率が高く、進路志向や準備状況の違いがうかがえた。スコア比較では、英検と IELTS (Academic) で DP 生が有意に高かった。

能力獲得の自己認識（質問 7）では、多くの項目で DP 生が non-DP 生を上回り、学びの姿勢、課題対応、協働性、国際理解、リーダーシップ等の自己評価が総じて高い傾向が確認された。もっとも、DP 生はすべての側面で一様に高いわけではなく、non-DP 生に比べて国語能力の自己評価が低い傾向にあることが見出された。

満足度と将来について（質問 8）では、学校での学習や生活への満足度、将来に関する検討状況において、DP 生は non-DP 生よりも概して高い自己評価を示した。

進路希望（質問 9）では、第一希望のみの集計では、non-DP 生は国内大学志向が大半を占めるのに対し、DP 生では海外大学進学を第一希望とする割合が相対的に高かった。

最後に周囲の環境（質問 10）では、学習環境や保護者の学習支援、同級生の学習志向、家族・友人との国際的話題等に関して DP 生が高い項目が多く、DP 生が比較的国際性の高い言語・文化的環境や学習支援環境に置かれている可能性が示された。一方で、経済的困難感や保護者の相談対応など一部項目では差がみられず、支援の在り方には DP 生と non-DP 生では共通する側面も確認された。

以上より、DP 生は non-DP 生に比べて、授業内外で探究的・言語的・国際的な学習経験により多く関与し、主体的学習態度や能力に関する自己認識、学習への満足、海外進学を含む進路の射程において特徴的な傾向を示した。他方で、本調査は横断調査であり、また DP 履修以前の教育経験や家庭環境等の差異も示唆されることから、DP 履修そのものの影響を解釈するには背景要因を考慮した分析が必要である。今後は、同一設計による継続調査を通じて、DP 履修初年度にあたる高校 2 年生から履修最終年度である高校 3 年生に至る学習経験や意識の変化を捉えるとともに、高校卒業後の進路段階を対象とした修了生調査との接続を図ることにより、DP 履修の効果や差異が時間的にどのように形成され、顕在化していくのかを検討する必要がある。

(4) 2025 年度実施高校 2 年生調査：調査の概要

【御手洗】

本調査は、2024 年度から 2027 年度にかけて実施する継続調査の一環として、毎年度、高校 2 年生（DP 初年度）および高校 3 年生（DP 最終年度）を対象に実施している質問紙調査である。本調査の目的は、DP 履修の初期段階から修了段階に至るまでの学習経験や意識、進路志向等を、学年別かつ年度別に把握し、DP 履修の進行に伴う変化や傾向を明らかにすることにある。

2025 年度調査は、DP 履修初年度にあたる高校 2 年生と、DP 履修最終年度にあたる高校 3 年生を同一年度内で比較可能とする点に特徴がある。特に、高校 2 年生調査については、DP 履修開始直後の学習経験や自己認識のあり方を量的に把握することにより、後続年度における同学年調査や高校 3 年生調査の結果を解釈するための基礎的参照点を提供する点に意義がある。

なお、DP 履修初年度においては DP 生の回答者数に一定の制約があるものの、本調査では毎年度同様の設計で調査を継続することにより、単年度では把握が難しい傾向についても、年度間の比較を通じて検討することを可能としている。

調査内容は、生徒の基本属性、学習態度や状況、高校の授業における学習経験、学校内外の活動状況、放課後の学習時間および学習内容、高校での成績や英語運用能力に関する資格、身につけている資質・能力、学校生活や将来に対する意識、進路希望および将来展望、家庭を中心とした学習環境等、多様な項目で構成されている。これらの項目は、先行研究における調査枠組みを踏まえつつ、生徒の学習経験や成長を総合的に把握することを目的として設定されたものである。

(5) 高校 2 年生調査：全体集計の結果

調査対象は、IB ディプロマ・プログラム（DP）を導入する高等学校（一条校）31 校に在籍する高校 2 年生 2,321 名であり、DP 生および non-DP 生を含んでいる。調査は集合調査法により実施し、調査協力校の状況に応じて、質問紙による回答および WEB（オンライン）による回答のいずれかの方法を採用した。なお、両調査方法における質問項目および内容は同一である。

調査時期は、2025 年 4 月から 5 月であった。

調査方法別の回答数は、質問紙調査が 1999 名（86.1%）、オンライン調査が 322 名（13.9%）であり、2,321 名から回答を得た。

<2025 年度高校 2 年生調査概要>

調査目的	本調査の目的は、日本における IB の教育効果について、生徒の成長・変化をより詳細に明らかにすることである。 また、高校生が学校内外でどのような学習活動や経験をしているかについて実態を明らかにし、生徒の学習状況や活動の多様性、またそれらが生徒の成長や進路選択にどのように影響を与えているかを把握する。
調査対象	IB のディプロマ・プログラム（DP）を導入する高等学校（一条校）に在籍する高校 2 年生（DP 生・non-DP 生）2,321 名（合計 31 校）

調査方法	集合調査法 調査協力校の要望に応じて、以下の2つの方法で実施した。 ①質問紙による回答 ②WEB（オンライン）による回答 ※調査票の内容は同一である。
調査時期	2025年4月～5月

<質問項目>

区分	質問項目
質問1. 生徒自身のこと	(1)年 組 番 (2)学籍番号（生徒番号）
	(3)性別 (4)ディプロマ・プログラム（DP）の履修
	(5)経験した学校や教育プログラム
質問2. 態度や状況に関すること	(1)知らないことがあると、よく質問をしたり調べたりする（他、全38項目、各1～5点）
質問3. 高校の授業での経験に関すること	(1)先生の話から知識を得る。（他、全18項目、各1～5点）
質問4. 学校での探求型学習に関すること	学習活動の内容、成長した点や身についてしたこと
質問5. 高校生活の中で、意欲的に参加している活動に関すること	(1)生徒会・委員会活動への参加（他、全7項目、各1～5点）
質問6. 放課後の学習時間と学習内容に関すること	(1)平日1日あたりの放課後の学習時間
	(2)平日1日あたりの放課後の学習時間の配分
質問7. 高校の成績と英語運用能力に関する資格について	(1)現在の成績
	(2)現在取得している英語運用能力に関する資格
質問8. 身についている資質能力に関すること	(1)興味のある対象について深く学習し、理解する姿勢（他、全26項目、各1～5点）
質問9. 現在や将来に関すること	(1)学校生活について（全3項目、各1～5点）
	(2)将来について（全3項目、各1～5点）
質問10. あなたの進路と将来の展望に関すること	(1)高校卒業後の進路希望
	(2)進みたい専門分野
	(3)高校やその後の学習を通じて、将来やりたいこと
質問11. 周囲の環境に関すること	(1)本やインターネット環境など家で学ぶ環境が十分にある（他、全13項目、各1～5点）

(6) 高校2年生調査：DP生とnon-DP生の傾向の比較

①基本属性について【質問1】

【山中】

質問1(4)では、IBディプロマ・プログラム（DP）の履修状況を尋ねた【表1-18】。回答者のうち、フル・ディプロマ履修生は19.6%、科目履修生（サーティフィケート取得を目指す者）は0.9%、

DP 非履修生は 79.5%を占めており、DP 生と non-DP 生の割合は、高校 3 年生調査の構成比と同じ程度であるといえる。

調査対象の構成が学年間で大きく異ならないことから、今後、学年をまたいだ検討を行う際の基礎資料として位置付けることができる。

【表1-18】 DP履修状況

履修状況	件数	割合 (%)
DP生 (フル・ディプロマ)	455	19.6
DP科目履修生／サーティフィケート	20	0.9
non-DP生	1846	79.5
合計	2321	100.0

【表 1-19】は、本研究における分析区分別の回答者内訳を示している。分析では、DP の制度的影響を検討する目的から、フル・ディプロマ履修生を DP 生と定義し、科目履修生および DP 非履修生を統合して non-DP 生として扱った。その結果、分析対象者の内訳は、DP 生が 19.6%、non-DP 生が 80.4%となった。

【表1-19】 分析区分の回答者内訳

分析区分	件数	割合 (%)
DP生 (フル・ディプロマ履修)	455	19.6
non-DP生 (科目等履修+DP非履修)	1866	80.4
合計	2321	100.0

【表 1-20】は、回答者の性別構成を全体および DP 生・non-DP 生別に示したものである。全体では、男性が 44.6%、女性が 55.2%を占めている。DP 生では女性の割合が 59.4%とやや高く、DP 生のうち 5 人に 3 人が女性である。non-DP 生では男性が 45.7%、女性が 54.2%となっている。いずれの区分においても、性別構成に著しい偏りはみられない。

【表1-20】 回答者の性別構成 (全体・DP生・non-DP生)

性別	全体 n (%)		DP生 n (%)		non-DP生 n (%)	
男性	1026	(44.6)	182	(40.4)	844	(45.7)
女性	1270	(55.2)	268	(59.4)	1002	(54.2)
その他	3	(0.1)	1	(0.2)	2	(0.1)
合計	2299	(100.0)	451	(100.0)	1848	(100.0)

②学校経験について [質問 1]

[山中]

質問 1 (5) では、回答者がこれまでに経験した学校や教育プログラムについて尋ねた。【表 1-21】は、全体および DP 生・non-DP 生別にその結果を示したものである。DP 生に着目すると、海外の学校経験や IB 中等教育プログラム (MYP) の経験割合が相対的に高い。一方、non-DP 生においては、該当経験がないとする回答が多いものの、10 人に 1 人は海外の現地校を経験しており、5 人に 1 人は MYP 経験者であった。

【表1-21】 学校・教育プログラムの経験（全体・DP生・non-DP生）

学校・教育プログラム経験	DP生 n (%)		non-DP生 n (%)	
インターナショナルスクール（日本）	60	(13.5)	108	(6.0)
インターナショナルスクール（海外）	57	(12.9)	65	(3.6)
海外の現地校	114	(25.7)	195	(10.8)
海外の日本人学校	46	(10.4)	78	(4.3)
国際バカロレア初等教育プログラム (PYP)	27	(6.1)	44	(2.4)
国際バカロレア中等教育プログラム (MYP)	200	(45.1)	349	(19.4)
あてはまるものはない	115	(26.0)	1217	(67.5)
回答者合計	443		1803	

注：複数回答方式のため、割合の合計は100%を超える。割合は各区分の回答者数を分母として算出している。

③自身の態度や状況について【質問 2】

【山中】

質問 2 では、自身の態度や行動に関する状況を尋ねた。本設問は、能力獲得に関しては、自己認識を直接的に問う質問項目（質問 8）を補完する位置づけとして、日常的な学習行動や対人行動、社会的態度など、実際の行動ベースの側面を幅広く捉えることを目的として設計されたものである。回答は 5 件法（「5：とてもあてはまる」～「1：まったくあてはまらない」）で得点化し、項目ごとに平均値を算出した。DP 生と non-DP 生の傾向の差異を検討するため、Welch の t 検定を行った【表 1-22】。

その結果、38 項目中 31 項目において、DP 生と non-DP 生との間に有意な平均値の差が認められた。特に、DP 生は「社会のことをよく勉強している」(DP 生 $M = 3.52$ 、non-DP 生 $M = 3.01$ 、 $g = 0.50$)、「学校とは関係なく自分から勉強する習慣ができています」(DP 生 $M = 3.50$ 、non-DP 生 $M = 2.91$ 、 $g = 0.51$) といった学習習慣を問う項目への評価が non-DP 生よりも高い傾向にある。また、「いつも新しいことに挑戦している」(DP 生 $M = 3.70$ 、non-DP 生 $M = 3.26$ 、 $g = 0.40$)、「他の国の人々の生活習慣や考え方の違いを調べることがよくある」(DP 生 $M = 3.79$ 、non-DP 生 $M = 3.33$ 、 $g = 0.39$)、「いつも何か新しいことを生み出そうとしている」(DP 生 $M = 3.50$ 、non-DP 生 $M = 3.07$ 、 $g = 0.38$) かどうかについても、DP 生のほうが高い傾向にあった。

その一方、「他の人の気持ちや考えを十分に理解することができている」($g = 0.06$)、「何かをするときに周囲の人を誘うことがよくある」($g = -0.01$)、「学校や社会の規則を守っている」($g = -0.07$)、「自分の良心や従うべきルールを持ち、それに基づいて行動している」($g = 0.10$)、「健康

的な生活に注意している」($g=-0.02$)、「体力・身体づくりをしている」($g=0.03$)、「ストレスを感じる事があってもリラックスして前向きにとらえることができる」($g=0.09$)の7項目については、DP生とnon-DP生の間に有意差は認められなかった。基本的な対人配慮、規範意識、生活習慣に関しては、群を問わずおおむね類似した状況にあることがうかがえる。

以上より、DP生は、主体的な学習行動、課題解決志向、社会的・文化的関心、変化への適応や挑戦といった側面において、non-DP生よりも高い傾向を示す一方で、基礎的な規範意識や健康行動、対人協調の一部については両者に違いがあまり認められなかった。

【表 1-22】自身の態度や状況について

	DP 生			Non-DP 生			g	p
	M	SD	n	M	SD	n		
(1) 知らないことがあると、よく質問をしたり調べたりする	4.25	0.75	445	3.97	0.86	1813	0.32	***
(2) 自分はどういう人間かを考えることがよくある	4.19	0.96	446	3.91	1.01	1812	0.27	***
(3) 社会のことをよく勉強している	3.52	0.95	444	3.01	1.01	1812	0.50	***
(4) 自然や環境のことをよく勉強している	3.31	1.09	443	2.91	1.07	1810	0.38	***
(5) 学校とは関係なく自分から勉強する習慣ができています	3.50	1.13	446	2.91	1.17	1811	0.51	***
(6) 問題が起きたときにはその理由を理解しようとする	4.18	0.81	445	3.95	0.83	1810	0.27	***
(7) 問題を解決するために自分ができていることを考える	4.20	0.76	445	4.00	0.82	1810	0.25	***
(8) 課題があれば自分で解決しようとする	4.11	0.80	445	3.91	0.85	1808	0.23	***
(9) 自分の気持ちや考えを十分に表現することができています	3.83	0.97	446	3.67	1.01	1812	0.16	**
(10) 他の人の気持ちや考えを十分に理解することができています	3.87	0.95	446	3.81	0.90	1813	0.06	n.s.
(11) 他の人の異なる意見を受け入れて価値を認めることができる	4.26	0.77	446	4.13	0.76	1801	0.17	**
(12) 異なる考え方や意見を調整して物事を進めることがよくある	4.11	0.82	446	3.93	0.83	1799	0.22	***
(13) 何かをするときに周囲の人を誘うことがよくある	3.85	1.08	444	3.86	1.08	1798	-0.01	n.s.
(14) 他の人たちと協力してチームで行動することができる	4.22	0.86	441	4.11	0.87	1798	0.12	*

(15) チームの中で自分の果たすべき役割を 率先して行っている	4.12	0.86	444	3.93	0.89	1796	0.22	***
(16) 自ら目標を設定し、その達成のために 行動することができている	3.88	0.94	444	3.64	1.02	1796	0.23	***
(17) グループの目的を示し、グループの人 たちを効果的に行動させることができ る	3.65	0.94	445	3.37	1.07	1799	0.27	***
(18) 学校や社会の規則を守っている	4.17	0.92	446	4.23	0.82	1801	-0.07	n.s.
(19) 自分の良心や従うべきルールを持ち、 それに基づいて行動している	4.33	0.77	446	4.25	0.77	1801	0.10	n.s.
(20) 自分の行動に責任をとることができる	4.11	0.82	445	3.99	0.89	1797	0.14	**
(21) 自分の態度や行動の正しさを確認する ことがよくある	4.17	0.87	445	4.03	0.89	1802	0.15	**
(22) 自分の態度や行動をよりよいものにし ようと努力している	4.29	0.76	446	4.13	0.85	1801	0.19	***
(23) 他の方は自分と違う意見を持っている ことを理解している	4.56	0.67	445	4.44	0.69	1798	0.17	***
(24) 世の中には色々な価値観や文化がある ことを理解している	4.68	0.60	443	4.54	0.67	1799	0.22	***
(25) 他国の人々の生活習慣や考え方の違 いを調べることがよくある	3.79	1.10	443	3.33	1.20	1799	0.39	***
(26) 困っている人を助けることがよくある	3.95	0.89	444	3.70	0.91	1798	0.27	***
(27) いつも新しいことに挑戦している	3.70	1.02	446	3.26	1.09	1798	0.40	***
(28) いつも何か新しいことを生み出そうと している	3.50	1.09	445	3.07	1.15	1801	0.38	***
(29) 自分の能力を有効に使うことができ ている	3.72	0.93	444	3.41	1.03	1797	0.30	***
(30) 健康的な生活に注意している	3.55	1.19	445	3.56	1.16	1801	-0.02	n.s.
(31) 体力・身体づくりをしている	3.47	1.23	445	3.43	1.35	1797	0.03	n.s.
(32) 自分で計画を立て、それに従って物事 を進めることができている	3.38	1.14	446	3.10	1.19	1797	0.23	***
(33) 社会や学校の一員としての義務と権利 を認識している	3.90	0.89	445	3.74	0.93	1800	0.17	**
(34) 社会や学校において、自分が行うべき 役割を果たしている	3.86	0.90	445	3.74	0.91	1798	0.13	*

(35) 社会や学校などの周囲をよくするために積極的に関わっている	3.73	1.00	446	3.48	1.05	1796	0.25	***
(36) 社会や学校において、周囲の人を助けたり協力することがよくある	3.96	0.88	445	3.80	0.90	1793	0.18	***
(37) 自分の周りに変化が起きてもうまく適応できている	3.87	0.97	446	3.70	1.03	1798	0.17	**
(38) ストレスを感じることがあってもリラックスして前向きにとらえることができている	3.36	1.23	446	3.24	1.25	1798	0.09	n.s.

***: $p < .001$, **: $p < .01$, *: $p < .05$, n.s.: not significant

M = 平均値、 SD = 標準偏差、 n = 回答数、 g = 効果量 (Hedges の補正)、 p = 有意確率

④授業中の学習経験について【質問3】

[山中]

質問3では、高校の授業において生徒がどのような学習経験をしているかについて尋ねた。具体的には、知識の獲得方法、探究的・協働的な学習活動、言語活動や表現活動の経験、学習方法の特性に関する18項目を設定した。回答は5件法（「5：いつも」～「1：まったくない」）で求め、各項目の平均値を算出した上で、DP生とnon-DP生の差異を検討するため、Welchのt検定を行った【表1-23】。

その結果、DP生とnon-DPの平均値は全ての項目で有意に異なっており、うち15項目ではDP生の平均値が有意に高く、残る3項目ではnon-DP生の平均値が有意に高かった。

とりわけDP生のほうが高い平均値を示した項目には、「英語で書かれた情報を収集する」(DP生 $M=3.94$ 、non-DP生 $M=2.55$ 、 $g=1.17$)、「あるテーマについて論述文(作文・エッセイ)を書く」(DP生 $M=4.16$ 、non-DP生 $M=2.90$ 、 $g=1.06$)、「作文・エッセイ・発表などへのフィードバックを受ける」(DP生 $M=4.27$ 、non-DP生 $M=3.15$ 、 $g=1.01$)、「本を一冊読む」(DP生 $M=3.72$ 、non-DP生 $M=2.62$ 、 $g=0.85$)、「海外で起こった出来事や課題について考える」(DP生 $M=3.94$ 、non-DP生 $M=2.97$ 、 $g=0.83$)があった。これらは大きな効果量を示しているといえる($g \geq 0.8$)。また、「学習の中で多様なメディア(新聞・映像・音楽など)に触れる」($g=0.64$)、「学習の成果を社会に発信する」($g=0.58$)、「自分が取り組んだプロジェクト(探究・調査・実験・発表会)のよかった点や課題を整理する」($g=0.57$)といった項目についても、DP生の平均値がnon-DP生に比べて高い傾向にあった。

一方、「教科書を中心に学ぶ」($g=-0.48$)、「用語や出来事を暗記する」($g=-0.40$)、「一問一答の問題を解く」($g=-0.20$)の3項目では、non-DP生の平均値がDP生を有意に上回った。これらの項目は、いずれも知識の再生や定着を重視した学習形態を示すものであり、non-DP生の学びにおいては、教科書中心・暗記中心の学習経験が相対的に多いことがわかる。

以上より、授業中の学習経験に関しては、すべての項目にわたり、DP生とnon-DP生の間で一貫した差異が確認された。特にDP生では、探究、協働、言語活動に関わる学習経験の頻度が高

く、non-DP 生では、教科書や知識の定着を重視した伝統的な学習経験が相対的に多い傾向がみられた。

【表1-23】授業中の学習経験について

	DP生			Non-DP生			<i>g</i>	<i>p</i>
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>		
(1) 先生の話から知識を得る	4.27	0.77	434	4.04	0.82	1778	0.28	***
(2) 教科書を中心に学ぶ	3.24	1.08	433	3.72	0.99	1776	-0.48	***
(3) 探究したい課題について問いを立てる	3.90	0.97	433	3.37	1.03	1776	0.52	***
(4) プロジェクト（探究・調査・実験・発表会）の計画を立てる	3.87	0.97	434	3.32	1.08	1773	0.52	***
(5) 図書室を利用して資料や文献を探す	2.86	1.33	434	2.34	1.14	1775	0.44	***
(6) 情報を得るとき、情報源の信頼性を確認する	4.16	0.93	433	3.66	1.08	1778	0.48	***
(7) 英語で書かれた情報を収集する	3.94	1.02	433	2.55	1.22	1776	1.17	***
(8) 自分と異なる立場や見方をもつ人の意見を聞く	4.28	0.81	433	3.89	0.93	1770	0.44	***
(9) 本を一冊読む	3.72	1.17	433	2.62	1.32	1777	0.85	***
(10) グループで協力して活動する	4.35	0.84	434	4.08	0.88	1773	0.31	***
(11) 海外で起こった出来事や課題について考える	3.94	1.00	433	2.97	1.19	1777	0.83	***
(12) あるテーマについて論述文（作文・エッセイ）を書く	4.16	0.92	434	2.90	1.24	1774	1.06	***
(13) 学習の中で多様なメディア（新聞・映像・音楽など）に触れる	4.09	0.88	434	3.41	1.12	1770	0.64	***
(14) 学習の成果を社会に発信する	3.11	1.20	434	2.45	1.12	1772	0.58	***
(15) 自分が取り組んだプロジェクト（探究・調査・実験・発表会）のよかった点や課題を整理する	3.80	0.99	433	3.16	1.15	1776	0.57	***
(16) 一問一答の問題を解く	3.36	1.19	434	3.58	1.12	1776	-0.20	***
(17) 用語や出来事を暗記する	3.47	1.09	432	3.87	1.02	1773	-0.40	***
(18) 作文・エッセイ・発表などへのフィードバックを受ける	4.27	0.80	434	3.15	1.18	1776	1.01	***

***: $p < .001$

M = 平均値、*SD* = 標準偏差、*n* = 回答数、*g* = 効果量（Hedgesの補正）、*p* = 有意確率

⑤課外活動について [質問 5]

[山中]

質問 5 では、課外活動への意欲的な参加度について尋ねた。具体的には、生徒会・委員会活動、部活動・クラブ活動、学校行事への参加といった学校内の活動に加え、授業外でのプロジェクト・探究活動、ボランティア活動、海外との交流活動、留学経験という学校内外にまたがる 7 項目を設定した。回答は 5 件法（「5：とてもあてはまる」～「1：まったくあてはまらない」）で求め、DP 生と non-DP 生の平均値の差について、Welch の t 検定を行った【表 1-24】。

その結果、7 項目中 5 項目において、DP 生と non-DP 生の間で統計的に有意な平均値の差が認められた。Non-DP 生よりも DP 生の平均値のほうが高い項目を見ると、「ボランティア活動への参加」（ $g=0.90$ ）や「海外との交流活動への参加」（ $g=0.86$ ）、「留学（短期・長期・交換等）」（ $g=0.79$ ）、「授業外でのプロジェクト・探究活動への参加」（ $g=0.74$ ）では比較的大きな効果を示した。また、「部活動・クラブ活動への参加」（ $g=0.36$ ）においても DP 生のほうがやや意欲的であるといえる。

一方で、「生徒会・委員会活動への参加」と「学校行事（体育祭・文化祭等）への参加」の 2 項目については、DP 生と non-DP 生の間に有意な差は認められなかった。これらの活動は、多くの学校において参加が制度的に保障・促進されている性格をもつことから、課程の違いによる差が生じにくい活動であると考えられる。

以上より、課外活動に関して、学校制度の枠内で実施される全員参加型の活動には DP 生も non-DP 生も同じ程度の意欲をもって参加しているが、自己選択性の高い活動ほど DP 生の参加度が高い傾向が示された。DP を履修する生徒は、学校内外の多様な学習機会へと意欲的に参加していることを読み取れる。

【表1-24】 課外活動について

	DP 生			Non-DP 生			g	p
	M	SD	n	M	SD	n		
生徒会・委員会活動への参加	3.07	1.51	451	2.96	1.45	1857	0.08	n.s.
部活動・クラブ活動への参加	3.48	1.51	450	3.97	1.34	1857	0.36	***
学校行事（体育祭・文化祭等）への参加	4.32	0.89	452	4.35	0.86	1856	-0.04	n.s.
授業外でのプロジェクト・探究活動への参加	4.07	1.05	453	3.13	1.33	1855	0.74	***
ボランティア活動への参加	3.86	1.18	449	2.67	1.36	1851	0.90	***
海外との交流活動への参加	3.51	1.36	449	2.32	1.39	1854	0.86	***
留学（短期・長期・交換等）	2.89	1.62	452	1.81	1.31	1858	0.79	***

***: $p < .001$, n.s.: not significant

M = 平均値、 SD = 標準偏差、 n = 回答数、 g = 効果量（Hedges の補正）、 p = 有意確率

⑥放課後の学習時間と学習内容について [質問 6]

[山中]

質問 6 は、学期中における放課後の学習時間に関して、1 日あたりの平均を質問したものである。時間は、「x 時間 y 分」のように尋ねたが、分析は分単位に換算して実施した【表 1-25】。

DP 生・non-DP 生間で平均値を Welch の t 検定によって比較したところ、統計的有意差がみられたのは 6 項目中 5 項目であった。そのうち、「1 日あたりの放課後の学習時間」、「①高校の授業の予習、復習、課題（問題を解くなど）」、「③調べ学習、探究・プロジェクト活動、課題論文」、「⑤資格試験に向けた勉強（英検、TOEIC、漢検など）」に充てる学習時間が、DP 生は non-DP 生よりも長い傾向にある。それに対して non-DP 生は、「②塾・予備校の予習、復習、課題（問題を解くなど）」に充てる学習時間が DP 生よりも長い傾向にある。なお、DP 生・non-DP 生間で平均値に統計的有意差がみられなかった項目は、「④大学受験の準備（過去問を解く、小論文を書くなど）」に充てる学習時間であった。

【表 1-25】放課後の学習時間と学習内容について

	DP 生			non-DP 生			<i>g</i>	<i>p</i>
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>		
1 日あたりの放課後の学習時間（分）	144.64	79.03	446	94.54	68.66	1841	0.71	***
①高校の授業の予習、復習、課題（問題を解くなど）	83.05	57.64	441	56.21	50.48	1797	0.52	***
②塾・予備校の予習、復習、課題（問題を解くなど）	16.87	41.34	391	30.31	47.64	1720	-0.29	***
③調べ学習、探究・プロジェクト活動、課題論文	46.02	55.11	412	9.74	25.11	1627	1.09	***
④大学受験の準備（過去問を解く、小論文を書くなど）	8.44	28.36	381	11.00	35.63	1616	-0.07	n.s.
⑤資格試験に向けた勉強（英検、TOEIC、漢検など）	25.34	39.63	406	13.24	33.01	1651	0.35	***

***: $p < .001$, n.s.: not significant

M = 平均値、*SD* = 標準偏差、*n* = 回答数、*g* = 効果量（Hedges の補正）、*p* = 有意確率

⑦高校の成績と英語運用能力に関する資格について [質問 7]

[山中]

質問 7 では、まず、生徒が自身の成績をどのような位置にあると考えているかについて、「上のほう」、「まんなか」、「下のほう」の 3 つの区分で質問した。【表 1-26】より、各区分について見ると、DP 生・non-DP 生ともに約半数が自身の成績を「まんなか」と考えていた。しかし、それぞれの生徒について、残る約半数の生徒の分布を調べると、DP 生では「上のほう」と回答する生徒（26.6%）がやや多く、non-DP 生では「下のほう」と回答する生徒（29.4%）がやや多いように見える。

このような成績の位置づけに関する認識が DP 生と non-DP 生の間で異なっているのかを調べるため、DP 生であるか否かを独立変数、自身の成績が「上のほう」を 3、「まんなか」を 2、「下のほう」を 1 とする従属変数を設定し、順序ロジスティック回帰分析を実施した。その結果が【表 1-26-1】である。回帰分析の結果、DP 生は、「下のほう」ではなく「まんなか」または「上のほう」を選ぶか、「下のほう」または「まんなか」ではなく「上のほう」を選ぶ確率が、non-DP

生の 1.30 倍であることが明らかになった。独立変数が従属変数の分散のどの程度を説明できているかを判断する目安となる擬似決定係数である Nagelkerke's R^2 の値から、DP 生であるかいは成績認識の差異の 0.3% を説明していることがわかる。すなわち、DP 生は non-DP 生よりも、自身の成績を相対的に高いと認識する傾向にあることが示された。

【表 1-26】高校の成績について

	DP 生		non-DP 生	
	%	n	%	n
上のほう	26.6	117	22.8	421
まんなか	50.2	221	47.8	881
下のほう	23.2	102	29.4	541

【表 1-26-1】高校の成績について

	<i>B</i>	<i>exp(b)</i>	<i>n</i>	<i>p</i>
DP 生	0.26	1.30	2283	**

Nagelkerke's $R^2 = 0.003^{**}$

** : $p < .01$

B = 偏回帰係数、*exp(b)* = オッズ比、*n* = 回答数、*p* = 有意確率

次に、取得している英語運用能力に関する資格について質問した。【表 1-27】より、DP 生も non-DP 生も、過半数が英検（実用英語技能検定）を取得しており、高校生にとって英検がメジャーな資格であることがうかがえた。その他の資格について、DP 生は non-DP 生よりも、海外大学への進学に用いられやすい TOEFL や IELTS アカデミック・モジュールの取得／受検率が目立って高かった。海外大学への進学を念頭に置き、TOEFL や IELTS アカデミック・モジュールのような資格試験の受検に DP 生は向かいやすいのだろう。TOEIC やその他についても同様の傾向がみられた。「資格は取得していない」に目を移すと、DP 生より non-DP 生でそのように回答した生徒の割合が高かった。non-DP 生の場合、英語資格の事前取得を必要としない者がおり、別途大学進学時に用いる入試区分との関連を検討しなければならないが、non-DP 生は、一般選抜のように、各大学が入試として独自に実施する試験を用いようとする生徒が DP 生より多いと考えられる。

【表 1-27】英語運用能力に関する資格を取得／受検している生徒の割合について

	DP 生		non-DP 生	
	%	n	%	n
英検（実用英語技能検定）	79.3	361	72.4	1351
TOEFL	12.5	57	2.6	48
TOEIC	8.6	39	2.3	42

IELTSアカデミック・モジュール	17.8	81	1.0	19
その他	6.4	29	0.8	14
資格は取得していない	5.1	23	21.6	403
回答者合計	455		1866	

注：複数回答方式のため、割合の合計は100%を超える。割合は各区分の回答者数を分母として算出している。

最後に、取得している英語運用能力に関する資格試験のスコアについて質問した。ただし、この質問は、回答の解釈に注意を要する。TOEFLはiBTとITPのスコアが、TOEICはTOEIC、TOEIC Bridge、L&RとS&Wのスコアが混在していることがうかがえるためである。そのため、ここでは、英検（実用英語技能検定）とTOEFL iBT、IELTS アカデミック・モジュールを用いて、DP生とnon-DP生の平均値を比較した。t検定を実施するため、英検の級には、1級に5、準1級に4、2級に3、準2級に2、3級以下に1を割り当てた。いずれの試験においても、数値が高いほど、英語運用能力が高いことを意味している。なお、明らかに他の試験のスコアと誤っている値やその試験で発生し得ない値、0は、分析から除外した。

DP生・non-DP生間で平均値をWelchのt検定によって比較した結果をまとめたものが、【表1-28】である。DP生はnon-DP生に比べると、英検でレベルのより高い級を獲得する傾向がある。ところが、TOEFL iBTとIELTS アカデミック・モジュールの場合、両者のスコアに統計的な有意差は認められなかった。Non-DP生のなかでTOEFL iBTまたはIELTS アカデミック・モジュールを取得する生徒の割合が非常に小さいことから、この2つの英語運用能力資格を取得するnon-DP生は、英語力向上への意識が相当強い層に限定されていると推測される。そのため、DP生とnon-DP生の間で当該英語資格の平均値に相違が生じているとはいえない結果となったように思われる。

【表1-28】英語運用能力に関する資格のスコアについて

	DP 生			non-DP 生			<i>g</i>	<i>p</i>
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>		
英検（実用英語技能検定）	3.22	0.90	357	2.27	0.97	1348	0.99	***
TOEFL iBTスコア	84.70	21.90	23	87.46	13.37	13	-0.14	n.s.
IELTSアカデミック・モジュールスコア	6.19	0.80	80	6.30	1.24	15	-0.12	n.s.

***: $p < .001$, n.s.: not significant

M = 平均値、*SD* = 標準偏差、*n* = 回答数、*g* = 効果量（Hedgesの補正）、*p* = 有意確率

⑧能力獲得に関する自己認識について【質問8】

【山中】

質問8では、調査時点で身につけている能力への自己認識について質問した。これまでに継続的に調査をしてきた質問項目をベースとして、DP生の調査対象者の増加とともに詳細な分析が

できることを狙って設定した項目である。選択肢（「5：身についている」～「1：身についていない」）に与えられた値をポイントとみなし、DP 生・non-DP 生間で平均値を Welch の t 検定によって比較した。

その結果は【表 1-29】に報告する。25 項目のうち 2 つの項目を除いて統計的有意差がみられ、そのすべてで DP 生の平均値が non-DP 生のそれよりも高いことが認められた。とりわけ「国際的な事がらを理解し、あつかう力」($g=0.66$)、「グローバルな社会の一員としての自覚」($g=0.63$)、「『外国語（英語等）』に関する能力」($g=0.58$)については中程度の効果量を示しており、DP 生は non-DP 生と比べると、国際的な能力ないし認識を獲得できていると意識していることが分かる。また、「人文・社会・自然科学を横断する幅広い知識」($g=0.47$)、「困難な課題に取り組む力」($g=0.43$)、「リーダーシップの能力」($g=0.41$)、「自ら率先して行動する力」($g=0.35$)についても、DP 生のほうが高い平均値を示している。なお、「自分の良心や社会の規範に沿って行動する力」($g=0.05$)と「『国語（現代文、古典等）』に関する能力」($g=0.09$)は、DP 生と non-DP 生の間に有意な差が認められなかった。

【表 1-29】能力獲得に関する自己認識について

	DP 生			Non-DP 生			g	p
	M	SD	n	M	SD	n		
(1) 興味のある対象について深く学習し、理解する姿勢	4.27	0.77	431	4.01	0.90	1756	0.30	***
(2) 人文・社会・自然科学を横断する幅広い知識	3.62	0.95	432	3.13	1.07	1757	0.47	***
(3) 困難な課題に取り組む力	3.94	0.92	431	3.50	1.04	1758	0.43	***
(4) 他者と意思疎通をはかり人間関係を構築する能力	4.06	0.93	430	3.89	0.98	1757	0.17	**
(5) 自分の良心や社会の規範に沿って行動する力	4.09	0.88	430	4.04	0.82	1753	0.05	n.s.
(6) 人や社会によって違った考えや文化があることへの理解	4.42	0.75	432	4.23	0.79	1756	0.24	***
(7) 他者を尊重し、ともに行動する力	4.31	0.79	430	4.18	0.81	1758	0.17	**
(8) 予測不可能な事態に直面しても挑戦する姿勢	3.96	0.87	431	3.71	0.97	1753	0.26	***
(9) 自分の生活と自然や社会とのつながりの理解	3.84	0.94	430	3.54	0.98	1753	0.30	***
(10) 自分の行動を評価し、次に生かす力	3.99	0.88	432	3.73	0.96	1754	0.27	***
(11) 問題が起きたときに解決する力	4.02	0.83	431	3.82	0.90	1755	0.22	***
(12) 自ら率先して行動する力	3.94	0.94	430	3.58	1.06	1756	0.35	***
(13) 自分自身で計画を立て、それに基づいて実行する力	3.67	1.12	431	3.29	1.18	1754	0.33	***
(14) 情報を処理し、活用する力	3.95	0.87	431	3.67	0.94	1752	0.29	***

(15)国際的な事ごらを理解し、あつかう力	3.98	0.95	430	3.26	1.13	1750	0.66	***
(16)チームで協力して行動する力	4.25	0.85	430	3.99	0.94	1752	0.28	***
(17)リーダーシップの能力	3.66	1.02	432	3.19	1.18	1748	0.41	***
(18)地域社会の一員としての自覚	3.57	1.10	429	3.27	1.10	1756	0.27	***
(19)日本社会の一員としての自覚	3.56	1.12	430	3.31	1.08	1755	0.23	***
(20)グローバルな社会の一員としての自覚	3.88	1.04	429	3.19	1.11	1739	0.63	***
(21)「国語（現代文、古典等）」に関する能力	3.30	1.14	431	3.20	1.08	1755	0.09	n.s.
(22)「社会科（歴史、地理、公民等）」に関する能力	3.47	1.05	431	3.33	1.06	1755	0.13	*
(23)「数学」に関する能力	3.49	1.05	432	3.24	1.14	1751	0.22	***
(24)「理科（物理、化学、生物、地学等）」に関する能力	3.52	1.11	430	3.30	1.08	1754	0.18	***
(25)「外国語（英語等）」に関する能力	4.05	0.93	431	3.43	1.09	1751	0.58	***
(26)その他の教科（芸術、体育、専門等）に関する能力	3.81	1.00	432	3.63	1.00	1751	0.17	**

***: $p < .001$, **: $p < .01$, *: $p < .05$, n.s.: not significant

M = 平均値、 SD = 標準偏差、 n = 回答数、 g = 効果量（Hedges の補正）、 p = 有意確率

⑨満足度と将来の検討状況について【質問 9】

【山中】

質問 9 では、満足度について質問した。選択肢（「5：とてもそう思う」～「1：まったくそう思わない」）に与えられた値をポイントとみなし、DP 生・non-DP 生間で平均値を Welch の t 検定によって比較した。

【表 1-30】より、3 項目のうち 2 項目で平均値に統計的有意差がみられた。高校での授業を含む自身の学びや能力に関して、DP 生は non-DP 生よりも満足していることが分かる。ただし、高校生活そのものへの満足度は、両群の間に有意な差が認められなかった。

満足度に関する結果からは、DP 生が自身の学習や経験を肯定的に捉える傾向が確認されたと見える。

【表 1-30】 満足度について

	DP 生			Non-DP 生			g	p
	M	SD	n	M	SD	n		
学校の授業などを通じた今の自分の学習に満足している	3.36	1.18	453	2.89	1.19	1847	0.39	***
これまでの学校での学習やさまざまな経験で得られた 今の自分の能力に満足している	3.09	1.23	453	2.85	1.17	1846	0.21	***

高校生活全体に満足している 3.70 1.09 453 3.72 1.05 1845 -0.02 n.s.

***: $p < .001$, n.s.: not significant

M = 平均値、 SD = 標準偏差、 n = 回答数、 g = 効果量 (Hedges の補正)、 p = 有意確率

問 9 ではさらに、将来についての検討状況をたずねた。選択肢は、「5: とてもそう思う」～「1: まったくそう思わない」の 5 件法である。

【表 1-31】は、Welch の t 検定を用いて DP 生と non-DP 生の平均値を比較した結果である。将来の学びたい分野や行きたい大学、やりたい仕事のいずれにおいても、DP 生は non-DP 生に比べて検討していると認識する傾向にあることが示された。

【表 1-31】将来について

	DP 生			Non-DP 生			g	p
	M	SD	n	M	SD	n		
将来、学びたい分野について考えている	4.38	0.88	453	4.10	1.01	1844	0.28	***
将来、行きたい大学について考えている	4.25	0.90	453	4.08	1.01	1847	0.18	***
将来、やりたい仕事について考えている	4.10	1.10	453	3.89	1.15	1844	0.19	***

***: $p < .001$

M = 平均値、 SD = 標準偏差、 n = 回答数、 g = 効果量 (Hedges の補正)、 p = 有意確率

⑩高校卒業後の進路と将来について [質問 10]

[山中]

質問 10 では、卒業後の進路および将来の展望について質問をした。希望する卒業後の進路について DP 生・non-DP 生別の結果をまとめた【表 1-32】。

第一希望では、DP 生・non-DP 生ともに、国内大学への進学希望が過半数を占めているが、DP 生・non-DP 生間で国内大学と海外大学のどちらへの進学を希望するかには相違が生じている。具体的には、海外大学への進学を第一希望とする生徒の割合が non-DP 生の場合 1.7%であるのに対し、DP 生では 33.9%にも及んでいる。DP 生においては、海外進学が進路の選択肢として広く視野に入れられているといえる。

【表 1-32】高校卒業後の進路希望

進路希望	DP 生 n (%)				non-DP 生 n (%)			
	第一希望		第二希望		第一希望		第二希望	
国内大学への進学	264	(58.9)	130	(41.9)	1699	(92.1)	253	(35.8)
海外大学への進学	152	(33.9)	130	(41.9)	31	(1.7)	193	(27.3)
未定・わからない	27	(6.0)	39	(12.6)	67	(3.6)	207	(29.3)
その他	5	(1.1)	11	(3.5)	47	(2.5)	54	(7.6)

次に、高校卒業後に進学・進路先として希望する専門分野について、第一希望および第二希望を尋ねた。【表 1-33】は、DP 生および non-DP 生それぞれについて、各分野を第一希望、第二希望として選択した人数と割合（％）を示している。

第一希望を見ると、DP 生では「人文・社会系」が 27.8％と最も高く、次いで「理・工・農系」（21.3％）、「その他（17.0％）」、「教養・学際系」（12.6％）、「医・歯・薬・獣医系」（11.2％）が続いた。non-DP 生の場合も DP 生と同様に、「人文・社会系」（25.6％）と「理・工・農系」（24.6％）、が上位 2 位を占めている。

第二希望では、両群ともに第一希望とは異なる分野を選択する傾向が確認された。概して、「人文・社会系」や「理・工・農系」、「医・歯・薬・獣医系」、「その他」は第二希望での選択率が低下する一方、「看護・保健・衛生系」や「教育・家政・福祉系」、「芸術・スポーツ系」、「教養・学際系」は第二希望での選択率が上昇しているようにみえる。

第一希望と第二希望の双方ともに、DP 生は non-DP 生よりも、「人文・社会系」や「教養・学際系」、「その他」の選択率が一貫して高くなっており、DP 生における進路希望の多様性を垣間見ることができよう。

【表 1-33】卒業後に進みたい分野について

	DP 生 n (%)		non-DP 生 n (%)	
	第一希望	第二希望	第一希望	第二希望
人文・社会系	124 (27.8)	71 (23.7)	468 (25.6)	164 (15.9)
理・工・農系	95 (21.3)	53 (17.7)	450 (24.6)	163 (15.8)
医・歯・薬・獣医系	50 (11.2)	20 (6.7)	219 (12.0)	120 (11.7)
看護・保健・衛生系	4 (0.9)	9 (3.0)	132 (7.2)	76 (7.4)
教育・家政・福祉系	21 (4.7)	31 (10.4)	159 (8.7)	154 (15.0)
芸術・スポーツ系	20 (4.5)	36 (12.0)	135 (7.4)	170 (16.5)
教養・学際系	56 (12.6)	57 (19.0)	89 (4.9)	132 (12.8)
その他	76 (17.0)	22 (7.4)	175 (9.6)	51 (4.9)
回答者合計	446	299	1827	1030

⑪周囲の環境について【質問 11】

【山中】

質問 11 では、生徒を取り巻く周囲の環境について質問した。選択肢（「5：とてもあてはまる」～「1：まったくあてはまらない」）に与えられた値をポイントとみなし、DP 生・non-DP 生間で平均値を Welch の t 検定によって比較した。

【表 1-34】より、DP 生・non-DP 生間で平均値に統計的有意差がみられたのは、13 項目中 7 項目であった。そのすべてで、DP 生の平均値が non-DP 生よりも高かった。DP 生は「本やイン

ターネット環境など家で学ぶ環境が十分にある」傾向が認められることから、学習のための環境整備に DP 生の家庭が積極的である様子がうかがえる。ただし、「親や保護者は自分の勉強のために必要なものを買ってくれる」、「勉強のためであれば親や保護者は積極的に援助してくれる」、「普段の生活の中でお金に困っていると感じることもある」かどうかについては、統計的な有意差が認められないため、DP 生と non-DP 生間で、家庭の経済的状況にはあまり違いがないと推察される。DP 生は non-DP 生に比べて、「家族とよく海外の経験や国際的な時事問題を話したりする」、「親や保護者が仕事などで英語などの外国語を使っている」、「友達とよく海外の話題（SNS、音楽など）を話したりする」傾向にあることから、周囲の環境が国際的であることが読み取れる。また、「周りの同級生は授業に熱心に取り組んでいる」からは、同級生の姿に刺激を受けていることがうかがえる。

【表 1-34】周囲の環境について

	DP 生			Non-DP 生			<i>g</i>	<i>p</i>
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>		
(1) 本やインターネット環境など家で学ぶ環境が十分にある	4.63	0.67	432	4.47	0.73	1763	0.22	***
(2) 親や兄姉などの家族は普段からよく勉強を教えてくれる	2.73	1.41	433	2.57	1.37	1764	0.12	*
(3) 普段から家族が本や新聞を読んでいるのをよく見る	3.15	1.40	432	2.93	1.39	1761	0.15	**
(4) 親や保護者は自分の勉強のために必要なものを買ってくれる	4.56	0.80	434	4.54	0.71	1765	0.03	n.s.
(5) 勉強のためであれば親や保護者は積極的に援助してくれる	4.50	0.87	434	4.52	0.73	1763	-0.03	n.s.
(6) 普段の生活の中でお金に困っていると感じることもある	2.21	1.30	434	2.15	1.21	1762	0.06	n.s.
(7) 親や保護者はあなたのやりたいことを応援してくれる	4.44	0.88	434	4.45	0.80	1762	-0.01	n.s.
(8) 親や保護者は学校生活について相談に乗ってくれる	4.16	1.09	432	4.13	1.03	1760	0.02	n.s.
(9) 周りの同級生は授業に熱心に取り組んでいる	4.20	0.92	434	3.93	0.96	1762	0.28	***
(10) 周りの同級生は普段からよく勉強を教えてくれる	4.02	1.03	432	3.93	1.03	1764	0.09	n.s.
(11) 家族とよく海外の経験や国際的な時事問題を話したりする	3.67	1.28	434	2.90	1.37	1762	0.57	***
(12) 親や保護者が仕事などで英語などの外国語を使っている	2.94	1.70	434	2.06	1.42	1763	0.59	***

(13)友達とよく海外の話題（SNS、音楽など）を
話したりする

3.93 1.17 434 3.20 1.42 1763 0.53 ***

***: $p < .001$, **: $p < .01$, *: $p < .05$, n.s.: not significant

M = 平均値、 SD = 標準偏差、 n = 回答数、 g = 効果量（Hedges の補正）、 p = 有意確率

【高校 2 年生調査のまとめ】

[山中]

本調査は、IB ディプロマ・プログラム（DP）を導入する一条校 31 校に在籍する高校 2 年生 2,321 名を対象に、DP 履修開始直後の段階における学習経験、態度・状況、能力の自己認識、進路希望、家庭を含む学習環境等を把握し、DP 生と non-DP 生の比較を通じて DP 履修の序盤としての特徴を検討したものである。調査は 2025 年 4 月～5 月に実施し、質問紙（86.1%）とオンライン（13.9%）により有効回答を得た。

まず基本属性として、回答者全体に占めるフル・ディプロマ履修生（DP 生）は 19.6%であり、分析では科目履修生と DP 非履修生を統合して non-DP 生（80.4%）として扱った。性別構成は全体・群別とも大きな偏りはみられなかった。一方、学校経験には DP 生と non-DP 生で違いがみられた。DP 生では MYP 経験や海外の学校経験の割合が相対的に高く、non-DP 生では「該当経験なし」が多数を占めた。これらは、DP 履修以前の教育経験の違いが一定程度存在することを示している。

学習に関わる態度・状況（質問 2）では、38 項目中 31 項目で DP 生が non-DP 生を有意に上回り、主体的な学習行動、課題解決志向、社会・環境への関心、異文化理解、挑戦志向などにおいて DP 生が高い傾向が示された。他方で、対人配慮や規範意識、健康行動等の一部では有意差がみられず、基本的な生活態度や対人面の基盤的側面は群間で共通している可能性が示唆された。

授業中の学習経験（質問 3）では、18 項目すべてで有意差が確認され、DP 課程では探究のプロセス（問いの設定、計画、情報の信頼性確認、資料探索等）や英語での情報収集、論述・エッセイ作成、フィードバック経験、読書、国際的課題の検討といった学習活動が体系的に組み込まれていることが、効果量の大きさも含めて明確に示された。一方で、教科書中心・暗記・一問一答といった再生型学習は non-DP 生で相対的に高く、教育課程上の学習経験の構造的差異が量的に確認された。

課外活動（質問 5）では、学校行事や部活動等の制度的に参加が促されやすい活動の場合、DP 生・non-DP 生であまり違いはみられなかった。それに対し、授業外の探究活動、ボランティア、海外交流、留学といった自己選択性が高い活動では、DP 生の参加度が有意に高かった。これは、DP 生が学校外を含む多様な学習機会に積極的に関与していることを示している。

学習時間とその内容（質問 6）では、DP 生は、学期中の平日放課後 1 日あたり学習時間が長い傾向にあった。例えば、DP 生は non-DP 生よりも、学校の授業の予復習や課題、探究・プロジェクト活動、課題論文、資格試験の勉強に時間を充てていることが見出された。一方、non-DP 生は塾・予備校の学習に充てる時間が長くなっており、学習内容・目的の違いが示された。

学業成績と英語資格（質問 7）では、自己認識として DP 生は「成績が上のほう」の割合が相対的に高く、non-DP 生では「下のほう」が相対的に高い分布がみられた。また、英語資格は両群で

英検が多数を占める一方、DP 生では TOEFL や IELTS アカデミック・モジュールなど海外進学で用いられやすい資格の取得率が高く、進路志向や準備状況の違いがうかがえた。英検と TOEFL iBT、IELTS アカデミック・モジュールのスコアを DP 生と non-DP 生間で比較すると、DP 生は英検でよりハイレベルな級を獲得していることが示された。

能力獲得の自己認識（質問 8）では、多くの項目で DP 生が non-DP 生を上回っていた。DP 生は、学びの姿勢、課題対応、協働性、国際理解、リーダーシップ等の自己評価が総じて高い傾向にある。

満足度と将来についての検討状況（質問 9）では、学校での学習やそれを通じて得た能力への満足度、将来に関する検討状況において、DP 生は non-DP 生よりも高い自己評価を示した。

進路希望（質問 10）では、海外大学への進学を第一希望に挙げる生徒の割合は、non-DP 生よりも DP 生のほうが高かった。

最後に周囲の環境（質問 11）では、学習環境や保護者の学習支援、同級生の学習志向、家族・友人との国際的話題等に関して DP 生が高い項目が多く、DP 生が比較的国際性の高い言語・文化的環境や学習支援環境に置かれている可能性が示された。一方で、経済的困難感や保護者の相談対応などの一部項目では差がみられず、支援の在り方には DP 生と non-DP 生では共通する側面があることも確認された。

3) 今後の見通し

本報告書では、DP 履修をほぼ完了した段階にある高校 3 年生と、DP 履修の初年度段階にある高校 2 年生の調査結果を報告した。2026 年 2 月現在実施中である高校 3 年生（DP 修了段階）調査については、同一設計による継続調査の一環として位置づけられるものであるが、本報告書では詳細な分析は行わず、次回以降の報告書において分析結果を報告する予定である。

また、大学生調査班との連携のもと検討を進めてきた修了生調査については、現在、倫理審査の段階にある。次年度には、本調査を実施し、高校在学時の学習経験と卒業後の進路・学修状況との関連についても検討を行っていく。

2-2. 教員調査

2025 年度、教員調査班は Primary Years Programme（以下、PYP）に着目し、訪問校調査と PYP 教員（以下、PYP 教員）の学び合いを実施してきた。また、IB 校に勤務した教員が non-IB 校に異動後を追跡したインタビュー調査も行った。また、2024 年度までに収集した DP 認定校で得られたデータを用いて、論文執筆や学会発表を行った。

1) PYP 訪問校調査

[文責：原和久]

① 研究の目的

本研究の目的は、学校教育法第一条に規定する学校である「一条校」で、かつ IBPYP を導入する小学校（以下、PYP 認定校）に勤める教員や管理職が、PYP の教育実践や PYP の教育効果について、どのような認識をもって教育活動に従事しているか明らかにすることである。

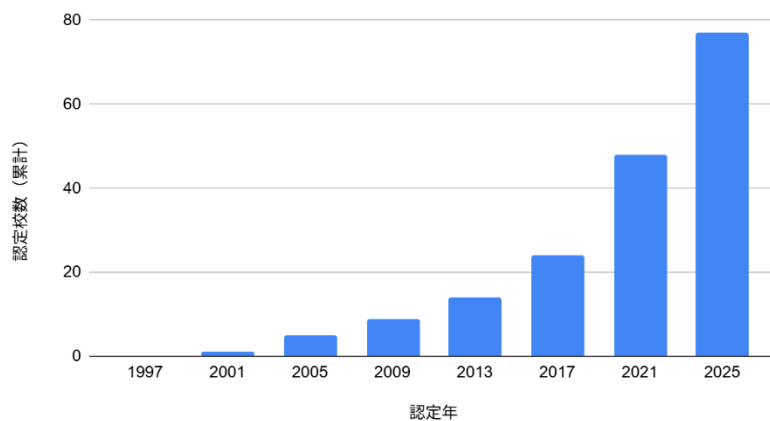
② 調査対象校

PYP は、3 歳から 12 歳までの幼児および児童を対象とした IB プログラムであり、日本においては、幼稚園・保育所・認定こども園などの就学前教育施設および小学校（国立・公立・私立）において、教育実践が行われていることが確認されている。PYP は IB 機構（International Baccalaureate Organization、以下 IBO）によって 1997 年に創設され、主にインターナショナルスクールにて実践されてきたが、IB を推進する日本政府の教育政策の後押しもあり、2000 年代以降一条校である国公立・私立の学校においても導入が進んでいる。PYP の実施期間については学校の裁量によるが、およそ学校が所在する国の教育制度に合わせて、入園・入学から卒園・卒業までの就学前教育段階であれば 2～3 年間、初等教育段階であれば 4～6 年間の区切りで実施されている。

今回の調査においては、研究目的として一条校における IB 導入の効果について、教員・管理職の認識を明らかにしたいこと、また、日本の教育制度を前提にした場合、就学前教育（幼稚園、保育所、認定こども園）と初等教育（小学校）では制度や教育課程に大きな違いがあるため、「一条校で PYP を導入する国内の小学校」のみを対象とすることとした。

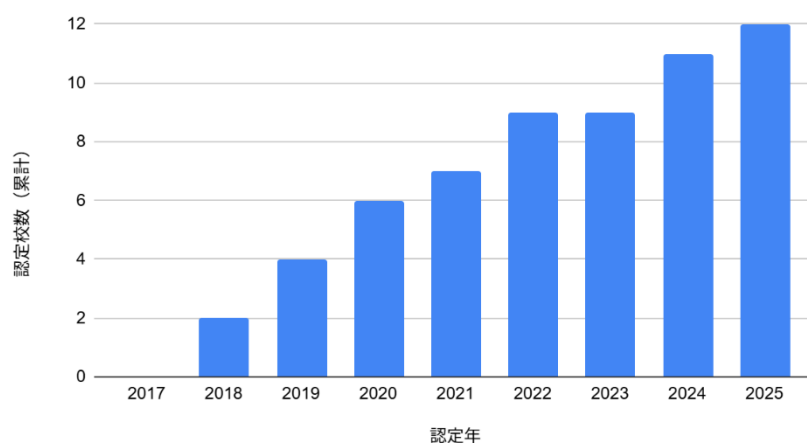
上記のような理由から、2025 年 4 月段階ですでに PYP を導入済みであった国内の小学校 11 校に対して調査依頼を行ったが、調査対象候補校 11 校のうち、1 校を除く 10 校から調査への協力を得た。なお、調査を開始した 2025 年 4 月時点で、IB 機構から正式に PYP 実施の認定を受けていない審査途上の PYP 候補校については、今回は調査を見合わせた。

PYP校の推移



【図 2-1】 PYP 認定校の推移

PYP一条校小学校の推移



【図 2-2】 PYP 一条校の推移

③ 調査対象校の特徴

調査に協力をいただいた小学校は、国立小学校 1 校、公立小学校 1 校、私立小学校 8 校の計 10 校である。インターナショナルスクールなどの非一条校を除くと、現時点で日本国内においては、PYP は私立小学校を中心に展開されている。10 校のプロフィールは下記の通りである。なお、学校が特定されないよう概略のみ掲載した。

【表 2-1】調査対象校一覧

調査対象校	学校種	地域	PYP 認定年
A 校	私立	地方都市	2021 年以降
B 校	私立	都市圏	2020 年以前
C 校	国公立	都市圏	2021 年以降
D 校	私立	都市圏	2020 年以前
E 校	私立	地方都市	2020 年以前
F 校	私立	地方都市	2020 年以前
G 校	私立	地方都市	2020 年以前
H 校	国公立	地方都市	2021 年以降
I 校	私立	地方都市	2021 年以降
J 校	私立	地方都市	2021 年以降

④ 調査方法

国内において PYP を実施する一条校の数が限られていること、また PYP 教員の教授観や教育観などについての先行研究が限られており本研究は実態を把握するための探索的な調査となることから、質的調査手法の採用が妥当であると判断した。具体的には、各 PYP 認定校を研究チーム数名（教員調査班）にて訪問し、参加者（管理職、PYP コーディネーターおよび教員）への半構造化インタビューを原則現地にて行い、PYP の認識や教育効果に関する「語り」を収集した。

インタビューは、対象学校の教員が持つ PYP についての認識を包括的に把握するため、各学校にて校長等管理職（1 名）、PYP コーディネーター（1 名）、教員から低・中・高学年より 3 名程度（各 1 名程度ずつ）の計 5 名程度の教職員を対象に行った。また、インタビューは学校に用意していただいた控室など静かな場所で行い、原則としてそれぞれの教員ごとに説明の時間もあわせて 1 授業コマ程度（平均 30 分から 40 分程度）を行った。インタビュー内容については、管理職と教員では、PYP の実践や PYP の教育効果についての認識が異なる場合があることも想定されることから、二種類のインタビューガイド（大まかな質問項目）を作成した。インタビューガイドは、本章末に掲載した「資料 I」（135 頁）および「資料 II」（136 頁）の通りである。

なお、着任直後の校長の場合は学校側からの申し出で PYP 導入の事情をよく知る副校長もインタビューに同席したり、PYP コーディネーターが複数いる場合は同時に聞き取りを行うなど、学校の事情に合わせて適宜複数人同席でのインタビューも行った。

インタビューを通して得られた音声データは、訪問後、随時文字起こしを行い、匿名化を行った上でデータとして PC に整理・保管した。インタビューで得られた音声データの文字起こしについては、「あの...」「えっと...」など場をつなぐのみで意味のない言葉やインタビュアーが言い直した場合に重複した同義の文などは削除し、文意を損なわないように文章を整えた。また、学校や調査協力者が特定されないよう、固有名詞や個人名などは削除したり仮名にしたりする操作を行った。

また、インタビューで語られた PYP の教育効果についての教員の認識と、実際に行われている授業での教育内容や教育方法との間に整合性を確認したり、授業や児童の様子を把握したりするため、訪問日に行われた教員 3 名の授業をそれぞれ見学・記録させていただき、教育効果のエビデンスを収集した。調査員が記録した教育効果に関するエビデンスの記述を含む「授業観察記録」は、インタビューデータとともに保管し、教員の語りを補完する質的データとして活用した。

訪問当日のスケジュールや教員の都合で、どうしてもインタビューと授業観察の時間が取れない場合は、授業観察のみ訪問日に行い、後日オンラインにてインタビューを行った。また、インタビューの内容を確認したい場合など、必要に応じてメールにて補足の質問を行った。

⑤ 調査対象教員の特徴

校長と PYP コーディネーター以外の教員については、調査依頼時に学校側に依頼し低学年、中学年、高学年より 1 名ずつ調査参加候補者を選定していただきインタビューと授業観察を行った。学年区分以外の選定の条件は特に明示しなかった。また、調査に先立ち、各参加者には調査の概要を示した依頼文書をあらためてメールで送付し、当日同意書に署名をいただいた上で調査に参加していただいた。また、選定された教員には、教員歴や IB 教員養成大学卒業の有無などの教職にかかわる情報を質問紙（フェイスシート）に現地にて、もしくはインターネット経由で記入していただいた。

このような方法により PYP 認定校への訪問を行った結果、2024 年 1 月から 2026 年 3 月末までの間に調査対象校 10 校の管理職・PYP コーディネーターなど 21 名へのインタビュー、および教員 27 名へのインタビューと授業見学を行った。インタビューを実施した人数の内訳は、教員 30 名、管理職 21 名（PYP コーディネーター 9 名を含む）、計 51 名である。調査対象者の概要は「資料 III」（137 頁）の通りである。

⑥ 分析方法

半構造化インタビューによって収集された質的なテキストデータ（インタビュースクリプト）は、質的分析ソフトである MAXQDA にインポートしコーディングを行った。具体的な作業手順としては、まずテキストデータをインタビューの項目（観点）ごとに大まかに分類・整理した。その上で、インタビュー項目と関連し意味のあるテキスト内の文節や文章に、それらを簡潔に表すコーディングフレーズを付与していった。また、コーディングを行う中で、認識や考え方が類似する語りや言説については、より抽象度の高いコーディングフレーズでひとつにまとめるなど、調査参加者の認識や考えの共通項や核となる概念の抽出に努めた。

インタビューの文字起こしとコーディングは、個々の学校訪問終了後できるだけ早い段階で行い、各学校への訪問調査が完了する度にテキストのコーディングとそれまでに蓄積したデータとの比較分析を行っていった。

⑦ 分析結果

インタビューから得られたテキストデータの中で、「PYP の教育効果」や「PYP についての認識」について意味を有すると考えられた文節にラベル付けを行い、その上で内容が類似する項目をより抽象度の高いテーマや概念でカテゴリー化した。

本報告書では、その中から主要なカテゴリーについて「管理職・PYP コーディネーター編」および「教員編」のそれぞれに分け、調査対象者の「語り」も適宜交えながら、その概要を次章以降の章で順に詳述する。語りの中には、IB や PYP 特有の用語も多く登場するため、PYP 関連用語を【表 2-14】(157 頁)に整理している。読み進める際に参照いただきたい。なお、分析の詳細については、今後関連する学会等で順次発表していく予定である。

◆ インタビュー結果のまとめ【管理職・PYP コーディネーター編】

【表 2-2】インタビュー項目一覧

観点 1 PYP の導入経緯

- ◇観点 1-1. 導入の理由
- ◇観点 1-2. なぜ PYP を選択したか
- ◇観点 1-3. 地域的な要因

観点 2 PYP の特徴・利点

- ◇観点 2-1. 導入によって達成したいこと
- ◇観点 2-2. PYP の優れている点
- ◇観点 2-3. 日本の教育の方が優れている点

観点 3 探究的な学びについて

日本の教育の枠組みの中でどのように PYP の探究的・教科横断的な学びを実現するか

観点 4 （管理職から見た）PYP の教育効果

- ◇観点 4-1. 児童に対しての教育効果
- ◇観点 4-2. 教員に対しての教育効果

観点 5 （管理職から見た）PYP の課題

- ◇観点 5-1. 導入・運営の課題
- ◇観点 5-2. 困っていること

観点 1 PYP の導入経緯

PYP は、IBO が提供する初等教育プログラムであるが、近年の傾向として日本国内にて PYP を導入する小学校が急増している。日本国際バカロレア教育学会は、このような状況を受け、2023 年発刊の学会誌において「日本の IB-PYP 導入による学校コミュニティの変容」という特集を組んでいる。その中で、本多（2023）は日本における学習指導要領（2017 年告示）や幼稚園教育要領（2017 年告示）が示す目標と PYP で期待されている目標との間に共通点が多いことが、小学校・幼稚園において PYP の導入が加速していることの一因ではないかと推測している。しかし、実際にどのような理由で各地の小学校が PYP を導入しているのか、日本における PYP の全体的な動向を踏まえ研究者の視点で実証的に明らかにした研究は管見の限り見あたらない。そのため、PYP が日本の公教育に与える影響について考察するためには、まずは日本の学校がなぜ PYP を導入するのかを明らかにする必要がある。

そこで、訪問調査におけるインタビュー項目の一つとして校長および PYP コーディネーターに PYP 導入の経緯について尋ねた。その結果、導入の経緯については、それぞれの学校や地域の事情を反映して様々であったが、全体的な傾向としておよそ下記のような 4 つの理由もしくは動機、ないしはその組み合わせがあることが分かった。

(1) 手段としての適切性・有効性

PYP 認定校の管理職および PYP コーディネーターが理由としてもっとも多く述べていたのは、文部科学省の学習指導要領で掲げる方針や目標を実現する手段としての適切性や有効性についてである。具体的に典型的な例としては、下記のような語りがみられた。

「(PYP の導入に関しては) 学校として次のステップ、(特に) 学び方を学習指導要領に合わせて、どういうふうにこれから構築していこうかということを考えました。(中略) やはり私達の学校は日本の学習指導要領をさらによりよく学ぶことが IB を入れたことの目的なんですよね。(PYP と日本の教育の) 相乗効果によって、より質を高めていくっていうことが目指すところかなと思ってるんですね。」(管理職 M12) [下線は筆者]

「どういう意図で PYP を立ち上げたかっていうところの一つとして、学習指導要領が変わるタイミングだったっていうのがあるんですよね。今後どういふことを入れていこうかっていったときに、主体的だとか探究的な学びというものをこれから日本の教育の中に取り入れていこうっていう流れがあって、今の指導要領があると思うので。なので、何か指導要領に負荷をかけてさらに何か別のことをしなくてはいけなくていいかっていうことではなく、今の指導要領を本当に豊かに深く子どもたちに伝えていこうと思ったときに、この PYP の探究的な学びですとか教科横断的な学びっていうのは自然に出てくるものなんじゃないかっていうふうに考えてはいます。」(管理職 M13)

このように、調査対象者の語りからは、文部科学省による学習指導要領(2017 年告示)の導入などの教育改革の動きを契機に、従来の教育からの質の転換をめざす「主体的・対話的で深い学び」や「探究的な学び」などの新しい方針や目標を実現するための先進的かつ先導的な手段として PYP が着目され、導入につながった経緯がうかがえる。PYP は、一般的な公立・私立の小学校で行われている教育実践や学習指導要領からかけ離れた教育実践なのではなく、これらの学校においては学習指導要領をより豊かに実践するための「一歩先を行く」教育実践モデルあるいはガイドプログラムとして認識され、導入されているように思われる。

(2) 既存の教育実践、学校の掲げる教育理念や方針などとの親和性

PYP 認定校の管理職・PYP コーディネーターの語りで、PYP 導入の理由として 2 番目に多く語られたのは、導入校における既存の教育実践や教育理念・方針などとの親和性である。具体的には、PYP の導入以前から長年「探究学習」「総合的な学習の時間」「異文化理解教育」「国際

理解教育」「帰国子女教育」「演劇教育」などに取り組み実績のある学校が PYP を導入するケースが多くみられた。

調査対象者の具体的な語りには下記のようなものがあつた。

「やはり IB の目的もそうですが、本校の教育理念と本当に親和性が高いので、そこはすごく合致してます。教育理念や IB の目的に沿った形で世の中に貢献できる人間の育成（をしたい）というのが一番大きい目的です。」（管理職 M4）

「（本校では）総合的な学習の時間が始まる前から総合学習をやっていて、総合的な学習の時間が根付いてきて、次に我々の研究の中でも、教科の横断的なのとか、総合学習の新しい良いものとして探究的な学びっていうのが大事なんじゃないかなっていうふうには考えていました。そこにこの PYP はマッチしたというところがありますね。そして国際教育っていうことも進めていたんで、そういった点でも IB は世界平和に貢献する人材育成が目的かと思うので、そこもマッチしたっていうところがあります。」（管理職 M5）

「学びを他者に伝えるというところは結構頻繁にやっていたんですよ。そういったところは元々大切にしている、表現をする、他者に伝える喜びとかっていうものを、（PYP の教育を通して）今もこれからも大切にしていきたいというところもあります。」（管理職 M13）

興味深いことに、IB との親和性についての指摘は、公立校だけではなく、宗教（キリスト教）をベースとする複数の私立小学校においても見られた。下記の語りにみられるように、カトリックやプロテスタントなどキリスト教をベースとする学校の管理職・PYP コーディネーター（特に創立時の管理職）は、IB とキリスト教の考え方に親和的な感情を抱いており、そのことが導入の一因となっている。下記の語りは、その象徴的な例である。

「（導入時の執行部は当時）キリスト教主義に基づいた探究型の学びだとか、子どもが主体になるような学びや、主体的な子どもが育つ教育っていうことをずっと考えてたそうです。その中で IB のことを勉強したら、『いやまさにそれですね!』ということで、目指す姿に IB が近かったから、それで導入したということです。」（管理職 M20）

「時代とともに変わらない（キリスト教の）価値観をどう伝えていくかというときに、出会ったのが IB だった。（中略）これは、カトリックかどうかっていうよりも、もう 30 年、40 年後になったときに、宗教を超えて、同じような価値観を継続できるんじゃないかというのが導入の一番大きいきっかけでした。」（管理職 M8）

このような調査対象者の語りからは、調査対象校がこれまでのやり方を捨て「スクラップ・アンド・ビルド」するために、あるいは急激な変化を期待して PYP を導入したというよりは、保護者などのステークホルダーへのアカウンタビリティ（説明責任）を高めたり学校のミッションをより効果的に遂行するために、あるいは既存の教育実践や理念を現代の教育の潮流にそったより適切なものに「更新」ないしは「発展」させるために PYP が導入されたといえることができるだろう。PYP を導入するための下地（実践、理念、文化など）が、PYP の導入以前の段階で既に存在していることが、PYP 導入の前提要因となっていることが推察される。

なお、すでに系列の中学校や高等学校で IB の MYP や DP をすでに実践している学校については、小・中・高で一貫教育を推進し IB の理念や教育手法を敷衍するために小学校において PYP を導入するケースがいくつかの学校でみられた。そのような学校においては、すでにその学校において実感されている IB の教育効果を他学年もしくは系列の学校園全体に広げることで学校園全体としての「相乗効果」や「ブランド力」を高めようとする姿勢が見られた。

「（私たちは）IBDP の高校を立ち上げ、小中高一貫教育を目指しておりますので、多感な時期の小学校に PYP 教育を取り入れて、国際人の育成に励みたいということで PYP の導入を決めました。（中略）（他の教育プログラムではなく PYP を導入したのは）DP との親和性ですね。繋がります。シークエンスですね。連続性があるということとラーナープロフィール（⇒【表 2-14】）とかいろんなものが全部共通しているというところですね。」（管理職 M15）

「PYP・MYP・DP が同じ地区で揃うっていうことは、日本の中でまだあまり数が少ないので、（中略）日本の中の一つの先導的なモデルとして存在価値が示せるっていうところはメリットだと思っています。」（管理職 M5）

管理職・PYP コーディネーターの語りにみられるように、PYP という国際的な枠組みを利用することで、学校がこれまで行ってきた教育活動（既存の教育実践や理念）の正当性を、外部の関係者に対してより明確かつ効果的に説明できるようになるのがブランド力を高めるメリットであると考えられる。

（3）特色ある学校づくり（他校との差別化）の一環として

調査対象者が言及した理由として 3 番目に多かったのは、地域における特色ある学校づくりの一環としての PYP の導入についてである。具体的には、地域における教育市場の競争的環境のなか、私立学校としての魅力やステイタスなどの付加価値を高める必要性などがそれにあたる。管理職の語りには次のようなものがあった。

「経営的なことを言いますと、やはりそういったものを一つ本校の特徴にして、もっといろんな、もっと多くの児童に学んで欲しい、集まってほしいという思いは当然あったと思います。」（管理職 M19）

「（もともと）PYP と同じようなこと（探究学習）をやってるんだけど、私学なので認定校になるっていうことは 1 つのステータスでもあるし、うちの教育とリンクできるのであれば、その良さがワールドスクールとしても認められて一定の価値を得られるなあ、ということもあったので認定校へのチャレンジをした、というのが経緯ですね。（中略）（PYP を導入することで）もっと強くなるし、価値も出るというか、付加価値もついて保護者の方にも理解を深められるかなという思いはありましたね。」（管理職 M10）

また、競争環境における独自性を確立する目的以外にも、外国人の増加によるバイリンガル人材育成の必要性や地域リソースの活用、国際教育や英語教育の充実を求める保護者の声やニーズへの対応など、地域の様々な需要に応えるために PYP を導入する学校が見られた。また、地方の PYP 認定校においては、地域創生や地域の活性化の一貫として PYP の導入に取り組んでいる学校もあった。

このような学校の共通点として、外国人の増加や少子化などの地域の課題をむしろ自校にとってのチャンスと認識し、新しい試みにチャレンジしようとするイノベーターの存在がある。また、そのようなイノベーターの志が、それを継承しさらに発展させようとする現在の管理職・PYP コーディネーターたちにとっても PYP 継続の一つの強い動機となっているように感じられる。

「私は IBこそ地方がやるべきだと思ってます。東京・大阪・名古屋っていう大都市は、ちょっと動けばいろんなものに触れる機会があるんですけど、地方に行けば行くほど、こういう国際的なプログラムっていうのはやはりなかなかないので、そういうものを地域で実践することに意義があるというふうに思ってます。」（管理職 M15）

「（教育の選択肢が少ない実情に対して）何かそこへね、石を投げて、波紋を広げていくっていう、そういう意気込みがあったようです。志が前執行部にあって、地域の子の教育を少し変えていかなくっちゃってという思いもあったようです。」（管理職 M20）

「この学校は周りに「探究」する学校がないので、それはこの地域のメリットにはなと思います。あと、英語で探究するっていうのがなかなかこの辺ではないので。」（管理職 M14）

このように、公立・私立の学校種の違いにかかわらず、また都市部のみならず地域においても PYP が学校や地域の魅力を高める一つ的手段として活用されている様子がうかがわれる。

ただし、実際に PYP が保護者や地域の方々にとって学校の魅力の増伸につながっているとの明確な認識は、今回の調査対象者からは得られなかった。後述するように、多くの調査対象者が、PYP の認知度の低さについて「PYP の課題」の一つとして言及している。

（4）平和な世界の構築に貢献する人材育成

なお、IB の目的の一つは「平和な世界の構築に貢献できる資質・能力の育成」であると言われるが、調査対象者へのインタビューにおいても、「グローバルな人材」や「世の中に貢献できる人間」の育成という点が、PYP 導入の理由としてたびたび言及された。

「やはり（導入時の執行部が）IB の理念に共鳴されたってことだと思うんですよね。世界平和に貢献できるグローバルな人材の育成にこういう小さな学校でも挑戦してみたいってところが一番（の動機）だったのかなと思います。」（管理職 M19）

「やはりこれからはどんな形にせよ世の中に貢献できる人間の育成っていうのが一番大きい目的ですので、そこに向けて PYP としての子どもたちを育てるところに中心を置きたいなと思ってます。」（管理職 M4）

また、なぜ他の国際教育プログラムではなく PYP か、という質問については、上記以外に認定機関としてのこれまでの長年の実績とブランド力といった理由を挙げる管理職もいた。平和な世界の構築に貢献する国際教育プログラムとしての一定の評価ないしはブランドを IB がすでに確立していることが、（他の教育プログラムではなく）PYP を導入する一つの動機となっている。

観点 1 では、日本の小学校で PYP の導入が急増している背景と、その動機を分析した。今回のインタビュー調査を通して、PYP 導入の理由は単一ではなく、各校の事情や公立・私立の違いを反映した複合的なものであることが明らかになった。それぞれの学校の導入理由には違いがあるが、主要な動機としては「（日本の学習指導要領を推進する上での）手段としての適切性・有効性」「既存の教育実践・理念との親和性」「特色ある学校づくりの一環としての競争優位性」そして、「平和な世界の構築に貢献する人材育成」という IB の理念への共感の 4 つが確認された。

PYP の導入を通して、各学校は伝統や信念といった核となる部分（ミッション）を国際的な標準と現代的な要請（アカウンタビリティ）に合わせて更新し、その存在価値を高めている。PYP の導入は、学校のミッション（教育方針）、アカウンタビリティ（説明責任）、ブランド力のそれぞれに密接に関連しつつ明確な影響を与えていると推察される。

PYP は日本の教育現場において、従来の教育実践から乖離したものではなく、むしろ学習指導要領の目標をより豊かに実現し、各校の理念を現代化（もしくは発展・深化）させ、特色のある教育を実現するための「一歩先を行く」効果的な教育モデルとして認識され、導入が進んでいることが示唆される。

観点2 PYPの特徴・利点

観点1でみたような理由で導入したPYPについて、管理職・PYPコーディネーターはPYPを（日本の従来の教育などと比較して）どのような特徴のある教育プログラムと認識しているだろうか。またPYP導入の利点についてどのように考えているだろうか。インタビューで得られた語りから、PYP認定校の管理職・PYPコーディネーターは、PYPについて主に下記の4つの特徴を利点として考えていることがわかった。以下は、それぞれの特徴・利点の概要と関連する調査対象者の語りの例をまとめたものである。

(1) 主体性を育む児童中心の教育

今回調査対象者となった管理職・PYPコーディネーターによれば、PYPの特徴は、学びの出発点を「子どもの興味関心」に置くという点にある。日本の従来の教育が教科書を中心に「何を教えるか」という教師の視点から設計されているのに対し、PYPでは「子どもが何を学びたいのか」「どのように学びたいのか」という児童中心のアプローチが重視される。このような認識の転換は、子どもの主体性を育む上で重要な基盤となっていると推察される。

また、児童が自分の学びの目的や意味を明確に理解しながら活動する点をPYPの特徴としてあげる管理職・PYPコーディネーターも多くいた。教師と子どもが「今なぜこれを学ぶのか」「この活動がどんな意義をもつのか」を共有することで、子どもは納得感を伴いつつ、自らの行動を選択できる。PYP認定校の管理職・PYPコーディネーターが、教師の指示に従って作業をこなす授業ではなく、児童が自ら考える授業や学習過程そのものを重視していることが分かる。

また、管理職・PYPコーディネーターの中には、学習を通して得た気づきや問いを、家族・友人・地域といった他者との関わりの中で発展させ、行動（アクション）に移すことを重視するものもいた。学んだことを自分の内面にとどめるのではなく、社会との接点の中で発表したり実践したりする経験は、自己効力感や責任感を育てるよい機会であり、児童が自分の学びの意味を実感する機会となっている。

関連する語りには次のようなものがあつた。

「（PYPの特徴は）子どもたちの興味関心を出発点として「学び」が始まるっていうところだと思うんです。逆に日本の教育っていうのはまず教科書があつて、先生たちは何を教えようかっていうマインドになっちゃってるんですね。」（管理職 M20）

「子どもがやることが明確になっているっていうところが、とても違うかなと思っています。子どもも何をするのか何のためにしてるのかっていうところをよく理解してやっていると、（日本の教育とは）違うかなと思っています。」（管理職 M18）

「（PYPを学ぶことを通して）子どもたちがこれから高校とか大学とかにいく中で新たな知識を得たときに、それをただ知識として子どもたちの中にあるんじゃなくて彼らがこれ

から生活とか社会の課題とかにどう繋がりがあるんだろうとかを考えてくれるといいなと思います。それがどどんうまくいって社会をどどん変えていったり、困ってる問題に対して新たな視点から解決策を見いだせる子どもたちになってほしいなと思っています。」
(管理職 M3)

「(PYP の学びでは) 自分だけの問題として終わらないで、その先に家族であったり、友達であったり、高学年だったらちょっと地域の問題であったりっていうところと、自分の興味関心を繋いでいくってところが大事だな(と思います) また、『アクション』がちゃんと据えられてるってところがいいなと思っています。(中略) 学んだだけで終わらないというか、自分の中(だけ)で終わらない、他と繋がっていくってところがいいな、大事だなと(思います)。」(管理職 M18)

(2) 概念を基盤とした探究学習の重視

また、今回調査に参加した管理職・PYP コーディネーターは、PYP の学びは概念的理解を目指しており、知識を単なる暗記や技能習得にとどめず、より広い文脈の中で活用する力を育てる教育プログラムであると認識している。また、ひとつの物事に対して様々な視点からアプローチできることを「探究」の利点としてあげる教員も多く見られた。

「主体性を育てることとそれからいろんな概念的な学びというのが、やはり公立の学校ではなかなか取り組めないところかなというふうに感じています。」(管理職 M4)

「自分の生活だったり自分が解決したい問題に活用していく力を子どもたちにつけてほしいなと思っていて、それがまさに(PYP における)概念型の学習なのかなと思っています。」
(管理職 M3)

「(PYP の利点は)「答えがない」こと。自分たちで問いを立てたりして、『答えのない問い』にいろんな角度から様々なアプローチの仕方で(探究)できるってところが(PYP は)優れているのかな。やっぱり、日本のナショナルキュラムでは『答えがある』ところに子どもたちは向かっていくので、そこが大きな違いかなと思ってて...。」(管理職 M11)

「これからの時代を生きていくには、与えられるんじゃなくて、自分で問いを見つけていく。それを探究していく。その最中にいろいろな視点で物事を考えられる...国際的に考えられる、そういう子どもが育っていくというのが一番のメリットだと思っています。」(管理職 M20)

インタビューした管理職・PYP コーディネーターたちによれば、児童は探究活動における学習内容を自分の生活や社会の課題に学びを結びつけ、「この知識はどのように役立つのか」「他の

場面にも応用できるのか」と考えるといという。また、こうした思考の積み重ねを通して、児童は自分の学びを自己の内に閉じずに社会へと開く姿勢を形成する。学びが実生活や社会課題への理解へとつながることで、子どもは自らの行動を通して世界に関わろうとする意欲を高めていくと考えている管理職・PYP コーディネーターが多くいた。この点に関連する管理職・PYP コーディネーターの語りには下記のようなものがあった。

「概念的な理解を育む方法とか、探究的に学びを進めていく力っていうのは、今のこの世の中に...（そして）これからの世の中にも、すごく必要な力なんじゃないかなと思っていて、それが一つ PYP のメリットだなと思います。」（管理職 M3）

「知識を教えることのもう一つ上に、概念というかセントラルアイデア（⇒【表 2-14】）というものがあって、子どもたちが授業の中での経験とか、自分たちでまとめたり話し合ったりする中で、セントラルアイデアにどうやって近づいていくかっていうところがいいなと思っています。（中略）知識が知識で終わらないというか、自分事となってその学んでることが生きてくるというか...、というところ（が PYP の特徴）ですかね。」（管理職 M18）

「パソコンで調べ学習させても、最初に一番上に AI の答えが出てきちゃったりってところで、これからの時代って、知識とかっていうのは答えがすぐ出てきちゃうと思うんですけど、そうじゃなくて、答えがないところに対して、どうアプローチしてどうか辿り着けるかっていう方が、僕は今後(社会で)求められる力じゃないのかな？ というふうに思います。」（管理職 M11）

（3）世界共通のカリキュラム・フレームワーク

PYP は単なる知識の習得ではなく、概念的理解を重視する教育プログラムであると認識されているが、カリキュラムの特徴として、「私たちは誰なのか」「私たちはどのような場所と時代にいるのか」「私たちはどのように自分を表現するのか」「世界はどのように機能しているのか」「私たちはどのように自分を組織しているのか」「この地球を共有するということ」という 6 つの教科の枠をこえたテーマ（⇒【表 2-14】）をあげる管理職・PYP コーディネーターが多くいた。これらの教科の枠をこえたテーマは、子どもたちが学びを現実世界の課題と結びつけ、多角的な視点で考える枠組みとして機能しており、これにより、児童は自分の興味や生活の範囲を超えて、社会・環境・他者との関わりの中で学びの意味を広げることができる。また、PYP が掲げる「IB の学習者像」（⇒【表 2-14】）は、学びの過程で育成すべき人間的資質を明確に示している。これらの資質は、知識の量よりも「どのように学び、どのように生きるか」という生涯学習者としての姿勢を支えるものであり、児童や教員が自らの成長を意識しながら行動する指針となっている。「探究」学習を行う学校は他にも多くあるが、6 つの「教科の枠をこえたテーマ」や 10 の「IB の学習者像」を掲げる PYP の教育方針が設定されていることが、PYP 認定校のアイデンティティや一体感を創出する肯定的な要因となっているように思われる。

「非常に枠組みがきちっと整理されているっていうことと、確かにこれは世界のどこの国でも、あるいはどこの時代でも通用する内容がよく考えられてるなっていう、そのところは非常にしっかりしたものだなっていう印象を持っています。」（管理職 M19）

「PYP の優れているところは、分野がきちっと 6 つの分野に決まってまして、それぞれセントラルアイデアを通して子どもたちが何を概念として獲得していくかってことが、きちっと据わっているというところ

です」（管理職 M19）

「PYP は子どもたちの授業の様子を見ていて、一つの『型』があるんだろうなと。その型にはまることによって探究的な学習が進んでいくんだろうなと...。そのような印象を持っています。」（管理職 M6）

（4）形成的評価と評価基準の重視

また、少数ではあるが、形成的評価や評価基準を重視している点を PYP の大きな特徴としてあげる管理職・PYP コーディネーターもいた。下記の語りにみられるように、数値では表せない「形成的な評価」に重点を置き、答えのない課題に対して多様な視点やスキルの育成に取り組ませる教育方法は、確かに PYP の特徴の一つであると考えられる。

「（PYP は）『形成的な評価』つまり数値で表せないものに焦点を当てるっていうことができる。（中略）できるかできないかじゃなくて、答えがない問題なんだけれども、そこに対しての様々なアプローチができるのが僕は PYP じゃないかな、というふうに思っています。」（管理職 M15）

このように、管理職・PYP コーディネーターの認識する PYP は、「主体性」と「概念的な探究」を軸とし、世界に通用する明確なカリキュラム・フレームワークのもとで、結果だけでなくプロセス（形成的評価）を重視しながら人間的資質の育成（IB の学習者像）をめざす教育プログラムであると言える。

このような認識は、IB 機構の PYP についての公式ホームページや公式文書等における説明などとも一致しており、「主体性の育成」「探究学習の重視」「形成的評価の重視」「学びに向かう力・人間性」などについては日本の現行の学習指導要領の重視する方針とも一致する。

PYP の管理職・PYP コーディネーターたちは、学習指導要領に基づきながらも、児童が自らの興味を出発点とし、概念を通して知識を「活用」し、社会の中で「行動」に移す力を身に付けることを期待している。PYP 認定校の管理職・PYP コーディネーターが、日本の学習指導要領と PYP の両方が重視するものをよく把握しながら学校運営を行っている様子がうかがわれる。

観点 3 探究的な学びについて

前述したように、PYP では「教科の枠をこえたテーマ」にそって教科の壁を越えた学習が年間を通して行われることになっている。しかし、日本のいわゆる一条校では、「国語」「算数」「理科」「社会」などの教科と、教科ごとの年間指導時間が厳格に設定されているため、教科学習を全く行うことなく教科を統合した形での教科横断的な探究活動のみを行うことは日本の文脈では難しい。

PYP 管理職・PYP コーディネーターへの聞き取りを通して、多くの PYP 認定校が文部科学省に「教育課程特例校」の申請をしており、一部教科の時間を削って生み出した教育課程内の時間、総合的な探究の時間、および教育課程外の時間を合わせて、週 5~10 時間程度の PYP の探究学習の時間を確保していることが分かった。例えば、ある PYP 認定校では、似通った指導項目を部分的に削除・統合したり（社会科の場合）、単元同士で関連する内容を統合させて指導したり（理科の場合）、教科で指導する内容の一部を探究活動で取り扱ったり（国語科の場合）することで教育課程における時間数の削減を行い、探究的な学びの時間を確保する工夫を行っていた。

また、PYP の UOI（⇒【表 2-14】157 頁）の内容については、学習指導要領の目標・内容を PYP の 6 つの教科の枠をこえたテーマにそって再構成し、年間カリキュラムを作っている場合が多かった。また、今回調査を行った学校では、探究単元に落とし込むことができない教科内容については、そのまま教科に残し、教科の時間に教えていた。

また、「教科の時間」と「探究の時間」のどちらにどれだけ力点をおくかは、その学校の教育課程についての考え方によって異なるが、多くの学校が教科における学習と UOI のつながりを重視しており、国語、社会、理科などの教科においても探究的な学びや児童の主体性をはぐくむ学びが行われている。教科と探究の時間の内容を全く切り離して行う学校もあるように見受けられたが、多くは探究の時間に必要となるスキルベースの学習を教科で行うなど、探究の時間と教科の時間をできる限り有機的に結び付けようとする学校もあった。また、探究と教科での学びをつなげることで、教員の負担を減らそうとする学校もあった。

また、学校によっては、学校全体で、あるいは高学年の一部の学級で、英語でのイマージョン教育が行われており、その場合外国人と日本人の教員がペアになっての学級経営やチームティーチングが行われている。そのような学校は、英語イマージョン教育を学校の特色の一つとして実践しており、英語教育に対する保護者の期待も高い。また、保護者の英語教育に対する期待は今後もしばらくは続くであろうと予測する管理職や教員もあった。しかし、英語力をどのように伸長していくか、また英語力が十分でない児童に対するサポートをどのようにするか、またどのように英語のネイティブ教員を確保するかなど、そのような学校ならではの悩みを語る管理職もあった。（この点については、観点 4「PYP の課題」の節で詳述する。）

また、PYP で取り扱う UOI の課題として、例えば社会科の中ででてくる内容を探究単元の中で取り扱う場合、社会科か探究単元かどちらの領域で評価するのか、またどのように評価するのかなどより適切な評価方法についてさらに研究していく必要性を指摘した学校もあった。

探究的・教科横断的な学びの実践は、各学校が学習指導要領の枠組みの中で、いかに柔軟かつ効果的に教育目標を達成するかという課題に対する多様なアプローチを示している。PYP 認定校の共通のカリキュラム・フレームワークとして教科の枠をこえた探究的な学びを重視しつつも、

教科ごとの基礎的な知識やスキルも重要視しており、そのバランスの取り方が各校の特色となっている。

なお、2025 年 9 月 19 日付け教育新聞などの新聞報道によると、文部科学省は次期指導要領にて「調整授業時数制度」を導入する方向で検討しており、来年度より研究校で先行実施を始めることを中央教育審議会教育課程企画特別部会に報告したという。文部科学省（2025）によれば、この制度は、年間 35 コマ以上の許可について授業数の一割程度を上限に各学校の柔軟な運用を認めるもので、別の教科等への上乗せや、教科の新設、学校の裁量的な時間として活用できるというものである。まだ制度設計の段階ではあるが、この制度が実現すると、現在教科の時間の一部を割いて探究活動の時間を生み出している PYP 認定校にとっては、「教育課程特例校」申請が簡略化される可能性もあり、PYP の運用がよりやりやすくなる可能性があるだろう。

観点 4 PYP の教育効果

PYP 認定校の管理職や PYP コーディネーターは、どのような点を PYP の教育効果と認識しているだろうか。本節では、「児童への影響」（観点 3-1.）と「教員への影響」（観点 3-2.）のそれぞれについて、調査対象者へのインタビューを分析した。

◇観点 4-1. 児童への教育効果

PYP の児童への教育効果としては、主に下記の 4 点が言及された。順に調査対象者の語りをまとめたい。

（1）主体的な学びへの姿勢の育成

第一に、多くの管理職や PYP コーディネーターが「PYP の効果」として強調したのは、児童の「主体的な学びの姿勢」の育成である。管理職・PYP コーディネーターは、PYP の学びが児童にとって「与えられた学び」から「自分の学び」へと転換する契機となっていると実感しており、知的好奇心や自己肯定感の向上につながっていると評価している。また、従来の一方的な授業と比較して、児童の発想を起点とする学習プロセスが、主体性を育成する実践的な基盤として管理職・PYP コーディネーターたちに認識されている。

具体的な語りには以下のようなものがあつた。

「（PYP の教育効果は）子どもたちの学びへの姿勢だと思うんですね。それは通常の教科を積み上げる学習のときとは違って、子どもたちがダイナミックさっていますかね、子どもたちらしい学びの姿を見せてくれるってところが一番のメリットかなと思ってます。」（管理職 M19）

「学びが子どもたちのものになる、自分自身の学びになるというのが、PYP の学び方を使うことによって以前と一番変わったことだと思っています。（PYP を）やる前とやった後

の大きな違いって、子どもが自分の学びとしているかしてないか。与えられた学びであったか、自分の学びであるかが大きな違いだと思うんですね。」（管理職 M12）

「公立ではある程度枠組みの中で子どもたちが教員の指導に従って学習するスタイルが多いですし、そこが PYP を学んでいる子どもたちからすると自分の発想または気づき、そこから学びを広げていけるところがすごく大きいところかなというふうに感じております。」（管理職 M4）

「（PYP の教育実践を通して）知的好奇心っていうのが旺盛になってるなって思います。うちの学校の子たちは自己肯定感がすごい高いんですよ。で、自分の人生を自分らしく生きていこうっていうような、思いがね、伝わってきます。」（管理職 M20）

「自分たちで考えないと進まない。（中略）そこには思考力だったり、判断力っていうのが必ず伴うので、そういう意味では（PYP のやり方は）非常にいいかなと思いますね。」（管理職 M10）

（2）概念形成のための探究と育成

第二に、「主体性を支える学習プロセス」として、「概念形成を目的とした探究学習」の効果が挙げられる。インタビューでは、児童が学年の進行に伴い、事象間の関連性を見いだす姿や、IB が「特定概念（⇒【表 2-14】）」と呼んでいる 7 つの概念群（特徴、機能、原因、変化、関連、視点、責任）を用いて見方・考え方を柔軟に適用する様子が報告された。また、学んだ概念や知識を他教科や異なる文脈へ転移する姿も報告されており、探究的思考の習慣化が児童の学習に質的変容をもたらしていることが示唆される。教員の語りには、下記のようなものがあった。

「概念的に理解を深めるために探究をしていくっていうのがすごくいいなと思っています。子どもたちの中でどんどん学年が上がっていくと、『これとこれは繋がってる』とか、『これも同じことあった』とか『つながり』を見つけることの面白さみたいなのを子どもたちが教えてくれてるなと思って、それはこれからの社会で『生きていく力』なのかなと感じています。」（管理職 M3）

「PYP は特定概念と言われている例の 7 つの見方考え方みたいなのがだいぶ子どもたちの中に根付いてきていて、教科学習をしていても『それって<変化>っていう見方で物事を捉えてることだね』って子どもが言ったりとか、『それは<特徴>を捉えて調べてることだね』とかって言うような姿は見られることがありますね。それはすごくいいことだと思います。」（管理職 M5）

「必ずしも概念で結びつくものじゃなくても、子どもたちがあるユニット(⇒【表 2-14】)から学んだことを他のユニットや他の場面で転移させようとしてくれる場面っていうのは今あったなと思いました。」(管理職 M3)

このように、PYP の概念的な学びや前節で言及した子どもの発想を起点とした学びの広がり子どもたちの知的好奇心の旺盛さや自己肯定感の向上につながっていると管理職・PYP コーディネーターたちは考えており、PYP の教育実践を通して、与えられた学びから自分自身の主体的な学びへの質的な転換がなされていると肯定的にとらえている。

なお、このような能動的な探究学習の教育効果の具体的な表れとして、全国学力学習状況調査の回答率の向上(=無回答率の低下)をあげる学校もあった。児童の学習への能動的姿勢が測定可能な成果として表出している例と考えられる。

「データとしては、この IB の探究をやり始めて全国学力学習状況調査で、無回答率がすごく下がったっていうことがありまして、(中略)何かしら自分なりに物事に対して答えを出そうとするっていうか...そういう姿勢っていうのはすごく伸びたんじゃないかなと思います。今年の全国学力テストでも無回答率が平均 12%の問いがあるんですけど、それうちは 0%でした。」(管理職 M5)

(3) 表現・発信能力の向上

第三に、管理職・PYP コーディネーターは「表現・発信能力の向上」を PYP の重要な教育効果の一つとして認識している。表現や発信能力は、IB が目指している「IB の学習者像」の中の一つの資質である「コミュニケーションができる人」や、学習に関する IB の方針をまとめた「学習のアプローチ」(⇒【表 2-14】)の中で取り上げられるコミュニケーションスキルにおいても重視されており、年間を通してプレゼンテーションの機会を創出する教員の姿が見られた。また、探究単元の総括課題として口頭での発表が推奨されたり、最終学年で PYP 学習成果発表会(PYP エキシビション⇒【表 2-14】)という発表会が PYP の規定として課されるなど、カリキュラム構造が、発信力や説明力を育成する基盤として準備されている。児童が多様な聴衆の前でも自信をもって発表する姿は、従来の日本の教育で弱点と指摘される「表現」の側面を補完する成果として位置づけられている。

「子どもたちが育んでる力の中で一番感じるのが発信力というところかなと思います。(中略)いろんな機会を捉えて毎年夏のところでは個人探究というものに取り組んでいますし、PYP の集大成として最終学年でエキシビションを行い発表しますが、友達の中だけではなく、保護者の方や学校関係者の方々がいらっしゃっても、臆することなく、自分の学んできたまたは調べて探究してきたことを堂々と発表できる姿っていうのが素晴らしいなと思っています。」(管理職 M4)

「日本の教育でも十分素晴らしい教育だと思うけれども、（PYP と比較して）日本の教育の足りないところと言うと『表現』です。そういうところっていうのは日本の教育ってのはちょっと弱いところなのかなというふうに思っているんですね。」（管理職 M13）

「（PYP では）プレゼンテーションの機会が多いので話す力っていうか、自分の考えを説明する力みたいなのは、とても伸びているというふうに思います。」（管理職 M5）

「PYP の児童たちを見ていると、発信力とか、プレゼン力とか、発想力っていうのはすごい豊かだなと思います。（中略）特に PYP のプログラムを実践してる中で、子どもたちのプレゼン力や発信力や発想力というのは、多分すごく秀でているんじゃないかなと思います。（管理職 M9）

（4）多面的・多角的な思考力の育成

最後に、管理職・PYP コーディネーターからは、「多面的・多角的な思考力の育成」も PYP の教育効果として挙げられた。具体的には、児童が複数の視点から物事を捉え、独自の判断を形成する態度が育っていること、さらに難民問題などグローバルなテーマを扱うユニットを通じて視野の広がりを実感されるなどのエピソードが語られた。これらの語りから、PYP が児童たちのグローバルな課題意識や広い視野を育成する機能を果たしていることがうかがえる。

「物事を多角的・多面的に考えて判断するみたいな、自分の考えを持つっていうような、そういう考え方みたいなのはすごく（PYP で）育ってきているんじゃないかなと思います。」（管理職 M5）

「（PYP をやることで）視点が広がりますね。日本だけの視点じゃなくてグローバルな視点に行けるんじゃないかなと。例えば、（日本の学校では）5 年生で難民問題なんていうのは絶対しないと思うんですよ。ただうちだと、5 年生で『なぜ難民が生まれるのか』とか、どういう考えを 5 年生として持っているのっていうような、ちょっと視野が広がるような設計をされてるので、そういうところは非常に素晴らしいかなというふうには思ってるんですよ。」（管理職 M15）

PYP 認定校の管理職・PYP コーディネーターへの聞き取りを通じて、PYP の児童への教育効果には、主に「主体的な学びへの姿勢の育成」、「概念形成のための探究と育成」、「表現・発信能力の向上」、そして「多角的・多面的な思考力の育成」の 4 点があることが分かった。管理職・PYP コーディネーターの語りからは、児童が学びを「自分自身のもの」として捉える質的な転換が生じ、知的好奇心や自己肯定感の向上に繋がっているという肯定的な認識が示されている。また、PYP の教育実践を通して、つながりや共通点を見出す力や特定概念を通して思考を広げる

力が育まれたり、全国学力学習状況調査における無回答率の低下が見られる学校があるなど、具体的な成果を挙げる学校もあった。

このように「児童への教育効果」という観点からまとめると、PYP を導入する意義としては、従来の日本の教育が強みとしてきた知識の系統的・体系的習得を補完しつつ、近年の教育動向にみられる「主体性」「表現力」「概念的思考」「多角的視野」の育成といった新たな資質・能力の育成を可能にしている点にある。PYP は、学習観・評価観・カリキュラム観の転換を通して、児童を変化の激しい社会で主体的に生きる学習者へと成長させるプログラムとして管理職・PYP コーディネーターに認識されている。

◇観点 4-2. 教員への教育効果

次に、PYP 教員への教育効果については、特に「協働設計を通じた専門性向上」「児童中心主義への意識転換」「探究的・概念的学习に対する理解の深化」の3点が強調された。インタビュー結果の概要と教員の語りをまとめる。

(1) 協働設計を通じた学びと成長

まず、教員への教育効果として、管理職・PYP コーディネーターからは PYP の協働設計のプロセスを通して、教員同士の専門的な学びが促進され教員としての成長につながった、といった発言が多く聞かれた。PYP では、学校組織として教員がチームとなって UOI を計画することが推奨されている。協働設計は時間がかかる作業ではあるが、現場の管理職・PYP コーディネーターには好意的に受け止められているようである。また、管理職・PYP コーディネーターの語りからは、UOI の協働設計を通じ、教員間で学習目標や児童像への共通理解が形成され、その過程で活発な専門的対話が生まれ同僚性が高まっていることが報告された。日常的に協働設計に取り組むことで、学年での連携や学年を超えた異学年間の連携が強まり、教員が相互に支え合う文化の醸成が促進されている様子がうかがわれる。

また、PYP の協働設計を通して、専門的な対話や意識の統一がはかれ、それによって教員の意識に変化が起こり、そのことが再び教員間の対話を生み出すという好循環が、管理職・PYP コーディネーターに実感されているように思われる。

以下の教員の語りは、協働設計について数多く言及された語りの中のほんの一部である。

「先生にとって良い影響…。なんていうか、思いを一緒にできるっていうか…。『セントラルアイデアって、これって結局どういうこと?』『子どもたちがどういう姿になってることを目指すのかな』っていうのを、プランニングの段階ですごく話し合うので、そこで思いが一つになって、他の学年の子でも見てあげられるっていうところが大きいな、と思います。」

(管理職 M18)

「教員同士が UOI を進めるにあたっては協働設計をしなければいけないので、単純に担任が全てを背負うというよりは、学年だったりいろんな先生同士の関わりが広いかなと…、そ

うすると 1 人で思い悩むのではなくて、協働的に働けるところがこの学校のプログラムを取り入れたところで教員も様々な意見を取り入れながら成長できるところが大きいかなと思います。」（管理職 M4）

「（協働設計を通して）一つの学年の中が同じ方向に向かって教育を進めていこうという意識は醸成されるのかなと思います。（中略）先生 1 人がやるんじゃなくて、学年団で協力し合いながら探究の単元開発をしていくので毎週必ずそういった探究の打ち合わせを持つようにもし...システムの、スケジュール的にしてるんですけども、そこで話し合って協働的に作っていこうみたいな雰囲気というか風土っていうか、そういうのがあるっていうところはすごく（PYP の）いいところじゃないかなと思ってます。（管理職 M5）

なお、この点については、昨年度（2024 年度）に行った「DP の教育効果研究」においても DP 認定校の管理職・PYP コーディネーターや DP 教員による同様の語りが複数みられた。目標が定まった協働作業の中での教師の学び合いや、その結果としての気づき・成長がみられる。「協働設計」という大きな方針が学校全体で示され、そのような文化が醸成されるということは、PYP、DP などのレベルにかかわらず、IB の教育プログラムを丸ごと学校に導入する利点であると感じられる。

（2）教師中心から児童中心への意識の変化

次に、PYP 教員への教育効果として管理職・PYP コーディネーターが指摘したのは、「教師中心から児童中心への意識の変化」についてである。具体的には、児童の学びや成長を評価する際、自分の視点ではなく児童の視点で考えることの必要性に気づいたり、児童が困難を抱えたときには児童ではなく教員の側が責任を感じたり、子どもとともに学びの成果に感動することに喜びを感じるなど、学習に対する見方の転換と授業運営における具体的な行動の修正を見て取ることができる。管理職・PYP コーディネーターの語りから、PYP が教員の教育観にも顕著な変容をもたらしていることが確認される。典型的な語りには次のようなものがあつた。

“A positive impact it has on teachers. I think the PYP asks the teachers to look at the learning from a student's perspective.”（日本語訳： 教員に肯定的な影響を与えています。PYP では、教員は児童の視点から学びをとらえるようになります。）”（管理職 M21）

「子ども主体の授業っていうのを意識してやってくれるようになってきたかな。子どもが主人公だし、1 人ずつ必要なものが違うから、私達はどう提供したらよいかっていうふうに（考えることを通して）先生たちが成長してきていると思います。」（管理職 M20）

「授業が作業になっちゃうと駄目なので、子どものための授業をどう楽しんで考えて、子どもとどう楽しんでやっていって...。子どもが書いたものに自分が感動してっていうよう

な先生であるっていうこと求められる。（中略）特にうちの学校はそういう先生であって欲しいですっていうことは他の先生方にもお伝えしますし、皆さんそうやって考えてくださって取り組んでいただけてるんですね。」（管理職 M12）

「当時、IB のことを知ってる人間が 1 人もいない学校だったんですね。なのでみんなゼロから探究して考えていって今の状態にある。それぞれの先生が自分で探究していたことを生かしながら、今授業をしてくれていますけれども.....それこそ子どもと先生でつくる探究であり、探究を通して学級経営をするってというのが一番教員にとっては大事で、これがうまくいくところと、なかなかうまくいかないと思うところがありますね。」（管理職 M12）

（3）探究的・概念的な学びへの理解の深まり

また、教員に対する PYP の教育効果として、複数の管理職・PYP コーディネーターは IB で重視される学習アプローチを、教員たちが教科の枠をこえて取り入れる試みを始めていることに言及している。当初、「探究」がテーマ学習と混同され理解が難しかった教員も、「探究を通じて概念を学ぶ」という視点を得たことで、教育実践の基盤が確立されたと指摘する管理職・PYP コーディネーターもあった。さらに、PYP の教育実践の取り組みが、体育や算数といった具体的な教科でのセントラルアイデア作成などの試行にも結びついており、教員にとって大きな成長につながっていると管理職・PYP コーディネーターは感じている。また、ある PYP コーディネーターは、平和の構築という IB の理念が教える学習内容全てに通底しているという認識をもっており、このことが教員の大きな成長につながっていると述べた。IB の理念である「平和の構築」が教員の教育的使命感や授業デザインの一貫性を支える基盤となっていると推察される。

具体的な語りには下記のようなものがあつた。児童に概念的理解を促すだけでなく、教員も概念的理解によって教員としての力量をあげている様子が見られる。

「概念的理解ってすごく IB は言ってるんだけど、この学びのことについて、ものすごく教員の勉強になっているところがあつて、探究の時間はもちろんだけど、それ以外の教科学習の時間でもそういった探究的な学びとか、概念的な理解を促すような学びっていうのを取り組んでみようっていうような、そういう動きがあるのは、すごく先生たちにとってもいいことじゃないかなというふうに思っていますね。」（管理職 M5）

「『探究を通して概念を学ぶ』っていうところが学べたのが一つすごく良かったなと。成長させていただいたと思ってるし、バカロレアっていう平和のためっていうところが一つ通っていることで、何を教えてもやっぱりそこに向かってるんだよっていうところが自分の中でも組み立てられてるのがすごく自分の成長につながってるなと思いながらやります。」（管理職 M18）

「概念的な理解の方は、日本の学習指導要領で言うとたぶん深い学びに近いものじゃないかなと思ってまして。つまり、何か一つの知識がわかるとかできるとかっていうことだけじゃなくて、その奥にあるもっと大事なことをみたいところまで深く考えられるようにしましょうっていうところは、日本の学習指導要領でもきつと求められている部分があると思うんですけど、(中略) 新しいトライに結びつくようなエッセンスを得ることができたっていうところはやってよかったかなと思います。」(管理職 M5)

観点 4-2. では、PYP の導入が教員に与える効果として、「協働設計を通じた専門的な学びと成長の促進」、「教育アプローチにおける教師中心から児童中心への意識変化」、そして「探究的な学習および概念的な学びに対する理解の深化」という三つの点が管理職・PYP コーディネーターから指摘された。管理職・PYP コーディネーターの語りでは、教員がチームとしてユニットプランナーを立てることがお互いの専門性を高め、学校全体で教育の方向性を共有することにつながり、また児童の視点から学びを捉え直し、必要に応じて指導法を柔軟に変える重要性が強調されている。さらに、PYP の「概念的な学び」を重視する考え方は、日本の学習指導要領で求められる「深い学び」にも通じるものであり、探究や概念的理解を中心に据えた PYP のカリキュラム構造や、その教育理念に裏打ちされた教育実践が、教員に新たな視点をもたらしている。

観点 5 PYP の課題

PYP を日本の学校に導入し運営していくには、どのような課題があるだろうか？ その点を明らかにするために、管理職・PYP コーディネーターに PYP の導入・運営に関する課題を聞いたところ、下記のような 6 つの項目に関して意見が挙げられた。

- ・学習指導要領との整合性に関する課題
- ・費用面での課題
- ・人材育成と研修に関する課題
- ・資料などが英語で書かれていることについての課題
- ・保護者への説明・理解と認知度の向上に関する課題
- ・会議の多さ

以下は、それぞれの項目について、語られた内容の要点をまとめたものである。

(1) 学習指導要領との整合性に関する課題

今回のインタビューにおいて、管理職・PYP コーディネーターから最も多く聞かれた PYP の導入・運営上の課題は、PYP のカリキュラムと日本の学習指導要領の整合性に関する様々な課題についてである。特に、PYP の探究ベースのアプローチと、体系的で厳格に定められた日本のカリキュラムとの根本的な発想の違いが、両立を非常に困難にしている。限られた時間の中で、UOI に組み込めない学習指導要領の内容は教科内で取り扱う必要があり、時間数の確保が必要になることが指摘されている。また、最終的に学習内容をどのように評価するかという点も、課題となっている。

管理職・PYP コーディネーターの語りには下記のようなものがあつたが、中でも 3 番目に引用した管理職・PYP コーディネーターの語りは、日本の教育と PYP の教科学習についての文化的な発想の違いについても言及しており、大変興味深い。

「公立で取り入れるためには学習指導要領とどううまく融合させるか、限られた時間の中でどこをどういうふうに工夫するといいいのか、っていうところが一番大きい課題かな」（管理職 M4）

「日本のカリキュラムは結構きっちりしてるじゃないですか。それを使って探究単元を作ったんですけど、（学習指導要領の内容を）六つのユニットにどう分けていくかっていうのが最初とてもパズルみたいに大変でした。（中略）日本の MEXT のカリキュラムは一条校として、全て教えないといけないので...。」（管理職 M14）

「日本は教科学習がベースにあって、それらを生かして、総合的な学習で活かして使いましょう（というやり方）。でも PYP はそうじゃなくて、探究が先なんですよ。子どもたちがやりたいという探究を思い切りやらせてその中で、教科的な学びがあればそこを結びつけて教科をやっていきましょうというような、発想が逆なのが非常に難しいです。両立させるのは、（PYP では）探究をメインにしてそこに結びつく教科をやってくっていうふうにやろうとしますが、多分学習指導要領の内容が全部そこに結び付けて入れられるかっていうと、入らない。それから学習指導要領はものすごく系統性とか考えて作られてますよね。特に算数は。それがもうバラバラに出てきちゃうというところがあるので、そこを両立させていくのは、どうしても難しさがやっぱりあって、結局今やってるのは探究メインで教科をできるだけ結びつけるけど、入らない教科学習のものはもうその学年で算数なら算数、国語なら国語、理科なら理科、社会なら社会というふうにスタンドアローンでやるしかない。そしてその時間もやっぱり確保しなくちゃいけないっていう、そういうことになるので、どうしてもコマ数が必要になる。両立させるときにはすごく難しさがあると思いますので、私達の学校はそれを教育課程特例で（やっています。）（PYP は、）教育課程特例か、ものすごい読み替えをしないとできない。そこが難しいんですね。またさらにそれをどう評価するのか。例えば社会科のある内容があつて、それはもしかしたら探究の中に位置づいてるかもしれないけれども、それは社会科で評価するのか、探究で評価するのか、みたいなこととか、どう評価するのかみたいなところは、まだまだ我々も研究途中っていう段階です。」（管理職 M5）

このように、PYP のカリキュラムづくりについては、一条校であるかぎり学習指導要領との整合性を保たなければならないため、どのような学習内容を、どの学年で、どのような学習レベルで配列するかという点で判断を迫られることから、一定の難しさを伴っている。また、厳格な教科別授業時数の枠組みを基本とする現行制度ではカリキュラム編成上の制約が大きく、教科横断

的な学びが中核となる PYP プログラムでは探究のための時間確保が制度的に難しい。PYP 認定校を更に増加させるためには、学習指導要領の目標を 6 年間で確実に達成することを前提とした上で、教科横断的な探究学習を育成する学年の枠を超えた学習内容の組み換えや授業時数の柔軟な設定を認めたり、ディプロマ・プログラムで認められているような科目の読み替え措置を認めたりするなど、制度的な検討も必要であろう。

なお、PYP では学習内容の配列が決まっていないため、逆に、日本語でのリソースや児童の発達段階に適した学習レベルに配慮された日本の教科書や学習指導要領が探究単元を作成する際の「ガイド」になっているという意見もあった。例えば、下記に語りを引用した教員は、PYP の探究単元がインターナショナルスクールの教育活動を参考としている場合などは特に、ともすると児童の実態と乖離した学習活動になってしまっている現状を「大人の趣味」と表現し、日本の教科書や学習指導要領が一定の「ブレーキ役」をはたしていることを明かした。

「インターナショナルスクールとかで見たものを参考に最初の POI (⇒【表 2-14】) って作成されてたと思うんですね。ただ、やっぱりそうすると日本の子どもたちにあまり馴染みのないトピックだったり、あとリソースを子どもたちに与えるときに、日本語でのリソースとかが少なかったりして、やっぱりちょっと「大人の趣味」みたいなふうに走っちゃってたところがあったのかな...とは個人的に感じていて、それがやっぱり教科書の内容とか入ってくるとリソースが子どもたちの実態に合ったりとか、先生たちも(日本の)教科書で「このくらい言ってるんだからここまでできてたらもうすごいんじゃない?」みたいな感じでちょっとブレーキが利くようになってきてるのかな、と私も先生たちも、やってく中でどういう形でやればいいかっていうイメージがどんどんついてきたのかなと思います。」

(管理職 M3)

このように、PYP においては探究単元の策定が完全に教員の裁量にゆだねられている中、一条校で PYP を導入している学校の教員にとっては、日本の教科書や学習指導要領が、日本の児童の平均的な学習レベルを確認したり探究の内容や方向性を調整する参照枠としての役割を果たしていることが明らかとなった。一条校で PYP を導入する学校の特徴と考えられる。

また、関連する課題として、IB の 3 つのプログラムの接続に関する課題にも言及したい。具体的には、学校の中には、同じ系列の中学校が IBMYP を採用している学校もあれば、そうではない学校もある。MYP を採用している学校が系列校となっている場合はそのまま IB を継続できるが、そうではない場合は学習指導要領ベースの教育へ移行する児童のために、小学校段階で学習指導要領の内容を確実に履修させる必要が生じる。PYP の探究的学習と日本の標準カリキュラムの両立が難しいとされる背景から、この接続は学校にとって大きな負荷となる可能性がある。

「PYP 認定校になって小学校の間はいいけど、中学校に出た場合に MYP 校じゃない場合、小学校で学習指導要領の内容をちゃんとやって送り出せばいいんですけど、それがどう

なのかっていうところが、今うちは何とかやろうとしてますけど、そういう課題もあるか
と思います。」（管理職 M5）

「PYP→MYP→DP の接続がすごく課題だなんて感じてます。PYP、MYP、DP って育っ
ていく中で、子どもたちをどうサポートしていけばいいのかとか、あと今の例えば 1 年生
の子が（将来）DP 入試を受けるときって、今の国内の大学入試の状態と少し変わってる可
能性もあるし、反対にぜんぜん IB 的じゃない不利な方向に行ってる可能性もあるので、そ
のときに未来を見据えてどういうふうに戦略を立ててやっていくかっていうのは、すごく
難しいなと思い（ます）」（管理職 M3）

（2）費用面での課題

また PYP の課題の一つとして、教育の導入と運用に伴う様々な費用に関する発言も多くみら
れた。PYP 認定校は IBO に年会費を支払う必要があり、教員が参加しなければならない有料の
ワークショップが新人研修も含めて発生する。人的流動性の高い私立校や毎年人事異動がある公
立校にとっては、新規に入職する人材の研修費をどのように捻出するかは頭の痛い問題である。

さらに、評価訪問時の交通費や宿泊費、通訳費用なども学校側の負担となり、これらが安くな
い費用として管理職・PYP コーディネーターに認識されている。そのため、管理職・PYP コーデ
ィネーターからはオンラインのものも含めてより多くの無料でのワークショップの開催を望む声
が聞かれた。また、文部科学省 IB 教育推進コンソーシアムの活用も期待されている。

「一つは費用面ですよ。認定校になったら年会費がかかりますし、教員は全員ワークシ
ョップに出なきゃ行けない。そのワークショップが有料である。新人が来たら新人もやん
なきゃいけない。これも有料である。それから評価訪問があつて、評価訪問のときに IB 本
部から人が来るけど、その際の交通費だったり宿泊費だったり、そういうのもこっち持ち
になるとか、通訳をつけたらこちら持ちになるとか、そういう費用面はそんなに安くない
んじゃないかなと思いますので、それは一つ大変な課題です。」（管理職 M5）

「子どもたちの教育に関わる者すべてが IB の研修を受けることってのが、一つのハードル
になりますので、結構これがね、お金の面もありますし、ちょっとしっかりやってかなきゃ
いけないんですけども...。まだちょっと追いついてない部分は正直ありますね。」（管理
職 M19）

「もっと無料のワークショップがあるといいですね。今、IB Exchange (⇒【表 2-14】) が
あってそこで色々な (Online) ワークショップは、あるんですけど。そうですね。先生方
がもっとそういうワークショップに出られるといいなと思ってます。」（管理職 M14）

また、多くの学校では、費用がかかることを承知の上で学費を上げずにより良い教育を提供したいという強い思いで取り組んでいるが、円安が外国人教員の雇用コストをさらに押し上げ、優秀な人材の確保を困難にしているという側面も述べられた。できるだけ良質の教育を安価に提供したいという気持ちと、内外の経済情勢の厳しさの中で、ジレンマを感じる管理職・PYP コーディネーターの様子が見えてくる。

“Yen has been really destructive to us. It's so difficult to recruit talent now. (日本語訳: 円安の影響はとても大きいです。近年は優秀な教員を雇うのが難しくなっています)”
(管理職 M2)

「人件費も PYP の (外国人の) 先生は、結構高いお金を受け取る方が多いので。そういう意味では、すごい厳しいところがあるなと思います。」 (管理職 M8)

「(課題は) 強いて言うならばお金かかるなっているのがあります。私どもの学校は (PYP を) 導入してその分お金を取りましょうってことをしてないんですよ。やっぱり「お高い学校」でありたくないと言いますか、より良い教育というものを皆さんに提供できる学校でありたいという思いでやってるので。」 (管理職 M13)

(3) 人材育成と研修に関する課題

人材育成と研修に関しては、費用の問題もちろんあるが、誰がどのように研修を行うか、もしくはアレンジするかも課題と認識されている。特に公立の学校においては、毎年一定数の異動があるため、新しく入職してくる教員への研修が負担となっているようである。

「先生の入替えがあると全てスタートから教えないといけないから、そこがすごく難しいところで...、今年も何人か新しい先生がいるんですけど、その先生と毎週ミーティングをして、ユニットを見てどういうふうに教えていくかっていうのを、もう毎週話をしてるんですけど、やっぱりそれだけじゃちょっと足りないんですね。」 (管理職 M14)

また、PYP においては、すでに経験をつんでいる教員にとっても、研修は必要なこととなり継続して PYP 教員としての専門的知識や授業力を向上させることが期待されている。PYP の探究サイクルの理解、評価設計、概念ベースの教育実践などは高度な専門性を要するため、経験を積んだ教員にとっても継続的な学習が不可欠であるが、校務の中で研修の時間を十分に確保することは難しく、結果として各校で試行錯誤しながら質の維持・向上を図っている状況が見えてきた。

「まだまだこの探究のサイクルの流れに乗ってるのかというところがかなり不安なところであったりとか、あとは評価がちゃんと組み立てられてるのかなっていうところが、まだまだ課題だなと思ってやっています。」（管理職 M18）

「学校として月に2回ぐらいPYPミーティングをするんですけど、その中でできてないところとか、評価についてみんなで話し合ったりとかしてるんですけど、そういうのをやっていけないといけないんですけど、時間がなかなか取れなくて。いろいろ課題がありますよね。」（管理職 M14）

また、そもそも人材育成や研修を行う立場のPYPコーディネーターの職が、日本の学校制度の中には位置づけられていないことを指摘する意見もあった。PYPコーディネーターの力量を持つ人材をどのように確保し、日本の学校システムの中に位置づけるかはどの学校でも課題として認識されており、何らかの財政的・人的支援が必要な課題であると思われる。

また、日本の教員文化として教科書を「カリキュラム」とみなす傾向が根強く残っており、PYPが求めるカリキュラム観・学習観への転換が容易ではないと指摘する声が外国人教員からは聞かれた。

“Even the most progressive Japanese teacher that I've worked with is still very much tied to the textbook and their belief that the textbook is the curriculum. And I think that that kind of limited understanding of a curriculum really hinders the implementation of IB in any kind of school.”（日本語訳：日本では、もっとも先進的な考えを持つ先生であっても教科書に縛られていて、教科書がカリキュラムだと思っている人が多いです。カリキュラムについての狭い考えが、学校種にかかわらずIBの可能性を狭めているように思います）”（管理職 M21）

このように、日本の伝統的なやり方と、PYPという今までにない教育システムの間にある文化的・制度的な違いの溝を埋めようと試行錯誤する現場管理職・PYPコーディネーターの姿がうかがわれる。

（4）資料などが英語で書かれていることについての課題

また、管理職・PYPコーディネーターからは、PYPの教材や資料が英語で提供されていることによる課題を指摘する声があった。PYP教員としてPYPの規定やカリキュラムの内容を知るためにはIBが発行するガイドや関連文書などを読む必要があるが、多くのIB関連リソース、特に最新の情報が日本語に翻訳されていないため、英語を得意としない教員にとっては資料にアクセスしたり、内容を理解したりすることが困難である場合がある。英語が苦手な教員は翻訳アプリを利用するなどして理解に努めているようであるが、微妙なニュアンスを翻訳するのは難しく翻訳アプリで翻訳された内容が正しいものなのか完全に信頼することができないため情報の共有も

妨げられている。また、IBが発行する最新の情報の多くが英語のみで書かれていて日本語には翻訳されていないことや最新のウェビナーなどのイベントは英語のみで開催されることが多いため、英語が得意でない教員にとって参加したり理解したりするハードルが高くなっている。

また、“Making the PYP happen: A curriculum framework for international primary education” (IBO, 2007) など、PYPの主要な手引きは日本語に翻訳されてはいるが、日本語では意味が理解しがたい翻訳となっている場合も多く、PYP教員の理解を妨げる要因となっているという声も聞かれた。このため、管理職・PYPコーディネーターからは、日本語での翻訳文書のより頻繁な発行と正確で分かりやすい翻訳を求める声が多く聞かれた。

「(IBの) 資料がなかなか英語から日本語にならないのが一番の課題だと思ってるんですよ。 (中略) ホームページにある MyIB ってリソースセンターで見たときに、何か読みたいなと思う資料っていっぱいあるじゃないですか。あれが全部英語なんですよ。 (中略) 先生たちにも、これ面白いよって渡してあげたいんですけど、「いや英語だからな…」なんて言うので…。」 (管理職 M12)

「資料がほとんど日本語じゃない言語で書かれてるものが多いので、先生たちがアクセスできるものって、本当に私が翻訳しないと何もわからないというか何も触れられない、アクセスできないって先生たちが多いので…。和訳のものとかも増えてはいるんですけど、もう最新の情報ってなると英語だったりすると、受けない先生たちも受けられなかったりするのちょっと弱みって言ってもいいほどなのかわからないんですけど…。」 (管理職 M3)

PYPの主要文書、評価基準、ワークショップ教材など、教員が日常的に参照する資料の迅速かつ正確な日本語化、および日本語版資料のさらなる拡充は、日本語話者の教員が多い国内の実情を踏まえると、PYPの実践を充実させるための必須条件であると思われる。

(5) 保護者への説明・理解と認知度の向上に関する課題

保護者への説明責任もまた、PYP実施校が抱える重要な課題である。複数の管理職・PYPコーディネーターが、学校のIBの取り組みへの認知度向上と保護者への教育プログラムの理解促進に関する課題に言及した。具体的には、IBが英語を習得するためのプログラムであると保護者に誤解されている場合があること、また入学後の保護者向けの説明が不足していることが指摘されている。また、ある学校では、探究的・主体的な学習の価値を保護者にうまく伝えきれておらず保護者の意識改革ができていないことを課題としてあげており、対応策の一つとして「学校だより」などを活用した情報発信を強化している学校もあった。

「保護者の方も一緒に学んでいかなければいけないところがまだまだ足りないというところと、それからどうしても英語(教育)に注視する親御さんが多くてですね。英語ができないとIBの学びが難しいんじゃないかってお考えの方もいらっしゃるんですけど、そこをや

はりもう少し発信をこちらがしていかなきゃいけないことと、一緒に学ぶ機会を今少しずつ増やして、校内の見学ツアーだとか保護者向けの説明会だとか。どうしても私学なので受験をしていただくための学校説明会多いんですけれども、入学後の保護者向けの説明が若干不足していたところが一番の課題かなと思ってます。」（管理職 M4）

「（PYP の利点を）うまく伝えられていないなって思ってます。保護者にうまく伝えられてないな。だからまだまだ保護者を変えていないな。意識をね...というのが今直近の課題ですね。それで今やってることは、こういう『（学校）たより』で、（中略）なかなか読んでくれないかもしれないけど、IB とか探究とはっていうのを伝えていかなくちやいけないなって思い始めているところです。」（管理職 M20）

（6）会議の多さ

教員間の協働設計と学校独自の探究単元の作成を重視する PYP では、学年での会議や学年を超えてカリキュラムについて話し合うための会議などどうしても会議やミーティングの時間が多くなる傾向があることが管理職・PYP コーディネーターから指摘された。会議自体は教員の専門性向上に寄与するものの、昨今の働き方改革の要請の中、探究活動の準備のための時間や協働設計のための話し合いの時間をどのように確保するか、また探究に取り組む児童を支援する時間をどのように作り出すか、管理職・PYP コーディネーターにとって悩むところである。学校組織として教員に対する包括的な支援が求められる領域である。

「組織として見直さなければいけないところが多々あるのと、やはりどうしても会議が多くなってしまったというところがあって...ただ会議の良さは会議の良さであると思うんですがそこでその会議のあり方が縦と横の繋がりがすごく大きく、先生方の力にはなってると思います。」（管理職 M4）

「それこそ『働き方改革』じゃないですけど、先生たちが子どものために授業のために使える時間をどれだけ確保してあげられるかというのが、学校としてのシステムとしてこれから考えていかなくちやいけないところだろうなっていうのは思いますよね。」（管理職 M12）

本節では、PYP を日本の学校に導入し実践する際に直面する課題を、管理職・PYP コーディネーターの語りから抽出し考察した。主要な問題点として、日本の学習指導要領との整合性を図ることの難しさ、教員研修費や年会費などの費用面での大きな負担、IB の資料が主に英語で提供されることによる教員の負担、保護者への PYP の理念と進路に関する理解促進の必要性、教員の働き方改革との折り合いなどの課題が浮かび上がった。

このように、学習指導要領に基づいた日本の教育課程と PYP の教育の実践の両立には様々な課題があるが、各 PYP 認定校の管理職・PYP コーディネーターは、それぞれのやり方でこれらの課題に取り組み、PYP の教育実践を行っていることが今回の調査で明らかになった。文化的・

制度的な違いはすぐに修正できる違いではないかもしれないが、その違いについて考えること自体が、ともすると当たり前と考えられがちな自国の制度を新たな視点で見つめることにもなるとともに、従来の教育と PYP の良さを取り入れたよりよい教育への制度設計へのヒントにもなるのではないかと考えられる。

◆ インタビュー結果のまとめ [教員編]

【表 2-3】インタビュー項目

観点 1 PYP についての認識 ◇観点 1-1. PYP の特徴 ◇観点 1-2. PYP の優れている点
観点 2 教育実践・教育観の変化 ◇観点 2-1. 教育実践の変化 ◇観点 2-2. 教育観の変化
観点 3 PYP の教育効果 ◇観点 3-1. 児童に対する教育効果 ◇観点 3-2. 教員に対する教育効果
観点 4 PYP 教員としての専門性向上
観点 5 PYP の課題

観点 1 PYP についての認識

国内の PYP 認定校で PYP に従事する教員は、海外由来の PYP をどのような教育であると認識し、日々の教育実践を行っているだろうか?その点を明らかにするために、PYP と日本の教育との違い（観点 1-1）および PYP の利点や強み（観点 1-2）について聞き取りを行った。

その結果、多くの PYP 教員は PYP について下記のような認識を持ち教育実践に取り組んでいることが分かった。

- ・探究学習を基盤とした教育
- ・概念の獲得を重視した教育
- ・児童の主体性やエージェンシーを大切にする教育
- ・協働設計による同僚性（チーム意識）の醸成

また、PYP の利点/強みとしては、特に下記の 2 つの特徴を挙げる教員が多くいた。

- ・スキルやコンピテンシーの育成
- ・独自のカリキュラム・フレームワークとカリキュラム上の教育的工夫

全体として、調査参加者の「語り」は、IB が重視している「指導のアプローチ（Approaches to Teaching）」の方針（【表 2-4】参照）と方向性を一にしておき、IB の理念や指導方法が、世界各地で開催されるワークショップなど IB 独自の研修制度や IB コンソーシアムの研修・イベントなどを通して一定程度 PYP 教員の中に内面化されていることが推測される。

それぞれの特徴についての教員の語りの例と、若干の分析を下記に列記したい。また、インタビューで語られた PYP の特徴に符合する教育活動が調査員の授業観察において記録されている場合は、それぞれの特徴ごとに「調査員の授業観察記録から抜粋」として代表的なエビデンスを別枠で列記した。

【表 2-4】指導のアプローチ（Approaches to Teaching）

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">1. 探究を基盤とした指導2. 概念的理解に重点を置いた指導3. 地域的な 文脈とグローバルな 文脈において展開される指導4. 効果的なチームワークと 協働を重視する指導5. すべての学習者のニーズを満たすために 個別化した指導6. 評価（形成的評価および総括的評価）を取り入れた指導 |
|---|

（出所：「指導のアプローチと学習のアプローチ」（IBO, 2015））

◇観点 1-1. PYP の特徴

（1）探究学習を基盤とした教育

IB は「指導のアプローチ」のひとつとして「探究を基盤にした学習（Inquiry-Based Learning）」を掲げており（IBO, 2015）、PYP においても探究を基盤にした学習活動を行うことが方針として示されている。実際、訪問時に行った授業観察においても、様々なスタイルの探究活動が各学校にて行われていることが確認された。

今回の PYP 教員へのインタビューにおいても、その点を PYP の特徴として指摘する教員が多くいた。また、これらの教員の多くは、自らが受けてきた小学校での教育や PYP 認定校赴任前の学校での経験、あるいは大学・大学院時代における教育実習の経験から、従来の日本の教育が「知識」や「内容」を過度に重視しており、知識量や知識を再現できるかどうかで児童を評価していると感じていた。一方、PYP は、知識の量的な習得よりも、学習内容の深い理解と探究学習を通して理想の学習者像に近づくプロセスを重視する教育プログラムであると教員たちに認識されている。また、PYP の教育は、教科書の配列どおりに知識を積み上げていく知識中心主義ではなく、探究活動を通して児童自身がすでにもっている知識を主体的に活用しながら学習活動を通して意味を見出すことを重視する構成主義に基づく教育であると考えられている。

具体的には、PYP 教員からは下記のような声が聞かれた。

「先生が前にいて色々と話して、我々は教科書を見て知識を詰め込んで、アウトプットもテストで答えられるかどうかというのが日本の教育かなって思ってた。でも逆に PYP っ

て、テストとかそういうのがゴールじゃなく、自分が例えば興味を持ったこととかより深く深く、知識をベースにしながらもそこをさらに深掘りするっていうのが PYP かなって、そういう違いを感じています。」（教員 T28）

“It's a constructivist approach based on previous knowledge. We try to find what the (children's) previous knowledge is and we try to build on that. We try to introduce the subjects in a provocative way that motivates the child's curiosity. So, it's kind of stemming from a natural curiosity that the child has and we try to support that. We also try to integrate the different subjects. So, it's in a more natural context and they can also make interesting connections across the curriculum.（日本語訳: PYP は（子どもたちが）すでにもっている知識を土台とした構成主義的なアプローチを採用しています。私たちは（子どもたちが）すでにもっている知識が何かを確認し、それを土台にして新しい学びを行います。また、子どもの好奇心を刺激して意欲を引き出し、子どもたちの興味を喚起しながら教科の内容を導入しようとしています。ですので、子どもの好奇心から学びが深まるようにし、教師がその学びを支援する、という考え方です。さらに、他教科との横断を意識しています。そうすることで、より自然な形で学びが実現し、教育課程全体を横断して面白いつながり（関連）も見いだせるようになります）”（教員 T20）

また、いわゆる探究学習には様々な様態があるが、PYP における探究学習の特徴として、夏休みの自由研究などの個人での探究学習とは異なり、教員のファシリテートのもと、他の児童とともに協力しあいながらクラスメートとともに取り組む探究活動（いわゆる Guided Inquiry）であると認識していることも明らかになった。

【調査員の授業観察記録より抜粋】

- ・児童自ら探究のプロセスや意義を理解した上で主体的に探究活動に取り組んでいた。
- ・意見交換をすることで自身の探究を客観的に捉え、今後の方向性について主体的に考えていた。
- ・探究はサイクルとして繰り返すことでより深い理解をもたらすことを理解しており、その上で探究に積極的に取り組んでいる。
- ・学びを自分事として考え、今後の探究の方向性について考えることができる。
- ・探究サイクルに関して、授業があるから教えるのではなく、基礎的な素養を身に付けさせることで持続的な探究のサイクルを教えようとしていた。
- ・教師からの「問い」をもとに、グループ内でリサーチをしたり、発表をしたりと、探究活動が実施されていた。
- ・各児童が自身の課題や興味関心に基づいてテーマを立て活動に取り組み、自分なりの表現方法で発表していた。

- ・探究を積み重ねることで、自分が次に何をすべきなのかといった自己決定がスムーズにできている。
- ・主体的に取り組むための足場固めとして、児童の生徒とつながりのある既習知識を引き出しながら授業を進めていた

(2) 概念の獲得を重視した教育

IBは「指導のアプローチ」として「探究を基盤とした学習」に加えて、「概念的理解に重点を置いた指導」も掲げているが、PYP 教員へのインタビューにおいても、その点を PYP の特徴として挙げる教員が多かった。

例えば、探究単元や教科での学習において多角的なものの見方や考え方を養うために、「特徴」「機能」「原因」「変化」「関連」「視点」「責任」などの「特定概念」を用いて個々の具体的な学習内容を関連づけたり、多様な観点から考察したり、一般化の可能性を児童とともに検討するなど、学習したことをより汎用性の高い概念で理解する特有の学習方法を PYP の特徴として指摘した教員が複数名あった。これらの教員にとって個々の学習項目の理解は、より深い概念の理解、もしくは概念を用いてものごとをより深く理解できる能力の獲得という「目的」に到達するための「手段」として認識されている。下記の語りはその一例である。

「概念にこだわる場所は PYP の特徴かなと思ってますね。（中略）例えば 5 年生の社会科で米作りの学習とかやるんですけど、それは結局「米作り」の勉強してるんじゃないかって、日本の農業っていうのを概念的に捉えるために、「米作り」を選んでやってるっていうふうに捉えると、ちょっと学びが広がるといえるか、そんな感じはしてるので、そこは意識しています。」（教員 T7）

「PYP は 1 つのものをいろんな視点から見ることができるので、教科横断的と言いますが、いろんな知識を総動員していかないと、その答えにたどり着けないところが、いいところだなというふうに思っています。まさに生きる力というか、社会に出てから 1 つの面しか見えてない人って視野が浅かったり、ちょっと考えが及ばなかったりすると思うんです。社会に出てからはいろんな視点で物事を考えられる人材っていうのが求められると思うので、そういうのをいろんなアプローチ方法で探究していけるっていうのは、すごくいいことだと思います。」（教員 T16）

このように、教科の枠をこえたテーマ、セントラルアイデア、特定概念などを用いて展開される「概念的理解に重点を置いた指導」は、他の教育プログラムにおける探究学習にはみられない PYP 特有の教育方法であると言える。

【調査員の授業観察記録より抜粋】

- ・教師は生徒と問いを中心とした対話を通して、徐々に問いを拡張させていき、概念的理解を促していた。
- ・効果的な問いを学習者に投げかけることで生徒の思考スキルの向上を意識させている。
- ・概念（ものの見方・考え方）について理解を深めるために、具体例を使って説明したり、適切にタスクを設計したりしている。
- ・セントラルアイデアや概念について考える、理解を促す活動が行われている。
- ・概念的理解とその後の実践を効果的に結びつけている。
- ・タスクを通して学習者の思考を促し、特定概念の理解を深めている。

(3) 児童の主体性やエージェンシーを大切にする教育

PYP の教育の特徴として 3 つめに多く挙げたのは、「児童の主体性やエージェンシーを大切にする教育」という理解である。「エージェンシー」という言葉は文部科学省（n.d.）によると「自ら考え、主体的に行動して、責任をもって社会変革を実現していく力」（p.5）とされているが、インタビューにおける教員の語りをみる限り、小学校段階におけるエージェンシーは、おおむね「児童の主体性」と同じ意味で使われているように思われる。教員によっては、児童が自分の学習について自覚的に学習活動に取り組む姿勢について「自覚化」という言葉を使用したり、「児童中心主義」や「構築構成主義」といった言葉を用いて説明する者もあった。

「自分が学びを主導している主体になってるっていうような認識を持って学習に取り組める子どもが普通の教育と比べると多いのかなって思うので、そこに関してはやっぱり大事なところかな...というふうに考えています。」（教員 T13）

「（日本の従来の教育と比べて）PYPの方がより子どもたちの主体性を大事にしているし、活かすチャンスも多いし伸ばすチャンスも多い。（中略）自分の思いとか、自分の興味関心というところから学びをスタートできたり、あと、ただ言われたことを覚えるんじゃなくて、友達と話し合ったりしながらその中で理解を深めたり、教え合うことで多様性が学べる、そういった環境があるっていうのが、PYPのいいところとして感じるところです。」（教員 T29）

「子どもたちのエージェンシーっていうところを探究でも教科でも重要視しています。（中略）それまでは何となくぼんやりと主体性って大事なんじゃないかなって感じてたのが、より明確というか、確信になって、子どもたちがずっと長く生きていくためには、自分のスタイルのエージェンシーっていうのがあることが、やっぱり幸せに繋がるんだな、ただ言いなりでやっていける子っていうのはこれまではよかったかもしれないけども、これからは大変になるかなっていうのを肌で感じています。」（教員 T29）

「学習者が自分が何をできるようになったのかとか、自分が何を学んでいるのかとか、そういう学習の自覚化みたいなことを（PYP は）すごく大事にしているんだらうなって思いました。だから、学習者も保護者も教師もみんな何を勉強してるかっていうことを協働で共有しているってところは日本のナショナルカリキュラムではそこまで言ってないかなって思いました。」（教員 T9）

「構成主義という考え方は、僕にとってはそれを知ることができて（考え方が）すごく変わったと思うことです。（中略）授業を魅力的にするとか、子どもたちが本当にその学びをやりたいと思えるようなものを作れば、子どもたちは学びに向かってくれるだろうというのは、今は素直にそう思うことができますし、それは、変わったというか、ああ、IB という枠組みを知ること、自分はこういうことをやりたいんだなということを自覚化できたような気はします。」（教員 T8）

【調査員の授業観察記録より抜粋】

- ・ 教師からの問いに答える形で、グループ内で自主的にリサーチを行い、表現していた。
- ・ 作品をお互いに見せあい、コメントしあう機会を設けて対話的な学びを実現していた。
- ・ ペアを組んでお互いの考えに対して意見を述べるができている。
- ・ 教師は学習者一人ひとりが自分事として学びを楽しむ様子や学習者一人ひとりの思いを大切にしている
- ・ 授業内の発表や質疑応答は基本的に学習者同士で進められていた。

（4）協働設計と同僚性（チーム意識）の醸成

最後に PYP 教員が PYP の特徴として挙げたのは「協働設計」や「同僚性」に関してである。PYP では、UOI の内容にかかわるすべての教員が協働でプランナーと呼ばれる「学習指導案」を作成することになっており、その過程で繰り返し教員間の話し合いが行われる。多くの教員が、カリキュラムの協働設計を通した同僚性やチーム意識の醸成を PYP の特徴や優れている点として挙げていることは、ともすると学級担任がひとりですべてのことを仕切る「学級王国」になりがちな従来の日本の小学校教育のあり方について考える上で、示唆を与えるものである。

ただし、協働設計と同僚性については、「観点 3-2. PYP 教員に対する教育効果」の節で詳述しているため、ここでは概要のみにとどめたい。

「（PYP の教育環境では）すごく何か（同僚と）一緒にやってる感はあるなっていうのはいつも感じますね。」（教員 T12）

「（協働設計では）先生たちからいろんなエッセンスを教わりあってやってるなっていうところが、多分、本校の先生にとって PYP をやっていることのプラスになっているんだろうな、というふうに感じています。」（教員 T10）

「（違いは）協働設計をするところかなと思っています。プランニングの際に、教員がチームで話し合っってプランをする。そのときに、教師も概念形成をしながらプランニングするっていうところが大きく違うかなって思っています。（PYP の強みは）教師にも考えさせる点ですね。

（中略）学習者に理解させたいこと、考えさせたいことそのものについても、（他の先生と一緒に）考えることが重要になってくるっていうのは PYP の優れている点かなって思いました。」
（教員 T9）

「一番大きい違いは、一つの指導案で複数の教員がプランナー（指導案）を共有して一緒にやっていくっていうことですけど、そこが一番大きな違いだと思います。（中略）子どもよりも教員がいっぱい話すようになりましたね。授業について来週はこういうことやってっやっていきましょうっていう話を共有して進めていくのでね。そこが一番変わったところかなとは思っています。」（教員 T18）

【調査員の授業観察記録より抜粋】

- ・学年を超えたグループでプロジェクトを実施しており、グループ単位での活動を行っていた。各グループには数名の教師が割り当てられており、児童と一緒に活動しながら、必要があれば助言をしていた。
- ・ユニットプランナーのストックが教師の間で共有されており、教師達は、目の前の児童達に合わせて単元設計をアレンジすることが出来る。
- ・日本人の先生も外国人の先生も協働できている、という声が聞かれた。
- ・UOI は学年担当の教師達が集まって協働設計している。

◇観点 1-2. PYP の優れている点

観点 1-1.の「PYP の特徴」に加えて、日本の教育との比較で、PYP が優れていると感じる点（利点や強み）についても PYP 教員に尋ねた。その結果、観点 1-1 ですでに言及した「特徴」以外では、「スキルやコンピテンシーの育成を重視する教育」および「独自のカリキュラム・フレームワークとカリキュラム上の教育的工夫」の二つが PYP の優れている点として挙げた。

具体的には、前者の「スキルやコンピテンシーの育成を重視する教育」では、「コミュニケーション力（発表・発信力）」や「国際志向性（Global-Mindedness）」について言及する教員が複数いた。知識の習得など認知的発達以外の、非認知的な発達をもたらすスキルや態度の伸長について、PYP 教員が日本の教育に対して優れていると感じていることがわかった。

また、後者の「独自のカリキュラム・フレームワークとカリキュラム上の教育的工夫」については、「IBの学習者像」「セントラルアイデア」「教科の枠をこえたテーマ」「特定概念」「学習のアプローチ」（⇒【表 2-14】）など IB 独自の教育学的工夫がされていること、またそれらが児童・教員・保護者など学校コミュニティにかかわるすべての関係者に共有されていることについてあげる教員が複数いた。

以下、それぞれのカテゴリーごとに典型的な語りを挙げ、若干の分析を加えたい。

(1) スキルやコンピテンシーの育成の重視

（日本の従来の教育や他の国際教育プログラムと比較して）PYP の利点/強みとしては、PYP の教育を通して、「批判的思考力」や「リーダーシップ」など、認知能力だけでは解決し得ない課題を解決するためのスキルやコンピテンシーの向上を育成しようとしている点が挙げられる。インタビューを行った調査参加者からは、児童のスキルや態度の育成に関して下記のような語りが聞かれた。AI 時代に必要とされる能力、グローバルな社会において活躍するためのスキル、そして国際志向性を身に着けるための適切な教育プログラムとして PYP が認識されていることがうかがえる。

「（日本の従来の教育と）すごく違うなって思うのは、決められた答えを一問一答見つけていくんじゃなくて、本当に将来自分が何か困ったなっていうときに、調べても出てこない問題に対して、どうすればわかるようになるのかとか、解決の仕方とかを PYP の教育（＝探究）を通して、身に着けていけるっていうのがすごく素敵なところだなっていうふうに思っています。やっぱり AI とかそういうのが発達してきて、例えば漢字とか計算とかもパソコンとかがやってくれる中で、今教育現場として求められてるのは何か...決められた答えを導くんじゃなくて、答えのない答えを自分で考えて解決できる力を身につけさせてあげたいなって思っているんで、そういった意味でいうと PYP はそれに適してるのかなというふうに思っております。」（教員 T13）

“Basically for PYP, not just in PYP, but all throughout the IB programme, our goal is for students to develop international-mindedness. And that's really important, you know, because education is changing and we should be preparing students for the future. It's that we should be preparing the skills that they need for them to be able to cope in the future. So that's one thing that I think the IB is unique about. （日本語訳：PYP はもちろん、IB 全体を通して、目標は生徒の国際指向性を発展させることです。児童が将来に向けて準備できるよう、教育も変化するべきです。児童が将来活躍できるよう様々なスキルを取得させる必要があります。この点に対応していることが IB の特徴です）”（教員 T30）

また、スキル/コンピテンシーの中で、児童のコミュニケーション力（発表・発信力）の育成を、PYP の「優れた点」としてあげる教員からは下記のような意見が聞かれた。

「探究の一つ一つのユニットの中で自分の考えをまとめて、それを発表したりだとか文章にしたりだとか表現するような活動がすごく多いので、発表とかもたぶん他の学校と比べると「苦手だな」とかっていうよりは「楽しいな」「得意だな」って思っている子が多いんじゃないかなって思います。(中略)「発表楽しかったからまたやりたい!」って言ってくれる子がすごく多いのは、PYP の利点なのかなって思っています。」(教員 T13)

「今日の朝(の発表)みたいに人前に立って話すっていうのは、かなり多いなって思っていて、1年生から3年生も年度末に学習発表会っていう形でうちの人の前で1年間の学びを伝える機会もありますし…。それで1・2・3年ときて、最終学年で最後エキシビションがあって、そこで大勢のお客さんの前でお話するっていう機会があるので、それがPYPならではの良さかなと思います。話す機会が多いところ…コミュニケーションって(言葉を)よく使いますけど。そういうところが多いかなって思います。」(教員 T19)

(2) 独自のカリキュラム・フレームワークとカリキュラム上の教育的工夫

また、インタビューでは、教員たちが、PYP のカリキュラム・フレームワークである「IB の学習者像」「教科横断的なテーマ」「特定概念」「学習のアプローチ」など PYP のカリキュラム・フレームワークがあらかじめ体系的に提示されている点を PYP の優れている点として高く評価していることが分かった。

まず「IB の学習者像」に関する語りからは、従来の「知識量」や「正解への到達」を重視する教育観からの脱却が読み取れる。教員は、学習者像が 10 の側面から構成されていることを、学習者の多様な特性や可能性を肯定的に捉える枠組みとして評価しており、これを児童に繰り返し提示することが、エージェンシーの育成に寄与していると認識している。「IB の学習者像」が単なる理念的スローガンとしてではなく、日常的な教育実践の指標として機能していることが推察される。

「私が IB に触れて、とても初期の頃に素晴らしいなと感じたのが 10 の学習者です。それは衝撃に近いというか、これまで受けてきた教育のイメージだと、知識のある人っていうところが大きい。でもそれは本当に 10 のうちの一つであって、それ以外のものも学習者として大事だよっていうところを出しているところっていうのは本当に素晴らしいと思います。(中略) 10 の学習者像っていうのは私の中で本当に子どもたちに繰り返し繰り返し伝えて、子どもたちのエージェンシーを養っていく、すごく良い指標になっている。素晴らしいことだと思っています。」(教員 T29)

「(日本の学校は)教科書通りに順番に進んでいくっていうイメージがすごく強くて、多少単元の入替えがあっても基本的には教科書のとおり決められた配列で決められた通りに決められた答えをできるように学習していくっていう、それが教育だっていうイメー

ジがすごい強かったんです。けれども、PYPをやってみて、子どもたちの実態とかその学校で大切にしている教育観とかを元に、『こういう子どもたちになって欲しい』っていう子ども像をちゃんと設定して、そうなるためにはどうしていけばいいのかっていうのを、PYPが提示してくれてるフレームの中で、学校裁量で決めていけるっていう、それが良さだになっていうふうに思っています。」（教員 T13）

「子どもたちのエージェンシー、子どもたちのボイス、チョイス、オーナーシップ（⇒【表 2-14】）っていうところを明確に打ち出して、それを大事にされていて、それを本当に育てるためのカリキュラムが実現できる。そういった掲げたものが絵に描いたもちにならないというか。カリキュラム自体がちゃんとそれにフォローしていつている。ATL スキルがその一つだと思いますし、そういったところが本当に PYP の教育全体として、目指す方向性があり、その実現に向けてのカリキュラムというか土台、方向性がありっていうところは素晴らしいなと思っています。」（教員 T29）

次に、6 つの「教科の枠をこえたテーマ」については、学習内容や児童の活動を単なる興味関心の追究に留めるのではなく、「世界の平和に貢献する人間の育成」という明確な理念のもとに位置づける役割を果たしている。教員の語りからは、児童が当初は必ずしも関心を示さないテーマであっても、世界的課題として提示されることで新たな気づきや探究への動機づけが生じることが示唆されており、この点は PYP のカリキュラムが持つ意図的・構造的な教育的介入の有効性を示すものといえるだろう。また、「ATL」は、理想の学習者像に到達するための手段を、また「特定概念」はそのためのものの見方や考え方を示すレンズを提供するものと言えよう。また、PYP のフレームワークは、学校裁量によるカリキュラム設計を可能にしつつも、縦断的な一貫性を担保するという点でも教員から高く評価されていた。教科書配列に依拠した教育と異なり、学校として目指す学習者像を起点に、学年間の系統性を意識したカリキュラム構築が可能であることは、教員の主体的な教育実践を支える基盤となっている。

「学習者像とか、概念、セントラルアイデアというものを軸に教育活動をやっていくので、教科横断的な視点が持ちやすいかなというふうに思いますね。」（教員 T17）

「PYP の UOI がすごいと思うのは、その世界の平和に貢献する人間を育むっていう視点のもと、6 つの transdisciplinary テーマがあって、（中略）最初、興味ないのかもしれないんだけどそれを扱って、『ああ、世界にこういう問題が知らなかったけど、あるんだ』ということを知って、そこに引き込まれて興味を持ってっていうことは、すごく『いい押し付け』だなと思うんですよね、6 つのテーマっていうものが。（中略）6 つのテーマは、すごく大きな世界とかかわるためのテーマで、大人にとっても、ちゃんと考えてこなかったなみたいなこともたくさんあると思っているので、その影響は非常に大きいなというふうに思います。」（教員 T8）

さらに、学校組織の観点からは、特に人事異動の多い公立学校において、教育実践の継続性が課題となりやすいのに対し、PYP という共通フレームワークを学校全体で共有することが、探究的学びの持続的実施を可能にしていることが指摘された。PYP の独自のカリキュラム・フレームワークは、各教員の資質・能力や異動などの流動性に左右されることなく、探究的で児童中心の学びを学校組織として持続的に実現するための有効な教育的工夫として利用されていることが示唆される。

「やはり人事異動が公立は多いので、人が入れ替わっていく中で（探究的な学びなどの新しい試みが）廃れていってしまうっていうことが往々にして公立学校はあると思います。その辺が PYP 認定校の学校としてやっていこうという体制を続けていくことに意義があるなどというふうに感じています。（中略）どんなに一生懸命やってもなかなか、やっぱり人が変わったり、校長先生が変わると、継続的にやっていくことって難しいなと感じていて、昔、すごい総合でやっていたのになぁと思っても、5、6 年たつとあれっていうこともあるので。」
（教員 T10）

一方、比較のために日本の従来の教育の優れた点についてもインタビューで質問したところ、PYP 教員からは日本の教育の優れている点として「教育課程の系統性」「基礎基本の確実な習得」「確立された授業技術」「礼儀や規律を重んじる学校風土」「しっかりした学校組織」の 5 点が挙げられた。また、日本の教育も PYP の教育もアプローチの仕方は異なりながらも目指すところは変わらないといった発言もみられた。また、「探究」を重視する近年の傾向など、日本の学習指導要領の方針が PYP に近づいてきていると感じている教員も少なからずいた。

外国人教員以外のほとんどの PYP 教員が PYP 認定校への入職前は一般的な日本の小学校に勤務しており、日本の教育で改善が必要な点を認識しながらも、同時にその良さを一定程度認識しながら、PYP の教育実践に取り組んでいる様子が見えてくる。

具体的な語りは以下のようなものである。

・教育課程の系統性

「（日本の教育が優れているのは）系統性です。教科の系統性はとてもよくできていて、やはりスペシャリストに組んでもらっているのです。例えばですけど、ここの教科書は異学年であっても同じページに同じ系統のものがちゃんと備えついている。（中略）系統性の素晴らしさは、他の国はちょっとわかりませんが、ありがたいばかりです。」（教員 T26）

「システム的に整っていて、ある一定のレベルまで全員が必ずクリアできるっていう意味では、日本のやり方の方が意味やしやすいといえますか、子どもたちにとってもはっきりしてるところが多いといえますか…。という点はあるかなと思います。」（教員 T6）

「教科書とか、教科内容の体系化みたいなのがしっかりできているので、多くの先生がある程度、質の保たれた教育ができることだと思います。どんな先生でも、また時間がなくても、教材研究をそれほど時間をかけて行わなくても、教科書に沿って教えれば。特に算数とか社会とか理科とか、図工とかもそうかもしれないけど、本当によく教科書ができていて、子どもに投げかけたい、投げかけるべき問い、学習活動まで、本当よくできてるなって思って。だから、その通りやれば、本当にもう 8 割、9 割なのかもしれないけれども、先生たちがある程度の質を保った教育を、どこの学校でも行えるっていうのはすごい強みだと思います。」
(教員 T9)

・基礎基本の確実な習得

「国語とか算数とかが独立している方がその習熟の時間という意味では読み書き計算みたいな基礎の部分はしっかりとできるのかなと思います。」 (教員 T6)

「基礎学力的なところはやっぱり (PYP の方が) ちょっと劣っているなっていうのが正直なところですよ。(中略) もちろん発表する力とか考える力とかそういうことに関しては (PYP の方が) すごく上がってるっていう認識はあるんですけども、その一方で国語とか算数の計算力とか漢字の定着率っていうのを見ると年々ちょっと落ちてきちゃってるかなっていうのでちょっと心配して、ご家庭にも協力を呼びかけているところであります。」 (教員 T13)

・確立された教授技術

「日本の教育っていうのは歴史がもう 120 年とかある分、(指導技術などの) スキルの面で長く積み上がっている部分もあるかなと思います。(中略) スキルの確立されている部分は安定感にも繋がっていると思うんですけども、そういったところっていうのは、「さすがだな」と思いますね。日本の教育は日本の教育で素晴らしいところがいっぱいあると思っています。」 (教員 T29)

・礼儀や規律を重んじる学校風土

「集団生活というか、規律とか、「ザ日本人」らしさというかね、そういったところが鍛えられるのは、日本の良さとも思えると思いますね。(中略) 礼儀とかっていうのは、オリンピックのときにも「おもてなし」とかって言ってましたけど、やっぱり日本人のアイデンティティではあると思うので、そこら辺を伸ばせるのは日本の教育の良さかなって思ってます。」
(教員 T28)

・しっかりした組織

「学校組織としての部分があったりはもちろんしますよね。教育というよりも、何て言うんですかね...大人の仕事の仕方とか、そういう部分では、この学校は新しい学校なんで、いわ

ゆる公務と言われるものの進め方がまだガチャガチャしてる感じなんで。そこは昔の学校の方がまとまっていると感じることもあります。」（教員 T7）

観点 2 教育実践・教育観の変化

現在 PYP を教えている教員、特に従来日本の教育現場に従事していた教員は、PYP を教えるようになってどのように教育実践や教育観が変わっただろうか。もしくは変わらなかっただろうか。

そのことを調べるために、インタビューでは教育実践や教育観の変化や変容についても PYP 教員に尋ねた。本節では、まず「教育実践」についての変化を、次に教育実践の変化をもたらしにより本質的な「教育観」の変容について取り上げ考察する。

なお、本報告書においては、便宜的・実用的な変更については「変化」という言葉を使用し、教育観など教員の価値観や信念にかかわるより永続的な変化については「変容」という言葉で記述した。

◇観点 2-1. 教育実践の変化

まず教育実践についてだが、PYP を教える前と後とで大きく変化したと PYP 教員自身が認識している事柄として下記の 6 つが挙げられた。それぞれについて概要をまとめ、関連する語りを例示した。

（1）児童の思いや考えを引き出す授業展開（授業の進め方についての変化）

「教育実践の変化」に関して、一番多く PYP 教員が指摘したのは「授業の進め方」についての変化である。今回インタビューを受けた多くの教員たちは、以前従事していた教育施設では一斉授業を行い、教師主導で教科書の知識を順番通りに一方的に教授していたという。しかし、PYP では教科書ではなく 6 つの教科の枠をこえたテーマに基づいて教科内容が再構成され、一人ひとりの子どもの思いや考えを引き出したりくみ取ったりしながら授業が進められる。例えば、ある教員は教えるのではなく「考えさせる」ことに重点を置き、児童の考えを「引き出す」ことに価値を置いている。また、ある教員は児童に寄り添いその思いや考えをくみ取り広げることがを重視している。また、児童とともに自分自身も探究の問いに取り組みながら、「探究者」としての学習モデルや探究の面白さを児童に示そうとしている教員もあった。

今回インタビューした教員の多くが、教科内容をいかに効率よく教授するかではなく、児童の好奇心をいかに育むか、またいかに学びを自分のものとし将来を見据えて自分で学習をすすめることができるかに重点を置きながら、PYP の実践を行っていることが分かる。

「子どもの考えをどう引き出すか、子どもたちにどう理解させていくか、何を理解させたらいいのかっていうようなことをすごく考えるようになりました。」（教員 T2）

「(以前は教科書を)何とか時間内にやるぞっていうのが頭の中にありました。でも PYP っていうのは、教えるっていうよりかは、子どもから引き出すのが大事な部分なので... その点が大きな変化です」 (教員 T28)

「一緒に「思い」とか「考え」をみんなで汲み取り合いながら広げていくっていうことができるようになったので、探究の内容は難しくても、割と進められるようになってるのかなって思います。」 (教員 T6)

「子どものアプローチの仕方を尊重するっていうのはあるかなと思います。」 (教員 T12)

「子ども主体でやりたいことをやらせてあげたいなあっていう思いが強くなって。 なんだろう、子どもたちの興味のあることを探り出して、それを突き詰めていこうっていうふうに。探究の流れを意識するようになってきたかな、というふうに思っています。」 (教員 T16)

「今までは教科書通りに進めることを重視していたので、今日はこの単語を覚えさせるぞっていう感じで進めてたんですけど。今は単元の中でどこかで触れてればいいなというふうに (考えるようになりました)。子どもたちが自分で学習する中で、自由に、子どもたちがやりたいように進めてくれればいいなというふうに思うようになりました。」 (教員 T16)

(2) 個々の児童が安心して発言できる環境づくり (クラスマネジメントについての変化)

インタビューを受けた PYP 教員の認識で、変化が見られた事項として次に多く挙げたのは、現在の職場に着任する以前に勤めていた学校や、PYP 導入以前の教育現場と比較して、PYP では個々の児童の考え方や主体性が尊重され安心して発言できる環境づくりを目指すようになったというものである。PYP 教員の多くは、意見が否定されることで子どもたちの発言意欲を失うことを避けるべきだと考えており、児童一人ひとりの考えを認め、児童が安心して自信を持って自分の意見を言える環境作りを重視する必要があると考えている。教員の語りでは、ともすると見過ごされがちな子どもたちのつぶやきを拾い上げながら探究学習を進めたり、子どもたち自身が「こうしたい」という発言や行動を大事に、子ども主導で物事を進めることを意識しながら探究単元に取り組んでいる教員が多かった。

「(PYP 認定校で教えるようになってからは) 子どもたちが自分の意見を安心して言えたりとか、自信を持って言えるような環境作りとか、クラスの雰囲気作りっていうのを大事にしたいなっていうふうに思ってます。(中略)「その子が言ってくれたことを大切にっていう気持ち」が自分の中では生まれたかなって思ってます。」 (教員 T13)

「できるだけ私が喋るんじゃなくて、子どもたちで学ばせたい。そのためにどういうフォローやどういう指導・指示できるかなって考えるようになりました。」（教員 T2）

(3) 概念やつながりの重視

また、PYP を教えるようになって単なる知識の伝達ではなく、知識の繋がりや他に転用できる概念を意識して教えることを重視するようになったという PYP 教員が多くいた。PYP 教師は、教科書の内容をそのまま教えるのではなく、学習を身近な事柄や他の教科と関連付けて考えさせるよう努めている。また、それによって現在の学習がどのように将来につながるかや他の人々にどのような影響を与えるかといった観点からも考えさせるよう取り組んでいる教員もあった。

「毎回授業を始める前に今回はどんなコンセプトで、どう考えて、どこを子どもたちに伸ばしたいかとか、そういうことをすごく考えるようになりました。」（教員 T2）

「概念学習と言われてますけれども、何か一つの事実を教えるというよりは、それがどう繋がっていくかとか、どんなところに応用できるかっていうことを意識して教えるようになったと思います。」（教員 T6）

「教科書にあることをそのままなぞるというよりは、何かそれをもっと広げて「一般化」ってほどではないんですけども身近な物事と繋げたり、他の学びと繋げて考えたりですとか、自分もどういうふうに教えられるかなっていうふうには考えるようになりました。」（教員 T6）

「今やっている勉強が全てなんじゃなくて、それが将来に繋がっていく学びなんだよって、（中略）『自分が主体になってやっていく』のはすごい大切なんだよっていうのを子どもにも伝えたいし、そういう気持ちを持ってやっています。」（教員 T2）

(4) 多様な教授ツールや思考スキルの使用

また、PYP 教員の語りでは、より多様な教授スキルやアプローチを採用する変化も見られた。例えば、付箋や KJ 法などのようにアナログなものから、タブレット端末や他の ICT ツールなどデジタルなものまで、様々な教育的ツールを使用して教育方法を多様化したり、児童をグループに分けて異なる情報源をもとに交流させるジグソー法を使って学習を行ったり、児童の学習スタイルに合わせて個別最適化を推進するなど、教育目的を達成するための方法を多様化させている。また、教員によっては、児童に「問い」を投げかけながら学習をすすめるソクラテス法を使用するなど、児童の思考力を育成しようと取り組んでいる教員もいた。また、また、PYP が定めた「学習のアプローチ」の中の「セルフマネジメント」というスキルを活用して児童に振り返る機会を与える指導を行うなど、学習の目的を意識した指導が行われている。このように、PYP では、

多様な教授ツールや思考スキルを使用しながら、学び方を意識した学習活動が展開されていることが分かった。

「ホワイトボードを使ったりとか、付箋を使ったりとか、手段が増えたというのはあります。iPad なんかも入れたので、当然 ICT もたくさん使いながらということになるのでね。
(中略) 本当に引き出しが増えたというのはあるかな。」 (教員 T18)

「社会の方もジグソー法を使ってやってみようっていうのをすごく思って、今年 1 年間それでやっていました。」 (教員 T1)

「『問い』を考えるようになったかな。やっぱり教えるだけじゃないから。何て問うたら子どもはどう反応するかなとか...。何か聞かれても、気になるなら自分で調べてごらんとか...全部じゃないですけど『はてな (?)』で返すことが多くなったかなと思います。」 (教員 T19)

「スキルを意識するっていうこととかですね、(例えば) 怒り方とかも『ふざけて駄目でしょう』とか『これが駄目でしょう』じゃなくて、『今の自分のセルフマネジメントスキルどのあたりだと思う?』『本当にあなたはどこを目指すの?』『そのためにはどうしたらいいの?』っていう声掛けを 1 年生でも取り入れることで、子どもが自分事になる。先生に怒られるからこうじゃなくて。なので、時々すごいワーストになってくると一回止まって、『今勉強楽しいと思う? 思わない?』『どうして?』『じゃあ、どうしたらいいんだろうね?』っていう声掛けができるようになったっていうのが自分でも (PYP を) やってきていて、すごい変化かなって思ってます。」 (教員 T2)

【調査員の授業観察記録より抜粋】

- ・生徒の発話に対して、意図の確認や、理由を確認するなど、生徒との対話を重視することで、生徒の語彙を豊かにする工夫がなされていた。
- ・ジグソー法を取り入れた意見交換を用いることで自身の探究を客観的に捉え、今後の方向性について主体的に捉えられていた。
- ・教員は調べ学習の選択肢や表現方法をいくつか与えていた
- ・学習者の発言を板書して、可視化することで、クラスルーム内の発話・対話を可視化させていた。
- ・各自がアイデアを付箋に書き、それらを模造紙に貼ったり、グループで整理したり、といった活動によって、すべての生徒が意見を表出できたり、お互いの意見を聞き合うことができたりするなど、児童の積極的な授業参加を促す工夫があった。

(5) 評価方法の変化

また、教員の中には、テスト中心の一律的な知識評価から、児童の学びを多様な表現方法で評価する柔軟な形に変更したという意見もみられた。ある教員は、戦国時代について学ぶために、戦国武将のオリジナルステッカーを作ったり、漫画を描いたり、肖像画を描いたりする選択肢を児童に与え、その取り組みを評価した。このような評価方法はテスト中心の評価方法にくらべて準備や実践に時間がかかるが、これにより児童一人ひとりの個性や学び方を尊重した評価が可能になり、より包括的な学びの理解が促進される。

「以前はテストで知識を評価することが多かったが、PYP 導入後は生徒が学んだことを多様な方法で評価できるようになった。児童は様々な表現手段を用いることができるため評価がより柔軟になり、児童の個性を尊重した評価が可能になった。」(教員 T20)

「評価の仕方がちょっと変わったかなっていうところがありまして、やっぱり今まではテストを見てチェックして、点数がいい悪いで判断しましたが、そうじゃなくて、それまでの(学びの)道のりとか、そういったところを評価してあげられるっていうのが、やはり PYP のいいところかなって(思います)。 先ほどお伝えしたように、いろんな方法でゴールにたどり着くということもあるので。評価の部分では、大きく変わったかな。もちろん、評価基準が変わっちゃうかもしれないですけども、まあ、1人1人を見るという意味では、すごくいい評価が最近できているかなというふうに思っております。」(教員 T17)

(6) 教員自身の取り組みへの姿勢の変化

教員の中には教師自身が日常生活の中で常にアンテナを張り、身の回りの事象(例:ゴミ収集車やシールの裏の表示)を学習と結びつけて考え、それを授業の導入やヒントとして活かそうとするようになったという教員もいた。また、ある教員は PYP のフレームワークに触れたことが刺激となり、ベテランの教員であるにもかかわらずこれまでの実践を振り返り、さらに授業力を向上させようとする意欲が見られるなど、取り組みへの姿勢の変化が見られた。さらに、これまであまり国際的な視点を持っていなかった教員も、外国人教員との協働や授業交流を通して、多様性や国際理解を意識するようになっていく。教育をより広いグローバルな視点から捉え、異文化理解や多様性といった観点から授業づくりに取り組む教員もあった。

「なんか常にアンテナを張るようになったなあって思います。例えばゴミのことやってたときに、ゴミの収集車の写真撮っちゃったりとか、こないだも同じ教員同士で遊びに行ったときに、いただいたシールの裏に『これは卵の殻をリサイクルして作りました』とか書いてあって、なんかそういうのにすごく目が行くようになって、やっぱり生活とか結びつけて考えるからこそ、自分も自然の中で子どもに導入したりとか、気づいて活

かせられるように自分が生活の中で関わりにアンテナを張るようになったって...。」
(教員 T19)

「PYP はフレームなので、そこでどう教員がそのフレームを活用して授業をやるのかってというのは任されてる部分があるので、すごく教師の力量が問われるなと思います。なので、教え方が変わったというか、自分の今までの教え方じゃいかな...ってというのは日々思ってます。」 (教員 T7)

「より意識するようになったこととしては、国際的な視野っていうのがそれまであまりなかったと思います。私自身、海外に少しだけ出たことはあったんですけどほとんど日本の中でずっと育ってきて、日本の学生さんたちや生徒さんたちに教えたっていう中で、これまで国際的な視野を意識して授業をしたり、子どもたちに接するっていうことは、ほぼなかった。それが IB の授業をしたり、ここならではですけどインターナショナルな先生方と授業作りをしたり、彼らの授業を見る中で、国際的な視野、多様性っていうところを意識して教えるようになったと言うところが、(教育実践の変化だと思います)」 (教員 T29)

教員の語りの分析にみられるように、PYP を実践する教員は、従来の知識伝達型の授業から、児童の思考や探究を中心に据えた教育実践へと教育実践に関する認識を変化させている。また、多くの PYP 教員は、PYP の実践を通して教師主導の一斉授業から脱し、児童の発言や興味を出発点に学びを展開する探究的な学びを重視するようになっている。また、児童が安心して意見を述べられる環境づくりを重視し、教師は「教える人」から「学びを支える伴走者」へと役割を転換している。さらに、教科の枠を超えて学習内容の関連性や概念的理解を重視し、他教科や実生活とのつながりを意識した授業設計を行う教員も多くいた。また、教授技法についても多様化しており、ICT や協働学習、「問い」を重視する授業展開などを通して、児童の思考力を伸ばす試みも広がっている。評価方法もテスト中心から脱却し、児童の学びを多面的に捉える柔軟な評価へと転換している。

このように、教員の語りからは、日々の実践を通して教育実践を「教える」から「共に探究する」スタイルへと変化させようと取り組む PYP 教員の姿をみることができる。

◇観点 2-2. 教育観の変化

PYP に携わることで、教員の教育実践のみならず教育観にも様々な変容が生まれている。今回行ったインタビューからは、主に「教員の役割」「児童理解」「教育の目的とエージェンシー」の3点について教育観の変容が見られた。いずれも、教師中心主義から児童中心主義への転換にかかわる変容である。

(1) 「教員の役割」についての考え方の変容：ティーチャーからファシリテーターへ

今回インタビューした教員の多くは、いわゆる伝統的な日本の一条校で教育を受け、PYP 認定校に勤務する以前は教師中心の授業を行っていたと明かした。しかし、PYP の実践を通して教員の役割について考えを改めた教員が多くいた。

例えば、ある教員は、PYP に携わるようになって、知識を一方的に指導するのではなく、子どもの学びを支援（ファシリテート）したり、知的好奇心を引き出したりするのが教員の役割と考えるようになったという。また、ある教員は、正解にたどり着かせるアプローチではなく、児童の探究を支援することに重点をおくようになったと述べている。このように、PYP 教員の語りからは「指導する人からともに学ぶ人へ」という教員の役割意識の変化をみることができる。

「PYP で探究する様子とか子どもとかを見てて、何か必ず一つの答えがあるわけじゃないから、何ていうのかな、そこに我々が絶対にたどり着かせる、無理やりたどり着かせるっていうのかな、そういうアプローチじゃなくって、子どもが思い続けてこの道を示してくれてるんでそれを我々がサポートするのが大事だっていう、教育観の変化はありました。」

（教員 T28）

「教育って勉強を教えることがまず第一かなって思ってたんですよ…。例えば「算数で計算問題できる」とか、「漢字絶対書ける」が、まず第一にやらなきゃいけないことかなって思ってたけど…、もちろんそれも大事なんですけど、やっぱり子どもが主役になって、自分で考えたり発見したり、することの方が大切なのかなって今は思っています。」（教員 T19）

「教えるべきことと、教えなくて考えさせるところ…については神経を使うようになりました。（中略）このカリキュラムになってからは子どもたち同士が自分たちで関われるような、こちらの出方をしなきゃいけないっていう気持ちが強くなりましたね。」（教員 T26）

「より児童に委ねる時間が増えたな、という感じはしています。」（教員 T10）

（2）児童理解についての変容：共に学びを深める存在へ

このような教員の役割の変化をもたらす前提として、児童のもつ能力などについての児童観の転換を教員の語りにみることができる。従来の日本の教育では、教員が知識を一方的に伝達し、児童は正解を導き出すことを求められる傾向が強かったが、PYP において児童は自ら学ぶ力をもっており、一方向的に知識を詰め込む存在（上下関係）ではなく、相互作用を通して共に学びを深める存在（教員と対等なパートナーとしての関係）として認識されている。

また、そのような児童観の変容ともなって、多くの教員が「指導する人」から「ともに学ぶ人」へと役割意識を変化させている。PYP 教員の語りでも、児童の探究心や思考の多様性を尊重し、正解へ導くよりも学びのプロセスを支援することの重要性を自覚するようになったという指摘が聞かれた。

「授業っていうと先生がメインって思うかもね。今までを考えると思えるかもしれない。そうじゃないよね。子どもがね、やっぱり中心だよっていうのが大事かな。」（教員 T28）

「ちょっと語弊あるかもしれないですけど、すごく以前よりも子どもと対等な立場だな
というふうに自覚できるようになりました。（中略）教師として教えるというよりは何か一
緒に考える立場だなっていうふうな考え方に変わっていたと思います。」（教員 T6）

“Before, I came to school just to teach, I read the book and try to tell the kids that" this is the book and study". But now. I am learning together with my students every day.（日本語訳：以前は、学校に来て「教える」だけでした。本を読んで、「これが教科書だから、これを勉強しよう」と子どもたちに伝える、そんな感じでした。でも今は、毎日、子どもたちと一緒に学んでいます）」（教員 T21）

“before I viewed students as children who need to be informed? But now, I see them as individuals who can make or give meanings to things by themselves.（日本語訳：以前は、子どもたちのことを「教えてもらわないといけない存在」だと思っていました。でも今は、自分たちで物事に意味を見つけたり、考えたりできる一人ひとりの存在として見えています）」（教員 T22）

ただし、児童と対等な立場であるといっても何もしなくてよいわけではなく、PYP 教員は 6 つの教科の枠をこえたテーマのもとセントラルアイデアを定め、ユニットプランナー（⇒【表 2-14】）に基づいて入念に計画をたてる必要がある。下記の実践をふりかえり、探究学習には「ものすごいサポートが必要」であると気づき、見えないところで子どもたちを支えることの重要性を認識した下記の教員の語りはそのことを物語っている。ユニットプランナーなどを使って入念に探究学習の準備をしながらも、探究学習の過程において児童の意見や発想に驚き、そこから新たな学びを得るという教員の語りからは、教員自身も学びの協働体の一員として成長している姿をみることができよう。

「（探究学習を）子どもと作るみたいなのも今までももちろん意識はしてたけれど、どっちかっていうと子どもに任せてしまっていた。だけど、（探究をやるには）やっぱりものすごいサポートが必要で、それをどう支えるのかみたいなのが PYP ではすごく大事なので...、。その子どもは何か自分たちでやってるふうに思うけど、こっちがすごく見えないところで支えてるみたいなのが必要だなと思ってのですね。そう思ってるので、その部分が足りなかったなっていうのは、思い起こせばありますね。結局子どもに丸投げして子どもが何か困っちゃったみたいなのがあったのは、やっぱりこっちがきちんとサポートしてなかったんだなっていうのは今振り返るといっぱい『ごめんなさい!』って思いますね。」（教員 T7）

(3) 「教育の目的」についての考えの変容

また、インタビューからは、「なぜ学ぶのか」や「学ぶことがどのように児童の未来につながるのか」について考えながら教えるようになったという語りが見られた。教科書を教えればそれで終わりではなく、その先にある「学ぶ目的」についての意識の変容をみることができる。

また、卒業後どのように社会とかかわるのかという意識を児童に持たせるために、「実社会とつながる学習を意識するようになった」という教員や、単に目先の目標を達成させるだけではなく、自分の行動がまわりに及ぼす影響や全体の幸福についても児童に考えさせる必要性について考えるようになったという教員もあった。IB の学習者像や、IB の提唱するエージェンシーの育成などと呼応しながら、児童の将来や未来について教育を行うことにより大きな価値をおく教育観の変容をみることができる。

「目の前の課題をクリアすることで精一杯だったんですけども、今ではその学び方についてもちょっと意識して指導できるようにはなってきたかなと思います。周りにポジティブな影響が与えられるようにどういうふうに学んだらいいとか、あと全体で考えるときにどういう視点があるとみんなにとってメリットがあるかだとかですね...」(教員 T6)

「IB の教育を通じて将来的にどういう大人になってほしいかという像が具体的に考えられるようにっていうふうには自分でも思っているんですが、そこは IB の学習者像ですとか、学校目標に応じて、こういう大人になって欲しいから今こういうふうに声掛けしようですとか、そこに至るまでに今この段階だから今はここを大切にしようというような意識はしているつもりです。」(教員 T6)

「我々が答えにたどり着かせるんじゃなく、子どもが、自分で自信を持ていろいろと調べるのが大事なので。結局、子どもたちが 10 年後とか 20 年後に大人になったときに生きていけるかが大事で、自分の力で探究ができていけば、自分で何かやる力が身に付いていくので、将来的にも安心かなって思います。」(教員 T28)

「今目の前の、とにかく国語の授業をどうやるかっていうことに夢中になっていたところから、より広い視野で、この子たちの 6 年間っていうようなことを考えるようになり視野が広がったと思います。」(教員 T8)

このように、PYP の実践を通して、目先の教育目標だけではなく、今行っている教育がどのように児童の将来や未来の社会の構築につながっているかに意識を向けるようになった教員の語りからは、IB や OECD などが提唱するエージェンシー育成のための教育観への萌芽が感じられる。また、このような教員によるエージェンシー育成の取り組みは、直接的・間接的に「自分の学びや行動が社会とつながっている」という意識を児童のうちに育んでいると考えられることから、

PYP の実践は学習指導要領が掲げる「社会に開かれた教育課程」の実現に寄与しているともいえるだろう。

さらに、PYP の導入・実践は、単に新しい教育プログラムを行うというだけでなく、教師の役割、児童観、教育の目的、授業の価値など、教員の信念や価値観を揺さぶる教育哲学的な振り返りにもなっていることが推察される。下記の教員の語りは、PYP に触発されて「教えること」や「学ぶこと」への意識に変容が見られた教員の一例である。

「自分が授業をしていることの価値であったり、子どもたちに対して、一体この授業は、どんな価値が子どもたちにあるのかっていうのを自覚しないと授業ができないんです。（自分は）教科書の内容を教材研究してそれを教えるっていうことをやってきたと思っているんですが、それだけではなくて、じゃあ本当にそれを今の子どもたちに教える、一緒に学んでいくっていうことが、どういう価値があるのかっていうのを自問自答したりだとか、本当に価値あることとして、自分が自信を持って授業できるのかなっていうことを、自分に問いかけるような姿勢は、PYP に触れて、僕は（自分が）変わった部分だと思っています。

（教員 T8）

なお、公立・私立を問わず PYP を教える前から構成主義的な教育や探究学習を実践している教員や、IB 校で初等・中等教育段階の教育を受けた教員も一定数おり、そのような教員については教育実践や教育観の大きな変化はみられなかったが、そのような教員からは、PYP を通して過去に行ってきたことが国際教育の観点からも通用することが分かり自信につながった（教育観の強化）とか、経験的に行ってきたことが明確に言語化された（理論化）といったような肯定的な発言や語りが聞かれた。そのような教育の語りの例は以下のとおりである。

「子どもたちの様子に合わせて、授業を組んでいったりとか変えていったりとかいうことをしてきたので、それは（PYP が導入されても）変わらないところなのかな。（PYP は自分の考えと）同じことを言ってるなと思いました。」（教員 T18）

「大学の頃に授業開発を専門にしている研究室に所属していたので、何か教科書ベースっていうよりかは自分で『Who we are』とかの問題に関連付けて、自分で教材を作ってたっていうようなことはあったので。...（教育実践・教育観が）大きく変化したっていうのは1年目のときはなかったです。」（教員 T1）

「（教育観は）大きくは変わらないんですが、子どもが自分で答えを生み出すとか、資料とか文章とかを読んで、自分なりに自分で発見してってほしいということは、公立の頃から変わっていないです。それをずっと公立でもやってきたつもりではあるんですが、よりダイナミックに自分の児童の実態を把握して、こういうことをやってみようっていうこ

とが、よりやりやすいのは PYP 認定校ですし、自分の考えが間違っていないんだっていう自信をいただいたような感じがしています。（教員 T10）

観点3 PYP の教育効果

「児童」に対する教育効果と「教員」に対する教育効果についてインタビュー結果をまとめた。それぞれ、下記のような事項について、インタビューに協力した PYP 教員が「教育効果」として認識していることが分かった。

◇観点3-1. 児童に対する教育効果

（1）他教科や生活とのつながりの意識

児童に対する PYP の教育効果としては、まず「他教科や生活とのつながりを意識した学び」が挙げられる。インタビューでは、PYP で学んだ児童は国語や算数などの教科を単体としてではなく、体験や他教科と結び付けて理解する姿勢を身につけているといった事例をあげる教員が多かった。例えば、探究的な学びを通して「算数で学んだことがここで活かせる」「国語の内容と似ている」といった気づきを自然に口にし、知識を相互に関連づけて考える児童の事例などが聞かれた。また、学習内容が実生活にも応用されることで、子どもたちは学びの意味を実感し、生き生きと学ぶようになったとの意見があった。こうした横断的な学びは、PYP の「特定概念」や教科横断的学習がもつ特徴的なカリキュラム構造によって支えられている。PYP の探究的な学びを通して各教科の学びが有機的に結び付けられていることは、日本の学習指導要領において求められている「教科等横断的な見方・考え方」や「実生活に生きる知識・技能」の育成に大きく貢献するものと思われる。

具体的な語りには次のようなものがあつた。

「国語とか算数とかのそれぞれの教科が単独で学ぶような形になるのではなくって、いろいろな体験とか思考に繋げながら『あそこで習ったことがこういうふうに活かせるんだね』っていうのが言えるので、子どもたちにとってもそこは生き生きと学べる一つの要因になってるんじゃないかなとは思います」（教員 T6）

「思考する上で、知識を覚えるというよりはそれを繋げていたり違う見方をしたりするというように、考え方が豊かになってるかなとは思います。おそらくそれはやはりキーコンセプト（⇒【表 2-14】）ですとか、探究の時間があることによるのかなと思うんですが、いろいろな教科でも思いつかないような発想が出たりですとか、時事ニュースに繋がって考えることが出てきたりですとか、そんな場面が結構ありますね。」（教員 T6）

「この子たちを見てると、前に学んだこととか、昔探究したこととかを引っ張り出して繋げて考えていて、知識とか理解がぶつ切りじゃない。何か繋げて考えようとするんですよ

ね。だから、ある意味知識が単体で頭の中にあるんじゃないくて、繋げて存在してるから定着するんだらうなというふうには思ってます。（例えば）授業中、『それって前やったね...、これと繋がるよね』みたいなことは子どもたちが言うんですね。あんまり以前の学校では言わなかったかな。他の教科の話とかも『算数でやったこれと繋がるよね』とか『国語のあの単元とこれ似てない?』みたいなことはよく言うんですけど、何かそうやって子どもが本当に乗り越えてくるから、僕も『えっ?それと繋がるの?』と驚かされることは多いですね。」（教員 T7）

「自分の興味のあることを深めて、生活の中でも結び付けて考えられるっていうのは PYP の良さかな。（中略）ひとつの教科でやったことが、それだけじゃなくって、いろんな教科とか自分の生活と関わりを見つけられるっていうのは、PYP での学び、なのかなっていうふうに思います。」（教員 T19）

「探究で学んだことが実生活で活かせることもありますし、組織（について）の探究で上手にみんながチームワーク良く動くためにはどういうふうに動いたらいいのかなというのを考えた後で、実際に生活していつか休み時間でトラブルが起こったときに「あのときこういうふうにしたからここにもこういうルールが必要だね」ってなったりですとか、何か生活に結構活かせる場面も多いかなと思います。」（教員 T2）

【調査員の授業観察記録より抜粋】

- ・児童の生活とつながりのある既習知識を引き出しながら地形の特徴や特産品について考える姿が見られた。
- ・教科横断的な学び（2～3 教科間の教科横断型の授業）が行われていた。
- ・身近な物事についての統計をクラスメートと取り、一緒にグラフを作成することで、学習者にグラフの概念を身に付けさせていた。

（2）能動的、自律的な学びの姿勢

次に「教育効果」として多く指摘されたのは、児童に「能動的・自律的な学びの姿勢」が育まれているという実感についてである。また、こうした学びの姿勢は、特に探究活動における自発的な行動や、仲間との協働を通してさらに強化されていると考える教員もあった。インタビューした教員からは、与えられた課題を受け身でこなすのではなく自ら興味を持って関連する書籍を調べたり、「こうしてみよう」と自発的に意見を出したり、学びの目的や意義を自覚し「なぜこの活動をするのか」を理解した上で主体的に行動する児童などのエピソードが聞かれた。また、能動的・自律的な学びの姿勢の一環として、10 の学習者像のひとつでもある「ふりかえり」ができるようになってきていることを教育効果として挙げる教員も複数いた。児童自らが課題を見つけ、学習の目的を理解した上で学びに取り組む姿勢は、日本の学習指導要領が示す「主体的・対話的で深い学び」の姿を体現するものであろう。

具体的な教員の語りには下記のようなものがあった。

「何かそのときの探究に関わる本を置いておくと、やっぱり見る子を見るんですよね。そこから見つけたことがだんだんクラスとかにも広がっていったりとか。『見て見て!ここにこんなこと書いてあるよ!』て、子どもが言ってきたりとかするので、環境を作ってあげるのって大事だなってというのは今感じてます。」（教員 T19）

「自分たちでこういうふうにしてみよう、ああいうふうにしてみようっていうふうに思ったり、つぶやいたりすることが多いように感じます。」（教員 T26）

“The most important impact, I think, is that our students become independent learners.[...] They are more aware of how independent they are. I think they don't depend on us. (They are) more responsible. Yes, they are responsible!（一番大きな影響は、やっぱり子どもたちが自立した学習者になることだと思います。自分たちがどれだけ自立しているか、ちゃんと分かっているんですよね。私たち教師にあまり頼らなくなってきました。それに、責任感もすごく強くなりました。そう、本当に責任感があると思います。）”（教員 T22）

「今自分たちはこの学習をしているんだ」とか、『何ためにこの活動をしているのか』とか、そういった意義を踏まえて学習に取り組む機会が多い。（PYP は）子どもたちの主体性だったり、その当事者感覚っていうのを高めているんだろうなと思います。」（教員 T29）

【調査員の授業観察記録より抜粋】

- ・探究を積み重ねることで、自分が次に何をすべきなのかといった自己決定がスムーズにできている。
- ・教師は一方的に答えを提示するのではなく、グループ内で解決策を考えさせている
- ・各児童が自身の課題や興味関心に基づいてテーマを立て活動的に取り組み、自分なりの表現方法で発表していた。
- ・発表、質疑応答は基本的に学習者同士で進められていた。議論の中では代替案・折衷案の提示や交渉をする場面が見られるなどコミュニケーションスキル、社会性スキルが見られた。

(3) 自己効力感や自信の育成

また、インタビューした教員によれば、PYP で学習している児童は「自己効力感や自信」を高める傾向があるという。特に、探究活動の中で自ら計画を立て、誰かのために行動する経験を積むことで、「自分の行動が他者に貢献できる」という手応えを得た児童は自己効力感や自信を高めている。また、別の教員によれば、PYP の学習環境下では、「わからない」ことは恥ずかしい

ことではなく、何かがわかるチャンスである。PYP の学習環境下で、「わからない」から「わかる」状態への探究サイクルを経験している児童にとって、「わからない」ことが直ちに自己効力感や自信の低下にはつながらないといった語りが聞かれた。このように、インタビューでは、PYP の学習を通して、自信をもって学習や生活に取り組む児童の姿が報告された。具体的な語りの例は以下の通りである。

「PYP を通して自己効力感が育ってると思いますね。たぶん探究の中の『アクション』とかで自分たちで何かを計画して行動することが多いと思うんですよね。しかもそれが誰かのためっていう "For Others" の計画だからだとは思いますが、誰かのために何かをするっていう意識が高いなと思います。」（教員 T5）

「『わからない』っていう状態は駄目なんだみたいな、そういうイメージがあったんです。実際に子どもたちも『わからないっていうのはちょっと恥ずかしい』とか、『わからないことはわからないって言いづらい』とか、そういう雰囲気があったんじゃないかなって思うんです。でも PYP を始めてからは、（中略）『わからなくて当たり前だしこれからみんなで考えていけばいいんだよ』とかっていうのを 1 年生のときから繰り返してるので、（中略）そういうわからないっていう状態に対して恐怖心を抱いてる子が少なくなってよくなったなって、私としては思ってます。」（教員 T13）

【調査員の授業観察記録より抜粋】

- ・児童が自分の探究テーマを決める際、児童から「知らないこと、できないことを問いにするといいよ」といった発言があった。
- ・ワークシートを早く書き終わった児童は、周囲のまだ終わっていない児童に声をかけ、助ける様子が見られた。

（4）より広い（国際的・俯瞰的な）視野の広がり

さらに、インタビューした教員は、PYP の学習を通して児童が「より広い国際的な視野」や「俯瞰的な見方」を獲得する効果を指摘した。従来の生活科や総合的な学習では身近なテーマにとどまりがちであったが、PYP では世界的な課題や他国の文化にも関心を広げる機会が多い。子どもたちは、なぜ今特定の学習に取り組んでいるのか考え、「日本の外」にも目を向け、グローバルな問題意識を育んでいる。地球市民（グローバルシティズン）としての資質・能力の育成や、学習指導要領が掲げる「持続可能な社会の創り手」（総則）の育成という観点にもつながるものであろう。

「生活科もそうですが、（総合学習は）自分を中心に、身の回りからとか...身近な人からっていう組み立てなんですけど、そうするとどうしても限界がある。ところが（PYP は）世界基準っていうか最初からドーンと（視野が）広いんで、興味関心がなくても、それぞれ

の分野に広く目を行き渡らせるチャンスがあるっていうことは、違くなって。子どもたちが将来生きていくときには、もっと広い世界に生きるはずなんだけれども、総合的な学習では追い切れなかったものに少し広がりがあるかなというところがいいなというふうに思っています。」（教員 T26）

「（PYP の枠組みで学習することで）漠然と探求していくのではなくて、何か指標とか大きな目安を持って勉強していくことで、何でそれを勉強しているのかとか、それが何につながっていくのかっていうのが、子どもたちの中で見通しを持ってやりやすくなるのかな、というふうに思います。」（教員 T15）

【調査員の授業観察で見られた探究テーマ（抜粋）】

- ・ 日本各地の食文化や食文化と自然環境のつながり
- ・ 生き物の体の特徴と環境の関連
- ・ 自分が探究したい興味関心トップ 5
- ・ 季節のサイクルと人間の生活
- ・ 社会の仕組みと他の生命との相互関係
- ・ 自己形成の過程に目を向ける
- ・ 人間の社会的な機能や役割について考える
- ・ 科学技術の発展と社会への影響
- ・ 音を聴いて感じたイメージをダンスで表現
- ・ 植物の観察を通して変化に目を向ける
- ・ 地形の特徴や特産物について考える
- ・ シミュレーション会議。あるテーマに関して、グループごとに立場を与え、その立場から意見を伝える。
- ・ 保護犬、保護猫、地域猫について

(5) コミュニケーション力の伸長

加えて、「コミュニケーション能力の伸長」も顕著な教育効果のひとつとして挙げられた。すでに「観点 1-2 PYP の利点・強み」の一節「スキルやコンピテンシーの育成の重視」のでも詳述したように、PYP の児童は PYP の全期間を通して自分の考えを言語化する機会を与えられ、他者の前で表現する経験を多く積んでいる。そのような経験を通して、学習発表会やエキシビジョンなどの場で、自分の学びを自信をもって伝える力が培われるという。インタビューに協力した教員からは、児童に間違いを恐れず積極的に発言する姿勢が定着しており自己表現が豊かになっていると感じるといった発言が多く聞かれた。下記の語りはその一例である。

“And the way that I see them is they are able to communicate, they are able to express their thinking, compared to other Japanese, because, for example, if you ask them

questions, Japanese students will just be quiet and wait for others to speak. But for IBPYP students, they can express themselves, and they are not afraid to commit mistakes. (日本語訳:PYPの児童は他の学校の日本人児童と比較して、コミュニケーションをとったり自分の考えを表現したりするのが得意だと思います。例えば、質問に対して日本の児童は他の児童が声をあげるまで黙っていることが多いですが、PYPの児童は自分から間違いをおそれず声を上げることができます)”(教員 T30)

「人前に立って話すっていうのは、かなり多くなっていうふうに思っていて、年度末に学習発表会っていう形でうちの人の前で1年間の学びを伝える機会もあります。また、最後年度にエキシビション(PYP学習発表会)があって、そこで大勢のお客さんの前で話しするっていう機会があるので、それがPYPならではの良さ(かなと思います)。話す機会が多いっていうところ...コミュニケーションって(言葉を)よく使いますけど。そういうところが多いかなっていうふうに思います。」(教員 T19)

【調査員の授業観察記録より抜粋】

- ・クラスの中で自由に発言できる雰囲気が作られており、コミュニケーションスキルを重視している。
- ・様々な表現方法(音楽、劇、絵など)を自由に使って、グループで作品を表現している。
- ・議論の際、発言のニュアンスを正確に伝えられるように工夫する様子が見られた。
- ・あるテーマについて、各立場にわかれ、その立場の人になったつもりで議論をしていた。議論の中では代替案・折衷案の提示や交渉をする場面が見られた。
- ・ペアを組んでお互いの考えに対して意見を述べることができていた。
- ・教師は一方的に答えを提示するのではなく、グループ内で解決策を考えさせている。

(6) 多様な見方・考え方の獲得

最後に、PYPの協働的な探究活動を通して児童たちは「多様な見方や考え方」を獲得していると教員たちは認識しており、このことが児童に対する教育効果の一つとして挙げられた。教員たちからは、知識を単に記憶するのではなく、他の児童の意見や考え方に触れることで物事を異なる視点から捉え直す機会を得たり、時事問題や身近な出来事と関連づけて考えることでより深い見方や考え方を獲得することができるといったエピソードが聞かれた。PYPの探究の枠組みの中で意識的に複数の視点を取り扱うことによる成果であると考えられる。

「思考する上で、知識を覚えるというよりはそれを繋げていったり違う見方をしたりするというような考え方が豊かになってるかなと思います。おそらくそれはキーコンセプトですとか、探究の時間があることによるのかなとは思いますが、いろいろな教科でも思いつかないような発想が出たりですとか、時事ニュースに繋げて考えることが出てきたりですとか。そんな一面が結構ありますね。」(教員 T6)

「身近なことでもいろんな視点で探究できる子になってるかな。」（教員 T9）

「理解を深めるというときには、一面的じゃなくて、いろんな側面から考えることで、理解が深まると思うので、それが PYP ならではのというか。PYP では必然的に他の人の意見を知るし、深く考えるためには、みんなで一回、一緒に協働しないとねって意図的に設定しやすいということもあると思います。（中略）協働的に学ぶときにも、相手の価値を認めて一緒にできるっていうのは、子どもにとって非常にいいことなんじゃないかなと思いました。」（教員 T8）

また、「多様な見方や考え方」の獲得とともに、何か問題が起こったときに様々な解決方法を試そうとする態度を身に付ける児童もいるようである。インタビューを受けたある教員は、PYP の教育効果について下記のように述べている。

「なんだろう、生きる力があるっていうか。何か問題が起きたとしても、それに対する解決方法をいっぱい持っているというのが、（PYP の教育効果だと思います。）まあ、まだまだ小学生なので、幼いところはあるんですけど、何かあった時にも、じゃあ、こうしてみようか、ああしてみようかっていうふうに、いろんな解決方法を持っている子は多いなと思いますね。」（教員 T16）

以上のように、PYP は児童に「他教科や生活とのつながりの意識」「能動的、自律的な学びの姿勢」「能動的、自律的な学びの姿勢」「自己効力感や自信の育成」「より広い視野の広がり」「コミュニケーションの伸長」「多様な見方・考え方の獲得」といった複合的な成長を促していると教員たちは感じている。これらは、未来を自ら切り拓く学習者を育てる上で極めて重要な教育効果であるといえよう。

【調査員の授業観察記録より抜粋】

- ・あるテーマについて、各立場にわかれ、その立場の人になったつもりで議論をしていた。議論の中では代替案・折衷案の提示や交渉をする場面が見られた。
- ・他者と自分の視点の違いや関連性について考えることができています。

◇観点 3-2. 教員に対する教育効果

一方、教員に対する PYP の教育効果としては、主に下記の 3 つが顕著であった。

（1）協働設計を通じた学びと成長（同僚意識の醸成）

「教員に対する教育効果」として PYP 教員がもっとも多く言及したのは「協働設計を通じた学びと成長」についてである。PYP において協働設計は、教員の学びと成長を促進する上で重要な

役割を果たしている。インタビューにおける語りをみると、協働設計のプロセスを通じて探究単元の質を高めることが可能となっているように思われる。

具体的には、教員はそれぞれの専門知識や指導経験を持ち寄り議論を重ねることで、個々の知識や視野を広げている。また、ベテラン教員から若手教員への知識伝達、若手教員からの新しいアイデアの提供は、双方にとって貴重な学びの機会となっている。また、複数の教員が協力して授業を設計することで、多角的な視点を取り入れた単元案を作成することができる。学校によっては教員同士がフィードバックを提供し合い、授業内容や指導方法を継続的に改善しようとする学校もあった。

また、授業準備や教材作成などの負担を分担することで、教員一人ひとりの負担が軽減され、困難な課題に直面した場合でも、チームで協力して解決策を探ることで精神的な負担も軽減され、と考える教員もいた。もちろん、PYPを導入していない学校でも協働設計はできるが、管理職の掛け声だけではなくプログラムの重要な方針として探究単元づくりでの協働設計を強力に推奨していることが、実際に教員の同僚性を高める結果につながっているように感じられる。

さらに、教員によっては、どう教えるか(how)だけではなく、学習者に6年間の学習を通して何を理解させたいか(what)についても単元案作成時点から同僚たちと深く話し合うことから、協働設計が自分自身の教育観や価値観を振り返る作業にもなっていると話した教員もあった。

一般的に日本の小学校教育は学級王国といわれるように、担任がすべてを取り仕切り教室の外の教員が授業や学級経営にかかわることはあまりないといわれている。もちろん、近年教科担任制を取り入れる学校も増加してきているが、教員の専門分野に踏み込んで児童の学習内容や教授方法の詳細を複数教員で協議しあう機会は限られているように思われる。その意味で、学級の壁や教科の壁を越えて、児童の学習の充実のために同僚性を醸成しているPYPの教育は特筆に値するものと思われる。

具体的な語りには次のようなものがあった。

「(以前勤めていた学校では)授業内容について話をするっていう機会ってあんまりないんですよ。他の先生方と。なので(PYPの協働設計は)すごくありがたいですし、それによってコミュニケーションが生まれるし、こうしたらいいなっていうのを常に振り返る環境があるのはすごくありがたいですね。」(教員 T5)

「(協働設計を通して)学年団の絆というか、方向性とかもみんなで一緒にやっ払いこうっていうようなところが生まれたかなっていうふうに思ってます。だから、チームで子どもたちを見てこうっていうところに繋がってるのかなっていうふうに思ってます。」(教員 T13)

「一番は、子どもよりも教員がいっぱい話すようになりましたね。授業について来週はこうということやってっやっていきましょうっていう話を共有して進めていくのでね、そこが一番変わったところかなとは思います。」(教員 T18)

「(通常の学校では) 担任より前に出るってことはないわけですよね。お互いをリスペクトする意味でも。でも協働設計の場合はそういう垣根はないんで、そこは自分事化しやすい場面ではあると思いますね。」(教員 T26)

「(PYP の強みは) 教師にも考えさせる点ですね。もちろん、日本の教育では指導方法みたいなことはすごく考えたり、研修とか研究会とかをやって、どうやって教えたらいいかとか、どういう教材、教具が有効なのかとか、そういうことについては、すごく話し合ったり、研究したりするんですけど。学習者に理解させたいこと、考えさせたいことそのものについて、(他の先生と一緒に) 考えることが重要になってくるっていうのは PYP の優れている点かなって思いました。(中略) 協働設計、(影響は) 大きいですね。協働設計することで、経験のある先生とない先生が、早い段階で、いろいろな価値観、教育観、あるいは教育実践とかも含めて、共有できると思います。」(教員 T9)

(2) 双方向的・水平思考の獲得

教員への効果として次に注目されるのは、PYP が教員と児童の間に「双方向的・水平的な学びの関係」を生み出していることである。従来、教員は「教える側」、児童生徒は「学ぶ側」として上下関係で区別されていたが、PYP の学習環境では必ずしもそのような上下の関係が固定しているわけではなく、両者が互いに学び合う関係にあると教員たちは認識している。児童がもたらす新たな視点や知識が教員に新しい気づきをもたらし、教員は児童の取り組む探究活動を通じて自身の考えをも更新していく様子がうかがわれる。こうした関係性を教員は児童と「対等な関係」と表現し、児童の意見をよく聞いて一緒に探究を深めていこうという態度を形成している。このような「対等な関係」は、学級内に相互尊重と信頼に基づく学びの協働体(学習コミュニティ)を形成するのに一助となっていると思われる。

このように、PYP 教員は知識を伝えるだけの存在ではなく、児童生徒と共に学び合い、新たな価値を創造するパートナーとして認識されており、双方向的な学びと水平思考を獲得した教員は、児童生徒一人ひとりの可能性を引き出すとともに、自身も教育者として成長し続ける存在であると言える。

教員の語りには次のようなものがあつた。

「以前よりも子どもと対等な立場だなというふうに自覚できるようになりました。もちろん知識面ですとかアウトプット等の仕方がまだわからないというところで、なかなか話を聞くときに伝わりにくいっていうことはあるんですけども、かといって、考えてることが浅いわけではないんだなっていうのがすごく自分でもわかるようになって、よりちゃんとその子の考えを聞いて、一緒に深めていこうっていう何かその教師として教えるというよりは何か一緒に考える立場だなっていうふうな考え方に変わっていたと思います。」(教員 T6)

「（児童とともに授業を作っていくことは）一教師の成長という意味でも、価値がすごいあると思っていますし、子どもにとっても、そういう自問自答する教師が目の前にいて、授業を一緒に作っていくっていうのは、『それなりに俺はわかってるよ』みたいな感じで、教えるよりもいいのかもしれないなと思います。」（教員 T8）

“I wasn't very often surprised in the classroom in the traditional way, but I'm often surprised in the PYP classroom. The students will go places I never even thought about, and I'm always very impressed, because they all have different backgrounds and they all have different abilities.（日本語訳：いままでのクラスでは驚かされることは少なかったですが、PYP のクラスではよく驚かされます。児童はそれぞれ様々な背景や能力をもっていて、私がけっして思いつかないことをやってのけるのです）”（教員 T20）

“As a teacher, I come to school every day. There is a new day to learn because sometimes students will have different answers. As I said earlier, it's not me who is providing all the information, it's them. That will fuel me. It's just me who will light the matchstick, but they will be the flames. And we burn together. We grow together. That's what I'm thinking.（日本語訳：私は教員として学校に来ているわけですが、児童は私と異なる答えをもっていますから毎日が学びです。前にも述べたように、学びを提供しているのは私だけでなく児童もなんです。彼らが提供するものが私の燃料です。私はマッチ棒に明かりをとすだけで、炎の元は彼らなんです。私たちは一緒に灯りをともし一緒に成長します。そんな風に考えています）”（教員 T21）

（3）探究的な学びへの理解や姿勢の深まり

教員への教育効果の3つ目は、「探究的な学びへの理解や姿勢の深まり」である。PYP 教員は、認定校で PYP 教員として UOI の作成に携わり、実際に実践するプロセスを通して、探究的な学びとは何かについて理解を深め、よりよい探究活動とは何か、常に模索する姿勢を身に付けている。諸外国と比較して、探究的な学びについて経験が浅い日本においては、PYP 教員として探究単元を実践することは、それ自体が大変よい学びとなっている。

また、PYP の探究単元の核となっているセントラルアイデアを決定したり、児童がセントラルアイデアを自分の言葉で説明できるように支援したりする過程において、多くの PYP 教員は概念や表現の違いについて深く考える必要があるため、言葉の使い方など言語に対する感受性が敏感になるという指摘もあった。

また、探究的な学びを支える要素の一つとして「楽しむ姿勢」に言及する教員もあった。PYP 教員は、自らが学びの過程を楽しむことの大切さを理解している。教員がワクワクしながら授業に臨むことで、児童にも熱意が伝わり主体的な参加を促しているように思われる。教員の探究に対する姿勢の深化が、子どもたちの学びの意欲を引き出す原動力となっている。

「社会人になってのいろんな経験ですとか、教員のいろんな経験が、それ以前より子どもたちとの授業の中で何でも活かせる。もちろん以前のことじゃなくて、今もいろいろ学んだり、あとプライベートの時間も、例えば博物館に行ってみたりそういった体験がやはり全部授業に帰っていく。教員もただ知識を伝える存在以上に私自身、1人の人としてというか、そういったものを全て活かしていこうっていう姿勢は、PYP 教員になって大きく変化したものなのかなと思います。」（教員 T29）

「なんか常にアンテナを張るようになったなあって思います。例えばゴミのことやってたときに、ゴミの収集車の写真撮っちゃったりとか、こないだも同じ教員同士で遊びに行ったときに、いただいたシールの裏に『これは卵の殻をリサイクルして作りました』とか書いてあって、なんかそういうのにすごく目が行くようになって、やっぱり生活とか結びつけて考えるからこそ、自分も自然の中で子どもに導入したりとか、気づいて活かせるるように自分が生活の中で関わりにアンテナを張るようになったなって...。」（教員 T19）

「教員としても決められた通りにやるっていうよりかは自分たちでできるっていう、良さじゃないんですけども、自分でこういうふうにしていくんだっていう気概を持って何か取り組めるっていうところもいいかななんて思ってます。」（教員 T13）

このように、PYP は教員に対しては「協働設計を通した学びと成長（同僚意識の醸成）」「双方向・水平思考の獲得」「探究的な学びへの理解や姿勢の深まり」といった教育効果をもたらしている。PYP 教員は、日々の PYP の教育実践を通して従来の日本のやり方とは異なる教育手法を学び、同時に教師中心の教育観から「主体的・対話的で深い学び」を重視する児童中心の教育観へ、教育に関する考え方を変容させていると言えよう。

観点 4 PYP 教員としての専門性向上

（1）OJT としての協働設計

PYP は探究的な学びを核とし、児童の主体性や国際的視野を育む教育であるため、教員には高度な教育理解と柔軟な思考が求められるが、日本においては探究的な学びの実践の歴史があまりないことや、国内の PYP 認定校はまだ数が少なく参考にできる国内の事例が乏しいことが課題として認識されている。では、PYP 教員はそのような中、どのように PYP 教員としての専門性を向上させているだろうか？

そのことを明らかにするために、インタビュー対象者に下記のような質問を行った。

「PYP 認定校で働くことは、あなたの教員としての成長や職能の向上につながっていると思われますか？ また、なぜそのように思うか教えてください。」

その結果、すべての教員が様々な機会を積極的に捉えて、PYP 教員としての専門性を高めていることが明らかとなった。

中でも、特に教員たちが言及したのは複数の教員が協力して行う UOI の「協働設計」を通じた教師としての成長と職能の向上である。探究単元の「協働設計」については、すでに「観点 1 PYP についての認識」や「観点 3-2 教員に対する教育効果」の節にて詳述したが、「協働設計」は教員の学びと成長を促進する上で重要な役割をはたしている。繰り返しになるが、教員はそれぞれの専門知識や指導経験を持ち寄り議論を重ねることで、個々の知識や視野を広げている。特に、ベテラン教員から若手教員への知識や経験の伝達や、逆に若手教員からの新しい授業アイデアの提供は、双方にとって貴重な学びの機械となっており、一種の OJT（On the Job Training）の機能を果たしている。また、協働的な教員間の学びは、個々の教員の力量を高めるだけでなく、教育チームとしての一体感を醸成し、学校全体の教育の質を向上させている。インタビューにおける教員の語りからは、「常に振り返る環境がありがたい」、「絆が深まり方向性が生まれた」、「他の教員とのコミュニケーションが深まった」、「価値観、教員観、教育実践を共有できた」、「他者とともに学び合うことが当たり前になった」といった肯定的な意見が多数聞かれた。すべての教員が協働で協力しながら探究単元に取り組むことをカリキュラムポリシーとして位置づける PYP の組織文化の中、教員たちは、教材研究の力、問いをつくる力、授業をデザインする力を高めている様子がうかがわれる。

なお、インタビューの対象となった PYP 教員たちは、OJT としての「協働設計」の取り組み以外にも、下記のような学びの場を通して、理論と実践の両面から PYP 教員としての専門性を進化させていることが明らかになった。以下、PYP 教員が専門性を向上させている主な方法について、それぞれの特徴を代表的な語りとともにまとめた。

(2) IB ワークショップを通じた専門性の向上

IB ワークショップは、PYP 教員にとって最も体系的に PYP や IB の教育について学ぶことができる国際的な学びの機会である。ワークショップでは、通常 3 日間程度の時間をかけて IB の理念や評価方法、探究単元の設計などについて国際的な視点から議論が行われ、参加者は各地から参加した教員たちと交流しながら PYP の実際について学ぶことができる。教員たちは、他の学校の教員との意見交換を通して自らの授業を客観的に見つめ直し、新たなアプローチを得る機会となっている。また、PYP のワークショップは、IB の教育理念や教育方針などを教員に内面化させる機能も果たしていると思われる。IB ワークショップが役に立ったと述べた教員の語りには下記のようなものがあった。

「まだ 4 年目なんですけど、1 年目と 2 年目にワークショップを受けました。その時に初めて概念的学びを知ったんですけど、学び方とか探究の仕方っていうものこそが人間の本質だってその時思ったんです。子どもだけじゃなくて大人も探究のサイクルで成長しているんだ、進歩しているんだっていうのが分かったところが、すごい成長になりました。」

（教員 T16）

「自分も PYP の研修とかに参加させていただいたりとか、資料とか毎年更新とかあると思うんですけども。そういうふうに自分のスキルアップというか、勉強を重ねていくことで、新たな知識を得たりとかってすることも多いので、本当に教員としてのスキルアップにはつながっているのかなと思っています。」（教員 T15）

「自分が慣れてしまっていて、『あれ?』って立ち止まったり、もう 1 回考え直すってことが減ってたんだなっていうことで、ワークショップはとても良い機会でした。」（教員 T26）

“I've been to four or five of those workshops and each one has elevated my level of teaching. (日本語訳: いままでに 4 つか 5 つのワークショップに行きましたが、そのたびに授業技術が向上していると思います)”（教員 T20）

ただし、一条校の教員と非一条校の教員では課題意識も異なるため、悩み事を共有するという意味では、IB ワークショップが役に立つと一概には言えない場合もあるようである。また、ワークショップは対面のものとオンラインで行うものがあるが、ワークショップリーダーや他の参加者とのより頻繁な相互作用が期待できるため、対面のワークショップの方を好む教員の方が多い。

「IB の研修を受けたんですが、やはり一条校じゃない先生たちとは土俵というか、立て付けというかやっていることがかなり違うので…。もちろん学びになる部分はあるんですが…。本校のように、学習指導要領と IB と（カリキュラムが）2 本走っている学校は、なかなかちょっと学びが得づらい環境にはあるのかなと思ったりもしました。（中略）インターの先生のやり方を聞いても、（日本の学校は）教科書もあり各教科もやらなきゃいけないし、IB もやらなきゃいけないという学校とでは立て付けが違うので、持って帰って活かしづらかったなという印象はあります。IB の理念とかやっていることで学びはあるんですけど。トレースするのは難しいなという印象がありました。」（教員 T10）

“The (face-to-face) workshop was really good because if you have any questions you can ask the workshop leader directly, or if there are some areas that you don't understand in IB you can ask your workshop leader about it. Online workshops are tedious. It takes time and it takes longer. (日本語訳: 対面のワークショップは、IB についてわからないことがあったらすぐに研修リーダーに直接聞けるところがとても良いです。オンラインで行われるワークショップは、回答を得るまでに時間がかかりますから、少し面倒です)”（教員 T30）

(3) 校内研修を通じた専門性の向上

校内研修は、通常 PYP コーディネーターや研究部の主任教員などがその中心的な役割を担い、学校全体として PYP の理念を共有し組織的に教育実践を深化させる場となっている。今回調査した PYP 認定校では、すべての学校で定期的なミーティングやリフレクションの時間が設けられ、教員間で探究単元の進行状況や児童の学びの様子を伝え合うことで、相互の実践知が共有されていた。また、年度末、あるいは年に数回定期的に時間をとって年間指導計画を見直している学校もあった。学校によっては年間を通して開催される研究授業や校内研究協議会を外部教員や教育者にも公開し、組織的に授業の質の向上につなげている学校もあり、各校にて工夫が施されている。また、前述した OJT としての協働設計に加えて、学校全体としても新任教員へのサポートや内部の研修を通して、学校全体の教育力を底上げしようとする試みが多く見られた。校内研修は、PYP の実践を「教員個人や教員グループの取り組み」から「学校文化」へと発展させる基盤となっているといえよう。

“Within the school we have a short professional development session. Like, for example, the PYP coordinator will always give us input about how the IB program works. (日本語訳: 学校内では、短い教員研修が行われます。例えば、PYP コーディネーターが行うものでは、IB をどのように実践したらよいか説明があります)” (教員 T21)

「メインはやはり IB コーディネーターの O 先生なんですが、一つ一つのトピックの中ではその実践を紹介される先生が登壇されたりですとか、あとは外部の講師の先生をお呼びして、研修を行うときもあります。」 (教員 T6)

「夏休みですとかいろんな研修を受ける機会があって、特にここにはこども園もありますので、そういった合同での研修を受ける機会があります。そうすると、子どもたちの発達をより長いスパンで考える機会がありますね。そういうところで、教員としての成長にすぐ繋がっていると思います。」 (教員 T29)

「月 1 回、4 時半から 30 分間勉強会っていうことで参加したい先生だけ参加してもらって、みんなで『学習と指導』の私から指定したページを読んで議論するっていうような形で(やっています)。」 (教員 T1)

(4) 高等教育機関での学び・連携

一部の教員は、大学や大学院に派遣され、IB や IB を支える教育理論を専門的に学び直すことで、IB 教員としての専門性を高めている。また、IB に関する学術研究を行う高等教育機関との連携も広がっており、協働研究や実践発表を通して理論と実践の橋渡しを行っている。こうした学問的な探究は、教育実践をより深く理解する基盤となり、教員自身の専門職としてのアイデンティティ形成に寄与している。インタビューを受けた教員の中にも、高等教育機関に派遣され学

んだ教員や、自主的に国際バカロレア教育学会で研究発表を行った経験のある教員がおり、PYPの理論と実践の両方で活躍している様子が見られた。

「〇〇大学で学んだことが、一般的な公立の学校よりも独特なところが多くて、個人的にはそこがIBとマッチしたと思うんですね。教科横断的なカリキュラムを作成したりですか。プロジェクトベースラーニングを大事にしていたりっていう地域性も含めた〇〇大学の教員養成のあり方がIBとマッチしたので、こちらでも私は自然に働けたのかなと思っています。」（教員 T6）

「大学の学びで指導のアプローチとかが一番学べたなと思って。今までは先生が話す、教える、それぐらいのアプローチしか知らなかったですけど、いろいろなアプローチや考え方があったなっていうのを知ったのが、一番ここに生きてるなって。」（教員 T28）

(5) IB が配布するカリキュラム関連文書を通しての学び

IB機構が配布するカリキュラム関連の文書は、PYPの理念や実践を支える重要な資料である。教員はこれらの文書を「MyIB」というIB教員や関係者のみがアクセスできるサイトを通して日常的に参照し、学習者像・概念的理解・評価規準などを確認しながら授業設計に活かしている。また、文書の改訂や新ガイドラインの導入時には、内容を精読し、校内で共有・議論を行うことで理解を深めている。このような継続的な文献学習が、国際基準に基づいた教育実践を支える知的基盤となっている。（ただし、英語で書かれた文書の翻訳の翻訳・発行頻度や日本語訳の質についての課題が教員から指摘されているが、この点については「観点5 PYPの課題」の節で取り上げたい。）

「勉強し続けなきゃいけないなっていう意識はIB入れてなかったら持ってなかったかもしれないです。（中略）本当に変わり続けなきゃいけないんだっていう形だね。（PYPコーディネーターが）本当にどんどんどんいろんな資料出してくれるので、やっと読み終わったかなって思ったらなんかまたあれは変わるらしいぞっていう話になるのでね...。それは悪い意味じゃなくてね。そこはIBに入れてなかったら、『変わり続けなきゃいけない』っていう意識はなかったかもしれないです。」（教員 T18）

「まずはPYPで出ている資料を読む。で、『こういうことかな？』を実践する。周りの先生とかにも聞いたりもして、また読むっていうものの繰り返しで、本当に試行錯誤っていうのがぴったりなところではあります。IBは他にも教員用のオンライン教材とかがあるので、長期休みとかには、今回はこの冊子読んでみようとかビデオを見たりして...。答え合わせじゃないんですけど自分自身としてはそんなふうにはしています。」（教員 T2）

(6) IB 教育推進コンソーシアムなどの外部の自主研修

文部科学省 IB 教育推進コンソーシアムや自主的な教員ネットワークによる自主研修も、PYP 教員の専門性を高める貴重な機会である。こうした研修は通常無料で行われることが多く、他校の教員との情報交換を通して多様な実践に触れることができ、自校の課題を客観的に捉える視点が養われる利点がある。特に、テーマ別の分科会や実践報告では、教員自身が発表者として学びを発信する機会も多く、アウトプットを通して自身の思考を整理・深化させる場となっている。

「やはり最初にその活動案を考えるときですとか、ちょっと行き詰まってどういうプログラムがあるかっていうのを情報交換したりする際にはかなり役立ってますね。」(教員 T6)

「最初 PYP を導入したときにもう本当に訳わからなかったんですけども、〇〇学校がワークショップを毎回開催してくださっていて、それに関してはキーコンセプトの考え方が全くわかってなかったの、すごい理解深まったなってような印象があります。あと、POI を作るときとかも XX 学校の方がアドバイスとかもしてくださったので、外部の方のそういうアドバイスって本当にありがたかったなって思ってます。」(教員 T13)

(7) 他の学校への訪問や教員との交流

他校の PYP 実践を直接見学することは、教員にとって大きな刺激となっている。授業観察や校内システムの共有を通して、自校との違いを比較し、改善のヒントを得ることができる。また、他校教員との交流は、教育の枠を超えた専門的コミュニティ形成につながり、長期的な相互支援関係を築く契機にもなる。このようなネットワークの広がり、PYP 教員としての実践力と柔軟な視野を育てる上で欠かせない。

「去年、私と副校長・校長で、△△学校の方に行かせていただいて、ちょっと学校見学させていただくってようなことはしていました。あと、私個人として、他の学校の IB の先生たち意見交換とかはするってような形です。」(教員 T1)

今回のインタビューからは、各学校の PYP 教員が多様な機会を捉えて校内外で教材研究を行い、探究單元における「問い」をつくる力を高め、自他校の教員とともに授業力の向上に取り組むなど、理論と実践の両面で専門性の向上を図っていることがあらためて明らかとなった。PYP 教員としての専門性の向上は、単なるスキルの習得ではなく、学び続ける姿勢の表れでもある。

PYP 教員は、IB ワークショップや校内外の研修、協働設計や大学との連携など、あらゆる学びの場を通して絶えず自己を更新しており、これらは「観点 3-2」で考察した「教員に対する PYP の教育効果」であるとも言えるだろう。こうした継続的な学びが、探究的な PYP の教育を支える力となり、児童のより豊かな学びを実現する原動力になっていると思われる。

観点 5 PYP の課題

インタビューデータを分析した結果、PYP を一条校で実践する際に教員が直面する多岐にわたる課題が明らかになった。これらの課題は主に (1) 「財政面に関する課題」 (2) 「教員に関する課題」 (3) 「探究的な学びの実施に関する課題」 (4) 「多様な学習者への対応」 (5) 「認知度の低さ」という 5 つの相互に関連する領域に集約されるように思われる。また、6 つ目の課題として、一部の学校では、英語で探究活動を行ったり、イマージョン教育を行っている PYP 認定校があるが、そのような学校ではイマージョンで行うことに伴う言語の問題も教員から指摘された。

(1) 財政面に関する課題

まず、財政面での課題であるが、予算的な制約のために必要とされる最小限の IB 研修しか受けられないという現状が多く、PYP 教員から指摘された。また、新規の教員が入職した場合はまずはその教員の研修が優先されるため、国公立・私立の別を問わず長く在籍している教員は IB 研修に行くのが後回しになっている現状を語るベテラン教員もあった。

また、オンラインで実施される研修と比較して、本来は対面式の研修の方が他校の教員との交流も可能となり効果的であると多くの教員たちは感じているが、予算の関係で研修に参加できるとしてもオンラインでの研修にとどまっている現状も聞かれた。また、インタビューに協力した教員は、皆モチベーションが高く、他の PYP 認定校へ訪問や授業見学に行き PYP 教員と交流するような機会を望んでいたが、予算措置が難しく実現できていないという意見も多かった。これらの教員からは、IB 研修に参加するための費用や研修リーダーを学校に招聘するための費用に対する補助など、公的な財政支援を要望する声が多く挙がった。

また、PYP では教室の壁を超えた学校内外のコミュニティでの探究学習活動が奨励されているが、フィールドワークや外部講師の招聘といった質の高い体験活動には費用がかかり、その捻出を課題として認識する教員もあった。また、探究活動を充実させるための図書館の書籍の充実などについて財政面の不足を嘆く声もあった。

典型的な教員の語りには以下のようなものがあった。

「ワークショップは一般的に行くとお金がかかりますよね。9 万円とか 10 万円とか。なので、自腹で行くのはちょっと...。(でも) 学校で行くってなると、全員は毎年行けないので。新しく来た人は必ず行ってねってなると、もうずっと (学校に) いる人は、学校のお金では行けなくなっちゃう...。」 (教員 T9)

「一番は財政面。やはり図書館の本をもっと潤沢にしたり、財政面のことですね。」 (教員 T26)

「フィールドワークですとか外部講師ですとか、何かいろいろな体験を重視している分、金銭的にお金がかかること等もあるので、そこをどうクリアしていくかというのも苦しいところです。」 (教員 T6)

(2) 教員に関する課題

次に教員に関する課題についてである。PYP の成功は、教員の力量、姿勢、そして協働に大きく依存しており従来の教育手法とは異なる資質や能力が教員には期待されるため、多くの PYP 教員にとっては国際教育や探究学習のフロンランナーとしてのやりがいとなっている。しかし、同時に高度な専門性や膨大な授業準備時間がとられることから、また「探究」には終わりがなくそのプロセスは継続的なものであることから、教科横断的な学びのデザインに慣れておらずその過程を楽しめない教員にとっては大きな負担となる場合もあるようである。また、IB による研修はなされているが、日本語の資料や日本語で開催される研修は限られているため、英語が苦手な教員にとってはさらなる負担となっている。特に導入初期段階では、PYP コーディネーターやベテラン教員などからの支援が不可欠であるとの指摘があった。

また、一部の学校においては、PYP のカリキュラムや教育理念に対する教員の理解の差が、授業の質にばらつきを生じさせる要因となっているとの意見もあった。また、PYP 教員の有志で定期的に実施されている「PYP 実践研究会」など一部の自主的な研究会では活発な研究活動や意見交流が行われているが、全体として PYP 認定校の教員間の情報共有や連携を促進するネットワークが十分ではないことも課題である。PYP 教員からは、他校の視察や教員コミュニティの構築を通じて課題を共有し、協働で解決策を模索する必要性が認識されている。特に一条校同士が連携を強化し、互いの授業を観察し合うことで、自校の状況に合わせた教育を開発していくことが求められているが、学校訪問には交通費や代替教員などのコストが必要となるため財政面での課題と相まって難しい学校もあるようである。

「自分自身が勉強不足っていうところもあるんですけども、どういうふうにユニットを組み立てていくのかっていうところが、まだ自分の中で、しっかりと正確に落ちてない部分もあるので。去年も、学年の中で PYP の授業を一緒に組んでいくというところでユニットの制作に関わらせていただいたんですけど。その中でも、難しいなっていう部分があったので。正解はないと思うんですけども、自分の中で正解を見つけられてないっていうのが率直なところです。」（教員 T15）

「ちょっとこれは個人的なことなんですけど。私、英語が全くダメなので…。なので、一番最初に行ったワークショップの時も、研修リーダーが最初は一生懸命、1つ1つ、日本語で言い直して下さっていたんですけど、2日目ぐらいから『じゃあ、もうここから先は英語でもいいですよ』って言われて、ええ~ってなって…。(中略) 今何言ってるの?とか(他の参加者に)聞きながらやったので。多分、ワークショップのランクが上がってくると、どんどん英語が飛び交うのかなあっていう…そういう個人的な心配はあります。」（教員 T9）

(3) 探究的な学びの実施に関する課題

探究的な学びの実施に関して、日本の教育制度における固定的な時間割が、PYP が推奨する教科横断的で柔軟な探究学習の障壁となっていることが PYP 教員に認識されている。例えば、探究学習の時間を確保するためには教科ごとの時間割の柔軟な調整が求められるが、実際には各教科の必要授業時間数が定められており、自由な調整は難しい。この点については、管理職・PYP コーディネーターの分析の観点 2「探究的・教科横断的な学びについて」のところでも言及したが、2030 年から導入される次期指導要領の策定作業の中で「調整授業時数制度」と呼ばれる制度について検討がなされており、探究学習活動などが特別な教育課程の申請をすることなく実施できる可能性もあり期待されるところである。

一方、探究的な学びの内容については、現状に満足せず更により学習とするにはどのようにしたらよいかという問題意識を抱く教員の姿が見られた。自分自身もそのような教育を受けたことがなく、理想の探究的な学びが何か提示されてもいないなか、教員たちは授業改善に向けて暗中模索しているように見受けられる。教員の語りからは、必ずしも IB の教員だから「いい探究の授業」が何か知っているわけではなく、彼らも非 IB 校の教員と同じようにどうしたら質の高い探究的な学びを実現することができるか試行錯誤しながら教育実践に取り組んでいる様子がうかがわれる。

また、インタビューでは、力のある教員ほど現状に満足せずに、さらにより探究の授業をめざそうとする傾向もみられた。下記の研究主任を務める教員の語りはその端的な例である。

「僕は今、ポジション的に探究部主任っていうのをやらせていただいているので探究の授業をどうしたら良くなるのか（に関心があります）。僕だけじゃなくて、学校としてもレベルを上げたいところはあるので。じゃあ、探究の『いい授業』とはどういうものかなのみたいなところから考えなきゃいけないんですけど探究のいい授業って僕も見ることがなくて…。

（中略）でも本校は『こういう探究の授業が、いい授業だよ』って、みんなの共通の土台になるものは、作りたいなと思っています。」（教員 T7）

「どういうふうにユニットを組み立てていくのかっていうところが、まだ自分の中でしつかりと正確に落ちてない部分もあるので。去年も、学年の中で PYP の授業を（他の先生方と）一緒に組んでいくというところでユニットの制作に関わらせていただいたんですけど。その中でも、難しいなっていう部分があったので。正解はないと思うんですけども、自分の中で正解を見つけられてないっていうのが率直なところですよ。」（教員 T15）

「『じゃあどうしたらいいの？』っていうのが一番の課題かなと。（従来は）指導書に書いてあるから、全部この通りに進めればとりあえず授業はできるっていう感覚があったところに、新しく PYP を取り入れてくださってなると、どこにどう取り入れればいいのか、何をしたら PYP になるのか、それでちょっとずれないとか、そういう不安だったり、教員たちがどうしていいかわからないっていうのはすごくあると思います。なので、本当に試行錯誤で…。」（教員 T2）

また、複数の教員が、よい探究単元づくりには準備や計画に時間がかかる現状があることを指摘している。教科書が存在しない IB の実践では、教員自身が探究テーマを各学校で設定する必要があり、その準備に多くの時間を要することが課題と認識されている。例えば、ある教員は「Sharing The Planet」の探究単元で「自然」を扱う際、子どもたちの関心を引くためにスタジオジブリ作品の『となりのトトロ』を導入として選んだ。この準備のために、教員自身がトトロ関連の書籍を徹底的に読み込み、教員自身がトトロと自然のつながりを探究する必要があったと述べている。これは、子どもたちに問いを立てる前に教員自身が深い探究を行うことの重要性を示していると同時に、PYP の探究単元の準備にかなりの時間がとられている現状が示されている。また別の教員からは、働き方改革が叫ばれる中で PYP が日本で普及していくためには、教授内容や行事の精選によって教員が単元案を検討・計画する時間を生み出す必要があるのではないかといった意見も聞かれた。

「(PYP の課題は) いくら時間があっても足りないってことですね。IB の実践だと教科書はない。しかも探究の内容も各校に委ねられている部分があるので。例えば私が 2 年生の担任だった時に"Sharing The Planet"で自然についての探究をしたいなと思ったときに、子どもたちの気持ちをつかむために、トトロを導入として入れたいなと思ったんですよ。そのときはちょうど夏休みだったので、図書館なり本屋さんでめっちゃくちゃトトロの解説の本とか、トトロのデザインのお話だとか、そういう本いっぱい仕入れていっぱい読んで、トトロと自然との繋がりを考えて、私自身が探究してたんですけど... (笑) 探究を計画するっていうときに、我々がまずは探究してないと。間違いなく私は今、この学校の中で一番トトロに詳しいと自負してるつもりなんですけど、そのぐらいやって初めて子どもたちに『自然とは何か』、『自然と仲良くなるためには』って問えると思ってるんですよ。だから、その、テキストがないだけに、それだけ探究に時間がかかるのが悩みですね。」(教員 T5)

「PYP を日本の学校に広めるにあたっては(単元案を) 検討する時間が絶対必要で。本校は 3 時過ぎから始めて、5 時とか 6 時手前ぐらいで話し合ってる学年も多くて。で、それが誰も文句言わないでやれるのは、PYP の学校だからだけ。多分、一般の学校だとそんなことをやってたら、管理職もいろいろ言われるだろうし、参加する教員もなんだよっていうふうになっちゃう。(中略) 今の日本の教育の中では、そこは難しいんじゃないかなって...。(PYP を) 広めるとか言ったときに、ユニットの考え方とか、そういうのはすごくいいと思ってるんですけど、それを実現するためには検討したり設計したりすることがセットだと思っているので。勤務のこととか、授業時数のこととか考えたらそこが一番難しいなって思います。」(教員 T9)

一方、PYP で学んだ知識が、中・高等学校進学後や受験の際に曖昧な記憶となっていないか不安を感じている教員も多かった。ある教員は、確認テストを行っても、知識が定着している生

徒とそうでない生徒の差が見られるなど、探究学習で得た知識が将来の受験等で通用するレベルで定着しているかという不安を吐露した。このような指摘は一条校で PYP を導入した学校の多くの教員が共通して持っているものであり、従来のテスト中心ではない形成的評価への転換に教員が苦慮している実態も浮き彫りになった。児童が小学校を卒業し中学校に入学する際、地域に IB 校がなかったり保護者の事情などで IB 校ではない学校に行く可能性があることや、ほとんどの児童が高校卒業時に日本の大学入試制度に直面する可能性があることから、一定の知識の定着が必要と考える教員が多かった。

また、日本の学習指導要領と比較して、PYP の学習内容（特に概念的理解）が児童の発達段階にあっているのか懸念する教員や知識偏重ではない教育の難しさから、探究的な学びには賛成しつつも生徒が十分な知識を持たないまま表面的な探究で終わってしまうのではないかという懸念をもつ教員もあった。

「知識の定着っていうところは、不安には思っているところではありますね。（中略）やっぱり何でしょう。何か自分習ってきたことを否定したくないっていう気持ちもあって…。教科型で受けてきた身としては知識がないのに考えるって言っても何か浅くなっちゃうんじゃないかなとか、そういう心配はあるかなっていうのもありますね。」（教員 T12）

「PYP やってて大丈夫かなって心配になることは、いろいろ調べたりとかして言葉が先行しちゃってるところが多いのかなって思っ。下の学年とか特に。何か実体験なく調べたことだとか…。例えば ipad などの機器とか情報を得るものがある中で、体験を通して実感しながらやるというのが、もしかしたら（PYP では）少し少なくなっちゃうのかなって、自分の感じ方としてはありますかね。（中略）概念って結構小学生には難しいんじゃないかな。「概念化される」ってよく言うと思うんですけどその概念として本当に（腑に）落ちてるのかなって思うときがあっ…。（子どもたちは）賢いからこそ、いろいろ調べて、わかってるつもりだけど、「概念」って言われたときに、子どもの中に本当に落ちてるのかなっていう。なんていえばいいのかな…。」（教員 T19）

（4）多様な学習者への対応

インクルーシブな教育環境を目指す PYP において、多様な背景を持つ児童一人ひとりのニーズに応えることは中心的な課題である。特に多様な児童を受け入れたいという学校の方針から発達特性を持った児童を受け入れている学校、経営的な事情から様々な学力層の児童を受け入れている学校、保護者や地域の期待から英語イマージョン教育を取り入れている学校などの学校においては、多様な発達特性、学力差、言語背景への対応や児童一人ひとりへの個別最適な支援が大きな課題として認識されている。

インタビューにおいては、発達特性のある児童を担当する教員の中には、グループ活動が苦手な児童を、PYP の「みんなで学び合う」という良さを生かしながらどのように巻き込んでいくかや、強いこだわりを持つ児童に「正解がひとつではない」ことをどのように理解してもらったら

よいのか、など悩みを打ち明ける教員もあった。また、PYP の幼稚園を卒園して入学した児童とそうでない児童（および保護者）の IB についての理解の差からくるやりにくさを指摘する 1 年生担当教員の声も聴かれた。

公立学校と私立学校では制度的な違いがみられるが、いずれにおいても発達特性、学力差、IB への理解の差への組織的な支援体制をどのように構築するかは大きな課題である。

「（PYP の課題は）ちょっと特性があったりとかで、なかなかグループに入れなかったり（する児童についてです）…。PYP の良さってみんなで一緒に考えたりとか、学んだりとかっていうところにあるのかなって思うけど、その子たちもうまく巻き込んであげるっていうのが課題かなって思ってます。」（教員 T19）

「発達特性のある子の場合、この（PYP の）カリキュラムは難しい。教室にいることはできます。いることはできますが本来その子が身につけた方がいいことが、この PYP のカリキュラムの中でできるかという、私は支援学校の経験があるので、課題のある子どもたちにとっては、私は向かないと思う。（中略）今の日本のバカロレアは…やってみた感覚では難しいと思います。」（教員 T26）

“Other challenges are within the classroom. You have to accept that children don't know limits.（中略） That's why we need skilled teachers.（日本語訳：私たちの課題は教室運営です。中には限度を知らない児童もいます。だから、生徒指導力のある教員が必要なのです）”（教員 T20）

「倍率的にはそんなに高い学校じゃないので経営から考えると「この辺まで入れなきゃいけない」っていうのはあるので。ちょっといろんな（学力差の）子が来ちゃってます…。」（教員 T7）

「PYP の幼稚園から来る子は PYP に対してある程度理解とかの経験が積んでいる部分があるんですけども、他の幼稚園で全然 PYP やってないですよってところから来るところでは、やっぱり差がついちゃってる、そこのバランスを保ったりとか、同じレベルまで引き上げるってところで違いが出てくるのかなと思いますね。（中略）最初に PYP とはなに、学習者像とはなについていうところ、やっぱり 1 から丁寧に教えてあげること、そういうものがあるんだ、そういうものを中心に学習をやっていくことが大切なんだっていうような、最初の共通認識を持たせるってことが大切なのかなと思いますね。」（教員 T17）

（5）認知度の低さ

PYP 教員が指摘する課題には、保護者や社会における PYP の認知度の低さに関するものも複数あった。教員たちは、PYP の教育内容が非常に優れていると感じており、他の公立・私立学校

でも採用可能で、PYP への理解が日本全体の教育の発展にも寄与すると強く信じてはいるが、同時に PYP の教育目標や具体的な内容を十分に理解している保護者が少ないという現状があると指摘する教員もあった。

また、一部の教員は学級通信やニュースレターなどを通じて情報発信を試みているが、その効果に課題があることを認識している。また、進学に必要な学力との関連性について保護者から疑問を呈された教員もあり、教員は PYP の学習が社会に広く認められることの重要性を訴えている。

「(課題は) 保護者の認知度が低いというのがすごい感じます。全国的に見ても、PYP っていうのがまだまだ浸透してない。公立とか行った先生とかと話す機会があったりしても、「IB って何なの?」 っていうところから始まる。そこはなんかやっぱりね...。(PYP は) かなり良い教育だなって思うし僕の思いの的には、公立でもできることだと思うので、もっともっと広まってほしい。」 (教員 T28)

「(PYP について) 周りの人にもわかってもらいたいというか。理解していただいて世に広まってほしいなあっていう思いは強いですね。」 (教員 T16)

「うちの人は PYP についてどれぐらい理解してるかっていうと、多分そんなにわからないんじゃないかなと。ATL スキルとラーナープロフィールぐらいは一生懸命発信してるんですけど...、。それで、今年度は親向けの PYP ニュースレターみたいなのを始めたんですけど。...かといって読んでもらってるかどうかというのとか...、難しいところかなと思います。」 (教員 T2)

「内部進学ができるわけじゃないので、『定期テストとか、進学に関して、また違う学力が求められるんじゃないか?』という部分を(保護者に)言われてしまうと、なかなか、苦しい部分があるなあっていうのは感じているので...、。IB のやっていることは素敵だと思う反面、まだまだそれが世の中には広く定着していないんじゃないかなと思うと、本校が発信する意義も大きいでしょうし、PYP のような学びがもっと社会に認められるといいなあとと思うところではあります。」 (教員 T10)

(6) PYP を英語で行うことに付随する課題

PYP 認定校の一部には、一条校でありながらプログラムを日本語ではなく英語イマージョンで、もしくは一部の教育活動を英語で行う学校も存在している。そのような学校の教員からは英語の習得だけではなく日本語ではない第二言語で深い学びを実現するにはどうしたらよいのかといった悩みや、英語で授業ができる教員をいかに確保するかといった人事上の悩みについて話を聞くことができた。下記の語りはその一例である。

「PYP を英語で行うのはなかなか難しい面も…。やはり母語でない子が多いので、思考を深めるというよりは英語を使うという方がちょっと比重が高くなるのでそこはちょっと難しい面はあるのかなとは思います。」（教員 T6）

「小学校の先生方の英語に対する意識ってすごく不安感の方が大きいと思うんです。そこで英語しかない IB が入ってしまうと理解するためには英語を読まなきゃいけないし、ワークショップ出るとかってなるにしても、コーディネーターが英語できないことにはどうにも進まないし、かといってコーディネーターの先生を外部から英語できる人（を呼んでくる）って言っても小学校で英語できるってなかなか難しいのかなと。」（教員 T1）

「やはり（英語の PYP クラスを増やすのは）かなり大変なんですよ。（中略）授業ができるぐらいの英語力を持った小学校教員の免許を持った人を探すのも大変ですし、ネイティブのいわゆる外国の先生にお願いするにしても外国の先生で英語で探究を教えたいと思う、（あるいは）教えられる先生を探すっていう、そのどちらにしてもすごくハードルが高いので、拡大していくっていうのは難しいかなっていう感じですね。」（教員 T7）

これらの7つの課題は単独で存在するのではなく、相互に影響し合っている。PYP を効果的かつ持続的に実践するためには、財政基盤の強化、教員の専門性開発と負担軽減および探究的な学びへの支援体制の構築、インクルーシブな教育環境の整備、IB に対する認知度の向上、そして英語イマージョン教育を実施する学校への支援などが不可欠であると思われる。

⑧おわりに

本報告書では、PYP 認定校訪問調査における管理職・PYP コーディネーターと教員へのインタビュー結果の分析を通して、PYP に対する管理職および教員の認識、教育実践および教育観の変化、児童および教員への教育効果、さらに PYP 教員としての専門性向上や課題について整理・考察を行った。その結果、PYP は単なる教育プログラムとしてではなく、日本の一条校における教員の教育実践や学校組織の在り方そのものに影響を及ぼす可能性を秘めた包括的なカリキュラム・フレームワークとして日本の学校教育における実践に影響を与えていることが明らかとなった。

特に、教科の枠をこえたテーマや学習者像を軸とした PYP の世界共通の枠組みや概念を基盤とする探究的な学びは、教員の協働的なカリキュラム設計を促進し、児童中心・探究中心の学びを持続的に実現するための基盤となっている。また、教員自身が教育観を問い直し、専門性を再構築していく過程が、PYP の実践を通して支えられている点も重要な示唆である。一方で、日本の教育制度や学習指導要領との整合性や、制度的支援の在り方に関する課題も浮き彫りとなった。

今後は、こうした現場の実践知を踏まえつつ、PYP の理念と日本の教育文脈とをいかに接続していくかが一層求められる。本調査の知見が、PYP の質的向上のみならず、探究的で持続可能な学校教育の在り方を検討するための一助となれば幸いである。

◆謝辞

本調査にご協力いただいた全ての学校、教員の皆様に深く感謝申し上げます。

◆参考文献

本多舞（2023） 「特集の主旨:日本の IB-PYP 導入による学校コミュニティの変容 」『国際バカロレア教育研究』 7, 1-3.

文部科学省（n.d.） 「資料 3: OECD における Agency に関する議論について」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/142/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2019/01/28/1412759_2.pdf

IBO.（2007）. Making the PYP happen: A curriculum framework for international primary education. Geneva, Switzerland: International Baccalaureate Organization.

IBO.（2015）. Approaches to teaching and learning in the Diploma Programme. Geneva, Switzerland: International Baccalaureate Organization.

IBO.（2025）.「学習と指導」

資料 I：管理職・PYP コーディネーターへのインタビューガイド

トピック	サブトピック	質問例
PYP の導入経緯	導入経緯	◆ PYP 導入の経緯を教えてください。 □ 色々な教育プログラムの中で、なぜ PYP を選ばれたのでしょうか？ □ PYP の導入にあたって、何か地域的な理由はありますか？
	PYP の利点	◆ 貴校に PYP を導入するメリットは何だとお考えですか？ □ PYP の導入によって、何を達成したいですか？ □ 日本の教育と比較して、PYP の教育の優れている点は何だとお考えになりますか？ □ 日本の教育の方が優れていると思われる点はありますか？
探究的・教科横断的な学びについて		◆ 日本の学習指導要領の枠組みの中で、どのように PYP の「探究的な学び」や「教科横断的な学び」を実現していますか？ 貴校でのやり方を具体的に教えてください。
（管理職から見た）	児童への影響	◆ PYP を実践することで、児童に対してどのようなよい影響があるとお考えですか？ □ 具体的なエピソードがありましたら教えてください。

PYP の教育効果	教員への影響	◆ PYP を実践することで、教員に対してどのような良い影響があるとお考えですか？ What positive impact do you think PYP has on teachers? □ 具体的なエピソードがありましたら教えてください。 Please tell us if you have any specific anecdotes.
(管理職から見た) PYP の課題		◆ PYP 教育の貴校（貴園）への導入や運営について、課題はありますか。 □ PYP を導入または運営するにあたって困っていることはありますか。

資料 II: 教員へのインタビューガイド

トピック	サブトピック	質問例
PYP についての認識について	日本の教育（前職）と PYP の違い	◆ 日本の教育（前職）と PYP の違いは何だとお考えになりますか？
	PYP の利点/強み	◆ 日本の教育と比較して、PYP の教育の優れている点は何だとお考えになりますか？
	日本の教育の優れている点	◆ 日本の教育の方が優れていると思われる点がありますか？
教授観・教育観の変化について	教授観	◆ PYP に携わるようになって教え方は変わりましたか？ □ 具体的なエピソードがありましたら教えてください。
	教育観	◆ PYP に携わるようになって教育についての考えに何か変化はありましたか？ □ 具体的なエピソードがありましたら教えてください。
	重視していること	◆ PYP で最も大事だと思うこと（重視していること）は何ですか。 □ どうしてそれが大事だと思うのですか？ もう少し詳しく教えていただけますか？

(教員から見た) PYP の教育効果	児童への影響	◆ PYP を実践することで、児童に対してどのようなよい影響があるとお考えですか? □ 具体的なエピソードがありましたら教えてください。
	教員への影響	◆ PYP を実践することで、教員に対してどのようなよい影響があるとお考えですか? □ 具体的なエピソードがありましたら教えてください。
PYP 教員としての専門性向上について	PYP 教員としての学びについて	◆ PYP 認定校で働くことは、あなたの教員としての成長や職能の向上につながっていると思われますか? なぜそのように思うか教えてください。
	PYP のワークショップなどについて	◆ PYP ワークショップや IB コンソーシアムの研修のような学びの機会は、役に立っていると思いますか?
(教員から見た) PYP の課題		◆ PYP を実践する上で、課題はありますか。

資料 III：調査対象者の概要

(教員 30 名、管理職 21 名 [PYP コーディネーター 9 名を含む]: 計 51 名)

調査対象者 ID	学年区分	言語	調査対象者 ID	役職	言語
教員 T1	高学年	日本語	管理職 M1	管理職	日本語
教員 T2	低学年	日本語	管理職 M2	管理職	日本語
教員 T3	低学年	英語	管理職 M3	PYP コーディネーター	英語
教員 T4	中学年	英語	管理職 M4	管理職	日本語
教員 T5	高学年	日本語	管理職 M5	管理職	日本語
教員 T6	低学年	日本語	管理職 M6	管理職	日本語
教員 T7	中学年	日本語	管理職 M7	PYP コーディネーター	日本語
教員 T8	低学年	日本語	管理職 M8	PYP コーディネーター	日本語
教員 T9	高学年	日本語	管理職 M9	管理職	日本語
教員 T10	中学年	日本語	管理職 M10	管理職	日本語
教員 T11	低学年	日本語	管理職 M11	PYP コーディネーター	日本語
教員 T12	高学年	日本語	管理職 M12	PYP コーディネーター	日本語

教員 T13	中学年	日本語	管理職 M13	PYP コーディネーター	日本語
教員 T14	低学年	日本語	管理職 M14	PYP コーディネーター	英語
教員 T15	中学年	日本語	管理職 M15	管理職	日本語
教員 T16	高学年	日本語	管理職 M16	管理職	日本語
教員 T17	低学年	日本語	管理職 M17	管理職	日本語
教員 T18	低学年	日本語	管理職 M18	PYP コーディネーター	日本語
教員 T19	中学年	日本語	管理職 M19	管理職	日本語
教員 T20	高学年	英語	管理職 M20	管理職	日本語
教員 T21	中学年	英語	管理職 M21	PYP コーディネーター	英語
教員 T22	低学年	英語			
教員 T23	高学年	日本語			
教員 T24	中学年	日本語			
教員 T25	低学年	日本語			
教員 T26	中学年	日本語			
教員 T27	高学年	日本語			
教員 T28	中学年	日本語			
教員 T29	低学年	日本語			
教員 T30	高学年	英語			

※「管理職」は、具体的には校長、副校長などを含むが、個人が特定されないよう具体的な役職名は記載していない。

2) PYP 教員の学び合い調査

[文責：佐々木]

①問題の所在

IB PYP 教員（以下、PYP 教員）は、IB の教育理念と探究を基盤とした学びを実践するための指導方略を的確に理解し、日々の授業に応用していく高度な力量が求められている。しかしながら、PYP 教員が他の PYP 認定校における教員の指導観や実践内容を、授業づくりの判断の根拠や調整過程まで含めて体系的に共有し合う機会は限られている。無論、校内における協議や授業の協働設計、IBO が主催するワークショップや自主的な勉強会等を通じて外部の知見に触れる機会は存在するが、その頻度や内容には制約があり、教員が日常の実践の中で生じる細やかな工夫やつまづきを相互いに言語化し、対話を通して検討・更新する場は十分とはいえない。結果として、各校における実践の工夫が校内で完結しやすく、類似の課題が学校内で反復されるなど、知見が共有され、他校へ展開・普及していくことが起こりにくいという課題がある。

さらに、PYP には DP のような統一試験が存在せず、カリキュラムの設計や学習成果の評価が学校の教育方針や文化に大きく依存している。そのため、同じ PYP といえども実践内容は学校によって大きく異なり、IB の教育理念がいかにかに具体的な授業実践に落とし込まれているかを可視化し、学校間で比較可能な形で捉えることは難しい。また日本国内においては、PYP 認定小学校（一条校）の各校が学習指導要領に則った教育活動と IB の教育方針の両立を図っており、PYP の実践は制度的条件との整合性の中で展開される。したがって、文脈依存性の高い実践を「良し悪し」で単純比較するのではなく、どのような条件のもとで、何が、どのように実現され／困難になるのかを記述できる共通の分析枠組み（共通言語）が求められている。

②本報告の目的

本報告は、PYP 教員が日々の実践の中で行っている判断・工夫・葛藤を、教員同士の対話を通して言語化し、学校や学年段階、制度・言語環境といった条件の違いを踏まえながら整理することを目的とする。具体的には、（1）PYP 教員が共通の指導原則をどのように授業に具体化しているのかを明らかにするとともに、（2）その実践を促進／阻害する条件を検討し、さらに（3）学び合いにおける相互作用が教員の理解・省察・実践再構築にどのように寄与するのかを検討する。

③分析枠組み：指導のアプローチ（Approaches to Teaching: ATT）

以上の課題意識を踏まえ、IB の全プログラムに共通する指導原則である「指導のアプローチ（Approaches to Teaching: 以下、ATT）」に注目する。ATT は、IB のすべてのプログラムに共通する指導の原則であり、児童の学びを支えるスキルである「学習のアプローチ（Approach to Learning: 以下、ATL）」と合わせて、以下のように述べられている。

「現代の教育研究に基づいた IB の 6 つの『指導のアプローチ』と 5 つの ATL は、IB ワールドスクールの教育者と児童生徒に指針と明確な焦点をもたらします。これ

らのアプローチは、IB の目標を教室内で確実に達成する上で非常に重要な役割を果たします。

これらのアプローチは、探究、行動、振り返りのサイクルを中心に据え、問いかけること、行動すること、思考することの相互作用を通じて、教師と児童生徒の日々の活動を支えています。また、人間関係も非常に重視しています。これは、教育的な成果とは教師と児童生徒の関係によって深く形成されるものだという IB の信念を反映しています。また、人々がさまざまに協力して、意味を見だし、世界を理解していく過程を称える姿勢を示しています（IBO 2020）。」

IB では、日本の学習指導要領とは異なり、教師における「指導」、児童における「学習」といった双方のアプローチの方略が並列に述べられている点に特徴がある。さらに、ATT の 6 つの観点に関しては、「意図的に幅広く策定され」ており、「教師が置かれた状況と児童生徒のニーズを最もよく反映した戦略を選択できるよう柔軟につくられ」ているとされている。以下にその詳細を『国際バカロレアの教育とは』（IBO 2020）より抜粋する。

- ①**探究を基盤とした指導**：児童生徒がそれぞれ独自に情報を入手し、独自の理解を構築することが重視されています。
- ②**概念的理解に重点を置いた指導**：各教科の理解を深め、つながりを見だし、新しい文脈へと学びを転移できるようになるために、概念を探究します。
- ③**ローカルな文脈とグローバルな文脈を反映した指導**：実際の文脈と例を用いて指導し、新しい情報を自分の体験や周囲の世界に結びつけて消化することを児童生徒に奨励します。
- ④**効果的なチームワークと協働を重視する指導**：児童生徒間のチームワークと協働を促すだけでなく、教師と生徒の協働関係もこれに含まれます。
- ⑤**学習への障壁を取り除いた指導**：多様性に価値を置き、インクルーシブな指導を行います。児童生徒のアイデンティティを肯定し、すべての児童生徒が適切な個人目標を設定して追求できるよう、学習機会を創出することを目指します。
- ⑥**評価を取り入れた指導**：評価は、学習成果の測定だけでなく学習の支援においても重要な役割を果たします。また、効果的なフィードバックを児童生徒に提供することの重要性も、このアプローチでは認識しています。

このように ATT は、PYP における授業設計・実施・評価の各段階に関わるため、実践の多様性を尊重しつつも、学校間で比較可能な形で整理するための「共通言語」として機能しうる。また、ATT の各観点は、以下に示したように学習指導要領が掲げる「主体的・対話的で深い学び」や「指導と評価の一体化」等とも親和性が高い観点を含んでおり、日本の学校制度の中で PYP の実践がどのように成立しているか／どこで困難が生じるかを検討する上でも有効である。以下に、ATT の 6 観点と親和性の高い観点を挙げる。

【表 2-5】 ATT の 6 観点

- ・ 探究を基盤とした指導/ 主体的な学び、問題解決
- ・ 概念的理解に重点を置いた指導/ 見方・考え方、概念を形成する
- ・ ローカルな文脈とグローバルな文脈を反映した指導/ 社会に開かれた教育課程、社会とのかかわり
- ・ 効果的なチームワークと協働を重視する指導/ 対話的な学び、協働的な学習
- ・ 学習への障壁を取り除いた指導/ 個に応じた指導、特別支援教育の視点、学習内容の習熟の程度に応じた学習
- ・ 評価を取り入れた指導/ 学習評価、振り返り

そこで本報告では、この ATT の 6 つの観点をもとに、PYP 教員の語りを整理・分析し、各観点がどのように理解され、どのような条件によって実現／困難化するのかを検討する。

④研究課題（リサーチクエスション）

以上を踏まえ、以下のリサーチクエスション（RQ）を設定する。

RQ1：PYP 教員は ATT の 6 つの観点を各自の文脈でどのように授業に具体化しているか

RQ2：ATT の適用を促進・阻害する条件（校内体制、制度、言語環境、学年段階）は何か

RQ3：学び合いの相互作用は、教員の理解・省察・実践再構築にどう寄与したか

⑤調査方法

本報告では、PYP 教員が ATT の 6 つの観点を各自の教育文脈にどのように適用しているのかを質的に明らかにすることを目的として、フォーカスグループディスカッション（Focus Group Discussion: 以下、FGD）の手法を用いた（Greenbaum, 2000; Morgan, 1997）。FGD は、参加者同士の自由な語り合いを通じて、個人の経験にとどまらない集団的な認識の形成や相互作用の中から多面的な知見を引き出す質的調査手法である。

調査は、PYP 候補校および認定校に勤務する教員を対象に、以下の 3 つのグループに分けて実施した。

- ・ グループ 1：一条校に勤務する低学年担当教員（主に 1～3 年生）
- ・ グループ 2：一条校に勤務する高学年担当教員（主に 4～6 年生）
- ・ グループ 3：インターナショナルスクール、及び就学前機関に勤務する教員

本研究プロジェクト全体が基本的に一条校の IB 校を対象にしているにもかかわらず、本調査においては PYP の教育を実践する一条校以外のインターナショナルスクールや就学前機関の教員も対象とした。これは、一条校での実践を相対的に検討できるようにするためである。

FGD のセッションは、各グループにおいて、2 回ずつオンラインで実施し、教員が ATT の各原則に関してどのような実践を行っているか、また、授業に適用する際にどのような課題や支援が必要とされているかについて自由に語ってもらった。セッションのテーマは事前に提示した上で、参加者が自らの経験に基づいて自由に話すことができるよう設計された。

各グループには、教員調査班のメンバーから 1 名がファシリテーターとして配置され、話題の流れを調整しつつ、参加者の発話を促進する役割を担った。なお、各グループの構成、参加者数、ファシリテーターの割り当ては【表 2-6】に示す。

【表 2-6】グループ名と参加者数及びファシリテーターの割り当て

グループ名	参加者数（最大）	ファシリテーター
グループ 1 一条校小学校低学年	5 名	木村光宏（岡山理科大学）
グループ 2 一条校小学校高学年	4 名	赤塚祐哉（相模女子大学）
グループ 3 インターナショナルスクール、就学前機関	6 名	渋谷真樹（日本赤十字看護大学）

【表 2-6】では、グループ 1 として一条校に勤務する低学年担当教員、グループ 2 として一条校に勤務する高学年担当教員、グループ 3 としてインターナショナルスクール・就学前機関に勤務する教員を設定したことを示している。表に記載された参加者数（最大）は、各セッションにおける参加者数の変動を考慮し、全セッションを通じて最も多かった人数を示している。

ファシリテーターの役割としては、以下の 3 点に配慮しながらセッションを進行した。第一に、特定のテーマに関して参加者の経験や考えを掘り下げるため、自由かつ安心して意見を表現できる対話の場を創出すること。第二に、PYP 教員という共通点を持ちつつも、教育文化や校種、所属校の環境が異なることを踏まえ、多様な視点を可視化するために、全員が発言できるような促しや問いかけを行うこと。第三に、参加者が暗黙的に理解しているが明確な言語として表現しづらい内容（例えば、教室での判断基準、実践上の肌感覚など）を、言語化できるよう支援することに留意した。

セッションの実施方法は次の通りである。各グループに対して、全 2 回のセッションを設定し、それぞれを「セッション 1」、「セッション 2」と名付けた。セッション 1 および 2 はそれぞれ約 90 分とし、Zoom を用いたオンラインによるリアルタイム形式で実施した。原則として全員が

揃ってから開始することとしつつも、途中参加や欠席があってもセッションは実施可能とした。また、それぞれのセッションで焦点を当てた内容については【表 2-7】に示す通りである。

【表 2-7】各セッションの目的と内容

セッション名	目的	焦点（フォーカス）を当てた内容
セッション 1	・ ATT をどのように理解し実践に取り入れようとしている/取り入れているかの共有	・ それぞれの学校の文脈 ・ ATT の 6 つの観点
セッション 2	・ IB での実践の共有	・ 参加者による実践事例の具体

【表 2-2】では、それぞれのセッションにおける目的と主な内容を示している。セッション 1 では、まず自己紹介に始まり、それぞれの学校の文脈について共有し合った。さらに、これまでの PYP 実践における経験を基に、ATT の 6 観点に着目し、それらをどのように理解し、授業の中で適用しているのかについて語り合った。具体的には、①探究を基盤とした指導（【探究】）、②概念的理解に重点を置いた指導（【概念】）、③ローカルな文脈とグローバルな文脈を反映した指導（【文脈】）、④効果的なチームワークと協働を重視する指導（【協働】）、⑤学習への障壁を取り除いた指導（【障壁の除去】）、⑥評価を取り入れた指導（【評価】）といった ATT の各観点が、単元設計や日々の授業運営においてどのように組み込まれているのか、また、それらを実現するにあたり直面する現場の制約や創意工夫について対話を深めた。

セッション 2 では、参加者が自らの授業実践を紹介し、それをもとに議論を行った。具体的には、PYP が定める概念レンズである特定概念に基づく単元設計や、ユニットプランナーを活用したカリキュラム構築の実例、学習者中心の授業展開、評価方法等が共有された。必要に応じて、使用教材やユニットプランナー、授業の流れや使用教材が提示され、それを手がかりに実践の特徴や課題を検討した。

ただし、本研究における分析対象は、あくまでセッションにおける教員の語りの内容に限定し、セッション内で共有された資料そのものは分析対象には含めない。なお、代表的な発言を引用する際には匿名化を施し、学校名や個人が特定されないよう十分に配慮した。

⑥分析方法

まず、セッションの内容はすべて録画・書き起こしを行い、逐語録を作成した。さらに逐語録に基づいて定性的な内容整理を行った。分析にあたっては、ATT の 6 観点を枠組みとして用い、教員の語りの中から実践に関する知見および課題を抽出し、整理した。

本報告では、語りを 2 段階のプロセスによって分析した。第 1 段階では、各グループ（A・B・C）における語りを ATT の 6 観点に着目しながら整理し、当該グループに特徴的な実践の焦点、課題、および背景要因を整理し、記述した（第 1 段階：グループごとの語りの分析と考察）。第 2 段階では、第 1 段階での分析結果を統合し、グループごとの共通点や相違点など、全体的な傾向と多様性を明らかにした（第 2 段階：総合的な分析と考察）。

⑦分析結果と考察

◆グループ1（一条校小学校・低学年）実施報告

担当：木村光宏
(岡山理科大学)

(1) 概要

グループ1では【表2-8】の通り、FGDの手法を用いた調査を実施した。また、調査対象者の属性は【表2-9】の通りである。

【表2-8】グループ1の実施日時と参加者数

セッション名	実施日時	開催方法	参加者数
セッション1	2025年7月24日	オンライン	5名
セッション2	2025年9月10日	オンライン	4名

【表2-9】グループ1調査対象者の属性

名前	国公立／私立の別	主な担当	PYP認定校での経験年数
A 教諭	私立	PYPコーディネーター	5年以内
B 教諭	私立	管理職	5年以内
C 教諭	私立	2年担任	3年以内
D 教諭	私立	3年担任	5年以内
E 教諭	国公立	1年担任	3年以内

(2) セッションを通しての成果と考察

(2-1) ATTの観点に基づく実践傾向と課題

ATTに基づく授業実践では、全参加者が「概念」を思考のレンズとして活用している。A 教諭は特定概念を教科横断的な「見方・考え方」と定義し、指示用語の明確化により教師の介入を減らし、児童が自ら学び合う時間を最大化する探究のデザインを重視していた。B 教諭は概念を「どの方向で探究するか」のレンズ」と例え、郵便番号の規則性を探る活動で算数と国語を繋ぐなど、実社会の文脈での学びを展開した。しかし、教員間の多言語環境下での協働が「永遠の課題」であることや、児童の障壁を取り除く「個別最適化」の実装に困難を感じている実態も議論となった。

また、低学年を受け持つC 教諭は、4つの枠に分けて整理する「フレイヤーモデル」という思考ツールを用いて実践を行ったが、本来は概念的理解を支援することが期待されるこのツールであっても、低学年の児童にとっては抽象的概念的理解を成立させるには不十分な場合があること

が明らかとなった。D 教諭は「インクワイアリー・ウォール」による学習過程の可視化で児童の省察を促す一方、概念そのものを知識としてまず明示的に教えるという、外国人の先生からの提案に基づく新たな手法を試行している。さらに、E 教諭は、探究が単なる「児童の自由」と誤解され、目的地を失い迷走する危うさを指摘する。彼は「どの階層の概念か混乱する」という自身の困難に触れつつも、共通の到達点としての「概念的理解」が、個々に異なる探究プロセスを交差させ、議論を深めるために不可欠な装置であると論じている。

総じて、実践には概念、探究、文脈、協働、評価が幅広く取り入れられているが「個別最適化」の具体策（区別化）や、概念の階層性の理解といった側面では、依然として多くの教員が限界や課題を抱えながら、自校の文脈に即した最適な指導法を模索し続けていると言える。

（2-2）実践を支える文脈的・制度的条件

所属校の教育文化とリーダーシップについて、各教員の実践は、その設立背景やリーダーの役割に深く依存していた。B 教諭は教頭という立場で、ATT の 6 つの観点を整理したポスターを自作し、経験の浅い教員も含めた全校的な意識共有を図るリーダーシップを発揮していた。A 教諭はコーディネーターとして、指示用語を明確化し、教職員間で「子どもの思考時間を確保する」授業デザインを共通言語化している。

学習指導要領との接続について、国公立や私立の枠組みの中で、学習指導要領との整合性は重要な条件となることが語られた。A 教諭は、指導要領の「深い学び」を「概念的理解」と定義し、PYP の特定概念を、教科の見方・考え方を横断的に働かせるための装置として活用している。D 教諭も、指導要領で求められる知識を「ピラミッドの土台」とし、その知識を概念というレンズで読み解く二段構えのアプローチをとることで、制度的制約と探究の両立を試みている様子がみられた。

さらに教員の専門性の差や、カリキュラムの複雑さが ATT の適用を阻む要因となっていることが指摘された。これは、学校内には PYP に精通した教員と初心者の教員が混在しており、すべての授業に ATT の視点を一貫して組み込むことが難しいとしている。この課題に対して B 教諭は、ATT の 6 つの視点を英語と日本語の両方で整理した独自のポスターを作成し、全教員に配布し、また学校独自のイラストを用いた「IB ポスター」や「下敷き」を児童に配布し、常に「今はどの概念（眼鏡）で考えているか」を確認できるようにしている。こうしたリーダーシップによるツールの標準化が、校内における ATT の共通言語化を支えていた。

（2-3）教員の気づきと今後の展望

対話による視点の拡張と省察的な気づきについて、セッションでの対話は、各教員が自身の依って立つ実践を相対化し、新たな視点を得る契機となったと考えられる。D 教諭が紹介した「概念をまず明示的に教える」というアプローチは、他の参加者には新しい手法として捉えられていた。概念の活用について、E 教諭は一度概念を習得した児童は、その後の知識習得の際にも自然と概念のレンズを通して物事を見ているのではないかと指摘した。また、C 教諭は、単なる「調べ学習」で終わっていた従来の教育実践と対比し、概念という枠組みがあることで「対話が活性

化」し、知識が一時的なものではなく「転移可能なスキル」へと昇華されるという確信を得た事例を共有した。

実践の再構築に向けた意欲と方向性について、他校の具体的なツールや手法に触れることで、自校の実践をアップデートしようとする意欲が見られた。B 教諭は、A 教諭が実践している「子どもの思考時間を確保するための指示用語の共通化」に深い関心を示し、自身の学校でも取り入れたいと述べている。また、D 教諭は、外部からの意見を取り入れることで、学びの可視化という手法をさらに洗練させようとしている。これらの姿勢は、単なる事例紹介に留まらず、他者の知見を自校の文脈に合わせて再構成しようとする、動的な学びの姿を示していた。

今後の実践・校内研修・教員養成への応用可能性について、本セッションで共有された知見は、個別の授業改善を超え、組織的な教員養成や研修への応用可能性がみられた。第一に、B 教諭が作成した「ATT の視点の共有」や、A 教諭の「指示用語の意識化」は、PYP の経験が浅い教員や初心者の教員が迷わず実践に入れるようにするための、強力な研修リソースとなり得る。第二に、A 教諭が提唱する「教師は沈黙し、徹底的にフィードバックに専念する」スタイルは、教員の役割を「知識の伝達者」から「学びの評価者・支援者」へと転換させるための、教員養成における重要な指針となっていた。第三に、横断的なカリキュラム開発について B 教諭が紹介した「テキストと探究テーマを繋げて実践する」や「算数と国語を跨いだ郵便番号の探究」は、探究的な学びを取り入れながら教科横断的な深い学びの設計を検討するという具体的モデルを提示している。

◆グループ2（一条校小学校・高学年）実施報告

担当：赤塚祐哉
(相模女子大学)

(1) 概要

グループ2では【表2-10】の通り、FGDの手法を用いた調査を実施した。また、調査対象者の属性は【表2-11】の通りである。

【表2-10】グループ2の実施日時と参加者数

セッション名	実施日時	開催方法	参加者数
セッション1	2025年8月8日	オンライン	4名
セッション2	2025年9月18日	オンライン	4名

【表2-11】グループ2 調査対象者の属性

名前	国公立／私立の別	主な担当	PYP認定校での経験年数
F 教諭	国公立	6年担任	2年
G 教諭	私立	アシスタント・コーディネーター	3年
H 教諭	私立	4年担任	4年
I 教諭	私立	4年担任	2年

(2) セッションを通しての成果と考察

(2-1) ATTの観点に基づく実践傾向と課題

ATTを授業内で実現するためには、児童らが自らの学習を振り返ったり、級友からの建設的なフィードバックを得たりすることが重要であるとの語りが得られた。例えば、G教諭は、児童のエージェンシーを育てるためには協働学習が重要であると言い、特に何を・どうやって学ぶかを選べる環境（選択）、自分の考えを言語化して意思決定に関わること（発言・表現）、学びを自分ごととして捉えること（当事者意識）の3つを意識しながら授業を組み立てていると説明した。

一方、セッションでは、受け持ちの児童の現状について、リサーチスキルが弱かったり、苦手意識をもったりする児童が多いと感じるという発言もあった＜H教諭＞。児童の実態を捉えた上で、リサーチスキルの向上を目的として、2人1組のペアによる協働学習を随時取り入れているとの説明もあった。ただし、中には1人で学習活動に取り組みたい児童も中にはいるため、児童が学習形態を選択できるような配慮を行っている点も説明がなされた＜G教諭＞。

F教諭も「グループでやりたい子と、個人でやりたい子と、選択性」と説明するが、ペアの条件として、探究したいテーマの類似性と、なぜペアになる必要があるのかを教員に説得力をもた

せて説明するよう求めているという。I 教諭も学習の選択について触れた。I 教諭は、ATT の「学習の障壁を取り除くデザイン」の取り組み例として、児童の主体性を伸ばすために、児童たちがそれぞれに興味をもったことを調べて学習に取り組む工夫を行っている」と説明し、結果として児童らはやる気に満ち溢れている様子であったことを語った。

セッションでは、授業内において、どのように概念型学習が実践されているのかについても意見が交わされた。例えば、G 教諭は、「セントラルアイデア」を単元の出発点として、児童にとって身近な事柄を取り上げ、調べて分かった情報をもとに級友に自分の意見を伝える実践を行っているとのことであった。一方、F 教諭は、概念型学習を授業計画に組み込むことへの困難さを説明した。F 教諭によれば、授業中に「価値」や「売買」といった概念を取り上げる場面があったが、児童らがそうした概念への理解を深められるような手立てについて、授業の計画段階で十分にできていなかったと振り返った。

(2-2) 実践を支える文脈的・制度的条件

指導と評価の一体化の視点からの語りも得られた。教諭らは、協働学習の一環として、ペアまたはグループによる学習を行っていた。協働学習と評価づけの関連として、H 教諭は、児童一人ひとりが学習について振り返りを行う機会を設けるようにしていると説明した。その上で、評価づけの段階では、児童一人ひとりの学習過程や探究の内容についての理解度や思考の深まりを観察し、その結果について評価づけを行っている」と説明する。一方、協働学習の実現にあたっての課題も指摘された。例えば F 教諭は、児童らが協働学習に対して、どのような学びがあったのかを自己評価する機会はあるものの、深みのある振り返りを提供できていないとの自覚を語った。

F 教諭の語りを受けて、G 教諭は協働学習の設計にあたっては、教員同士による協働の重要性が大切であると説明した。所属校の組織的な枠組みとして、教師らが記載する「レポートカード」（校内共通のテンプレートをを用いた指導の振り返りシート）を活用していると説明した。「レポートカード」には、ATL と IB の 10 の学習者像について、児童らがどの程度伸長させることができたかを記載しているという。特に ATL スキルを指導することによって、一人ひとりの児童が積極的に協働学習に参加できるようになっていった、と説明した。

I 教諭は教員同士による協働を深めていくことによって、児童の概念的理解が深まるのではないかと、との実感をもっていた。I 教諭の学校では、食物連鎖とか光合成といった、生態系についての授業を展開した際、授業で取り扱う概念として「システムや構造、ネットワーク、仕組」を設定し、私たちの世界はどのように構成されているのか（How we organize ourselves）を核となる問いを設定したという。ところが、教員によって重きを置く概念が異なったり、「持続可能性」に焦点を当てるばかり、核となる問いに十分に迫れなかった例も経験したという。こうした経験から、教員同士による協働の重要性を実感したとのことであった。

G 教諭は、外国人教員との協働について、日本人教員との文化の違いもあることから、丁寧に対話を重ねる重要性も語った。そして、協働学習の設計にあたっては、教員同士による協働を超えて、学校コミュニティ全体の協働も重要であるとの語りも得られた。H 教諭は、児童と教員のチームワーク、教員と保護者のチームワークが大切と説明した。

(2-3) 教員の気付きと今後の展望

セッションへの参加を通して、日頃の指導と学習について、客観的に振り返る場面が得られたようである。例えば、G 教諭はローカルとグローバルの双方の視点を授業で取り扱うようにしているものの、ローカルの文脈から脱却できていない現状についても気づきも得られたと説明した。加えて、G 教諭は特定概念について、児童がどの程度考えが深められたかどうかを評価する枠組みが弱かったのではないかと、との振り返りもした。F 教諭は、児童同士の協働学習をより耕す必要性に加えて、学部との連携・協働も、ATT の実現をしたいと説明していた。H 教諭は、授業で取り扱うセントラルアイデアについて、児童にとっては難しい言葉で描写されているため、一人ひとりの児童がどのような捉え方をしているのか、理解の深まりはどうか、といった指導上の配慮を行う必要があると振り返った。I 教諭は、セントラルアイデアをどのように授業で取り扱うのか、児童に授業を通して、セントラルアイデアに基づいた授業内容を身に付けさせたり、考えさせたりしたい点が十分に焦点化できていないこともあった点を語った。加えて、拡張させたかった概念についても、教員同士による協働が十分ではなかった点もあったことを語り、授業設計にあたって、教員同士による協働をより深めていく必要性について認識した。

◆グループ3（保育所、非一条校（初等教育段階）、候補校、関心校）実施報告

担当：渋谷真樹
（日本赤十字看護大学）

（1）概要

グループ3では【表2-12】の通り、FGDの手法を用いた調査を実施した。また、調査対象者の属性は【表2-13】の通りである。

【表2-12】グループ3の実施日時と参加者数

セッション名	実施日時	開催方法	参加者数
セッション1	2025年7月28日	オンライン	6名
セッション2	2025年9月17日	オンライン	5名

【表2-13】グループ3調査対象者の属性

名前	校種	主な担当	PYP認定校での経験年数
J 教諭	私立校（初等教育段階）	ディレクター	10年以上
K 教諭	インターナショナルスクール（初等教育段階）	カリキュラムコーディネーター	5年以下
L 保育者	私立保育所	コーディネーター	5年以下
M 教諭	インターナショナルスクール（初等教育段階）	コーディネーター	10年以下
N 教諭	インターナショナルスクール（初等教育段階）	管理職	10年以下
O 教諭	インターナショナルスクール（初等教育段階）	日本語担当	3年以下

（2）セッションを通しての成果と考察

（2-1）ATTの観点に基づく実践傾向と課題

グループ3では、ATTは全てのIBプログラムで言われており、根底になっているものの、PYP教員として特段意識することはないという意見が複数あった。グループ3で多く語られたのは、ATTにもあるように、PYPでは探究的な学びや概念学習が強調されているが、それらを教科の体系的な習得とどのように両立させているのかということであった。教師経験の浅いO教諭は、日本のカリキュラムにあることを学んでいないことや、探究の授業で何を学んでいるのかが一目ではわかりにくいことに保護者が不安をもっていると感じており、PYPは「自由だからこそ難しい」と語った。M教諭は、かつて探究学習を行った際、算数の体系的な学びができていなかったために、展開しにくかった経験を共有した。L保育者は、事前評価などユニットの枠組みに固執すると、目の前の子どもの姿とかみ合わないことがあり得ると言い、むしろ、「子どもの姿」や

「今の子どもたちになってほしい姿とか願い」をベースに授業を計画するようにしていると語った。これらのことは、探究や概念に基づいた指導をしようとすると、教科の基礎知識や順序性を犠牲にしたり、授業計画ありきになってしまったりする不安が生じやすいことを示している。これらに対して、PYP 経験の長い教員は、時には粛々と体系的な学びをすすめることが必要だと語った。PYP は決して教科の体系的性を否定したり軽視したりしているわけではないことを、自分の教職経験から語っていた。

実際に探究や概念に基づいた指導をすすめるにあたり、M 教諭の学校では、POI を教員全員で作成することを目指している。学年会議で UOI をつくり、教科横断的な視点を取り入れながらカリキュラムを作っている。コーディネーターは全てのプランニングの会議に入っている。専科教員とコーディネーターも、週に 1 時間打ち合わせをして、各学年でそのときに行っているテーマやセントラルアイデア、探究の流れ、鍵となる問いに基づくアクティビティー授業などを共有して、どういうところで関連付けられるかを確認している。専科教員の担当する授業は少ないが、それでも、どうやって UOI や POI と関連付けられるかを検討しているという。このように、PYP の手法に沿って、複数の教員が関わりながら計画し、実践していることがわかった。

ATT には「効果的に差別化して教える」ことが挙げられているが、英語力の違いに配慮した指導についても語られた。具体的な授業例としては、Who we are の単元で、クラス担任の外国人教員が主となって、健康的なライフスタイルについて行った探究学習を O 教諭が紹介した。まず外国人教員が、英語で音楽療法や栄養、ヨガなどを取り上げた。しかし、この学校には日本人児童が多く、食物など可視化できるトピックは理解できても、抽象的な概念を英語で理解することは不十分であった。そこで、認知的により踏み込むために、日本人教員が「相互作用」という概念を取り上げ、人間関係について取り扱った。単元計画はクラス担任とコーディネーターが行い、授業が進行する中で児童の反応をみて、日本人教員に協力を依頼した例であった。目標とする認知的なレベルを下げずに、個々の児童の言語力に配慮した試みである。

(2-2) 実践を支える文脈的・制度的条件

グループ 3 は非一条校であったが、児童の大半が日本人であることもあり、私立校（初等教育段階）では日本の学習指導要領や教科書を意識している場合がほとんどだった。たとえば、K 教諭の学校は、「一条校の学校よりは柔軟に授業展開していける」ものの、一条校になることも学校の視野に入っているので、学習指導要領に沿った授業の展開もしているという。また、M 教諭は、学習指導要領をスタンダードベンチマークにしたり、教科書をリソースとして用いたりしている。O 教諭の学校では、外国人の PYP コーディネーターも、学習指導要領に含まれている概念やスキルを気にかけていると言う。グループ 3 では、「学習指導要領ってそもそも大綱的だ」として、カリキュラム・マネジメントの重要性を指摘する意見が複数あった。

単元設計においては、専科教員とクラス担任との協働の難しさが、複数の教師によって語られた。多くの学校では、クラス担任と PYP コーディネーターが中心になってユニットプランナーを作成しており、専科教員は従属的になりがちである。M 教諭は、本来は、全ての教員が POI（の作成）に関わり、教科横断的に展開していくのが理想だが、学年を通して学びをみている専科教

員が十分に力を発揮していないのが「もったいない」と感じている。そのような中で、J 教諭は、コーディネーターが目を配り、他の教諭と一緒に授業計画を楽しむマインドセットを広げていく重要性を語り、専科教員を盛り立てながら授業計画を立てる方法を試みていると話してくれた。

一方、L 保育者は、保育所ならではの難しさを語った。たとえば、就学前機関では、担任がすべての教育を担う点で小学校段階とは異なっている上に、教員が協働で授業計画を練る時間的余裕がない。また、衛生や安全など、行政の要請が多いため、PYP ならではの活動がしにくいということであった。

(2-3) 教員の気付きと今後の展望

PYP の学びを設計したり、教師間で協働したりするためには、オンライン上にプラットフォームがあると便利だという意見が複数あった。J 教諭の学校では、ドキュメントをドライブで共有し、短時間で教員が協働できる環境を整えている。M 教諭は、ティーチャー・エージェンシーが叫ばれているが、最初から個々の教員に任せきりよりも、「最初は型を作るほうが先生たちも分かりやすい」と考えている。ユニットプランナーの作成に苦戦する教員や、プランナーが最後まで書き切れなくても黙認する管理職がいる。そこで、ベンチマークやスタンダードのような「頼るところ」を据えた上で、スケジュールや手順を示すとプランナー作成の経験の少ない教員にも役立つ。教師の異動に関わらず、学校として教育の質を担保するためにも、managebac（注 8）などが導入されるとよいという意見があった。

なお、この話し合いの最後には、経験の浅い教員が「もっと私も柔軟にしていいたなっていうのをすごい自信になりました」と語るなど、教師同士の学び合いがあり、一定の効果があつたと予想される。

⑧総合考察

本節では、第一段階で分析された内容を統合して再度分析をし、考察を行う。その際、一条校の教員によって構成されているグループ 1（低学年）・2（高学年）を主分析対象とし、グループ 3（他校種）を参照しながら考察を行う。また、本節では RQ1 の記述から RQ2 を抽出し、そのちに RQ3 である学び合いの寄与について検討する。

(1) ATT6 原則にみる実践の具体化と成立条件（主分析：グループ 1・2）【RQ1+RQ2】

ここでは、一条校の小学校教員のグループ 1・2 における FGD で得られた語りをもとに、ATT の 6 つの観点に照らした PYP 教員たちの実践の様相を整理する。総じて、参加した教員たちは ATT のそれぞれの観点を単独に実践に活かすのではなく、複数の観点が関連し合ったものと捉えていることが明らかになった。とりわけ【探究】と【概念】が実践の中核として頻繁に語られ、【協働】と【評価】はそれを支持するものとして語られていた。一方、【文脈】と【障壁の除去】は相対的に語りが少なく、言語化と共有の難しさが示唆された。

(1-1) 探究を基盤とした指導（【探究】）

PYP のカリキュラムが POI を中心に構成されていることから、参加したすべての教員が探究を基盤とした指導を実施していた。語りからは、探究を「児童同士が学び合う」「省察しながら進む」「目的地（探究の方向性）を見失わない」「エージェンシーが発揮される」ものとして成立させようとする志向が共通して見られた。

実践の実際としては、指示用語の明確化（共有言語）、教師の介入の削減、学習過程の可視化（教室環境・記録・共有の仕組み）、PYP が重視する「児童の声・選択・学びの主体性（voice, choice, ownership）（⇒【表 2-14】）」を活かす手立てが挙げられた。加えて【概念】の観点と同時に働かせることで、探究の方向性が定まり深い学びへ移行しやすいという語りもあった。

一方で、つまりきとして、「探究＝自由」と誤解され、問いや活動が拡散して迷走しうる危うさも指摘された。

したがって【探究】の阻害・促進条件としては、探究が深まっている児童の姿の共有や、教員・児童が用いる共通言語の存在や共有の仕組み、さらには教員が協働で行う省察の機会の創出が関与していることがうかがえる。

（1-2） 概念的理解に重点を置いた指導（【概念】）

本観点は、全体を通してもっとも多く言及がなされたことから、参加した教員たちの間で特に関心の高い観点であり、また試行錯誤が重ねられている部分であることがうかがえる。概念的理解に重点を置いた指導は、他の 5 つの観点と比べて学習指導要領に類似の内容が存在しない部分でもあり、最も PYP らしい部分でもある。

実践の実際としては、PYP の定める特定概念を学習指導要領における「見方・考え方」と捉えたり、探究の方向性を決めるレンズとして用いたり、また思考ツールを用いて概念を整理したりといった多様な方略が語られた。さらに概念を知識として教えた上でユニットの学びを進める手法、概念的理解が多様な探究プロセスをつなげ、議論を深める装置になるという捉えも示された。

一方で、PYP における概念といった場合、特定概念、付加概念、セントラルアイデア、概念的理解といった用語があり、また一口に概念と言っても抽象度に幅があるため、どの階層の概念を指すのか混乱しやすいとの語りもあった。概念を基にした学びを授業計画に組み込むことへの困難さに直面しているとの語りもあり、概念に関する理解が深められるような手立てが課題となっている。

したがって【概念】の阻害・促進条件としては、用語の共通理解と概念の階層の整理、単元設計を協働で行う時間の確保、概念的理解の見とりと評価の観点の共有が考えられる。

（1-3） ローカルな文脈とグローバルな文脈を反映した指導（【文脈】）

本観点に関しては、相対的に発言が少なかった。得られた語りは、「ローカルの文脈から脱却できていない現状についても気づきが得られた」という省察的なものであった。

この「語りの少なさ」自体が結果であり、少なくとも以下の複数の可能性が考えられる。第一に、地域に根差した学習や国際的視点の導入は一般的な一条校でも一定程度行われており、教員にとっては既に内在化しているため問題化されにくい可能性がある点である。第二に、PYP らし

さが際立つ【概念】に意識が集中し、【文脈】が相対的に意識されにくい可能性である。第三に、「グローバルな文脈を反映する」とはどの程度の実践を指すのかが学校内で十分に言語化・共有されておらず、語りにくい可能性もある。

したがって、促進・阻害条件に向けては、グローバルな文脈を反映した実践に関する理解度を高める校内での意識化やそのための対話が論点となると考えられる。

(1-4) 効果的なチームワークと協働を重視する指導（【協働】）

本観点は特にグループ 2 で多く語られ、協働を通じて児童のエージェンシーが育まれること、リサーチスキル等を含む ATL の向上を仕組むことが実践の意図として示された。

実践の実際としては、個人学習・ペア・グループの選択を児童に委ね、なぜペアで行うのか（テーマの類似性等）を教員に説明し、説得させる手法が紹介された。これは協働を単なる形態ではなく、学びの目的に結びついた意思決定として位置づける工夫である。

一方で、協働は目的の伴わないグルーピングといった学習形態の変更に留まると形骸化しやすく、つまずきとして、目的・役割・評価の観点が曖昧なまま活動が進む危険もはらんでいる。

このため、促進・阻害条件として、協働の目的と成功基準の明確化、児童相互の支援的な学級文化を支える継続的な指導、協働を支える時間割・学習環境の整備が重要となると考えられる。

(1-5) 学習への障壁を取り除いた指導（【障壁の除去】）

本観点も、どのように実践に取り入れているかの語りが相対的に少なかった。そのため、PYP 教員らが実践に取り入れることが難しく感じている可能性が示唆された。「児童が興味をもったことに取り組めるような環境を整える」といった語りは見られたが、読字の困難さなどの障壁を除いた実践をいかに行うかに関しては、課題が多く残っていると考えられる。ここで注意すべきは、PYP における【障壁の除去】が、日本で近年多く語られている「個別最適化」と同義でなく、参加可能性・アクセス・アイデンティティの肯定といったより広い概念として理解されるべき点である。

したがって、促進・阻害条件として、「障壁」を学習者側の不足ではなく環境・教材・評価といった教員側の設計課題として捉える校内での共通理解、合理的配慮や支援体制との接続、学びのユニバーサルデザイン（Universal Design for Learning: UDL）等の枠組みを参照した具体化が、今後の実践を支える論点となる。

(1-6) 評価を取り入れた指導（【評価】）

本観点に関しては、グループ 2 を中心に、形成的評価に関する語りが多かった。実践の実際として、振り返りの機会を多く設け、児童一人ひとりの理解や思考の深まりを探究プロセスの中でモニターしながら学習を進めていることが語られた。

その反面、自己評価の機会は設けているが、深みのある教師側からの評価が提供できていないといった問題も存在していることが語られた。

このことから促進・阻害条件として、形成的評価を支える観点・成功基準の共有、フィードバックの質を高める校内研修と協働の省察が重要であることが考えられる。

(1-7) 学年段階による傾向の差

ここでは、グループ1（低学年）とグループ2（高学年）の間における傾向の差について整理する。低学年では、学びを支える手立てとして、「具体化」「可視化」「方向づけ」に関する語りがより強く表れていた。具体的には、概念の形成を具体化するプレイヤーモデルといった思考ツールを用いるものの、概念的理解には一定の限界があるとの語りが見られた。また探究プロセスの可視化のために「インクワイアリー・ウォール」で省察を促す方略が示された。また探究が迷走しやすいことから、方向づけの必要性が語られた。

高学年では自己調整のための「意思決定」「協働」「相互評価（フィードバック）」の比重が高まることが語りから示唆された。具体的には、エージェンシーの焦点が、学習の選択や意思決定のための言語化へと移っている様子がうかがえた。また、振り返りや級友からのフィードバックの重要性が語られ、協働と評価が学習の推進力として機能している点が示された。

このことより、低学年では探究を成立させるための支援（具体化・可視化・方向づけ）が相対的に求められ、高学年では学習者の自己調整を促す設計（意思決定・協働・相互評価）がより重要になるという学年段階に応じた差異が見出された。

(2) ATT6 原則にみる実践の具体化と成立条件（参照分析：グループ3）【RQ1+RQ2】

ここでは、グループ3におけるFGDからの語りをもとに、一条校と比較しながらATTの実践の現れ方を整理する。

まず、参加した教員らからは「ATTはIB全体で言われており、根底になっているものの、PYP教員として特段意識することはない」との語りが複数あった。これは、グループ1・2ではあまり見られなかった語りであるが、グループ3では経験の長いPYP教員たちから語られた。したがって、ATTが実践に取り込むべき原則であるというよりは、すでに実践の前提として内在化している可能性が示唆された。

次に、制度への接続における差異が見られた。グループ3におけるインターナショナルスクール（初等教育段階）は、一条校でないことから学習指導要領に基づく学習を提供する義務を負わない。しかし、児童の大半が日本人であることを背景に、学習指導要領や教科書を意識した学習を展開し、「ベンチマーク」として扱っているとの語りも見られた。一方で、学習指導要領の内容に関する制約はないことから、より柔軟にPYPのカリキュラム展開できるという利点も語られた。しかし、経験の浅い教員からは「自由であるからこそ難しい」との語りも見られ、自由度の高さが設計上の困難さとして立ち現れる側面も示唆された。また、このことから照射されるのは、一条校において、学習指導要領や教科書を意識した学習の在り方が、【探究】において自由度を阻害する可能性があるという点である。

また、【探究】や【概念】に基づく学びと、一条校で実践されているような教科の体系性（基礎知識の積み上げや学習の順序性）をどのように両立させるかに関する不安や工夫が語られた。

具体的には、教科の体系的な学びの基礎が十分でないために学習が進めにくいこと、探究や概念的理解を重視する結果、教科の基礎知識の積み上げや順序性を犠牲にした授業の計画を余儀なくされる感覚も共有された。他方で PYP 経験の長い教員からは、PYP が教科の体系性を否定したり軽視したりするものではなく、必要に応じて系統的な学びを位置づけることが重要であるという見方も示された。

インターナショナルスクール（初等教育段階）では、言語多様性への配慮が常に必須となり、【障壁の除去】の具体化が実践上の課題として現れていた。具体的には、【障壁の除去】に取り組みながらも、認知的水準を落とさない実践の工夫が語られた。

以上より、グループ 3 における ATT の実践の促進・阻害条件に関しては、一条校とは異なる「学習指導要領に対する自由度」と「その自由度がもたらす設計上の難しさ」、さらに「教科体系性との両立」や「言語多様性への配慮」といった点が挙げられる。また、ATT を特段意識していないという語りは、ATT が実践の前提として内在化していることを示す可能性があり、熟達という良さを生み出す反面、言語化・共有化への課題が生じうると考えられる。

（３）学び合いの相互作用と変容【RQ3】

学び合いにおける相互作用は、参加者が自校の実践を相対化し、省察を深める契機となった。異なる学校の実践を言語化して共有する過程で、ローカルな文脈に偏り過ぎていた可能性や、セントラルアイデアの理解・概念の焦点化の不足など、ATT 実践上の課題が客観的に捉え直されていた。

また、対話は指導観、とくに評価観の更新にもつながった。とりわけ、概念的理解や思考の深まりをどのように見とるかという評価の枠組みが課題として自覚され、形成的評価やフィードバックを設計の中心に位置づけ直す視点が共有された。さらに、他校のツールや手法は単なる参照にとどまらず、自校の条件に合わせて再構成し、実践をアップデートしようとする意欲を促している様子を見とることができた。

加えて、児童の協働を促進するためには、教員同士の協働に加えて、教師の役割を「知識の伝達者」から「学びの見取りと支援（フィードバック）の担い手」へ捉え直す視点も示された。

これらにより、学び合いは ATT に関する教員の省察を深め、一定程度、実践の改善に寄与したと考えることができる。

（４）小括—一条校における ATT の定着と内在化に向けて

以上のように、ATT は初期段階では意識的・明示的に参照され、実践の中に活かされていくが、グループ 3 で見られたように協働と熟達を通し、実践の前提として内在化していく可能性が見いだされた。そのため、校内での共有においては、ATT を適切に言語化し、共通理解として明確化していくことが重要であると考えられる。とりわけ一条校においては、学習指導要領および教科の体系性との接続の必要性が ATT の実践を意識化させる促進要因になる一方、一条校ではないインターナショナルスクールとは異なり授業時間の縛りや授業の系統性への意識が強い場合には、探究や概念を核とした学びの実践の阻害要因にもなりうるということが明らかになった。加えて、校内

における教員間の共通理解・協働の程度や時間的保障、児童への支援体制、さらには学年段階に応じた手立ての違いが、ATT の各観点の実践の現れ方に影響を及ぼしていた。

したがって、ATT を実践として定着させるためには、個人の工夫に任せるだけでなく、校内の条件を整えることが不可欠である。具体的には、校内における共通理解と協働体制、児童への支援体制、学年段階に応じた手立てといった条件を、学校の実情に即して設計・運用していく必要がある。

さらに学び合いは、ATT を言語化することで自身や自校の実践を相対化し、ATT に関する実践知を更新するプロセスを促進したと考えられる。一方で、ATT が内在化することは熟達の指標である反面、暗黙知化を招き、経験の浅い PYP 教員への継承が難しくなる恐れもある。そのため、ATT を定期的に言語化したり、協働で省察したりする機会が必要と思われる。

⑨おわりに

本報告では、PYP 教員が日々の実践の中で行っている判断・工夫・葛藤を、PYP 教員同士の対話（FGD）を通して言語化・共有する学び合いの機会を創出し、それによって ATT という共通の指導原則をいかに具現しているのかを検討した。その結果、それぞれの学校の文脈や学年が異なる中でも、ATT という共通言語を手掛かりに、PYP 教員たちはそれぞれの解釈と工夫をもとに、探究、概念、協働、評価等を組み合わせながら実践を行っていることが明らかになった。特に非一条校との比較からは、一条校が制度的制約の中で ATT を実践の中に位置づけ、活かそうとしている様相が相対的に浮かび上がった。

今後は、このような学び合いの機会を継続的に創出することにより、PYP 教員同士が実践を言語化し相対化するプロセスを重ねていくことで、実践知を更新していくことが期待される。さらに本報告の知見が、PYP 教員のみならず、探究的な学びや概念的な学びを基盤とした学びづくりに取り組む日本の教員たちにとっても示唆を与えるものとなれば幸いである。

◆謝辞

調査にご協力くださった PYP 教員の先生方に心より感謝申し上げます。

◆引用文献一覧

Greenbaum, T. L. (2000). Moderating Focus Groups: A Practical Guide for Group Facilitation. SAGE Publications.

IBO (2019) 「国際バカロレア (IB) の教育とは」

Morgan, D. L. (1997). Focus Groups as Qualitative Research. [2nd ed.]. SAGE Publications.

【表 2-14】PYP 関連用語一覧

IB の学習者像 IB Learner Profile	IB の学習者が、IB を通して培う人間性を示したものの。以下の 10 の要素から成る。 探究する人 (Inquirers) 知識のある人 (Knowledgeable)
--------------------------------	---

	考える人 (Thinkers) コミュニケーションができる人 (Communicators) 信念をもつ人 (Principled) 心を開く人 (Open-minded) 思いやりのある人 (Caring) 挑戦する人 (Risk-takers) バランスのとれた人 (Balanced) 振り返りができる人 (Reflective) 現場では「10の学習者像」が用いられることもある。
学習のアプローチ Approaches to Learning (ATL) スキル	IB の全プログラムで掲げられる学習者が身に着けることが目指されるスキルのこと。以下の 5 つのスキルから成る。 思考スキル (Thinking skills) リサーチスキル (Research skills) コミュニケーションスキル (Communication skills) 社会性スキル (Social skills) 自己管理スキル (Self-management skills)
児童の声・選択・学びの主体性 Voice, Choice, Ownership	学習者のエージェンシーを支える 3 つのキーワード。学習者は学習において自ら声 (voice) を発し、選択 (choice) を行い、主体性 (ownership) を発揮することで、自己効力感が育まれると共に意味のある探究が可能となるとされる。
ピーオーアイ Programme of Inquiry (POI)	POI は、PYP のカリキュラムにおいて「教科の枠をこえたテーマ」を、いつ、どの ように探究するかを大まかに示した学年横断的な概観のこと。PYP のカリキュラム設計そのものとほぼ同義で用いられることもある。
ユーオーアイ Unit of Inquiry (UOI)	POI における、探究のユニットのこと。UOI の設計には、「中心的アイデア」、「概念」、「探究の流れ」が含まれる。現場では、教科の名前のような使われ方もする。
ユニットプランナー (単元計画) Unit Planner	単元の計画や指導案を記したもの。PYP では、1 年間に 6 つの教科の枠をこえたテーマ (教科横断的なテーマ) に基づいて 6 つのユニットを学習する。ユニットプランナーはこのユニットごとに教員らが協働しながら作成する。単に「プランナー」と呼ばれることもある。
ユニット (単元) Unit	単元を意味する。文脈によっては、UOI を指して用いる場合もある。また、ユニットプランナーと同義で用いられる場合もある。

特定概念 Specified Concept	概念的理解を支える概念レンズであり、PYP では以下の 7 つが特定されている。すなわち「特徴」「原因」「機能」「変化」「関連」「視点」「責任」である。 ※カリキュラム改訂前は、特定概念をキーコンセプト（重要概念）と呼んでいた。実態として、現在も習慣で「キーコンセプト（重要概念）」を使用する PYP 教員も多くいる。
教科の枠をこえたテーマ Transdisciplinary Theme	POI を構成する普遍的なテーマ。教科の枠をこえたテーマであり、地域の課題やグローバルな課題に批判的に取り組むための出発点となる。以下の 6 つのテーマから成る。 「私たちは誰なのか」 Who we are 「私たちはどのような場所と時代にいるのか」 Where we are in place and time 「私たちはどのように自分を表現するのか」 How we express ourselves 「世界はどのような仕組みになっているのか」 How the world works 「私たちは自分たちをどう組織しているのか」 How we organize ourselves 「この地球を共有すること」 Sharing the planet
セントラルアイデア （中心的アイデア） Central Idea	UOI の核となる一般化された概念的理解を表した一文。この一文が児童の探究を促し、概念的理解を支えるための構造を教師にもたらす。中心的アイデアは中立的、普遍的でオープンエンドな一文である。
探究の流れ Line of Inquiry	各 UOI において、中心的アイデアの理解を発展させるために、探究の範囲と焦点を与える道筋のこと。中心的アイデアを 3～4 本にかみ砕いた文。探究の流れは、中心的アイデアを明確化し、相互に関連しながら理解を支えるよう設計する。
エキシビション Exhibition	PYP 最終学年に行われる集大成としての探究プロジェクトのこと。学習者が取り組んできた調査や学びを共有する機会となる。
IB エクスチェンジ IB Exchange	IBO が管理運営するオンライン上の専門的な学習コミュニティ。教材や情報の交換が行われている。
マネジバック ManageBac	子どもたちの学びを支える学習プラットフォーム。世界中の多くの IB 校で採用されている。

①研究背景と目的

教育改革やグローバル化を背景に IB は世界的に拡大し、日本でも 2026 年 2 月時点で公立の認定校は 23 校を超えた。その結果、IB 校での経験を持つ教員が一般公立校へ異動する例も増えているが、その経験が一般校の教育実践にどのような影響を与えるかは十分に明らかになっていない。

IB は、探究型・概念重視・国際志向の教育観を掲げ、教員の専門性にも影響を与えるとされ、Lee et al. (2022) は、IB 教師が non-IB 教員より多文化教室での自己効力感が高く、生徒中心・構成主義的実践に関与しやすいと報告しており、IB 経験が教育実践の移転可能性を考える上でも重要である。

したがって本研究では、IB 校で DP 指導経験を有する教員に着目し、異動後の公立一般校の教員の実践にどのように波及しているか、またその限界・緊張関係も明らかにすることを目的とする。この目的を達成するために以下の通りリサーチクエスチョン (Research Question: 以下、RQ) を設定した。

RQ1: 公立 IB 校での教育経験を持つ教員は、non-IB 公立校での授業実践やカリキュラム設計において、どのように IB の教育理念・指導法を活用し、再構成しているのか。また、応用の課題はどのようなものがあるか。

以上のように、IB 校から異動した教員の語りを通じて、IB 実践が日本の公立学校においてどのように移転・適応されているかを明らかにすることは、IB の普及だけでなく、より広く公教育変革の可能性を考える上でも意義深い。

②研究方法

本研究は、IB 指導経験を持つ 5 名の教員 (教員 A~E) を対象に、半構造化インタビューを実施・録音した。参加者は、公立高等学校に在籍し、国際バカロレア DP プログラムの立ち上げに関わった。異動後はいずれも non-IB の公立高校で勤務しており、IB での経験をどのように異動先の学校で活用しているかを語ってもらった。どの教員も IB 校から直接現任校へ異動しており、参加者の IB 教員経験年数は 4 年または 5 年で、性別や教科に偏りがないよう配慮した。

録音したデータの文字起こしを行い、テーマ分析 (Braun & Clarke, 2006) を採用してカテゴリ生成及び再文脈化を行った。本稿では、IB 経験による教員の専門的成長、経験の異動先における指導場面での活用、教員同士の関わりに絞って議論を行う。

③分析と結果

IB 経験による教員の専門的成長について、教員 A (外国語) は、IB 校での経験が大学の 4 年間の留学よりもスキルのなところが明らかに伸びたと語り、IB 経験による自己の専門的成長を強

調した。また IB のクライテリアのおかげで評価が整理され、マークバンドごとに切り離して考えるという客観的な評価手法の獲得を重要な成長点として位置づけた。また、教員 B (国語) は、教科書の内容を全部やらなきゃいけないという固定観念から脱却し、目標を達成するためにどの教材を使い、どの活動をするかを組み合わせるという目的志向的な教材活用の視点について語った。教員 E (地理歴史) も、自分の頭がすごく良くなった感じがあると語り、知的成長を実感している。

これらの経験の異動先における指導場面での活用について、教員 A (外国語) は、異動先で使用する教科書がトピックベースで狭いトピックであることに違和感を感じ、RQ を設定し、その探究過程を通して英語スキルを育成する指導を実践している。教科書を使用しながらも、オリジナルで RQ を立てさせ、それに応えさせる流れで構成し IB のような授業の流れにアレンジしていると述べた。また、教員 E (地理歴史) は、地理の授業において「知識の習得をさせて、その後問いを提示して、探究させ、ホワイトボードに書かせ発表させるという流れを組み込み、探究を授業サイクルに統合している。さらに教員 D (外国語) は、IB のコアで培われた「研究のあり方」や「問いの立て方」といった、探究の基礎となる概念が現在の授業で役立っていることを確認しており、IB の手法が学習活動の根本的な授業構成に貢献していることが示された。

教員同士の関わりについても IB 経験の波及がみられた。教員 E (地理歴史) は、IB の協働設計を参考にしているかもしれないと述べ、授業の進捗や抱えている困難について他の教員と打ち合わせを行うことで、教員間のコミュニケーションを活性化させ、評価のあり方について議論をするなど本質的な議論を行うことができる場を設けていた。また教員 C (理科) は、共通のパフォーマンステストを実施する際、多くの生徒を評価する中で、評価の感覚の共通化を図るなど、教員間の協働がモデレーション (評価の調整) の実施に結びついている事例を示した。

一方で、応用が困難だったという語りも得られた。例えば、生徒間で協働的な学びを促そうとすることで、他者にコメントできない生徒が多いため、ピアリーディングが成り立ちにくい状況 (教員 A: 外国語) や、IB で使われるルーブリックなどの評価基準について習慣だとか、いい加減だと捉えられてしまうという課題を報告した (教員 B: 国語)。

本研究は、IB 校での DP 指導経験を持つ教員が、異動後の非 IB 公立校においてどのように IB 的实践を再構成し、学校文化に波及させているかを明らかにした。その結果、IB 経験は単なる授業技法の移転ではなく、省察的対話や協働的設計を通じて教育実践を再構成する契機として機能していることが示された。

一方で、異動先の学校の環境や同僚との関わりの中で、IB の教育手法が活かしにくい状況も想定される。今後の研究では、こうした教育手法の波及に伴う困難にも着目し、どのような場合に教育手法の共有がされるかについて事例から検討を進める必要があると考えられる。

文献

Lee, M., Mo, Y., Wright, E., Lin, W., Kim, J. W., Bellibas, M., Faigen, B., Gumus, S., Ryoo, J. H., & Tarc, P. (2022). *Decoding the IB teacher professional: A comparative study of Australia, Canada, China, Denmark, South Korea, Taiwan, Turkey and the United States*. IBO.

Braun, V., & Clarke, V. (2006) . Using thematic analysis in psychology. *Qualitative Research in Psychology*, 3 (2) , 77–101.

4) EMI 調査の報告

[文責：木村]

①研究背景と目的

日本では近年、IB の導入が進み、特に文部科学省が推進するデュアル・ランゲージ・ディプロマ・プログラム (DLDP) を通じて、公立高校においても EMI の実践が広がっている。DLDP では 6 教科群のうち少なくとも 2 科目を英語で履修することが求められ、日本語を第一言語とする生徒にとって、教科内容と外国語学習を同時に行うという新しい学習環境が生まれている。本報告書は、下記の Kimura & Umetsu (2025) による質的研究をもとに、日本の IB 校における EMI の実態と、教師がどのような指導戦略を用いているのかを、日本語読者向けに整理・報告することを目的とする。

Kimura, M. & Umetsu, S. (2025). Teachers' strategies for English-medium instruction in International Baccalaureate schools: An analysis of the diploma programme in Japan. *International Education Journal: Comparative Perspectives*, 24 (2), 19-36.
<https://doi.org/10.70830/iejcp.2402.21026>

本報告書の一部は、上記の論文の内容を日本語に翻訳して引用した箇所が含まれる。これらの翻訳掲載については、当該論文の編集部および共著者の許諾を得ている。本報告書は非営利の研究報告を目的とし、原著論文を代替するものではない。

②研究方法

研究では、日本の公立 IB 校 3 校に勤務する 17 名の教師を対象に、半構造化インタビューが実施された。対象教科は英語、数学、理科、芸術、地理など多岐にわたり、教員の国籍や言語背景も多様であった。インタビューは各 30 分程度で行われ、収集された語りは Williams & Moser (2019) の three-step coding を用いて質的に分析された。

③結果

3.1 日本語と英語の併用（トランスランゲージング）

ある教師は、英語のみで授業を行うのではなく、日本語と英語を柔軟に使い分ける指導を行っていた。例えば数学教師の一人は次のように述べている。

「生徒は日本語では内容を理解できているが、それを英語で説明する表現が難しいことが多い。だから最初は日本語で考えさせてから、英語に変換させるようにしている。」(Kimura & Umetsu, 2025 より翻訳)

このような実践は、理解そのものを日本語で支えつつ、アウトプットを英語で促すという戦略であり、教師側も「完璧な英語」より「意味が通じる英語」を重視する姿勢へと変化していた。

3.2 教科特性による EMI の違い

研究では、EMI のあり方は教科によって大きく異なることが示された。英語や芸術などの言語・表現系科目では、テキスト理解やディスカッション、表現活動が学習の中心となる一方で、

教師は生徒の文化的背景や語彙理解に特に注意を払っていた。英語教師の一人は次のように語っている。

「アメリカの文化的な話題が出てくると、生徒は内容には興味を持つのですが、文化的背景が分からず理解が止まってしまうことがあります。そこで、日本の若者文化の例に置き換えて説明するようにしています。」(Kimura & Umetsu, 2025 より翻訳)

また、芸術科の教師は、英語での表現活動において句読点やレポートの構成など、言語形式そのものの指導が必要になると指摘している。このように、言語・表現系科目では、英語能力そのものが学習対象と深く結びついており、文化理解や言語形式の指導が教科内容と不可分の要素として位置づけられている事例が抽出された。

一方で、理科や数学などの非言語系科目では、英語による読解よりも、概念的理解や問題解決そのものが学習の中心となる傾向が強かった。特に理科では、専門用語や抽象概念の理解において、生徒が英語表現よりも内容理解そのものにつまずく場面が多く、理科教師の一人は次のように述べている。

「英語は話せる生徒でも、理科の内容になると、簡単な文章でも意味を取り違えてしまうことがあります。英語というより、理科の概念そのものが難しいのだと思います。」(Kimura & Umetsu, 2025 より翻訳)

この語りは、理科における EMI の困難さが単なる言語能力の問題ではなく、教科特有の認知的負荷と深く関係していることを示唆している。

3.3 教師自身の専門性の変化

EMI は生徒だけでなく、教師自身の専門性にも影響を与えていた。複数の教師が「英語で教えることで、説明の論理性を意識するようになった」と述べている。ある教師は以下のように振り返っている。

「英語で教えるようになってから、自分の説明が本当に論理的かどうかをより意識するようになった。日本語だと曖昧にできていた部分が、英語ではごまかせない。」(Kimura & Umetsu, 2025 より翻訳)

この語りは、EMI が単なる言語切替ではなく、教師の思考様式や授業設計そのものを変える契機になっていることを示している。

3.4 教師間の協働と EMI 実践の調整

本研究では、EMI の実践が個々の教師の努力だけでなく、教師間の協働によって支えられていることも明らかになった。特に、日本人教師と英語を母語または第二言語とする外国人教師との協働は、授業内容の調整や言語使用の工夫において重要な役割を果たしていた。

ある数学教師は、英語を母語とする同僚教師との協働について次のように述べている。

「ネイティブの先生が使う英語表現は、教科書とは違う自然な言い方が多く、とても参考になります。一方で、私は日本の生徒がどこでつまずきやすいかをよく知っているのも、そこを補い合っています。」(Kimura & Umetsu, 2025 より翻訳)

この語りは、EMI の実践が単に「英語ができる教師」に依存するものではなく、異なる専門性や経験をもつ教師同士の相互補完的な関係によって成立していることを示している。日本人教師は教科内容の構造や学習上の困難点に精通しており、外国人教師は自然な英語表現や質問技法に強みをもつ。このような役割分担を通じて、EMI 授業は言語面と内容面の両方において調整されていた。

また、外国人教師側も、日本人教師の指導法から学ぶ点が多いことを指摘している。英語を母語とする教師は、日本人教師の「段階的な説明」や「視覚的支援」の活用を通じて、生徒の理解を支える方法を学んだと述べている。このように、EMI は一方向的な言語支援ではなく、教師同士の相互学習を通じて発展する実践であることが示唆された。

④日本の教育政策への示唆

本研究の知見は、日本における英語教育政策や IB 推進政策に対して重要な示唆を与える。特に、EMI を「英語で行う教育」と単純に理解するのではなく、日本語を含めた複言語的实践として捉える必要性が示された点は重要である。教師の語りからは、英語と日本語を柔軟に使い分けることが、生徒の理解を支えるだけでなく、学習への参加意欲や心理的安全性の確保にも寄与していることが明らかになった。

また、本研究は、EMI が生徒だけでなく教師自身の専門性や授業観にも影響を与えている点を明らかにした。英語で教える経験を通して、教師は自身の説明の論理性や授業構成を再省察し、より明確で構造化された指導を志向するようになる傾向が見られた。このことは、EMI が単なる言語の切替ではなく、教師のメタ認知的成長や専門性の再構築とも深く関係していることを示している。

一方で、本研究は質的調査に基づく限られたサンプルを対象としており、教科間の差異や学校間の制度的条件については、より広範なデータによる検証が今後の課題として残されている。今後は、異なる地域や国の IB 校を対象とした比較研究を通じて、EMI の実践がどのように文化的・制度的文脈の中で調整・再構成されているのかを、国際的視点から検討していく必要がある。

2-3. 大学調査

大学調査（大学及び修了生を対象とした調査）では、「①大学調査」及び「②修了生調査」を行う。なお、「1-1. 業務の概要」の「2）業務の内容」で述べた通り、「①大学調査」の質問紙調査による部分については、「基礎調査（大学調査）」として位置づけたため、「2-5. 基礎調査（大学調査）」において報告する。

◆大学及び修了生を対象とした調査（大学調査）

①大学調査…日本の大学での IB を活用した入試に関する実態調査を行う。

i) IB を活用した入学者選抜の形態・方法に関する調査

ii) IB を活用した入学者選抜の要件に関する調査

iii) IB を活用した入学者選抜の出願時期・入試時期・国内・国外別の出願状況に関する調査

②修了生調査…IB 校卒業後の大学での学びやその後の進路を明らかにする。

i) IB 修了生の大学入学後の学びの実態

ii) IB 修了生の大学卒業後の進路

1) 調査の概要

(1) 調査の目的

本調査の目的は、今日の日本における国際バカロレア（以下、IB）を活用した入試の現状と課題、そして IB 修了生の大学入学後及び卒業後の進路状況を明らかにすることである。それにより、今後 IB を活用した入試の導入を検討している大学や現在実施している大学での入試のさらなる改善への示唆を得ることができる。また、IB 修了生の大学入学後の学習パフォーマンス及び卒業後の進路等を明らかにすることで、日本における IB 教育の効果を検証するための基礎的なデータを示すことができるといえる。

(2) 問題の所在

文部科学省は、2023 年 3 月 28 日に、国際バカロレア（IB）認定校が、今後認定校になる予定の候補校を含めて、207 校（2023 年 3 月 14 日時点）になったことを発表している（2025 年 9 月現在：271 校）。これにより、同省が掲げていた「2022 年度中に 200 校以上」という推進目標を達成したのである。これは、現在（2026 年 1 月）のイギリスにおける 128 校（前年度から－7 校▼）、ドイツにおける 78 校（昨年度から－4 校▼）、スイスにおける 52 校（昨年度から－2 校▼）やフランスにおける 25 校（昨年度から＋1 校△）等、欧州の主要国と比較しても、非常に多くの認定校数を有していることが分かる。

このように、日本国内における IB 校数の拡大に伴い、問題となってくるのが、これらの IB 校を卒業し、国内の大学進学を希望する IB 修了生の大学入学者選抜である。従来、IB は国境を越

えて提供されてきた国際教育資格及び大学入学資格であったものの、近年の日本における状況を含め、世界各国においても国内の IB 校を卒業し、国内の大学に進学する「国境を越えない IB 修了生」といった現象が見られるようになってきている（花井：2016）。日本においても、これまで IB 資格は、海外からの帰国生が取得する資格として、帰国生入試等で取り扱われてきた。しかし、先述のように、国内における IB 校数の拡大に伴い、今後これらの学校を卒業した IB 修了生の選抜や受け入れ体制の整備は、国内大学にとっては喫緊の課題であるといえる。2026 年 2 月現在、日本国内において IB 資格を活用した入試を実施している大学は、本調査で把握している限り 82 大学であり、まだまだ少ない状況である。

そこで、本研究では、国内における IB を活用した入試を実施している大学での実施状況、導入背景やプロセス、選抜方法、課題等について明らかにすることで、今後 IB を活用した入試を導入する際の示唆を得たいと考えている。

また、IB 資格を取得した生徒の大学入学後の学習パフォーマンスやその後の進路を含めた、IB 修了生調査を実施することで、IB の効果を検証するための一つの指標を得ることができると考えている。

（3）研究課題

以上の点を踏まえ、本調査研究では、以下の 2 つの研究課題を設定した。

研究課題①：大学調査

- i) IB を活用した入学者選抜の形態・方法に関する調査
- ii) IB を活用した入学者選抜の要件に関する調査
- iii) IB を活用した入学者選抜の出願時期・入試時期・国内・国外別の出願状況に関する調査

研究課題②：修了生調査

- i) IB 修了生の大学入学後の学びの実態
- ii) IB 修了生の大学卒業後の進路

（4）調査方法

本研究では、主に半構造化インタビュー調査（今年度はすべてオンライン実施）を通じて、IB を活用した入試を実施している大学における当該入試の導入背景、プロセス、選抜方法や課題等を明らかにする。

（5）調査スケジュール

2025 年度は、主に大学調査を中心に実施した。まず、昨年度に行った 4 大学へのインタビュー調査に引き続き、今年度は 2 大学（後述する）に対して、半構造化インタビューを実施した。なお、修了生調査については、本年度より進めている。

（6）インタビュー調査項目

本調査研究では、インタビュー調査の項目として、以下の項目を設定した。なお、インタビュー項目については、昨年度と同様である。

調査項目

- ・ IB 入試の導入背景、目的、いつ頃から検討を始めて、どのように導入されたのか？
- ・ 導入にあたって苦労したこと
- ・ 現在の実施体制（何名で IB 入試を実施しているのか？）、実施体制について課題と考えている点はあるか？

i) IB を活用した入学者選抜の形態・方法に関する調査

- ・ 入試名称と実施区分（総合型選抜の一環か IB 特別入試を実施しているのか？）
- ・ 対象学部・学科について
- ・ 選抜方法（小論、面接、書類等）について
- ・ IB の最終成績（スコア）のみで選抜しているのか？別途小論文や面接試験等を行っているのか？
- ・ 学部・学科ごとに選抜方法の違いはあるか？
- ・ 募集人数、定員を設けているのか？若干名なのか？人数の設定の背景・基準
- ・ どの国・地域の修了生が多いのか？
- ・ 入学者選抜の形態や選抜方法に関連して、感じている課題などはあるか？
- ・ 選抜形態・方法に関して、学内で議論する機会はあるか？

ii) IB を活用した入学者選抜の要件に関する調査

- ・ 出願（入学）要件（entry requirement）として、どのような要件を設定しているか？
- ・ その出願（入学）要件は、どのように、何を基準に設定されたのか？
- ・ 出願（入学）要件の見直しなどは行われているのか？行われている場合、どの程度の間隔で見直しを行っているのか？
- ・ IB サートیفিকেートの取扱いについて（ディプロマのみを認めているのか？サートیفিকেートも認めているのか？）
- ・ IB デュアルランゲージプログラムの出願資格としての取扱い
- ・ 出願（入学）要件を設定する上で、意識したこと、直面した／している課題はあるか？

iii) IB を活用した入学者選抜の出願時期・入試時期・国内・国外別の出願状況に関する調査

- ・ 出願時期について、どのように設定しているか？DP 最終試験と重ならないよう意識しているか？
- ・ 出願時期について、海外からの志願者（帰国生または留学生）のニーズには対応しているか？海外からの出願は想定されているか？

iv) 入学後の追跡調査及び学生サポートについて

- ・入学後の IB 修了生の学習パフォーマンスなどは追跡されているのか？
- ・IB の入学者の選抜と入学後のサポートなどを担当する方がいるか？
- ・入学前教育、カウンセリング等を含む特別なケアの有無について
- ・入試区分ごとの追跡調査（IR 部門との連携を通じて）の有無について
- ・IB 入試に関連して、他大学と連携することなどはあるのか？ある場合、どのような連携を行っているのか？
- ・その他、IB 入試に関連して何か課題に感じていることはあるか？

（文責：花井）

2) 進捗報告

(1) 調査結果の概要

2025 年 7～12 月にかけて、【表 3-1】の 2 大学に対して、半構造化インタビューを実施した。以下、調査結果の概要を述べる。

【表 3-1】調査対象大学

日時	大学名
7 月 7 日 (月) 15:00～16:00	国立 H 大学(①)
12 月 12 日 (金) 15:00～16:00	国立 I 大学(②)

①国立 H 大学

日 時：7 月 7 日 (月) 15:00～16:00

対応者：国立 H 大学アドミッション担当教員 1 名

調査者：井藤真由美（関西学院大学）、岩渕和祥（名古屋大学）、江幡知佳（大学入試センター）、ルステモヴァ・アクトルクン（筑波大学）、浅越天真（九州大学大学院）

IB 入試の導入背景、目的、いつ頃から検討を始めて、どのように導入されたのか？

1999 年に中央教育審議会より『初等中等教育と高等教育との接続の改善について（答申）』が出されたことを契機として、H 大学では、2003 年から独自の特色入試（以下、特色入試 X）を導入した。

その後、いわゆる「高大接続改革」を受けて、入試の特色化をさらに進めるため、第 2 弾の特色入試（特色プログラム X）が設計された。これは、①地域創生、②グローバル化への対応、および③入学前教育の再編（トランジション教育の導入）を三本柱とするものであった。一連の変革の背景には、地域や国際的な場で活躍できる人材を育成するという目的があった。

特色入試 X のうち「グローバル枠」について、令和 8 年度（2026 年度）実施、令和 9 年度（2027 年度）入学の入試より、IB 特化型へと移行することが公表されている。IB へ特化する背景として、特色入試 X のグローバル枠の出願者数が減少傾向にあったこと、また国内からの志願者の割

合が年々高くなり、外国の学校出身者やインターナショナルスクール等の国際色豊かな学生を集めるという当初の目的から実態が乖離していったことが挙げられる。以上の背景に加えて、IB 入試の導入については、既存の特色入試 X の枠組みで入学した IB 生のパフォーマンスが良好であったことも、特化への移行を後押しする要因となった。

導入にあたって苦労したこと

IB 入試の導入にあたっての苦労として、校内の教員に IB 教育を認知、理解してもらう点が挙げられる。今後は、IB 入試で入学した学生の追跡調査（パフォーマンスのフィードバック）を行いながら、校内の理解を深めていく方針である。

現在の実施体制（何名で IB 入試を実施しているのか？）、実施体制について課題と考えている点は何か？

現在の実施体制として、入試設計はアドミッション・センターが担当している。特色入試 X の実施体制は、学部学科の教員ならびにアドミッション・センターである。

i)IB を活用した入学者選抜の形態・方法に関する調査

- ・選抜方法（小論、面接、書類等）について
- ・IB の最終成績（スコア）のみで選抜しているのか？別途小論文や面接試験等を行っているのか？

選抜は、「一次選考」と「最終選考」の二段階で行われる。一次選考では、主に出願書類と IB スコアに基づき、最終選考に進めるか否かを判断する。最終選考は、他の特色入試 X（IB 枠以外の枠）の受験者との同一の括りで、募集単位ごとに設定された多様な選抜方法（面接、口頭試問、講義レポート、グループディスカッション、プレゼンテーション等）によって総合的に評価する。

ii)IB を活用した入学者選抜の要件に関する調査

- ・その出願（入学）要件は、どのように、何を基準に設定されたのか？

各大学の事例を参照しつつ、文部科学省の IB 推進の担当者等に意見、助言等をいただきつつ設定した。

- ・出願（入学）要件の見直しなどは行われているのか？行われている場合、どの程度の間隔で見直しを行っているのか？

今後、経験を蓄積しつつ、見直しを行う予定である。

- ・IB サートیفिकートの取扱いについて（ディプロマのみを認めているのか？サートیفिकートも認めているのか？）

サートیفिकートは認めておらず、ディプロマ取得者からの出願のみを認めている。

- ・ IB デュアルランゲージプログラムの出願資格としての取扱いについて
取り扱い方に相違はない。

- ・ 出願（入学）要件を設定する上で、意識したこと、直面した/している課題はあるか？

我が国の総合型選抜における問題は、基本的に日本のカリキュラム（学習指導要領）に基づいて作成される。学習指導要領と外国の教育プログラムとでは、学習範囲に相違があると思われる。それゆえに、IB 生が難しく感じている部分があるのではないかと考えている。

また、IB の教育プログラムの改訂のキャッチアップに苦勞する。国内外の学校により、設置科目や履修カリキュラムが異なるので、出願要件でどこまでが現実的なもののかの把握が困難だと感じている。

iii)IB を活用した入学者選抜の出願時期・入試時期・国内・国外別の出願状況に関する調査

- ・ 出願時期について、どのように設定しているか？ DP 最終試験と重ならないよう意識しているか？

最終選考と日本の IB 校の最終試験期間（10 月下旬～11 月中旬）が重なっている。大学側もこの重複については認識しているが、IB 枠だけを別日程で実施することは現段階において難しく、特色入試 X の他の枠と足並みを揃えて実施する必要がある。

- ・ 出願時期について、海外からの志願者（帰国生または留学生）のニーズには対応しているか？
海外からの出願は想定されているか？

海外からの出願（帰国生・留学生）については、日本語能力が前提となっている。出願要件に日本語に関する規定があり、選抜（試験）自体が日本語で行われるためである。

入学後の追跡調査及び学生サポートについて

- ・ 入学後の IB 修了生の学習パフォーマンスなどは追跡されているのか？
- ・ 入試区分ごとの追跡調査（IR 部門との連携を通じて）の有無について

全ての入試区分で入学した生徒の GPA 等の学業成績は継続して確認している。（統計データに基づくわけではないものの）観察に基づく、IB 生の学習ストラテジーなどは優秀である印象を受けている。

- ・ IB の入学者の選抜と入学後のサポートなどを担当する方がいるか？

入学後のサポート体制として、IB 生に限らず全学生が対象のものが整備されている。具体的には、大学院生や教員が数学の学習をサポートする仕組み、および学習面・生活面全般の相談を担当教員や先輩学生にできる体制が整えられている。加えて、博士課程に留学生が多く、交換留学生も多いという特性を活かし、学生が主体となって運営する語学交流の場（カフェ）も設けられている。

・IB入試に関連して、他大学と連携することなどはあるのか？ある場合、どのような連携を行っているのか？

現在、実施する予定はない。

(文責：江幡)

②国立I大学

日時：12月12日（金）15:00～16:00

対応者：国立I大学アドミッション担当教員1名

調査者：花井渉（九州大学）、岩渕和祥（名古屋大学）、江幡知佳（大学入試センター）、ルステモヴァ・アクトルクン（筑波大学）

・IB入試の導入背景、目的、いつ頃から検討を始めて、どのように導入されたのか？

I大学のIB入試は、平成29年度（2017年度）入試から開始された。当時スーパーグローバル大学創成支援事業（SGU）採択を受け、グローバル人材育成の推進という国の政策に沿う取り組みとして位置づけられた。その目的としては、IB履修生の受け入れを通じた国際化・多様化の推進を行うことにあった

I大学におけるIB入試導入は、全学的な検討のもと進められた。まず、全学的委員会においてIB入試導入の是非や制度設計に関する議論が行われ、その後、各部局に対して意見照会が実施された。これらの議論を踏まえ、2017年度（平成29年度）より6学部でIB入試が実施された。その後、2学部で導入され、現在、8学部で実施している。

導入に際しては、学部間で差異が見られた。①当初より積極的に参加を決断した学部、②議論の末、参加を判断した学部、③逆に、断念した学部にわかれた。そうした判断の異同は、主に、IB入試に動員可能な人的資源に依拠していた。理念よりも、教員の負担といった実行可能性が、意思決定において優先された。

導入にあたって苦労したこと

1. 確約制度の運用上の不具合

IB入試の導入当初は、合格した場合、入学を確約することを出願要件としていた。しかし、海外からの受験者において確約が順守されない事例が発生し、制度の実効性に疑義が生じた。このため、2025年度（令和7年度）入試では対象を国外IB校出身者に限定した上で確約を撤廃し、さらに2026年度（令和8年度）入試では対象を国内IB校出身者にも再度広げ、確約制度そのものを完全に廃止する措置を講じた。これらの対応は、国際出願者の行動特性や進学先選択プロセスを踏まえたことで、制度の調整を余儀なくされたことを示すものである。

2. 選抜制度の複雑化と整合性の確保

確約制度の見直しと並行して、2025年度（令和7年度）入試では、国内IB生の受験経路を既存の総合型選抜へ拡大した。その結果、当該選抜における出願要件（調査者の学習成績概評がA段階）をIB生に適用するための基準設計が不十分であることが判明した。これにより、当該の

選抜の公平性に課題が生じ、学習指導要領に基づく A 段階と、IB の成績との比較可能性の再整理が必要となった。制度変更が段階的に実施されたことにより、志願者の区分や評価指標の適用関係が一時的に複雑化した点は、運用面での大きな負担となったが、結果的に、IB のカリキュラムやそれに基づく成果についての理解を深める契機にもなった。

3. 学力評価の共通尺度化と同等性確認（FCE）の未整備

異なる教育制度出身の志願者を公平に選抜するためには、学力を比較可能にする共通尺度の確立が不可欠である。しかし、同等性確認（Foreign Credential Evaluation :FCE）の具体的な基準や運用手順は学部ごとに異なっており、全学で統一的な判断を下すための実務基盤が十分とは言い難い状況にあった。共通尺度の設計には、データの蓄積に基づく、評価指標の妥当性検証や関係部局間の合意形成が必要であり、短期間での構築は困難を伴った。

4. プリディクテッドスコア（予測される成績スコア）の扱いに関する構造的課題

IB 特有のプリディクテッドスコアとファイナルスコアの乖離は構造的な課題として認識されている。選抜時点ではプリディクテッドを参照せざるを得ない一方で、後に公表されるファイナルとのギャップが合否判定の公平性に影響し得る。これに対処するため、スコアの段階化や許容幅を設ける等の評価基準の見直しを検討中である。IB 認定高校ならびに IB 機構には、プリディクテッドスコアとファイナルスコアのギャップを解消する手立てを考えていただきたい。

5. アドミッション機能・専門人材の確保

共通尺度の確立や FCE の運用には、それらに通じた専門人材の整備が不可欠である。残念ながら、そうした人材は、大学においては多くはない。さまざまな関連業種にスコープを広げ、リクルーティングをしていく必要がある。採用にあたっては、教育研究を主とする学部教員とは異なる審査基準を適用すべきである。また、そうした人材を育成していくことも課題である。

6. 入学後追跡の未整備とエビデンス蓄積の遅れ

IB 入試で入学した学生の学修成果や大学適応状況について、現時点では体系的な追跡調査が実施されていない。個別のエピソードとしては高い評価が示されているものの、制度評価や改善に資する定量・定性データの蓄積は不十分である。本格的な追跡調査の設計・実施が求められる。

i)IB を活用した入学者選抜の形態・方法に関する調査

- ・選抜方法（小論、面接、書類等）について
- ・IB の最終成績（スコア）のみで選抜しているのか？別途小論文や面接試験等を行っているのか？

I 大学の IB 入試における選抜は、IB 最終成績を出願要件とし、また、筆記試験、面接、出願書類の評価を組み合わせた手法によって実施されている。IB の最終成績だけでなく、大学側が求める学力・適性・思考力等を多面的・総合的に評価する制度設計が採用されている。

ii)IB を活用した入学者選抜の要件に関する調査

- ・その出願（入学）要件は、どのように、何を基準に設定されたのか？

出願要件については、国際的な学力資格として信頼性の高い IB フル・ディプロマの取得を基礎条件としつつ、学部の専門性に応じたスコア基準・履修科目要件を独自に設定する方式で構築されている。その背景には、異なる教育制度間で学力を公平に比較するための「共通尺度」構築の必要性、他の選抜との制度的整合性の確保、および主に海外 IB 校からの志願者増加を見越した国際化戦略がある。これらを踏まえ、出願要件の設定は「学力保証」「制度整合性」「学部の教育方針」の三点を基準として調整されたものと理解できる。

- ・出願（入学）要件の見直しなどは行われているのか？行われている場合、どの程度の間隔で見直しを行っているのか？

I 大学の IB 入試における出願（入学）要件について、「見直し頻度」の明確な期間に関する言及はなかった。しかし、制度運用上の課題への対応や入試体系の再編に伴い、出願要件は複数回にわたり実質的な見直しが行われている。特に、2025 年度および 2026 年度の制度変更においては、確約制度の撤廃や IB 生の出願枠の再整理、別選抜における受入れ拡大と当該選抜における出願要件の調整が行われた。また、将来的には同等性確認（FCE）の確立に応じて、学力指標の扱いを含む出願要件がさらに再構築される可能性が高い。これらの動向から、出願要件の見直しは固定的な周期ではなく、制度的課題や教育政策の変化に応じて行われていると整理できる。

- ・IB サートIFICATEの取扱いについて（ディプロマのみを認めているのか？サートIFICATEも認めているのか？）

出願できるのは フル・ディプロマ（IB Diploma Programme）取得者のみとなっている。

- ・出願（入学）要件を設定する上で、意識したこと、直面した/している課題はあるか？

I 大学の IB 入試における出願（入学）要件は、フル・ディプロマを基盤とした共通尺度による学力評価を確保すること、学部の専門性に適合したスコア基準（履修科目含む）を設定すること、そして多様な志願者層に対応しつつ入試制度全体と整合することを意識して策定されている。一方で、IB 生がエントリーできる別の選抜において、一条校生との公平性、全学的な FCE（同等性確認）の未整備、プリディクテッドスコアの扱い、学部間の体制差など、複数の課題が存在する。これらは制度運用の中で段階的に是正されてきたが、依然として改善途上の課題も多く、今後も検討され続けると考えられる。

iii)IB を活用した入学者選抜の出願時期・入試時期・国内・国外別の出願状況に関する調査

- ・出願時期について、どのように設定しているか？DP 最終試験と重ならないよう意識しているか？

I 大学では、IB 入試の選抜を 11 月の土曜日に実施している。

- ・出願時期について、海外からの志願者（帰国生または留学生）のニーズには対応しているか？
海外からの出願は想定されているか？

I 大学の IB 入試では、海外 IB 校出身者が主要な志願者層となっており、制度設計においても海外志願者の存在が前提とされている。特に、確約制度の廃止やプリディクテッドスコアを前提とした出願要件ならびに選考は、海外 IB 生の進学行動やスケジュールを踏まえて制度を調整した結果であり、海外志願者のニーズに対応した運用上の改善が行われている。

入学後の追跡調査及び学生サポートについて

- ・入学後の IB 修了生の学習パフォーマンスなどは追跡されているのか？

現在は組織的な追跡調査は実施されていない。ただ、正式な追跡調査を導入予定。

- ・入試区分ごとの追跡調査（IR 部門との連携を通じて）の有無について

「入試区分別の追跡調査」や「IR 部門との連携による分析」は行われていない。

- ・IB の入学者の選抜と入学後のサポートなどを担当する方がいるか？

現時点では、IB 入学者を専門に担当する教職員は存在しない。

- ・IB 入試に関連して、他大学と連携することなどはあるのか？ある場合、どのような連携を行っているのか？

IB 入試に関連して他大学と連携していることは行われていない。一方、IB 機構が設置する Japan University Advisory Group (JUAG) に参加し、制度変更や IB 教育に関する情報収集を行っている。

（文責：花井）

(2) 考察（中間報告）

以上、2 大学における IB を活用した入試の現状と課題についてインタビュー調査を通じて明らかにした。そこでいくつかの項目について比較分析を行い、その特徴を示したい。

【表 3-2】IB を活用した入試の現状と課題に関する比較分析表

選抜方法	書類審査と学部・募集単位ごとに面接／口頭試問／講義レポート／グループディスカッション／プレゼン等を総合評価（1/2 大学） IB 最終成績は出願要件に位置づけ、その上で筆記試験・面接・出願書類評価を組み合わせる多面的に評価する設計（＝IB スコアのみでの選抜ではない）（1/2 大学）
定員	特に明記なし

どこの国、地域の修了生が多いのか？	特に明記なし
選抜方法に係る課題	学内教員に IB 教育を認知・理解してもらう点で苦労した、入学後の追跡調査で学内理解を深めていく方針（1/2 大学） 確約制度の不具合と撤廃：当初の「合格＝入学確約」要件が海外志願者で遵守されず、2025 年度は国外 IB 校限定で確約撤廃→2026 年度に全体で完全撤廃へ。制度運用上の整合性確保が課題だった（1/2 大学） 制度間の整合性：国内 IB 生の総合型選抜への受験経路拡大に伴い、「学習成績概評 A 段階」の扱いと IB 成績の比較可能性に課題が生じ、再整理が必要となった（1/2 大学） 同等性確認（FCE）・共通尺度の未整備：学部間で運用差があり、全学統一の基準設計と合意形成が未成熟（1/2 大学） プリディクテッドスコアの取扱い：ファイナル（最終成績）との乖離という構造的課題があり、評価基準（段階化・許容幅等）の見直しを検討中（1/2 大学） アドミッション専門人材の不足：FCE 運用や共通尺度設計に通じた専門人材の確保・育成が必要（1/2 大学） 入学後追跡の未整備：制度改善の根拠となる定量・定性データ蓄積が不足（1/2 大学）
出願（入学）要件（entry requirement）の設定	他大学の事例を参照し、文部科学省の IB 推進担当者の意見・助言を踏まえて設定（1/2 大学） 基礎条件：IB フル・ディプロマ取得を前提に、学部専門性に応じたスコア基準・履修科目要件（HL 等）を独自設定。評価の公平性（共通尺度）、AO 等他選抜との整合性、国際化戦略を軸に制度設計（1/2 大学） 見直し方針：固定周期は示さず、2025・2026 年度の制度変更（確約撤廃、出願枠再整理等）に見られるように、運用課題に応じて随時見直し。今後は FCE 確立に応じた再構築の可能性（1/2 大学）
IB サーティフィケートの取り扱い	サーティフィケートは不可。ディプロマ取得者のみ出願可（2/2 大学）
IB デュアルランゲージプログラムの出願資格としての取り扱い	相違なし（英語 DP 等と同様に扱う）（1/2 大学）
出願（入学）要件を設定する上での課題	日本の学習指導要領と外国プログラムの学習範囲の相違により、IB 生が難しく感じる部分がある可能性（1/2 大学）

	IB カリキュラム改訂のキャッチアップの困難、設置科目・履修が学校ごとに異なるため、現実的な出願要件の線引きが難しい（1/2 大学） 一条校基準との比較可能性：総合型選抜での「概評 A 段階」と IB 成績の関係づけが不十分で公平性課題（1/2 大学） FCE の欠如：同等性確認の全学的な基準・手順が未整備 プリディクテッドの扱い：ファイナルとの差異が可否の公平性に影響し得る（1/2 大学）
出願時期	最終選考と日本の IB 校の最終試験（10 月下旬～11 月中旬）が重なる。枠内での運用上、IB 枠のみ別日程にするのは困難（1/2 大学） 海外志願者への対応：日本語能力が前提（出願要件に日本語規定、選抜も日本語で実施）（1/2 大学） 11 月実施（1/2 大学）
その他、IB 入試に関連する課題	導入背景と狙いの変化：既存の「グローバル枠」を令和 8 年度実施（2026）、令和 9 年度入学（2027）から IB 特化へ移行。背景には、既存枠の志願者構成の変化（国内比率の上昇）と、既存枠で入学した IB 生のパフォーマンスが良好だったことがある（1/2 大学） 入学後の追跡：全入試区分の GPA 等を継続確認。統計断定ではないが、IB 生の学習ストラテジーは優秀との印象（1/2 大学） 学生支援：数学サポート、学習・生活相談、学生主導の語学交流カフェなど、全学対象の支援が整備（1/2 大学） 入学後の体制：入試区分別の追跡（IR 連携）なし、IB 入学者の専担者なし。今後、正式な追跡調査を導入予定（1/2 大学） 外部連携：他大学との連携は現状なし。IB 機構の JUAG へ参加し、制度変更等の情報収集を行う（1/2 大学）

まず、両大学に共通する大きな特徴として、IB 最終成績を単独の可否判断材料とはせず、多面的評価を行っている点が挙げられる。H 大学では、一次選考で出願書類および IB スコアを確認した上で、最終選考では面接、口頭試問、講義レポート、グループディスカッション、プレゼンテーションなど、多様な評価方式を組み合わせることで総合的に判定している。I 大学においても、IB 最終成績はあくまで出願要件として扱われ、選抜は筆記試験、面接、出願書類の評価を組み合わせる総合的手法によって実施される。このように、両大学は IB の特性を踏まえ、「学力・思考力・適性」を複合的に把握しようとする姿勢が共通している。

また、IB サーティフィケートを出願資格として認めない点も両大学に共通している。H 大学・I 大学ともに、出願資格はフル・ディプロマ取得者に限定しており、IB の本来の評価体系を重視する姿勢が確認できる。

さらに、入学後の追跡調査の整備が途上である点も両大学の共通課題である。H 大学では全入試区分における GPA 等の学業成績を継続的に確認しているものの、IB 生の人数が少ないため統計的な評価には慎重である。一方、I 大学では現時点で体系的な追跡調査は実施されておらず、同調査の正式な導入を予定している段階にある。この点は、両大学が入試制度の妥当性検証や改善に向けて、より精緻なデータ収集が必要であることを示唆している。

次に、両大学の相違点をみると、志願者ターゲット、制度改変の方向性、評価基盤の整備度の三点に明確な特徴の差が表れている。

第一に、志願者の主対象となる層が異なる。H 大学は選抜や授業が日本語で行われることから、出願には日本語能力を前提としており、結果として国内 IB 校出身者が主要な志願者層となっている。一方 I 大学は、制度設計段階から海外 IB 校出身者を主要志願者層として位置づけており、確約制度の撤廃やプリディクテッドスコアを前提とした運用など、海外志願者の進学行動やスケジュールに適應するための制度調整を積極的に進めている。その結果、両大学は IB 生の受け入れ方針において、「国内志向」と「国際志向」という対照的な方向性を示している。

第二に、制度改善の焦点が異なる点が挙げられる。H 大学では既存の特色入試枠を IB 特化へと移行させるなど、「枠組みそのものの再編」が進んでいる。対して I 大学では、制度の運用過程で生じた問題を丁寧に修正してきた点が特徴である。具体的には、確約制度の不具合と撤廃、国内基準と IB 基準を接続する際の公平性の課題、同等性確認（FCE）の未整備、プリディクテッドとファイナルスコアの乖離など、「評価基準・実務基盤の再設計」が中心的課題となっている。

第三に、出願時期と海外志願者への対応に差がある。H 大学の最終選考は IB 最終試験期間（10 月下旬～11 月中旬）と重複しており、IB 枠のみ日程調整を行うことが困難であるため、海外志願者の出願行動に一定の制約が生じている。一方、I 大学は同じ 11 月実施であっても、確約制度の撤廃やプリディクテッドスコア活用等の制度調整によって、海外志願者の特性に柔軟に対応しようとする姿勢がみられる。

以上より、H 大学は「国内志願者に適した枠組み再編型」のアプローチ、I 大学は「海外志願者に適した評価基盤整備型」のアプローチを重視していると整理できる。両大学の方向性は異なるものの、いずれにおいても多面的評価の標準化、同等性確認（FCE）の整備、プリディクテッドスコアの適正な取り扱い、入学後追跡の充実といった改善課題が共通して存在する。これらの課題への対応は、IB 入試の公平性・透明性を高め、持続可能な制度運用を実現する上で不可欠といえる。

（3）今年度（令和 7 年度）の調査までで得られた示唆

今年度までに、大学調査班では国内において IB を活用した入試を実施している大学（計 9 大学）へのインタビュー調査を実施した。

【表 3-3】2023 年度・2025 年度調査を含めた IB を活用した入試の
現状と課題に関する比較分析表（9 大学比較）

選抜方法	書類審査のみ（成績評価証明書、自己推薦書、評価書）（1/9 大学）
------	-----------------------------------

	書類審査のみ（最終スコア、EE、TOK、CAS などの資料）の学部もある（1/9 大学） 書類審査と面接（2/9 大学） 書類・面接・小論文（2/9 大学） IB の最終スコアと、志望理由書、課題論文（EE）の日本語の要約とオリジナルのコピー、TOK・CAS に関する活動レポートを全体的に評価（1/9 大学） 理系の学部では筆記試験や口頭試問（面接）（1/9 大学） 教育系の学部では筆記試験とプレゼンテーション（1/9 大学） 国際教養学部、国際商学部、理学部、データサイエンス学部では、筆記試験（小論文もしくは総合問題）＋面接（1/9 大学） 医学部看護学科：面接（1/9 大学） 医学部医学科では、第 1 次選考（書類審査：IB 資格の成績＋英語スコア）＋第 2 次選考（面接）＋第 3 次選考（IB 資格の成績と面接の成績の合計点に基づく合格者の決定）（1/9 大学） 一次＝書類＋IB スコア、最終＝面接・口頭試問・講義レポート・プレゼンを他枠と同一括りで総合評価（1/9 大学） IB スコアは出願要件に位置づけ、筆記・面接・書類の複合評価（IB スコアのみでの選抜は行わない）（1/9 大学）
定員	若干名（6/9 大学）（ただし、IB 教員になる人を多く獲得したいと考えているものの、他の入試区分で獲得する学生数等を鑑み、柔軟に対応できるように、現在はあえて定員化せず、若干名の募集にしている大学 1/9 大学） 医学部のみ 2 名（1/9 大学） 医学部のみ 3 名（1/9 大学） 医学部のみ 5 名（1/9 大学） 歯学部では定員を設けている（1/9 大学） 以前は若干名であったが、現在は全学部で定員化している。IB 生の特徴に関する研究を継続し、IB 生が 21 世紀型スキルを獲得していることのデータやエビデンスを蓄積して提示することで教員を説得して定員化が実現（1/9 大学）
どこの国、地域の修了生が多いのか？	中国の他のアジア諸国、オーストラリア、ニュージーランド、北米、中南米、ヨーロッパなど（国立 A 大学） ドイツ、シンガポール、イギリス、オランダ、ベトナム、中国（私立 B 大学） イタリアやシンガポール、イギリス（国立 C 大学） 国内の一条校出身者からの出願が多い（7～8 割程度）（D 公立大学）

	海外のインターナショナルスクールから入学する学生もいるが、国内の IB 校を主な対象と想定していることもあり、国内からの進学者が多い（国立 E 大学） 日本からの IB 生が多い。英語で IB を経験して海外から受験する生徒も少数いる（公立 F 大学） シンガポール、タイ、ドイツ、オランダ、イタリア、イギリス、スイス、フィリピン、ベルギー、インド、マレーシア、ニュージーランド、台湾など（国立 G 大学） 選抜は日本語前提のため、国内 IB 校中心の設計色が強い（国立 H 大学） 海外 IB 校出身者を主要志願者層として制度設計（国立 I 大学）
選抜方法に係る課題	確定スコアと見込みスコアの比較（2/9 大学） 国際バカロレア特別入試の広報（2/9 大学） 全ての学部学科において、教員ではなく、アドミッションオフィサーが入試を集約して選考していく体制を構築したい（1/9 大学） IB 入試の出願時期と実施時期（IB の 5 月試験と 11 月試験によって出願までの期間の違いが生じてしまう）（1/9 大学） IB スコアにおける「リマーク」の取り扱いが難しい（1/9 大学） IB スコアの見込み点で合格し、その後最終試験でディプロマが取得できなかったとしても入学を認めている（1/9 大学） IB 入試の実施時期と辞退率の高さが大きな課題（1/9 大学） 併願を認めているため、他大学との競合や入試時期の設定が重要である。10～11 月の早い時期に入試を行うと、IB 生の最終試験と重なり出願が困難になる一方、1 月以降に実施するとすでに進学先が決まっているケースが増えてしまう（1/9 大学） 合格率に比して入学率が低く、第一志望に選ばれることが少ない現状がある（1/9 大学） 日本語を履修していない海外インター出身の生徒が出願を希望する場合にどのように対応していくのかについて、今後検討する必要がある（1/9 大学） もう少し募集枠を広げたい（1/9 大学） IB 生が多様化したため、書類審査だけではなく面接を課す学部が増えた。IB の資格を取得していても IB 生らしいスキルを身につけているとは限らないため、面接を通じて、各学部が求める IB 生を見極める必要がある（1/9 大学）

	大学入学共通テストで求めていることを IB 生に求めるのは適切ではないと考えている。日本の大学は IB 生の特徴をもっと良く知るべきである (1/9 大学) 比較的歩留まり率がよいが、それでも辞退者はいる (1/9 大学) 学内の IB 理解促進、IB 最終試験期 (10–11 月) との日程重複 (1/9 大学) 確約制度 (合格＝入学確約) の不具合→2025–26 で段階的撤廃、総合型との整合、共通尺度／同等性確認 (FCE) の未整備、プリディクテッド乖離、専門人材不足、入学後追跡の未整備 (1/9 大学)
出願 (入学) 要件 (entry requirement) の設定	HL 科目指定 (例: 歴史か地理か哲学、いずれか一つを HL で履修していること) (3/9 大学) 国際系 36 点以上 (1/9 大学) 薬学部 32 点以上 (1/9 大学) 医学系 38 点以上 (2/9 大学) 日本語 A、もしくは B で一定の基準点 (3/9 大学) 理系の学部では、必ず数学 HL で 5 点以上 (1/9 大学) IB ディプロマ取得済み (または見込み) (3/9 大学) 日本語 A が 4 点以上で、IB 科目全体の中で 5 点以上の科目が 1 つ以上というボーダーラインを設定 (1/9 大学) 学部外のプログラムでは、サーティフィケートでの出願可 (1/9 大学) 履修科目とレベル(HL)指定、科目のスコアの要件を設定 (2/9 大学) 他大学事例＋文部科学省担当者の助言で設定、運用に応じ随時見直しの方針 (1/9 大学)
IB サーティフィケートの取り扱い	理工学部の英語コースのみサーティフィケートも認めている (ただし、SAT のスコアも求める) (1/9 大学) IB ディプロマ取得者のみ出願可 (3/9 大学) 総合型選抜と IB 入試を併願する学生も一定数いる。IB ディプロマを取得した人は総合型選抜で入学し、ディプロマを取得できなかった人 (サーティフィケート取得者) が IB 入試で救われたケースもある (1/9 大学) IB のフル・ディプロマが取れなくても、もう一回受験機会を与えるという発想に立っている。日本語 A が 4 点以上で、IB 科目全体の中で 5 点以上の科目が 1 つ以上というボーダーラインを設定した明確な理由はないものの、受験の間口を広げることを考えている (1/9 大学) DP のみ可 (サーティフィケート不可) (2/9 大学)

IB デュアルランゲージ プログラムの出願資格 としての取り扱い	英語ディプロマ・プログラム (DP) との区別はしていない (6/9 大学)
出願 (入学) 要件を設定する上での課題	通っていた高校で学んでいた範囲は科目によって異なるため、入学前時点での丁寧な支援が必要 (1/9 大学) 最終試験のスコアの正確性に疑問を感じている (1/9 大学) デュアルランゲージとフルに英語で DP を受けた生徒であっても、TOEFL などの英語スコアの提出を求めている (1/9 大学) 高い日本語力を求めるのは、国立大学として、日本語で履修する授業が多いため (1/9 大学) 医学部と保健学科は日本語 B でも良いが、日本語による国家試験があるため HL6 以上を求めている (1/9 大学) 法学部では英語力を重視するなど、学部ごとの求める資質を基準にしている (1/9 大学) 学習指導要領と IB の学習範囲差、IB 改訂へのキャッチアップ、設置科目多様性による線引きの難しさ (1/9 大学) 概評 A 段階と IB の比較可能性、FCE 欠如、プリディクテッド乖離、学部間体制差 (1/9 大学)
出願時期	二期に分けて募集 (3/9 大学) 8 月募集と 10 月募集がある。10 月募集は全学部を対象に実施しており、8 月募集は 5 月に最終試験を受ける海外の IB 生を主な対象として、医学部と工学部のみで実施している (1/9 大学) IB 入試の実施時期が 10 月や 11 月のため、IB の最終試験が 11 月に実施されるような学校の生徒には負担となっている可能性がある (11 月出願の場合) (1/9 大学) 今までは 1 月出願、2 月実施で行ってきた。IB の最終試験と重ならず、他の大学と競合しないという利点があった。ただ、試験実施前に他の大学へ進学を決めてしまうという危機意識や他の入試方式の日程との関係もあり、前倒しで 11 月下旬出願、12 月実施に変更された (1/9 大学) 総合型選抜は 9 月に出願、試験日は 10 月の始め、合格発表は 11 月 1 日／IB 入試は 11 月の中旬に出願、12 月に試験を実施 (1/9 大学) 最終選考が 10-11 月の IB 試験期と重複、IB 枠のみ別日程は困難 (1/9 大学) 11 月実施 (1/9 大学)
その他、IB 入試に関連する課題	IB の最終スコアと本人の学力の差の見極め (1/9 大学)

	インターナショナルスクールと一条校での IB 教育の違いがあるのかどうか (1/9 大学) 教員不足 (1/9 大学) 各大学によって出願の時期や選考方法が異なっていたり、現在でも IB 入試に関する情報収集がしにくい (1/9 大学) 入学者が増えない中で IB 入試を継続していくモチベーションについて (1/9 大学) IB 入試のみ異なる時期に実施することは難しい (1/9 大学) IB 科目への単位認定について (1/9 大学) 入学後の IB 修了生の学習パフォーマンスの追跡は行っているが、GPA だけを見ると、IB 生が際立っているわけではない。ただし、人数が少ないため比較は難しい。GPA で比較するのは IB 生にとってフェアではないと感じている (1/9 大学) IB 生の悩みの例としては、日本の憲法など、既習を前提に大学教員が話をすること、グラフ電卓を使用する IB 数学と日本の数学との相違、海外 IB 校出身の学生は入学当初はサークル活動をしなかったこと、日本の考え方やシステムに慣れていないこと、などが挙げられる (1/9 大学) 既存グローバル枠→IB 特化 (2026 実施／2027 入学) (1/9 大学) GPA 継続把握 (1/9 大学) 全学的学習支援 (数学／学習・生活相談／語学交流カフェ) (1/9 大学) 入試区分別追跡の未実施→正式導入予定 (1/9 大学) Japan University Advisory Group (JUAG) 参加による情報収集 (1/9 大学)
--	---

全体として、選抜設計は多様である一方、IB 最終成績を単独の可否根拠とせず、面接・筆記・口頭試問・書類等を組み合わせる多面的評価への「部分的収斂」が確認できる。H 大学は一次で書類・IB スコア、最終で面接や口頭試問等の総合評価を実施し、I 大学も IB スコアを出願要件に留め、筆記・面接・書類の複合評価を採用している。

志願者プールの想定には分化が見られる。H 大学は選抜・授業の日本語前提により国内 IB 校中心の運用色が強いのに対し、I 大学は海外 IB 校出身者を主要志願者層に位置づけ、確約制度の撤廃やプリディクテッド（予測）スコア前提の運用など、海外の進学行動に適合する調整を進めている。言語方針の違いが志願者構成と歩留まり設計に直結する点は示唆的である。

公平性・同等性の確保は未成熟である。I 大学は学部間で運用差が残る同等性確認（FCE）の未整備を課題化し、H 大学も国内学習指導要領と IB の学習範囲差への対応を論点としている。

さらに、プリディクテッドと最終スコアの乖離やリマーク対応をめぐる実務上の不確実性は、条件付合格や許容幅の明示、事後検証ルールの整備といった制度的手当てを要請する。

時期要因も構造課題である。複数大学で IB 最終試験期（10～11 月）と入試の重複が指摘され、辞退率上昇や第一志望化の阻害要因となり得る。H 大学は他枠との整合上、IB 枠のみ別日程化が難しく、I 大学は確約撤廃やプリディクテッド活用で海外志願者の弾力性に対応している。同一時期でも制度設計の工夫次第で歩留まり影響は緩和可能である。

出願要件は、DP（ディプロマ）取得を基盤に、学部別のスコア閾値や HL 科目指定、日本語 A/B 基準などの細分化が進む。医療系での日本語 B HL6 以上など職能要件に基づく基準設定も見られ、入口要件と入学後支援の接続が望まれる。サーティフィケートの扱いは大学間で揺れがあるが、H/I 大学はいずれも DP のみ可とし、同等性の説明責任を優先している。

入学後の追跡は整備途上で、H 大学は GPA の継続把握と全学的な学習・生活支援を実装する一方、I 大学は区分別追跡の正式導入を予定している。今後は、面接等の評価標準化（共通ルーブリック、評価者キャリブレーション）、FCE フレーム（換算表・閾値・事後検証）、IR 連携の縦断 KPI（取得単位・進級・離脱・卒業・就業）の標準化が、制度の公平性・透明性・持続性を下支える鍵となる。

（文責：花井）

（4）海外大学調査：アメリカの大学における IB を活用した入試の実施状況及び課題について

① 米国 A 大学

日 時：1 月 28 日（火）10:30～11:30 対応者：米国 A 大学アドミッション担当職員 1 名 調査者：岩渕和祥（東京大学）
--

IB 入試の導入背景、目的、いつ頃から検討を始めて、どのように導入されたのか？

・当該大学では、IB を「特別入試」として導入してはいない。従来から IB を含む各カリキュラムを同一の出願枠で評価している。IB を入学試験にいつから用いているかの正確な時期はわからないが 1970 年代にはすでに対象として含まれていたと思われる。

現在の実施体制（何名で IB 入試を実施しているのか？）、実施体制について課題と考えている点は何か？

・国際担当チームは 3 名で、国際出願が多すぎるため外部評価者（各国の学校カウンセラー等）を雇って審査支援をしている。そうした外部評価者の中には IB の質問に関して相談できるようなカウンセラーも含まれている。

・IB 自体は標準化されているので地域ごとに異なる扱いはしない。ただし、審査を始める前に国や地域ごとの学校教育を文化的な背景など異なる点についてトレーニングを行う。

選抜方法(小論、面接、書類等)について／IBの最終成績(スコア)のみで選抜しているのか？別途小論文や面接試験等を行っているのか？

・面接は実施しない。提出された出願書類のみで審査し、提出後の追加資料(推薦状等)も受け付けない。IBについては出願時点では Year 12 の校内成績(internal marks)を評価し、予測スコア(predicted score)は使わない。この方針は内部研究の結果に基づいている。Year 13 の成績、および最終 IB スコアは合格後の条件確認として使い、合格時の成績と大きく乖離すれば取り消しの可能性がある。

・なお、TOK、EE、CAS などのコア科目については考慮されない。

・学業成績は合否判定の 50%のみに過ぎず、課外活動・リーダーシップ・地域活動など多くの要素を考慮する。

・IB 科目は GPA 換算後、honors 扱いされるためポイントが加算される。

・8 割の専攻では HL か SL で評価が大きく変わることはない。ただ、STEM 系であれば関係する科目で HL を取っていることを期待する。

どこの国・地域の修了生が多いのか？

・当該大学全体の出願では、中国が約 30%、次いでインド、韓国が多い。IB 修了生の国別応募数についてははっきりとした数字はわからないが、量としてはその傾向を反映すると思われる。

・体感としては国外からの出願はインターナショナルスクール出身者が多く、その中でも IB が最も多いと思われる。そのほかは AP や A レベルも多い。

入学者選抜の形態や選抜方法に関連して、感じている課題などはあるか？

・課題は特に挙げられていない。

選抜形態・方法に関して、学内で議論する機会はあるか？

・毎年 6 月に大学システムにおける各キャンパスの同職が会議を行い、IB や A レベル等の運用やトレンドを議論し、可能な範囲で整合を図る。ただし予測スコアの扱いなどはキャンパス間で一致していない。

出願(入学)要件(entry requirement)として、どのような要件を設定しているか？

・Year 10、Year 11 で取った授業で GPA が 3.0。州外からの出願者(non-residents)については 3.4。

・運用面では、IB 出願者の学力目安として(コア科目を除く)42 点満点中 38 点程度が競争力のある水準、もしくは 34/42 でも競争力はあると見られている。英語要件では、IB English A で HL ならば 5~7、SL は 6~7 を満たせば英語力証明として認める。

その出願(入学)要件は、どのように、何を基準に設定されたのか？

・以下の情報は出願要件というよりは審査の方針についてであることに留意。予測スコアを使わない方針は、学内の内部研究で予測スコアが実績と乖離しやすいという知見に基づく。方針策定は基本的に入試オフィス主導で、他部署の意見やキャンパス間会議、蓄積された組織知、そして過去の大量の出願によるビッグデータでの傾向分析も活用している。

出願（入学）要件の見直しなどは行われているのか？行われている場合、どの程度の間隔で見直しを行っているのか？

・以下の情報は出願要件というよりは審査の方針についてであることに留意。毎年 6～7 月頃から審査準備を始め、データベース等を確認して「国の制度が変わっていないか」などを点検し、トレーニングを実施する。

出願時期について、どのように設定しているか？DP 最終試験と重ならないよう意識しているか？

・IB 最終スコアの公表が 7 月中旬でも運用上の問題はない。前述の通り、評価は Year 12 の成績で行うため。合格後の最終確認は 5 月からの実施だが、6 月に成績が揃う米国の生徒に比べ IB 生はやや遅くなる。ただそれ以外は概ね同じスケジュール。

入学後の IB 修了生の学習パフォーマンスなどは追跡されているのか？

・大学として在学後のリテンションやパフォーマンスに近年注力し始めている。結果については今後出ると思われるが、担当者自身の考えでは IB 生は研究センターの環境に向いていて大学でのパフォーマンスも高いと思われる。

IB の入学者の選抜と入学後のサポートなどを担当する方がいるか？入学前教育、カウンセリング等を含む特別なケアの有無について

・IB 向けに特別な事前研修・特別なケアはない。全学生向けの一般オリエンテーションに含まれる。

・IB 履修者には入学後、大学の単位（college unit）を認定する。その際は、HL や SL、ディプロマに応じて単位が付与される。

入試区分ごとの追跡調査（IR 部門との連携を通じて）の有無について

・IB は独立の入試区分ではない。合格者データや出願情報などについては学部別のデータなども含め公開されている。入学後のデータ分析は現在力を入れつつある。

IB 入試に関連して、他大学と連携することなどはあるのか？ある場合、どのような連携を行っているのか？

・他大学との連携はない。同大学のシステム内では、毎年 6 月に各キャンパスの担当者が集まり、IB 運用や評価のトレンドを共有し、可能な範囲で整合を図る。

(文責：岩渕)

米国 A 大学の調査から、IB を「特別入試」として扱う日本の大学とは異なり、IB・AP・A レベルなど多様な国際カリキュラムを同一枠で評価する包括型モデルが確立していることが明らかとなった。IB は 1970 年代から対象となっており、制度として特別扱いせず、提出書類のみで審査する完全書類型選抜が特徴である。出願段階では Year 12 の校内成績を用い、予測スコアは用いない方針が内部研究により正当化されている。合否判断では学業成績が 50%にとどまり、課外活動・リーダーシップ・地域活動など非学力要素が重視される点も特徴的である。

また、国際担当 3 名に加えて外部評価者を活用し、多様な教育文化への理解を補完する体制が整えられている。IB 修了生向けの特別支援は設けず、一般学生と同一のオリエンテーションを行い、入学後に HL/SL に応じた単位認定で学習成果を評価している。以上から、A 大学では、標準化・データ主導・非学力評価重視を組み合わせた成熟した IB 評価体系が運用されていることが示唆された。

(文責：花井)

(5) これまでの調査から得られた示唆について

示唆①：IB 修了生の大学入学後パフォーマンスに関するエビデンス蓄積

国内 7 大学の比較では、書類のみでの選抜に不安を残し、小論文や面接を併用する傾向がなお強い。背景には、IB で何を学び、どの程度「大学で学ぶ準備」ができているかに関する学内理解の不足がある（広報・シンポ・追跡の必要性も指摘）。

H 大学は全区分の GPA 等を継続把握し、IB 生の学習ストラテジーを肯定的に評価する観察所見を持つ一方、人数規模の制約から統計的断定は避けるという慎重姿勢である。I 大学は区分別の体系的追跡が未整備で、正式導入を計画中である。米国 A 大学は入学後のリテンション・パフォーマンスに近年注力し始め、IB 生は研究志向環境に適合しやすいとの見立てを持つが、特別なケアは設けず一般オリエンテーションに統合、学修成果は IB 科目の単位認定（HL/SL）で制度的に担保している。

示唆②：IB 教育システムと日本の選抜制度差から生じる課題の克服

国内では見込みスコアと確定スコアの乖離、入試広報の難しさ、出願・実施時期（10～11 月）と IB 最終試験の重なりが繰り返し課題化されている。特に時期の問題は、辞退率上昇や第一志望化阻害と結びつく。

H 大学は最終選考が IB 最終試験期と重複し、他枠との整合上 IB 枠だけの別日程が困難。また、学習指導要領と IB の学習範囲差・IB カリキュラム改訂の追従に悩む。I 大学は確約制度を 2025-26 で段階的に撤廃し、総合型選抜との整合や同等性確認（FCE）の未整備、プリディクテッド乖離への対応を進める途上にある。

対照的に米国 A 大学は、面接なしの完全書類審査とし、出願時は Year12 の校内成績のみを評価（予測スコアは用いず）、最終スコアは合格後の条件確認とする運用で、乖離時は合格取消もあり得るという明確な「条件付合格」設計を敷く。

示唆③：世界各国からの IB 生受入れに向けた英語プログラム等の拡充

国内では、多くの大学が日本語 A/B の基準や学部別スコア閾値・HL 指定を課す。これは日本語授業を前提とする実状への適合だが、海外 IB 校からの応募可能性を狭める副作用がある。H 大学は選抜・授業とも日本語前提で国内志向の色が濃い。I 大学は海外 IB 層を主要志願者に据え、11 月実施の枠内で確約撤廃やプリディクテッド前提の運用に舵を切った。一方、米国 A 大学は IB English A の成績で英語力要件を充足させ、入学後は IB 科目の大学単位認定を通じて学修成果を制度的に承認している。

（文責：花井）

3) 修了生インタビュープロジェクト

(1) 調査の概要

修了生インタビュー調査の目的は、国際バカロレア修了生（以下、IB 修了生）が、大学（学士課程）における学びをどのように経験してきたかを明らかにすることである。とりわけ、IB の学習経験を有することが、いかに大学における学びに影響を及ぼすかに着目する。対象は、日本の一条校 IB 校→日本の大学という経路を辿ってきた IB 修了生である。

研究方法として、インタビュー調査法ならびにインタビューに先立つ補足的なアンケート調査法を採用した。以下、インタビューの詳細と結果の概要を示す。なお、インタビューガイドと事前アンケートは、巻末資料として掲載する。

(2) インタビュー一覧

インタビューの対象者一覧を、以下の【表 3-4】に示す。

【表 3-4】大学生調査の対象一覧

仮名	学年	所属大学	専攻分野	実施日	所要時間
A さん	1	私立	医学	2025 年 9 月 30 日	62 分
B さん	1	私立	法学	2025 年 10 月 9 日	78 分
C さん	2	私立	国際関係学	2025 年 10 月 17 日	44 分
D さん	1	私立	工学	2025 年 10 月 2 日	70 分
E さん	3	国立	言語	2025 年 10 月 15 日	66 分
F さん	1	公立	医学	2025 年 10 月 1 日	65 分
G さん	1	公立	教養	2025 年 10 月 15 日	70 分

H さん	1	私立（中退） →海外大学	経営学	2025 年 10 月 20 日	42 分
I さん	4	私立	教育学	2025 年 10 月 8 日	67 分
J さん	2	私立	教養	2025 年 10 月 22 日	77 分
K さん	3	国立	工学	2025 年 10 月 20 日	82 分
L さん	2	私立	総合政策	2025 年 10 月 22 日	91 分
M さん	1	国立	教育学	2025 年 10 月 21 日	89 分
N さん	3	国立	医学	2025 年 10 月 16 日	80 分
O さん	1	私立	教養	2025 年 11 月 11 日	90 分
P さん	1	私立	法学	2025 年 11 月 18 日	89 分
Q さん	1	私立	教養	2025 年 11 月 17 日	65 分

(3) インタビューの結果

以下、インタビューの結果について、A さんから Q さんまで順に示す。

A さん

A さんは、現在、私立大学医学部医学科の 1 年生である。IB プログラムを選択した背景として、初等教育や MYP 段階では実践的な英語教育やアクティブラーニングを重視する両親の意向や周囲の影響が強かった。他方、DP への進学は A さん自身の希望によるところが大きかった。IB のなかでも、特に TOK（知の理論）を通じて正解のない問いに対して深く考え議論する力が養われたことや、EE（課題論文）を通じて自らテーマを設定し計画的に進める自主性が身についたと振り返る。日本の医学部医学科受験において、IB 生は浪人が困難であるというリスクを考慮し、国内の医学部に加え、ハンガリーの医学部も併願するなど、戦略的に進路選択をした。大学入学後の学業面では、1 年前期において優秀な成績（高い GPA）を収めている。IB で生物を未履修であったことに不安を感じていたものの、大学が提供した IB 生対象の入学前教育（映像授業や課題）によって基礎を習得できたため、入学後の授業が復習となり、スムーズに適応できた。一方で、物理に関しては IB で使用していた公式集がない日本の学習スタイルとのギャップに苦労した。しかし、一般選抜の学生に追いつこうとする気持ちが学習へのモチベーションとなった。医学部の学習では暗記量が多く、その点は IB との違いである。ただし、哲学と医療といった科目における倫理的なディスカッションの場面では、TOK で養われた多角的な視点や批判的思考力が発揮され、周囲の学生とは異なる強みを感じる場面もある。

B さん

B さんは私立大学法学部に在籍する 1 年生である。小学校時代は中国の現地校および日本の日英バイリンガル学校で学び、その後、DLDP を擁する私立の中高一貫校に進学した。当初は DP を選択する予定はなかったが、説明会で示された生徒主体の学びに魅力を感じ、DP コースへの進学を決意した。IB で身につけた力として、資料分析力、論理的に深く考える力、論文構成力、

そして継続力を挙げている。大学進学にあたっては志望校を一枚に絞り、総合選抜型入試において予測スコアを活用して合格を果たした。

大学進学後の授業では、判例や条文の暗記・適用といった知識習得が重視される場面が多く、IB で培ったスキルが直接的に生かせる機会は限られていると感じている。一方で、特に TOK や EE で培った論理的思考力と資料分析力を活かし、課題論文やレポート作成において高い評価を得ており、成績も全体的に非常に良好である。B さんは一定の妥協を受け入れつつ学び方を切り替えて大学での学修に取り組んでいると述べており、この柔軟な思考の転換こそが IB で獲得した力であると自覚している。問いを立てる姿勢や論理構成力は現在も自身の強みであり、法的思考に新たな視点をもたらしていると感じており。今後も法学という枠組みの中に IB 的探究姿勢を融合させ、知的成長を継続していく意欲を示している。

C さん

C さんは、現在、私立大学総合グローバル学部の 2 年生である。高校で IB コースを選択した理由としては、英語力向上への強い意欲や、批判的思考やグローバルな視点など、将来、必要となると思われるスキルが身につけられそうな点に魅力を感じたからである。実際に、批判的思考力やライティング力が身につく、またクラスメートに帰国生が多かったこともあって、多様な価値観への寛容性が身についたと感じている。進路選択については文系と理系とで最後まで悩んでいたため、どちらでも選択できるように高校での授業を選択していた。最終的には、パレスチナ問題への関心から紛争解決・平和構築分野に興味を持ち始め、IB 入試を受けられる大学を 3 大学受験した。IB 入試については情報量が圧倒的に少なく、友達同士で情報を交換し合うなどかなり苦労した。現在は、社会科学の諸分野を学んでいる。高校で選択できなかった歴史を学べる点は嬉しいが、高校で世界史を履修してきた同級生との間に知識量の差を感じることもある。また、授業が高校世界史の知識を前提として進められることが多く、戸惑いもある。IB で身につけたライティング力や情報収集・整理・分析力は大いに役に立っている。英語を使う機会が減ってしまったのは残念だが、今はオランダ留学を計画している。

D さん

D さんは、現在、私立大学の 1 年生であり、工学を専門とする学科に所属している。IB プログラムを選択した背景には、幼少期のアメリカ滞在で身につけた英語力を維持・向上させたいという思いや、海外大学進学も視野に入れて将来の選択肢を広げたいという意図があった。IB の学びでは、TOK を通じて答えのない問いに対し多角的に考える力が養われた。また、EE では、物理の研究を通じて大学での論文作成に通じるスキルを習得した。進路選択においては、当初志望していた建築系では IB 入試を実施しているところが少なかったため、自身の強みである数学や統計を活かせる現在の学科へと希望を変更した。総合型選抜で入学を果たした。入学後の学業面では、IB で履修した数学の高度な内容が予習となっており、講義の理解やレポート作成において有利に働いている。一方で、感覚的に習得してきた英語については、日本の大学で求められる文法中心の学習に違和感を覚えている。加えて、暗記が重視される化学の授業の場面でもギャップを

感じ、高校の教科書で補うなどの工夫が必要であった。しかし、CASを通じて克服したコミュニケーションへの苦手意識が、教授へ積極的に質問に行く姿勢につながっている。また、IBにおける課題の多さから培われた時間管理能力を活かし、学業と部活動、アルバイトを両立させている。

Eさん

Eさんは、現在国立大学で外国語・地域研究を学ぶ3年生である。リベラルアーツ的な環境の方が合っているのではないかという保護者の判断で中学からIB校に進学した。Eさんは自ら博物館などに足を運び、中学生の段階で強い関心を抱く地域や文化に出会い、自らの進路の方向性を早い時期に定めた。以降の学習や進路選択は一貫してその関心に基づいており、高校、大学での選択も「何を学び、将来どのように関わっていききたいか」という問いに沿って積み重ねられてきた。現在の大学生活において、Eさんは自身の関心を起点に学習を進めている。授業で扱われる内容について、必要だと感じた知識や背景は自ら補いながら理解を深めており、長文の読解やレポート作成、議論への参加に対して大きな負担は感じていない。Eさん自身は、反復的な学習では身につけにくい「急には伸びない能力」をこれまでの学習を通じて培ってきたという認識を持っており、その点が現在の学習を支えていると捉えている。一方で、日本の大学教育に特有の前提知識や、学生間で共有されている学習経験の違いに戸惑う場面が全くないわけではないが、それらは自分で調整しながら向き合うものとして受け止められている。また、Eさんは学びを教室内に限定されたものとは捉えていない。日常生活や学外活動、ボランティアなどの経験を通じて、地域社会や周囲との関わり、自身の行動がどのような影響を持つのかを意識する姿勢が続いている。現在の大学での学びは、これまで積み重ねてきた選択を確かめつつ、将来の進路や社会との関係を考えていくための過程として位置づけられている。

Fさん

Fさんは、現在、国立大学医学部医学科の1年生である。幼少期の海外経験から、受動的な学習スタイルに疑問を持ち、主体的な学びを求めてIBDPを選択した。IBでは、特にTOKや、9割が失敗に終わったというEEの実験プロセスを通じて、正解のない問いに向き合う力と学びに対する自主性を得た。医学部医学科受験においては、海外（ハンガリーやチェコ）の大学を一時検討したが、学習環境のリスクを考慮して国内大学に絞り、綿密な学習計画を遂行することで合格を勝ち取った。大学入学後は、数学や、IBで未履修だった物理の授業で苦労した。周囲の医学生レベルは相当高いという認識をもっており、先輩のIB修了生（医学部医学科所属）も、同様の認識を入学直後に抱いたと聞いている。しかし、教授や友人へ積極的に質問に行くなど、IBで培った行動力を発揮して乗り越え、単位を落とすことなく順調に履修できている。周囲には受験を終えて学習意欲が低下する学生もみられるなか、能動的な学習への姿勢を維持できていることが自身の強みであると感じている。例えば、必修履修の範囲だとディスカッションの場面はないが、英語科目を履修することでそのような機会に参加したり、大学1年生のうちから関心のある分野の学会に参加したりしている。将来は臨床医として働きつつ、自身のスポーツ経験に基づき再生医療の研究にも携わるという明確なビジョンをもっている。

Gさん

Gさんは現在、公立大学国際教養学部1年生である。高校からIBコースを履修し、それ以前に留学やIB経験はない。履修の背景には、幼少期から通っていた教会におけるバイリンガルな環境の影響があり、自然に国際的な環境への関心を抱いたことにある。IBコースがある高校を最初に紹介したのは母親であった。DPでは、「暗記ではなく自ら問いを立てる学習」への転換に直面し、教員の支援に依存せず主体的に学ぶ姿勢を身につけた。具体的には、「学ぶことに明確な意義を見つけられるようになった」と振り返っている。特にCASでは、フェアトレード・イベントの企画、SDGs関連大会への参加、ダンス活動などを通じて、興味関心と学習の境界を曖昧となり、「生活と学習が一体化していた」と感じる経験を重ねた。大学入学後は、在学中の留学を前提に設計された「英語集中プログラム」中心のカリキュラムのもとで学びつつ、前期GPA3.0を収めている。IBではTOEFLのような標準化英語テストの対策を重視しないため、入学後の英語テストでは対策不足という課題に直面した。一方で、IBで培ったレポート作成力や資料探索力は、大学での学習において明確な強みとなっている。また、ダンス部や環境クラブ（地域と連携した活動）、ビジネスコンテストへの参加など課外活動にも積極的であり、CASでの経験がリーダーシップ（まとめ役として）発揮に直結していると自己評価している。今後はリベラルアーツで幅広い学びを土台に、自身の関心分野を探究しつつ、実社会での活躍を視野に入れている。

Hさん

Hさんは私立大学進学の後、海外（アジア）の大学へ進学した。DP在学中は、授業におけるディスカッションを中心とした学習や、エッセイ・課題論文の作成を通して、自ら問いを立て、資料を収集・分析し、論理的に考えを構成して文章として表現する経験を重ねた。とりわけ、Extended Essayでは、限られた資料の中で研究を進める過程を通して、研究の進め方や情報探索の重要性を学んだと述べている。

大学進学にあたっては、IBの学習経験や成績を評価する入試制度を活用して進学した。国内大学では教育・人間科学系の学部にて在籍し、その後、海外の大学に進学してビジネス分野を学んでいる。大学で求められるレポートや論述課題においては、IBで培ったエッセイライティングの経験が活かされ、構成や論点整理において困難を感じることは少なかったと述べている。

また、授業内外でのディスカッションやデータの解釈を求められる場面では、IBでの学び方が有効であったと感じており、周囲の学生から意見を求められることもあったという。現在は、スポーツとビジネスを結びつけた分野への関心を持ち、大学での学びやインターンシップ、学外活動を通して将来の進路を具体化させている。

Iさん

Iさんは現在、私立大学教育学部に在籍する4年生である。幼少期に英語圏で学んだ経験を持ち、その後日本の公立学校での教育を経て、高校ではIBDPを修了した。探究的な学習への関心

から IB を選択した。在学中は、課題論文や探究活動に取り組む中で、自ら問いを立て、複数の視点から考え、それを文章としてまとめる経験を重ねたと振り返っている。

大学進学にあたっては、将来人に教える仕事に就きたいという希望から教育学部を志望し、IB での学びを評価する入試制度を利用して進学した。大学では教育学の基礎科目を履修する一方で、中高英語教員免許取得課程に取り組み、教育実習も経験している。大学で求められるレポートや論述課題においては、IB で培った論理的構成力や文章表現力が活かされているという。一方で、日本の学校英語教育に特有の授業の枠組みや文法用語になじむまでには時間を要したと述べている。しかしその過程で、IB での言語運用を重視した学び方について周囲から質問を受けることも多く、授業内で意見を求められる場面が見られた。現在は教員としての進路が決まっており、今後は教育現場での実践を通して学びを深めていきたいと考えている。

J さん

J さんは現在、私立大学国際教養学部 の 2 年生である。幼少期は日本在住ながら、国際教育を取り入れた小学校に通い、英語で学ぶ環境に早くから触れた。中学・高校では IB（国際バカロレア）校に進学し、学習面では従来型の「勉強」よりも、探究活動や課外活動、レポート作成に強みを見出していった。IB の学びの中では、特に EE（課題論文）で女性リーダーシップをテーマに研究した経験が印象深く、関心を明確化すると同時に、リサーチ力や論理的思考力の向上につながったという。また、CAS では体育祭実行委員長や学校説明会のプレゼン運営など、もともと行っていたリーダー的活動を発展させ、チームで役割分担しながら成果を出す経験を積んだ。IBDP 全体を通して、個人の努力だけでなく、仲間と支え合いながら学ぶ姿勢や、プレゼンテーション・言語化能力が身についたと振り返る。大学進学後も、これらの力は授業や課外活動で生かされており、将来はエグゼクティブコーチとして日本で働くことを目標に、学びを深めている。

K さん

K さんは、現在、国立大学工学部に所属する 3 年生である。高校受験時、地元の進学校における浪人率の高さやトップダウン式の教育への懸念から、主体的な学びと英語環境を求めて、IB 校（IBDP コース）を選択した。IB では、TOK での思考の言語化や、EE での物理実験のプロセスに充実感を得た。大学受験では、国公立大学への現役合格を目指し、IB 入試と並行して共通テスト対策も行う戦略をとった。大学入学後は、専門科目の学びに満足しているものの、特に数学において、IB では許可されていた関数電卓や公式集が使用できないことで難しさを感じた。このことから、強い覚悟がなければ、IB を選ばない方がよいとも考えている。一方で、IB で培った大量の文献を読み解く力や論文執筆への心理的ハードルの低さは、今後の研究活動における強みだと認識している。また、教養科目（人文系）のレベルの低さに物足りなさを感じるなど、日本の大学教育のカリキュラムに対して一部批判的な視点ももっている。卒業後は大学院へ進学することを見通している。

L さん

Lさんは現在、私立大学の総合政策系学部に在籍する2年生である。小学校から高校まで一貫して英語による教育を受け、中学校段階からMYPで学び、高校ではIBディプロマ・プログラムを選択した。DPでは、すべての授業や課題が第二言語である英語で行われる環境に強い負荷を感じつつも、探究的な学びを通して、リサーチ力、批判的思考力、論理的に考え抜く力を身につけたと述べている。大学では、情報・データ分析・社会課題を横断的に扱う授業やプロジェクト型学習に取り組んでおり、課題に対して前提を問い直し、複数の視点から検討する姿勢が自然に身についているという。特に、既存の情報を整理するだけでなく、「なぜそうなるのか」を掘り下げて問いを立て、仮説を検証するプロセスにおいて、IBで培った探究経験が生かされていると感じている。一方で、大学の成績評価や授業形式は、IBで経験した思考過程を重視する学びとは異なる側面もあり、考える力そのものが直接評価される機会は多くないと感じている。しかし、そうした環境の中でも自ら学びを深める姿勢を保ち、グループワークでは他者の意見を取り込みながら議論を再構成する役割を担っている。

Mさん

Mさんは、現在、国立大学教員養成系の1年生である。小学校段階から、英語教育に力を入れる環境で育った。IBDPでは、文理両方の進路を視野に入れつつ数学AAをHLで履修し、他方EEでは、特定の文学作品をテーマに執筆した。高校生の時に出会った教員の影響で、同じく教員を志し、現在の所属大学へIB特別選抜を経て入学した。大学入学後、IBの日本語Aでは扱わなかった古典文法（古文・漢文）の知識不足に直面したが、大学の丁寧な授業により克服し、現在のところ（1年前期の段階で）単位を落とすことなく優秀な成績を収められている。学習面では、周囲の学生の発言の少なさや主体性の低さに驚きを感じている。一方で自身は、IBで培った自己表現力や思考力を活かし、受動的な講義に不満を抱くだけでなく、図書館の活用や教員への質問など能動的に学ぶ姿勢を維持している。正課外でもIB関連の自主ゼミに参加するなど、意欲的に学んでいる。

Nさん

Nさんは、現在、国立大学医学部医学科の3年生である。親の仕事（移動）に伴い、幼少期から海外複数国で生活し、小学2年生からIB教育を受けてきた。日本に帰国後、IBDPコースに入り、医学部医学科進学を見据えて生物、化学、数学AAをHLで履修した。また、EEでは、スーパバイザーの支援のもと菌の繁殖抑制に関する実験に取り組んだ。受験においては、イギリスの大学も併願したが、将来のキャリア（日本での就職）や学費を考慮して国内大学を選択した。IBの学習と並行して、イギリスの大学進学のための試験の対策を行うことが最大の困難であった。大学入学後は、英語で学んだ専門用語を日本語へ置き換える苦労を感じた。関数電卓が使用できない数学の試験形式に戸惑いもあった。しかし、IBで培った自律性とタイムマネジメント能力を活かし、膨大な暗記量を要する学習にも適応し、高いGPA（優秀な成績）を維持している。単に成績が良いという理由で医学部に入学した学生も周囲にはいるが、自身については、IBでの探究を通じて醸成された明確な目的意識が学習意欲の維持につながっていると振り返る。CASで

培った挑戦心をもち、早期から研究室配属プログラムに参加するなど、正課外でも能動的に活動している。

Oさん

Oさんは現在、私立大学国際教養学部1年生である。国内の公立小中学校を経て、私立高等学校でIBディプロマ・プログラム（DP）を履修し、最終スコア42点で修了した。履修の背景には、中学生の頃、コロナ禍で登校機会が限られる中、自ら英語学習を進めた経験が転機となり、従来型の「決まりきった授業」や暗記中心の学習に疑問を抱くようになったことがある。学校への登校意欲も低下した時期もあったが、そのような中で科目を主体的に選び、探究的に学ぶIBの学習観に魅力を感じたという。実際、進学後のIBコースの学習環境は非常に刺激的であり、周りの学習意欲も高く、本人の履修満足度も高い。大学進学にあたっては海外大学も検討したが、高額な学費負担や専門分野への早期コミットメントへの迷いから、幅広い学びの中で将来の専攻を選択できる国内のリベラルアーツ系学部を選んだ。IBを学習したことの効果として、批判的思考力、情報収集とエッセイ執筆のスキル、「勉強することが日常化したこと」の3点を挙げている。大学入学後は英語ライティングや統計などを履修し、前期GPA4.0という非常に高い成績を収めている。大学の学びにおいては、アカデミック・ライティング、資料探索、課題に向けた計画的学習の面でIBの学習経験が直接的に活きていると評価している。将来的には、マーケティング分野に関心を寄せており、今後予定している英国留学を通して、海外で働くことの現実性を見極めたいと考えている。

Pさん

Pさんは、現在、私立大学で法学を専攻する1年生である。母親の勧めで、小学2年生から英語を重視する教育を受けてきた。IBDPでは、理系科目を得意としながらも、法への強い関心から、未履修科目である歴史でEEを執筆するなど、バランスよく主体的に学びを深めた。IBを通じて批判的に考える力（疑う力）やタスク管理能力を身につけた。一方で、精神的に苦しかったとも振り返り、IBの経験を「ハイリスク・ハイリターン」であったと総括している。IBDPを修了できずに（24点を取得できずに）終わる友人もいたことから、やはりその厳しさも強調している。大学受験では、海外の治安への懸念から国内進学を選択し、法曹以外のキャリアの多様性に魅力を感じて現在の所属大学を志望した。入学後、法学部では全員が初学者となるため、他学部でみられるようなカリキュラムのギャップによる学習困難は感じていない。実定法学のような暗記中心の科目ではIBで培った疑う力を活かしにくい一方、法哲学などの基礎法学ではTOKで学んだ思考プロセスが役立っている。

Qさん

Qさんは、DPでは「言語A（英語）」（HL）を自ら進んで履修し、英語による論理的な思考を身に付けられたと語る。それとともに、DPの課題が多かったため、同時並行で物事を進める力が身についたと語る。

一方、進路選択時には芸術系大学（音楽）に行きたい思いもあったが、DP の課題との両立が難しく、最終的には私立大学の国際教養系学部に進学する。大学卒業後の進路として、IB 教員養成課程を設置する大学院進学を視野に入れており、将来的には DP の英語科教員になりたいと語る。

大学では、歴史や生物に関連した学術的な話についていけない、といった感覚をもっている。その背景として、高校 1 年時に必修科目として当該科目を受講したが、DP の科目としては履修していないことによる。このことにより、同級生と比較して知識がないと感じる。加えて、数学の知識が乏しいという実感があり、特に微分・積分は少し学習した程度という認識をもっており、やや苦手意識をもっている。ただし、Q さんは「いまは学び直している」という表現を用いて、大学生になっても自ら学習にキャッチアップしていこうという姿勢がうかがえる。

Q さんは、大学生活で困りごとがある際には、DP 修了生の仲間に相談するという。なぜなら、たいていの困りごと等の話について共感してくれるから、と語る。

Q さんは、DP 修了生の優位性として、英語関連の学問的な話や外国人との会話には自信があると語る。加えて、授業内の議論はクラスメートよりも積極的であり、他者と協力しながら情報収集したり、課題に取り組んだりといった力には自信があると語る。また、Q さんが取り組んでいる大学内外での活動（例えば海外での支援活動）について、DP での学習のおかげで、自分で活動に意味づけしたり、価値づけしたりしながら取り組む姿勢が身についていると語る。

(4) 考察

大学生調査の結果、IB 修了生は、IBDP を通じて培ったと自己認識する能力を、大学での学習において概ね有効に活用していることが確認された。インタビューから得られた知見は、主に以下の三点に集約される。

第一に、アカデミック・スキルの転移である。EE や TOK を通じて習得された論文執筆能力や批判的思考力は、文系・理系を問わず、大学でのレポート作成や探究的な学習場面において、明確なアドバンテージとして認識されていた。

第二に、カリキュラムおよび学習文化のギャップの存在である。多くの対象者が、入学直後に何らかの学習上の障壁に直面していた。具体的には、理系科目における関数電卓や公式集の使用の可否に伴う困難、および人文学領域における知識量の不足などが挙げられる。また、暗記を中心とする試験形式や、周囲の学生の受動的な学習態度に対して、IB での探究的な学習観との齟齬を感じる事例もあった。

第三に、自律性による困難の克服である。IB 修了生は、上記のギャップを、IB で培った主体的に学ぶ姿勢によって乗り越える傾向にある。彼らは、不足する知識やスキルを自律的に補うだけでなく、教員への積極的な質問や、正課外活動への参加を通じて、自身の学びを主体的に豊かにしようと試みていた。

(文責：江幡)

4) 今後の見通し

今後の研究の計画については、以下のとおりである。

①国内外の大学での IB を活用した入試に関する実態調査（先行研究及びデータ収集・整理）

2026 年度は、2025 年度に引き続き、国内外の大学における IB を活用した入試に関する先行研究の検討や情報収集・整理を進める。また、「国際バカロレアを活用した大学入学者選抜例一覧」の情報をレビューし、必要に応じてアップデート作業を行う。また、情報収集・整理と並行して、インタビュー調査へ向けた調査項目の準備を進める。また、可能な範囲で予備調査を実施し、それに基づいて調査項目の再検討を行う。

②IB を活用した入学者選抜の形態・方法・要件・出願時期・入試時期・国内・国外別の出願状況に関する調査（国内における IB を活用した入試を実施する大学への訪問調査）

2026 年度は、2025 年度から引き続き、国内における IB を活用した入試を実施している大学へのインタビュー調査を実施する。基本的には訪問調査を実施する予定であるが、適宜オンライン会議システムも活用し、オンラインでのインタビュー調査も実施する。

また、2026 年 4～2027 年 1 月にかけて、イギリスをはじめとする諸外国の大学における IB を活用した入試に関する訪問調査を実施する。詳細については、次年度（2026 年度）の報告書において報告する予定である。

さらに、2026 年度は、引き続き、IB を活用した入試を実施している大学へのインタビュー調査を実施する。また、前年度の調査から明らかになった項目について整理するとともに、今日の日本における IB を活用した入試の現状と課題について、更なる活用に向けた示唆について、学会・シンポジウムでの報告や論文としての発信を積極的に進める。

③国内外の大学での IB を活用した入試に関する実態調査（国内における IB を活用した入試を実施する大学への訪問調査及び全体総括）

2027 年度は、引き続き、IB を活用した入試を実施している大学へのインタビュー調査を実施する。また、2023 年度から進めてきた調査研究（今日の日本における IB を活用した入試の現状と課題等）について、全体総括を行い、学会・シンポジウムでの報告や論文としての発信を積極的に進める。

④国内において IB 校を有しているが、県内大学において IB 入試を実施していない県及び自治体の教育委員会への聞き取り調査について

2026 年度より、IB 校を有しているが、県内大学において IB 入試を実施していない県及び自治体の教育委員会関係者等に対して、IB 入試に対する認識や今後県内の大学において IB 入試を推進する予定があるのか、IB 入試を導入することに対する懸念や課題等について聞き取り調査を実施する。

（文責：花井）

5) 筑波大学における Faculty Development (FD) 報告

(1) FD 概要

FD 名：「筑波大学における国際バカロレア (IB) 特別入試の意義と展望—IB の学びが大学での学修にもたらすもの—」

主催：教育学学位プログラム

日時：2025 年 7 月 10 日 (木) 15:15-16:40

場所：筑波大学 総合研究棟 A110 (オンライン併用)

対象：筑波大学教職員 (特に入試業務担当者)

基調講演登壇者：藤井さやか(システム情報系・教授)

報告登壇者：島田康行(人文社会系・教授/アドミッション・センター)、梅津静子 (人間系・助教)、松崎秀彰(茗溪学園中学校高等学校・教諭)

(2) FD 趣旨

筑波大学は IB 入試を導入して 10 年が経過し、その過程で様々な試行錯誤が重ねられた。さらに、令和 5 年度より文部科学省・国際バカロレアに関する国内推進体制の整備事業として調査研究業務を受託した。本調査を通して、IB 生の大学入試の課題が多く浮かび上がってきた。

本 FD は本学が実施する IB 入試の現状と課題、そしてこの入試がもつ意味や文部科学省及び IB 校から寄せられる期待を確認するとともに、IB での学修やスコアの意味について理解を深めることで、本学における IB 入試の今後を考えることをねらいとする。

(3) 基調講演概要

講演題名：「IB の学びと大学での学修」

講演者：藤井さやか

概要：自身がイギリスのユナイテッドワールドカレッジ (UWC) で、英語で実施された授業や様々な社会奉仕活動を通して、自分なりの興味や問いをもって学ぶ姿勢が培われ、大学の学びの基礎を身に着けることができた と述べた。UWC を卒業した後、筑波大学に入学し、そこでの体験を共有した。さらに、UWC から筑波大学に進学した他の学生もそれぞれの分野で活躍している様子を報告した。また、自身の子どもたちも IB プログラムが提供されている学校に入学し、彼らの IB 経験から、Creativity, Action, Service (CAS) を通した地域貢献、行動力や交渉力、主体的な学び、批判的思考が育成できたと述べた。上記より、大学が求める学生像と IB の学習者像は親和性が高いことを述べ、IB と大学教育の接続の強化を主張した。その入試の再構築として、IB をはじめとした様々なグローバル入試の拡大、点数だけではない学習過程や学習経験を含んだ評価の多様化、大学の受け入れ体制の整備などの必要性を報告した。

(4) 報告概要

報告①

報告題名：「IB 入試導入の意図と実施上の課題」

報告者：島田康行

概要：2014 年より開始した筑波大学の国際バカロレア特別入試 (IB 入試) の導入にあたっては、主体的に学ぶ力を持つ学生の選抜をめざし、コミュニケーション能力や探究心をはじめとした社会課題に向き合う力を評価したことを述べた。また、これまでの IB 入試の課題を報告した。具体的には合格者数の伸び悩み、従来の日本の入試文化との違いによる入学辞退率の高さ、ディプロマ・プログラム (DP) の予測スコアと確定点の評価の難しさ、「若干名」募集における合格人数の調整の難しさなどが課題としてあげられた。そこで、2022 年に入試方法を一部変更し、DP 取得者を対象とする 7 月出願と、DP 取得者・取得見込み者の両方を対象とする 11 月出願に分けて実施するとともに、11 月出願を推薦入試の時期に合わせることで、志願者・合格者ともに倍増したことを報告した。今後の課題として、IBDP の予測スコアの評価方法の確立などが残ることを報告した。

報告②

報告題名：「IB ディプロマ・プログラムの評価プロセス」

報告者：梅津静子

概要：IBDP の基本情報を説明し、特にその評価方法に着目した。IBDP は 6 科目をそれぞれ 1～7 の成績で評価し、コア科目を 3 点換算で評価することで、最大 45 点のプログラムとなっている。IB の評価では、公平性、比較可能性、信頼性、学びの真正性、運用可能性が重要な要素として挙げられている。評価は内部評価と外部評価を組み合わせたものであることが特徴的である。内部評価は学校の教師が担当し、第三者による適正化が行われる。一方で外部評価は最終試験という形式で IBO の採点官が厳格な採点プロセスで評価を行う。評価の特徴として、学びのプロセスを重視している点が挙げられる。最終成績はグレードバウンダリーに基づき付与される。グレードバウンダリーは、年度毎に生じる試験の難易度の違いに対応しており、上記を通して、公平性や比較可能性を確保することが目指されていることを報告した。

報告③

報告題名：「IB 校からみた筑波大学の IB 入試」

報告者：松崎秀彰

概要：筑波大学 IB 入試の現状を IBDP 教員の視点から報告を行った。筑波大学の IBDP 入試は、他大学と比べて合格基準が高く、「難しい」という印象が強いと述べた。その入試方法の課題として、予測スコアと最終スコアの差異による合否判定への影響、学類別の合格基準の違いや面接における専門的な質問に対する対策の難しさ、予測スコアの重視から最終スコアが減点要素としてのみ利用されている課題があげられた。生徒の状況として、40 点取得者は海外有名大学へ、35 点前後は国内外の大学へ進学する傾向があることを報告した。上記の状況を通し、筑波大学の IB 入試の改善点として、35 点以上取得した生徒の合格基準の緩和、最終スコアを評価に含めた入試方法、試験方法の柔軟化を提案した。

(5) 参加者の感想

参加者は IB 教育全般の理解が深まり、大学視点からの IB 入試の意義や課題についてよりよく理解することができたと感想を述べた。また、受験生を送り出す高校側からの実情について学ぶことができ、筑波大学の IB 入試が「難しい」ことが参加者の印象に残った。今後の IB 入試充実に向け、筑波大学の入試関係の教職員が IB 教育についてより知識を深めるべきだという意見がみられた。

(文責：梅津)

2-4. 基礎調査（学校調査）

1) 調査の概要

本調査の目的は、日本のIB校（一条校）に対する実態調査を実施し、基礎的データを収集・蓄積することである。調査対象は、ディプロマ・プログラム（DP）、中等教育プログラム（MYP）、初等教育プログラム（PYP）を実施する一条校とする。

文部科学省IB教育推進コンソーシアム事業において、DP校を対象とした実態調査が2019年に実施されており、「デュアルランゲージ・ディプロマ・プログラムに関するアンケート調査結果」として公表されている。この先行調査を参照しつつ、調査項目を精査し、質問紙を開発した。また、これまではDP校のみが対象であったが、IB校の拡大状況を踏まえ、調査対象をMYP校、PYP認定校の一条校に拡大した。なお、2024年度に実施した調査の結果は文部科学省IB教育推進コンソーシアムホームページにて公開されている。2024年度の研究調査報告書を参考にしつつ、質問項目や集計結果を一部改善している。

本調査において、全国のIB校に依頼した質問紙調査の調査票は、巻末資料を参照のこと。

2) 進捗報告

11月25日（火）、12月5日（金）、12月23日（火）、国内のIB校に調査票のフォームリンクまたはメールにて送信した。内訳は以下の通りである。

PYP：22校（幼稚園10校、小学校12校）、MYP：22校、DP：44校

3月31日（月）の時点での回収状況は以下の通りである。

PYP：21校（幼稚園9校、小学校12校）、MYP：22校、DP：41校

※2025年度からDP開始の高校は今回の調査対象に含まれていない。

3) 今後の見通し

引き続き、調査票の回収を進める。また、今後の生徒調査、教員調査、大学調査を進める上で必要となる基礎的分析を行う。

（文責：アクトルケン）

2-5. 基礎調査（大学調査）

1) 調査の概要

本調査は、今後の日本における国際バカロレア（IB）推進のための施策立案・改善等に向けた調査の基礎資料とするために、日本国内において IB を活用した入試を実施している大学に対して、入試区分、募集人員、対象学部、対象者、出願資格や求める IB スコア基準等を含む、基礎情報を収集、整理することである。

本調査では、「(1) 公開情報」と「(2) 非公開情報」の 2 種類の基礎情報を収集する。(1) 公開情報については、文部科学省 IB 教育推進コンソーシアムのホームページに情報を掲載する（国際バカロレアを活用した大学入学者選抜例一覧／<https://ibconsortium.mext.go.jp/about-ib/entrance-exam/>）。また、(2) 非公開情報の回答データは、統計的に処理し、大学名や個人を特定できるかたちで公表はせず、今後の大学を対象とした調査実施の際の基礎データとし、報告書及び学会発表・論文等において公表する可能性があるものとして、収集・分析を行う。

2025 年度も引き続き、株式会社トモノカイに IB を活用した大学入学者選抜の実施状況に関する基礎調査の実施を依頼した。なお、本調査において、全国の大学に依頼した質問紙調査の調査票は、巻末資料を参照のこと。

巻末資料

【質問紙およびインタビューガイド】

1. AY2024_高校 3 年生対象質問紙
2. AY2025_高校 2 年生対象質問紙
3. AY2025_修了生プロジェクトインタビューガイド
4. AY2025_修了生プロジェクト事前アンケート用紙
5. 基礎調査(大学調査)調査依頼書
6. 基礎調査(IBを活用した大学入学者選抜)調査票
7. 国際バカロレア(IB)を活用した入試概要

【集計結果】

1. AY2024_高校 3 年生集計結果【全体】
2. AY2024_高校 3 年生集計結果【DP 生全体】
3. AY2024_高校 3 年生集計結果【non-DP 生全体】
4. AY2025_高校 2 年生集計結果【全体】
5. AY2025_高校 2 年生集計結果【DP 生全体】
6. AY2025_高校 2 年生集計結果【non-DP 生全体】

【高校3年生対象】

高校での学習・経験に関する調査

※質問1. (2) 学籍番号（生徒番号）の記入については、先生の指示に従ってください。

※質問文でとくに指定がない場合は、選択肢の中からもっともあてはまる番号に○をつけてください。

質問1. あなた自身のことをうかがいます。

(1) ____年 ____組 ____番

(2) 学籍番号（生徒番号） _____

(※(1)、(2)の欄は今後、追跡調査を行う際に照合するためだけに使用します。)

(3) 性別 ()

(4) あなたは現在、ディプロマプログラム（DP）を履修していますか。

1. 履修している（フル・ディプロマの取得を目指す）
2. 履修している（科目履修生／サーティフィケートの取得を目指す）
3. 履修していない

(5) 以下の項目の中で、あなたが経験した学校や教育プログラムはありますか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

- | | |
|--------------------------|--------------------------|
| 1. インターナショナル・スクール（日本） | 2. インターナショナル・スクール（海外） |
| 3. 海外の現地校 | 4. 海外の日本人学校 |
| 5. 国際バカロレア初等教育プログラム（PYP） | 6. 国際バカロレア中等教育プログラム（MYP） |
| 7. あてはまるものはない | |

質問2. あなたは以下の態度や状況にどのくらいあてはまると思われますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

- | | まったく
あてはま
らない | あまり
あてはま
らない | どちら
とも
いえない | やや
あて
はまる | とても
あて
はまる |
|--------------------------------------|---------------------|--------------------|-------------------|-----------------|------------------|
| (1) 知らないことがあると、よく質問をしったり調べたりする ----- | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| (2) 自分はどのような人間かを考えることがよくある ----- | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| (3) 社会のことをよく勉強している ----- | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| (4) 自然や環境のことをよく勉強している ----- | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| (5) 学校とは関係なく自分から勉強する習慣ができている ----- | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| (6) 問題が起きたときにはその理由を理解しようとする ----- | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| (7) 問題を解決するために自分ができることを考える ----- | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| (8) 課題があれば自分で解決しようとする ----- | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| (9) 他の人の気持ちや考えを十分に理解することができている ----- | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| (10) 自分の気持ちや考えを十分に表現することができている ----- | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |

	まったく あてはま らない	あまり あてはま らない	どちら とも いえない	やや あて はまる	とても あて はまる
(11) 何かををするときに周囲の人を誘うことがよくある -----	1	2	3	4	5
(12) 他の人たちと協力してチームで行動することができる -----	1	2	3	4	5
(13) チームの中で自分の果たすべき役割を率先して行っている -----	1	2	3	4	5
(14) 自ら目標を設定し、その達成のために行動することができている --	1	2	3	4	5
(15) グループの目的を示し、グループの人たちを 効果的に行動させることができる -----	1	2	3	4	5
(16) 学校や社会の規則を守っている -----	1	2	3	4	5
(17) 自分の良心や従うべきルールを持ち、 それに基づいて行動している -----	1	2	3	4	5
(18) 自分の行動に責任をとることができる -----	1	2	3	4	5
(19) 他の人は自分と違う意見を持っていることを理解している -----	1	2	3	4	5
(20) 世の中には色々な価値観や文化があることを理解している -----	1	2	3	4	5
(21) 困っている人を助けることがよくある -----	1	2	3	4	5
(22) いつも新しいことに挑戦している -----	1	2	3	4	5
(23) いつも何か新しいことを生み出そうとしている -----	1	2	3	4	5
(24) 自分の能力を有効に使うことができている -----	1	2	3	4	5
(25) 健康的な生活に注意している -----	1	2	3	4	5
(26) 体力・身体づくりをしている -----	1	2	3	4	5
(27) 自分で計画を立て、それに従って物事を進めることができている --	1	2	3	4	5
(28) 社会や学校の一員としての義務と権利を認識している -----	1	2	3	4	5
(29) 社会、学校などの周囲をよくするために積極的に関わっている ----	1	2	3	4	5
(30) 自分の周りに変化が起きてもうまく適応できている -----	1	2	3	4	5
(31) ストレスを感じるがあっても リラックスして前向きにとらえることができている -----	1	2	3	4	5
(32) 自分の態度や行動の正しさを確認することがよくある -----	1	2	3	4	5
(33) 自分の態度や行動をよりよいものにしようと努力している -----	1	2	3	4	5

質問 3. これまでに受けた高校の授業の中で、あなたは次のような活動をした経験がありますか。
各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

	まったく ない	あまり ない	ときどき	よく ある	いつも
(1) 先生の話から知識を得る -----	1	2	3	4	5
(2) 教科書を中心に学ぶ -----	1	2	3	4	5
(3) 探究したい課題について問いを立てる -----	1	2	3	4	5
(4) プロジェクト(探究・調査・実験・発表会)の計画を立てる -----	1	2	3	4	5
(5) 図書室を利用して資料や文献を探す -----	1	2	3	4	5
(6) 情報を得るとき、情報源の信頼性を確認する -----	1	2	3	4	5
(7) 英語で書かれた情報を収集する -----	1	2	3	4	5
(8) 自分と異なる立場や見方をもつ人の意見を聞く -----	1	2	3	4	5
(9) 本を一冊読む -----	1	2	3	4	5
(10) グループで協力して活動する -----	1	2	3	4	5
(11) 海外で起こった出来事や課題について考える -----	1	2	3	4	5
(12) あるテーマについて論述文(作文・エッセイ)を書く -----	1	2	3	4	5
(13) 学習の中で多様なメディア(新聞・映像・音楽など)に触れる -----	1	2	3	4	5
(14) 学習の成果を社会に発信する -----	1	2	3	4	5
(15) 自分が取り組んだプロジェクト(探究・調査・実験・発表会) のよかった点や課題を整理する -----	1	2	3	4	5
(16) 一問一答の問題を解く -----	1	2	3	4	5
(17) 用語や出来事を暗記する -----	1	2	3	4	5
(18) 作文・エッセイ・発表などへのフィードバックを受ける -----	1	2	3	4	5

質問 4. 高校生活の中で、あなたはどの程度意欲的に次のような活動に参加していますか(参加していましたか)。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

	まったく あてはま らない	あまり あてはま らない	どちら とも いえない	やや あて はまる	とても あて はまる
(1) 生徒会・委員会活動への参加 -----	1	2	3	4	5
(2) 部活動・クラブ活動への参加 -----	1	2	3	4	5
(3) 学校行事(体育祭・文化祭等)への参加 -----	1	2	3	4	5
(4) 授業外でのプロジェクト・探究活動への参加 -----	1	2	3	4	5
(5) ボランティア活動への参加 -----	1	2	3	4	5
(6) 海外との交流活動への参加 -----	1	2	3	4	5
(7) 留学(短期・長期・交換等) -----	1	2	3	4	5

質問 5. 学期中の平日（月曜～金曜）放課後の学習時間（＝1 日あたりの平均）と学習内容を教えてください。

※時間は 10 分や 30 分の単位でおおまかに回答してください。

※時間あるいは分が 0 の場合は、空欄ではなく、例のように（ ）内に 0 を記入してください。

例) 「およそ（ 0 ）時間（ 40 ）分」、「およそ（ 2 ）時間（ 0 ）分」など。

(1) 1 日あたりの放課後の学習時間： およそ（ ）時間（ ）分

(2) 1 日あたりの放課後の学習時間のうち、①～⑤の時間配分を教えてください。

①高校の授業の予習、復習、課題(問題を解くなど)	およそ（ ）時間（ ）分
②塾・予備校の予習、復習、課題(問題を解くなど)	およそ（ ）時間（ ）分
③調べ学習、探究・プロジェクト活動、課題論文	およそ（ ）時間（ ）分
④大学受験の準備(過去問を解く、小論文を書くなど)	およそ（ ）時間（ ）分
⑤資格試験に向けた勉強(英検、TOEIC、漢検など)	およそ（ ）時間（ ）分

質問 6. あなたの高校の成績と英語運用能力に関する資格について教えてください。

(1) あなたの現在の成績は、学年でどのくらいですか。

1. 下のほう

2. まんなか

3. 上のほう

(2) あなたが現在取得している英語運用能力に関する資格を教えてください。あてはまる番号に○をつけ、級やスコア等を記入してください。

1. 英検（実用英語技能検定）（級： ）
2. TOEFL（スコア： ）
3. TOEIC（スコア： ）
4. IELTS アカデミック・モジュール（スコア： ）
5. その他（具体的に： ）（スコア等： ）
6. 資格は取得していない

質問 7. あなたは現時点で、以下のことが、どのくらい身についていると思いますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

身に あまり どちら やや 身に
ついて 身について とも 身について について
いない いない いえない いる いる

- | | | | | | | | | | | |
|-------------------------------|-------|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|
| (1) 興味のある対象について深く学習し、理解する姿勢 | ----- | 1 | --- | 2 | --- | 3 | --- | 4 | --- | 5 |
| (2) 人文・社会・自然科学を横断する幅広い知識 | ----- | 1 | --- | 2 | --- | 3 | --- | 4 | --- | 5 |
| (3) 困難な課題に取り組む力 | ----- | 1 | --- | 2 | --- | 3 | --- | 4 | --- | 5 |
| (4) 他者と意思疎通をはかり人間関係を構築する能力 | ----- | 1 | --- | 2 | --- | 3 | --- | 4 | --- | 5 |
| (5) 自分の良心や社会の規範に沿って行動する力 | ----- | 1 | --- | 2 | --- | 3 | --- | 4 | --- | 5 |
| (6) 人や社会によって違った考えや文化があることへの理解 | ----- | 1 | --- | 2 | --- | 3 | --- | 4 | --- | 5 |
| (7) 他者を尊重し、ともに行動する力 | ----- | 1 | --- | 2 | --- | 3 | --- | 4 | --- | 5 |

	身に ついて いない	あまり 身について いない	どちら とも いえない	やや 身について いる	身に ついて いる
(8) 予測不可能な事態に直面しても挑戦する姿勢	1	2	3	4	5
(9) 自分の生活と自然や社会とのつながりの理解	1	2	3	4	5
(10) 自分の行動を評価し、次に生かす力	1	2	3	4	5
(11) 問題が起きたときに解決する力	1	2	3	4	5
(12) 自ら率先して行動する力	1	2	3	4	5
(13) 自分自身で計画立て、それに基づいて実行する力	1	2	3	4	5
(14) 情報を処理し、活用する力	1	2	3	4	5
(15) 地域社会の一員としての自覚	1	2	3	4	5
(16) 日本社会の一員としての自覚	1	2	3	4	5
(17) グローバルな社会の一員としての自覚	1	2	3	4	5
(18) チームで協力して行動する力	1	2	3	4	5
(19) リーダーシップの能力	1	2	3	4	5
(20) 「国語(現代文、古典等)」に関する能力	1	2	3	4	5
(21) 「社会科(歴史、地理、公民等)」に関する能力	1	2	3	4	5
(22) 「数学」に関する能力	1	2	3	4	5
(23) 「理科(物理、化学、生物、地学等)」に関する能力	1	2	3	4	5
(24) 「外国語(英語等)」に関する能力	1	2	3	4	5
(25) その他の教科(芸術、体育、専門等)に関する能力	1	2	3	4	5

質問8. あなたは、あなたの現在や将来についてどのように考えていますか。

	まったく そう思わ ない	あまり そう思わ ない	どちら とも いえない	やや そう 思う	とても そう 思う
(1) 学校生活について					
① 学校の授業などを通じた <u>今の自分の学習</u> に満足している	1	2	3	4	5
② これまでの学校での学習やさまざまな経験で得られた <u>今の自分の能力</u> に満足している	1	2	3	4	5
③ <u>高校生活全体</u> に満足している	1	2	3	4	5
(2) 将来について					
① 将来、 <u>学びたい分野</u> について考えている	1	2	3	4	5
② 将来、 <u>行きたい大学</u> について考えている	1	2	3	4	5
③ 将来、 <u>やりたい仕事</u> について考えている	1	2	3	4	5

質問 9. あなたの進路と将来の展望について教えてください。

(1) あなたは高校を卒業後、どのような進路を希望していますか。もっとも当てはまるものから番号を選択してください（第一希望だけでも可）。

第一希望 () 第二希望 ()

1. 国内大学（国公立）への進学
2. 国内大学（私立）への進学
3. 海外大学への進学（私費）
4. 海外の大学への進学（奨学金等の経済支援が前提）
5. 未定・わからない
6. その他（具体的に記入してください：_____）

(2) あなたはどの専門分野に進みたいですか。もっとも当てはまるものから番号を選択してください（第一希望だけでも可）。

第一希望 () 第二希望 ()

1. 人文・社会系 2. 理・工・農系 3. 医・歯・薬・獣医学系
4. 看護・保健・衛生系 5. 教育・家政・福祉系 6. 芸術・スポーツ系
7. その他（具体的に記入してください： ）

(3) 質問9(1)で「1. 国内大学（国公立）への進学」「2. 国内大学（私立）への進学」と回答した方にうかがいます。あなたが現段階でもっとも希望する大学等に進学するとき、どのような区分の入試を受けるつもりですか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

1. 大学入学共通テスト
2. 一般選抜（前期課程・後期課程）
3. 特別入試（学校推薦型選抜（指定校・公募）・総合型選抜など）
4. 特別入試（国際バカロレア（IB）特別入試など）
5. その他（具体的に記入してください： _____）
6. まだ決めていない

(4) あなたは、大学入試対策として以下の取り組みをどの程度行っていますか。

		まったく ない	あまり ない	ときどき	よく ある	いつも
①	大学入学共通テストや一般選抜のための勉強をしている	1	2	3	4	5
②	英語運用能力等の資格試験に向けて勉強している	1	2	3	4	5
③	筆記試験(小論文やエッセイ)のための準備を行っている	1	2	3	4	5
④	口述試験(面接)のための準備を行っている	1	2	3	4	5

(5) 高校やその後の学習を通じて、あなたが将来やりたいことを教えてください。以下の欄に自由に記述してください（「とくにない」「わからない」場合には、「なし」と記入してください）。

[illegible]

質問 10. あなたの周囲の環境についておたずねします。

	まったく あてはま らない	あまり あてはま らない	どちら とも いえない	やや あて はまる	とても あて はまる
(1) 本やインターネット環境など家で学ぶ環境が十分にある -----	1	2	3	4	5
(2) 親や兄姉などの家族は普段からよく勉強を教えてくれる -----	1	2	3	4	5
(3) 普段から家族が本や新聞を読んでいるのをよく見る -----	1	2	3	4	5
(4) 親や保護者は自分の勉強のために必要なものを買ってくれる -----	1	2	3	4	5
(5) 勉強のためであれば親や保護者は積極的に援助してくれる -----	1	2	3	4	5
(6) 普段の生活の中でお金に困っていると感じることもある -----	1	2	3	4	5
(7) 親や保護者はあなたのやりたいことを応援してくれる -----	1	2	3	4	5
(8) 親や保護者は学校生活について相談に乗ってくれる -----	1	2	3	4	5
(9) 周りの同級生は授業に熱心に取り組んでいる -----	1	2	3	4	5
(10) 周りの同級生は普段からよく勉強を教えてくれる -----	1	2	3	4	5
(11) 家族とよく海外の経験や国際的な時事問題を話したりする -----	1	2	3	4	5
(12) 親や保護者が仕事などで英語などの外国語を使っている -----	1	2	3	4	5
(13) 友達とよく海外の話題(SNS、音楽など)を話したりする -----	1	2	3	4	5

質問は以上です。ありがとうございました。

【高校 2 年生対象】

高校での学習・経験に関する調査

※質問 1. (2) 学籍番号（生徒番号）の記入については、先生の指示に従ってください。

※質問文でとくに指定がない場合は、選択肢の中からもっともあてはまる番号に○をつけてください。

質問 1. あなた自身のことをうかがいます。

(1) ____年 ____組 ____番

(2) 学籍番号（生徒番号） _____

(※(1)、(2)の欄は今後、継続的な調査を行う際に照合するためだけに使用します。)

(3) 性別 ()

(4) あなたは現在、ディプロマプログラム（DP）を履修していますか。

1. 履修している（フル・ディプロマの取得を目指す）
2. 履修している（科目履修生／サーティフィケートの取得を目指す）
3. 履修していない

(5) 以下の項目の中で、あなたが経験した学校や教育プログラムはありますか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

- | | |
|--------------------------|--------------------------|
| 1. インターナショナル・スクール（日本） | 2. インターナショナル・スクール（海外） |
| 3. 海外の現地校 | 4. 海外の日本人学校 |
| 5. 国際バカロレア初等教育プログラム（PYP） | 6. 国際バカロレア中等教育プログラム（MYP） |
| 7. あてはまるものはない | |

質問 2. あなたは以下の態度や状況にどのくらいあてはまると思われますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

- | | まったく
あてはま
らない | あまり
あてはま
らない | どちら
とも
いえない | やや
あて
はまる | とても
あて
はまる |
|---------------------------------------|---------------------|--------------------|-------------------|-----------------|------------------|
| (1) 知らないことがあると、よく質問をしたり調べたりする ----- | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| (2) 自分はどのような人間かを考えることがよくある ----- | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| (3) 社会のことをよく勉強している ----- | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| (4) 自然や環境のことをよく勉強している ----- | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| (5) 学校とは関係なく自分から勉強する習慣ができている ----- | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| (6) 問題が起きたときにはその理由を理解しようとする ----- | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| (7) 問題を解決するために自分ができることを考える ----- | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| (8) 課題があれば自分で解決しようとする ----- | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| (9) 自分の気持ちや考えを十分に表現することができている ----- | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| (10) 他の人の気持ちや考えを十分に理解することができている ----- | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |

		まったく あてはま らない	あまり あてはま らない	どちら とも いえない	やや あて はまる	とても あて はまる
(11) 他の人の異なる意見を受け入れて価値を認めることができる	-----	1	2	3	4	5
(12) 異なる考え方や意見を調整して物事を進めることがよくある	-----	1	2	3	4	5
(13) 何かをするときに周囲の人を誘うことがよくある	-----	1	2	3	4	5
(14) 他の人たちと協力してチームで行動することができる	-----	1	2	3	4	5
(15) チームの中で自分の果たすべき役割を率先して行っている	-----	1	2	3	4	5
(16) 自ら目標を設定し、その達成のために行動することができている	--	1	2	3	4	5
(17) グループの目的を示し、グループの人たちを 効果的に行動させることができる	-----	1	2	3	4	5
(18) 学校や社会の規則を守っている	-----	1	2	3	4	5
(19) 自分の良心や従うべきルールを持ち、 それに基づいて行動している	-----	1	2	3	4	5
(20) 自分の行動に責任をとることができる	-----	1	2	3	4	5
(21) 自分の態度や行動の正しさを確認することがよくある	-----	1	2	3	4	5
(22) 自分の態度や行動をよりよいものにしようと努力している	-----	1	2	3	4	5
(23) 他の人は自分と違う意見を持っていることを理解している	-----	1	2	3	4	5
(24) 世の中には色々な価値観や文化があることを理解している	-----	1	2	3	4	5
(25) 他の国の人々の生活習慣や考え方の違いを調べることがよくある	-	1	2	3	4	5
(26) 困っている人を助けることがよくある	-----	1	2	3	4	5
(27) いつも新しいことに挑戦している	-----	1	2	3	4	5
(28) いつも何か新しいことを生み出そうとしている	-----	1	2	3	4	5
(29) 自分の能力を有効に使うことができている	-----	1	2	3	4	5
(30) 健康的な生活に注意している	-----	1	2	3	4	5
(31) 体力・身体づくりをしている	-----	1	2	3	4	5
(32) 自分で計画を立て、それに従って物事を進めることができている	--	1	2	3	4	5
(33) 社会や学校の一員としての義務と権利を認識している	-----	1	2	3	4	5
(34) 社会や学校において、自分が行うべき役割を果たしている	-----	1	2	3	4	5
(35) 社会や学校などの周囲をよくするために積極的に関わっている	----	1	2	3	4	5
(36) 社会や学校において、周囲の人を助けたり協力することがよくある	-	1	2	3	4	5
(37) 自分の周りに変化が起きてうまく適応できている	-----	1	2	3	4	5
(38) ストレスを感じるがあっても リラックスして前向きにとらえることができている	-----	1	2	3	4	5

質問3. これまでに受けた高校の授業の中で、あなたは次のような活動をした経験がありますか。
各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

	まったく ない	あまり ない	ときどき	よく ある	いつも
(1) 先生の話から知識を得る -----	1	2	3	4	5
(2) 教科書を中心に学ぶ -----	1	2	3	4	5
(3) 探究したい課題について問いを立てる -----	1	2	3	4	5
(4) プロジェクト(探究・調査・実験・発表会)の計画を立てる -----	1	2	3	4	5
(5) 図書室を利用して資料や文献を探す -----	1	2	3	4	5
(6) 情報を得るとき、情報源の信頼性を確認する -----	1	2	3	4	5
(7) 英語で書かれた情報を収集する -----	1	2	3	4	5
(8) 自分と異なる立場や見方をもつ人の意見を聞く -----	1	2	3	4	5
(9) 本を一冊読む -----	1	2	3	4	5
(10) グループで協力して活動する -----	1	2	3	4	5
(11) 海外で起こった出来事や課題について考える -----	1	2	3	4	5
(12) あるテーマについて論述文(作文・エッセイ)を書く -----	1	2	3	4	5
(13) 学習の中で多様なメディア(新聞・映像・音楽など)に触れる -----	1	2	3	4	5
(14) 学習の成果を社会に発信する -----	1	2	3	4	5
(15) 自分が取り組んだプロジェクト(探究・調査・実験・発表会) のよかった点や課題を整理する -----	1	2	3	4	5
(16) 一問一答の問題を解く -----	1	2	3	4	5
(17) 用語や出来事を暗記する -----	1	2	3	4	5
(18) 作文・エッセイ・発表などへのフィードバックを受ける -----	1	2	3	4	5

質問4. あなたは、これまでの学校での探究型の学習（課題を設定して主体的に学ぶ）において、
どのような活動をして、自身のどのような点が成長した、または何が身についたと思いますか。
以下の欄に自由に記述してください。

※ 学習活動の内容は、○年生の××学習、○○プロジェクトでの××、クラブ活動での××など、具体的に
書いてください。回答は3つまでとし、すべて記入する必要はありません。

※ 「とくにない」「わからない」場合には、「なし」と記入してください。

学習活動の内容	成長した点や身についたこと

質問 5. 高校生活の中で、あなたはどの程度意欲的に次のような活動に参加していますか（参加していましたか）。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

	まったくあてはまらない	あまりあてはまらない	どちらともいえない	ややあてはまる	とてもあてはまる
(1) 生徒会・委員会活動への参加 -----	1	2	3	4	5
(2) 部活動・クラブ活動への参加 -----	1	2	3	4	5
(3) 学校行事(体育祭・文化祭等)への参加 -----	1	2	3	4	5
(4) 授業外でのプロジェクト・探究活動への参加 -----	1	2	3	4	5
(5) ボランティア活動への参加 -----	1	2	3	4	5
(6) 海外との交流活動への参加 -----	1	2	3	4	5
(7) 留学(短期・長期・交換等) -----	1	2	3	4	5

質問 6. 学期中の平日（月曜～金曜）放課後の学習時間（＝1 日あたりの平均）と学習内容を教えてください。

※時間は 10 分や 30 分の単位でおおまかに回答してください。

※時間あるいは分が 0 の場合は、空欄ではなく、例のように（ ）内に 0 を記入してください。

例)「およそ（ 0 ）時間（ 40 ）分」、「およそ（ 2 ）時間（ 0 ）分」など。

(1) 1 日あたりの放課後の学習時間： およそ（ ）時間（ ）分

(2) 1 日あたりの放課後の学習時間のうち、①～⑤の時間配分を教えてください。

①高校の授業の予習、復習、課題(問題を解くなど)	およそ（ ）時間（ ）分
②塾・予備校の予習、復習、課題(問題を解くなど)	およそ（ ）時間（ ）分
③調べ学習、探究・プロジェクト活動、課題論文	およそ（ ）時間（ ）分
④大学受験の準備(過去問を解く、小論文を書くなど)	およそ（ ）時間（ ）分
⑤資格試験に向けた勉強(英検、TOEIC、漢検など)	およそ（ ）時間（ ）分

質問 7. あなたの高校の成績と英語運用能力に関する資格について教えてください。

(1) あなたの現在の成績は、学年でどのくらいですか。

1. 下のほう

2. まんなか

3. 上のほう

(2) あなたが現在取得している英語運用能力に関する資格を教えてください。あてはまる番号に○をつけ、級やスコア等を記入してください。

1. 英検（実用英語技能検定）（級： ）

2. TOEFL（スコア： ）

3. TOEIC（スコア： ）

4. IELTS アカデミック・モジュール（スコア： ）

5. その他（具体的に： ）（スコア等： ）

6. 資格は取得していない

質問 8. あなたは現時点で、以下のことが、どのくらい身についていると思いますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

	身に ついて いない	あまり 身について いない	どちら とも いえない	やや 身について いる	身に ついて いる
(1) 興味のある対象について深く学習し、理解する姿勢 -----	1	2	3	4	5
(2) 人文・社会・自然科学を横断する幅広い知識 -----	1	2	3	4	5
(3) 困難な課題に取り組む力 -----	1	2	3	4	5
(4) 他者と意思疎通をはかり人間関係を構築する能力 -----	1	2	3	4	5
(5) 自分の良心や社会の規範に沿って行動する力 -----	1	2	3	4	5
(6) 人や社会によって違った考えや文化があることへの理解 -----	1	2	3	4	5
(7) 他者を尊重し、ともに行動する力 -----	1	2	3	4	5
(8) 予測不可能な事態に直面しても挑戦する姿勢 -----	1	2	3	4	5
(9) 自分の生活と自然や社会とのつながりの理解 -----	1	2	3	4	5
(10) 自分の行動を評価し、次に生かす力 -----	1	2	3	4	5
(11) 問題が起きたときに解決する力 -----	1	2	3	4	5
(12) 自ら率先して行動する力 -----	1	2	3	4	5
(13) 自分自身で計画を立て、それに基づいて実行する力 -----	1	2	3	4	5
(14) 情報を処理し、活用する力 -----	1	2	3	4	5
(15) 国際的な事がらを理解し、あつかう力 -----	1	2	3	4	5
(16) チームで協力して行動する力 -----	1	2	3	4	5
(17) リーダーシップの能力 -----	1	2	3	4	5
(18) 地域社会の一員としての自覚 -----	1	2	3	4	5
(19) 日本社会の一員としての自覚 -----	1	2	3	4	5
(20) グローバルな社会の一員としての自覚 -----	1	2	3	4	5
(21) 「国語(現代文、古典等)」に関する能力 -----	1	2	3	4	5
(22) 「社会科(歴史、地理、公民等)」に関する能力 -----	1	2	3	4	5
(23) 「数学」に関する能力 -----	1	2	3	4	5
(24) 「理科(物理、化学、生物、地学等)」に関する能力 -----	1	2	3	4	5
(25) 「外国語(英語等)」に関する能力 -----	1	2	3	4	5
(26) その他の教科(芸術、体育、専門等)に関する能力 -----	1	2	3	4	5

質問 9. あなたは、あなたの現在や将来についてどのように考えていますか。

まったく
そう思わ
ない

あまり
そう思わ
ない

どちら
とも
いえない

やや
そう
思う

とても
そう
思う

(1) 学校生活について

- ① 学校の授業などを通じた今の自分の学習に満足している ----- 1 — 2 — 3 — 4 — 5
- ② これまでの学校での学習やさまざまな経験で得られた
今の自分の能力に満足している ----- 1 — 2 — 3 — 4 — 5
- ③ 高校生活全体に満足している ----- 1 — 2 — 3 — 4 — 5

(2) 将来について

- ① 将来、学びたい分野について考えている ----- 1 — 2 — 3 — 4 — 5
- ② 将来、行きたい大学について考えている ----- 1 — 2 — 3 — 4 — 5
- ③ 将来、やりたい仕事について考えている ----- 1 — 2 — 3 — 4 — 5

質問 10. あなたの進路と将来の展望について教えてください。

- (1) あなたは高校を卒業後、どのような進路を希望していますか。もっとも当てはまるものから番号を選択してください（第一希望だけでも可）。

第一希望（ ） 第二希望（ ）

1. 国内大学への進学 2. 海外大学への進学 3. 未定・わからない
4. その他（具体的に記入してください： ）

- (2) あなたはどの専門分野に進みたいですか。もっとも当てはまるものから番号を選択してください（第一希望だけでも可）。

第一希望（ ） 第二希望（ ）

1. 人文・社会系 2. 理・工・農系 3. 医・歯・薬・獣医系
4. 看護・保健・衛生系 5. 教育・家政・福祉系 6. 芸術・スポーツ系
7. 教養・学際系 8. その他（具体的に記入してください： ）

- (3) 高校やその後の学習を通じて、あなたが将来やりたいことを教えてください。以下の欄に自由に記述してください（「とくにない」「わからない」場合には、「なし」と記入してください）。

質問 1 1. あなたの周囲の環境についておたずねします。

	まったく あてはま らない	あまり あてはま らない	どちら とも いえない	やや あて はまる	とても あて はまる
(1) 本やインターネット環境など家で学ぶ環境が十分にある -----	1	2	3	4	5
(2) 親や兄姉などの家族は普段からよく勉強を教えてくれる -----	1	2	3	4	5
(3) 普段から家族が本や新聞を読んでいるのをよく見る -----	1	2	3	4	5
(4) 親や保護者は自分の勉強のために必要なものを買ってくれる -----	1	2	3	4	5
(5) 勉強のためであれば親や保護者は積極的に援助してくれる -----	1	2	3	4	5
(6) 普段の生活の中でお金に困っていると感じることもある -----	1	2	3	4	5
(7) 親や保護者はあなたのやりたいことを応援してくれる -----	1	2	3	4	5
(8) 親や保護者は学校生活について相談に乗ってくれる -----	1	2	3	4	5
(9) 周りの同級生は授業に熱心に取り組んでいる -----	1	2	3	4	5
(10) 周りの同級生は普段からよく勉強を教えてくれる -----	1	2	3	4	5
(11) 家族とよく海外の経験や国際的な時事問題を話したりする -----	1	2	3	4	5
(12) 親や保護者が仕事などで英語などの外国語を使っている -----	1	2	3	4	5
(13) 友達とよく海外の話題(SNS、音楽など)を話したりする -----	1	2	3	4	5

質問は以上です。ありがとうございました。

インタビューガイド

(※ 基本的に点線部の項目については、インタビューに先立ち、メールのやりとり(事前アンケート等)を通じてうかがう。当日のインタビューでは、適宜補足的にうかがう。)

(※ 大学の卒業生を対象にする場合には、適宜文言の時制を調整する。)

<大学進学前の学習経験について>

- 幼少期からの学校歴、学習経験
 - ✓ いつ頃、日本で教育を受け、あるいはいつ頃、海外で教育を受けてきましたか。
 - ✓ 学習指導要領に基づく教育を受けた経験はどの程度ありますか。
 - ✓ IB (PYP) や IB (MYP) を学んだ経験はどの程度ありますか。
- IB (DP) における学習経験
 - ✓ IB (DP) を選択した理由は何ですか。
 - ✓ IB (DP) における科目選択の内容とそれぞれの成績を教えてください。
 - ✓ TOK、EE、CAS への取り組みの内容を教えてください。
 - ✓ IB (DP) を通じて、どのような知識、スキル、能力などが身についたと考えますか。
- 学校外の学習経験
 - ✓ 予備校や塾、家庭教師、補習校などで学んだ経験があれば、教えてください。

<大学入試(進路選択)について>

- 所属している(していた)大学名等
 - ✓ 所属している(していた)大学、学部、学科、および学年(入学年度)を教えてください。
- 入試区分
 - ✓ 上記の大学に入学した際の入試区分を教えてください。
- 大学進学希望の内容の推移
 - ✓ いつ頃から、「どのような大学に進学したい」といった希望を考えるようになりましたか。その希望の内容は、その後、どのように具体化、変更(推移)していききましたか。
 - ✓ 大学進学(受験)の場面で、困難に感じることはありましたか。
 - その困難をどのように乗り越えましたか／乗り越えることが難しかったですか。／その際、誰に相談しましたか。)
 - ✓ IB 認定校において、進路について、どのような指導、支援を受けましたか。
- 将来展望
 - ✓ 大学進学時に考えていた、あるいは現在考えている、大学卒業後の見通し(将来の目標)について教えてください。

<大学での学びについて>

➤ 履修科目一覧と成績

- ✓ 大学に入学後の履修単位数、修得単位数、GPAについて、差支えない範囲で教えてください。

➤ 大学（正課）における学習経験

- ✓ 正課（教養教育、専門教育、ゼミナール、卒業研究・論文）における学習経験
 - どのような学習成果を感じていますか。また、特に学習成果を感じた科目はありますか。
 - 学習上の困難を感じたことはありますか。ある場合、どのような科目で感じましたか。
 - その困難をどのように乗り越えましたか／乗り越えることが難しかったですか。また、その際、誰に相談しましたか。
 - IB の学び（IB を通じて身につけた知識、スキル、能力など）が活かしたと感じた場面はありますか。
 - IB の学び（IB を通じて身につけた知識、スキル、能力など）を活かすことができなかったとしたら、それはなぜだと考えますか。
 - 正課（教養教育、専門教育、ゼミナール、卒業研究・論文）における学びについて、どのように満足／不満足を感じていますか。

➤ IB 修了生に対する入学前教育等

- ✓ IB 修了生を対象にした特有のケア（入学前教育等）を受けることがありましたか。あったとすれば、それはどのようなものでしたか。また、授業を受けるうえで、どのように役立ちましたか。
- ✓ 大学で授業を受けるうえで、IB 以外の学習経験（塾など）が活かしたと感じる場面はありますか。

➤ 大学（正課外）における活動、経験

- ✓ 正課外（大学における、授業に関係のない自主的な活動：サークル活動等）で、力を入れていることがあれば教えてください。

➤ 大学外における活動、経験

- ✓ 大学入学後、大学外において力を入れていることがあれば教えてください。

<（大学卒業生の場合）大学卒業後の状況について>

➤ 卒業後の進路等

- ✓ 大学卒業後の進路とその進路を選択した理由を教えてください。
- ✓ 大学卒業後に、IB の学び（IB を通じて身につけた知識、スキル、能力など）が活かしたと感じた場面があれば、教えてください。

事前アンケート用紙

「国際バカロレア修了生の大学における学びに関する質的研究」

事前アンケート用紙

「国際バカロレア修了生の大学における学びに関する質的研究」へのご協力を誠にありがとうございます。インタビュー調査に先立ち、以下のアンケートにご協力をいただけますと幸いです。

アンケート調査の所要時間は 60 分程度です。アンケート調査の実施にあたり、以下の点を遵守いたします。

- ① 収集した電子媒体データは、セキュリティの高い保管場所に保存・管理します。
- ② 調査を通じて得られたデータは、研究期間終了後、一定期間経過後に完全に消去します。
- ③ 調査で知り得た内容を公表する場合には、個人名を使用しません。
- ④ 調査の内容が成績評価に関係することは一切ありません。
- ⑤ アンケート調査への回答開始後も、回答したくない項目に対する回答の拒否、中止、撤回によって何ら不利益を受けません。

調査へのご協力のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

この研究は筑波大学人間系研究倫理委員会の承認(課題番号:)を得て、調査協力者のみなさまに不利益がないよう万全の注意を払って行われています。いつでも調査協力者となることを、不利益を受けずに撤回することができます。

本研究を通じて知り得た情報は、万全の注意を払って保護されます。個人情報侵害するかたちで情報が公表されることは一切ありません。研究の内容や研究の倫理的な問題等についてご意見、ご質問などございましたら、以下の宛先までお気軽にお尋ねください。

【研究の内容についてのご意見、ご質問】

研究責任者: 筑波大学人間系・教授 藤田 晃之(ふじた てるゆき)

TEL: 029-853-4745 / E-mail: tfujita@human.tsukuba.ac.jp

研究分担者: 筑波大学人間系・助教 梅津 静子(うめつ しずこ)

TEL: 029-853-6738 / E-mail: umetsu.shizuko.fu@u.tsukuba.ac.jp

【研究の倫理的な問題についてのご意見、ご質問】

筑波大学人間エリア支援室 研究支援

TEL: 029-853-5605 / E-mail: hitorinri@un.tsukuba.ac.jp

アンケート項目

(※ 全ての項目について、回答は任意になります。)

1. これまでの学校歴について

- ① 小学校から高等学校段階までの学校歴を、差支えない範囲で教えてください。具体的な学校名の記入を希望しない場合、大まかなくくりでの記入(「日本の公立小学校」 「ドイツのインターナショナルスクール」 「アメリカの現地校(公立、MYP)」など)で問題ございません。

年齢	学校名等
()歳 ～()歳	
()歳 ～()歳	
()歳 ～()歳	
()歳 ～()歳	

2. 国際バカロレア認定校での学びについて

- ① IB(DP)カリキュラムのグループ 1～6 において、どの DP 科目を履修していたか、教えてください。

- グループ 1「言語と文学(母国語)」: _____
- グループ 2「言語習得(外国語)」: _____
- グループ 3「個人と社会」: _____
- グループ 4「理科」: _____
- グループ 5「数学」: _____
- グループ 6「芸術」もしくはその代替科目: _____

- ② IB(DP)カリキュラムの 3 要件において、どのような学習、活動に取り組んだか、その概要を教えてください。

- 課題論文

- 知の理論

- 創造性・活動・奉仕

③ IB (DP) の最終試験の成績に関して、差支えない範囲で教えてください。

- グループ 1「言語と文学(母国語)」_____点

- グループ 2「言語習得(外国語)」_____点

- グループ 3「個人と社会」_____点

- グループ 4「理科」_____点

- グループ 5「数学」_____点

- グループ 6「芸術」もしくはその代替科目: _____点

- 課題論文: _____

- 知の理論: _____

- 合計(45 点満点) _____点

4. 大学での成績について

① 大学に入学後の成績(GPA)に関して、以下の例①および例②を参考にして、差支えない範囲で教えてください。

(例①)

	累計	2025 年度	2024 年度	2024 年度	2023 年度	...
--	----	---------	---------	---------	---------	-----

		春学期	秋学期	春学会	秋学期	
履修単位数	69	21	15	18	15	…
修得単位数	66	21	15	16.5	13.5	…
GPA	3.65	3.8	3.5	3.8	3.5	…

(例②)

履修した科目の[80%以上／60～80%未満／40～60%未満／20～40%未満／20%以下]が、
AもしくはA+(80 点以上)の成績である。

以上

2025 年 9 月〇〇日

大学入試御担当者 様

文部科学省委託

「国際バカロレアの教育効果等に関する調査研究」

研究代表者 藤田晃之（筑波大学人間系・教授）

国際バカロレアを活用した大学入学者選抜の 実施状況に関する基礎調査について（依頼）

平素より格別の御高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

筑波大学では、文部科学省の委託を受け、国際バカロレア（IB）の教育効果等に関する調査研究業務を行っています。このたび、日本国内の大学における IB を活用した大学入学者選抜の実施状況を把握するための基礎調査を実施いたします。

つきましては、御多用中お手数ですが、下記要領により御回答くださるようお願いいたします。

記

1. 調査対象

IB を活用した入学者選抜を実施している国内大学

2. 調査内容

（IB 認定校等での情報活用を想定し 2 部構成としています。）

①IB を活用した大学入学者選抜の実施状況に関する基礎調査

- （1）公開情報…文部科学省 IB 教育推進コンソーシアムのホームページ（※）の「国際バカロレアを活用した大学入学者選抜例一覧」に掲載します。
- （2）非公開情報…回答いただいたデータは統計的に処理し、大学名や個人を特定できるかたちで公表しません。今後の大学を対象とした調査実施の際の基礎データとさせていただき、報告書及び学会発表・論文等において公表する可能性があります。

②IB を活用した入試概要

文部科学省 IB 教育推進コンソーシアムのホームページ（※）に大学ごとに掲載します。

※[IB を活用した入試 | IB 教育推進コンソーシアム \(mext.go.jp\)](https://mext.go.jp/)

3. 回答方法及び回答期限

①②のファイルに御記入の上、**11 月 28 日（金）まで**にメール添付にて、株式会社トモノカイ／pe-global@tomonokai-corp.com）まで御送信ください。本調査について御質問等ございましたら、下記の連絡先まで御連絡ください。

以上

＜本件調査に関すること＞

株式会社トモノカイ Personal Education ディビジョン（担当：中原・岩本）

〒160-0004 東京都新宿区四谷 3 丁目 3-1 四谷安田ビル 4 階

TEL: 03-5766-2006 E-mail: pe-global@tomonokai-corp.com

＜本件調査の事務に関すること＞

筑波大学人間系・IB 教育調査室 ルステモヴァ・アクトルクン（E-mail: ibkk@un.tsukuba.ac.jp）

＜委託事業に関すること＞

文部科学省大臣官房国際課外国人教育政策推進第二係

瀬戸、森下（TEL: 03-5253-4111／内線 3675）

国際バカロレアを活用した大学入学者選抜の実施状況に関する基礎調査

本調査は、今後の日本における国際バカロレア（IB）推進のための施策立案・改善等に向けた調査の基礎資料とするために実施いたします。御多用中お手数ですが、御協力のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

<記入上の注意点>

- ・次ページの【記入例】を御参照の上、水色のセルに御記入をお願いいたします。
- ・2025 年度中に実施済み、または実施予定の入学者選抜について御記入ください。

※一般入試および帰国生や留学生のみを対象とした入試は対象外とします。

本調査では、IB 生が受験しやすい「総合型選抜」「推薦入試」のみを対象としています。

※入学者選抜の方式（以下、選抜方式）が複数ある場合は、選抜方式ごとに 1 つの記載欄（以下の表）を御使用してください（表をコピーいただければと思います）。

（１）公開情報 ※文部科学省 IB 教育推進コンソーシアムのホームページに掲載します。

国公私	国立／公立／私立	
大学名（所在地）	所在地は都道府県で記入	
入試名称		
試験導入年度 ※西暦で御記入ください		
対象学部	①全学部 ②一部の学部	
学部名	②の場合	
募集人員		
出願資格 ※該当する項目をすべて選択	☐ IB ディプロマ資格取得者 ☐ IB ディプロマ資格取得見込者 ☐ IB 科目修了証明書（サーティフィケート）取得者 ☐ IB 科目修了証明書（サーティフィケート）取得者見込者 ☐ その他の者	☐ IB ディプロマ資格取得者 ☐ IB ディプロマ資格取得見込者 ☐ IB 科目修了証明書（サーティフィケート）取得者 ☐ IB 科目修了証明書（サーティフィケート）取得者見込者 ☐ その他の者
対象者 ※該当する項目をすべて選択	☐ 国内一条校の IB 生 ☐ 国内インターナショナルスクールの IB 生 ☐ 海外現地校・インターナショナルスクールの IB 生	☐ 国内一条校の IB 生 ☐ 国内インターナショナルスクールの IB 生 ☐ 海外現地校・インターナショナルスクールの IB 生
IB スコア基準	※募集要項等で公表している場合、御記入ください。該当がない場合は「なし」と御記入ください。	
主な出願書類 ※該当する項目をすべて選択	☐ IB ディプロマ取得（見込）証明書 ☐ 志望理由書 ☐ 学校の成績証明書（調査書含む） ☐ IB の成績証明書 ☐ EE の写し、TOK の学習成果物、CAS の概要レポート ☐ その他（自由記述）	☐ IB ディプロマ取得（見込）証明書 ☐ 志望理由書 ☐ 学校の成績証明書（調査書含む） ☐ IB の成績証明書 ☐ EE の写し、TOK の学習成果物、CAS の概要レポート ☐ その他（自由記述）
関連 URL	募集要項掲載ページ URL	

（２）非公開情報 ※可能な範囲で御記入ください。

※該当する項目をすべて選択	☐ 学校の成績証明書（調査書含む） ☐ IB の成績証明書 ☐ EE の写し、TOK の学習成果物、CAS の概要レポート ☐ その他（自由記述）	☒ 学校の成績証明書（調査書含む） ☒ IB の成績証明書 ☐ EE の写し、TOK の学習成果物、CAS の概要レポート ☐ その他（自由記述）
関連 URL	募集要項掲載ページ URL	

（１）公開情報 ※文部科学省 IB 教育推進コンソーシアムのホームページに掲載します。

国公私	国立／公立／私立	国立
大学名（所在地）	所在地は都道府県で記入	○○○大学（東京都）
入試名称		全選抜方式（総合型選抜 II）
試験導入年度 ※西暦で御記入ください		2017 年度
対象学部	①全学部 ②一部の学部	②一部の学部
学部名	②の場合	経営学部、法学部
募集人員		総合型選抜：若干名
出願資格 ※該当する項目をすべて選択	☐ IB ディプロマ資格取得者 ☐ IB ディプロマ資格取得見込者 ☐ IB 科目修了証明書（サーティフィケート）取得者 ☐ IB 科目修了証明書（サーティフィケート）取得者見込者 ☐ その他の者	☒ IB ディプロマ資格取得者 ☒ IB ディプロマ資格取得見込者 ☐ IB 科目修了証明書（サーティフィケート）取得者 ☐ IB 科目修了証明書（サーティフィケート）取得者見込者 ☐ その他の者
対象者 ※該当する項目をすべて選択	☐ 国内一条校の IB 生 ☐ 国内インターナショナルスクールの IB 生 ☐ 海外現地校・インターナショナルスクールの IB 生	☒ 国内一条校の IB 生 ☒ 国内インターナショナルスクールの IB 生 ☒ 海外現地校・インターナショナルスクールの IB 生
IB スコア基準	※募集要項等で公表している場合、御記入ください。該当がない場合は「なし」と御記入ください。	なし
主な出願書類 ※該当する項目をすべて選択	☐ IB ディプロマ取得（見込）証明書 ☐ 志望理由書 ☐ 学校の成績証明書（調査書含む） ☐ IB の成績証明書 ☐ EE の写し、TOK の学習成果物、CAS の概要レポート ☐ その他（自由記述）	☒ IB ディプロマ取得（見込）証明書 ☒ 志望理由書 ☒ 学校の成績証明書（調査書含む） ☒ IB の成績証明書 ☐ EE の写し、TOK の学習成果物、CAS の概要レポート ☐ その他（自由記述）
関連 URL	募集要項掲載ページ URL	

（２）非公開情報 ※可能な範囲で御記入ください。

a) IB 生の評価ポイント	IB スコアにより加点。
----------------	--------------

選抜にあたり IB 生が優位的に評価される点があれば教えてください。		EE、TOK、CAS に関する提出資料の審査により加点。
b) 直近の入試実績	実施年度	2025 年度
	志願者数	18 名
	合格者数	10 名
	入学者数	8 名
c) 今後の方向性について 貴学での IB を活用した入試の今後の方向性について、もっともあてはまる記号を選んでください。		ア 全学部へ拡大する予定 イ 未導入の学部にも拡大する予定 ウ 募集人数を増やす予定 エ 現状を維持する予定 オ 見直し又は削減予定 カ その他（具体的に： ）
d) その他 御意見や御質問がありましたら御記入ください。		

〇〇大学 <国際バカロレア（IB）を活用した入試概要>

※2025 年度中に実施済み、または実施予定の入学者選抜についてご記入ください。

※掲載内容はあくまでもポイントをまとめたものになります。出願前には必ず募集要項を御確認ください。

※一般入試および帰国生や留学生のみを対象とした入試は対象外とします。本調査では、IB 生が受験しやすい「総合型選抜」「推薦入試」のみを対象としています。

※複数の入学者選抜についてご回答いただく場合は、1 つの選抜方式につき 1 つの記載欄をご使用ください。選抜方式が複数ある場合は、以下の記載欄をコピーし、それぞれに 1 つの選抜方式のみをご記入ください。

入試名称：		
大学の入試のアピールポイント（入試課記入）：		
	4 月入学	1 0 月入学
学部名		
募集人員		
出願資格 ※IB スコア 基準を含む		
対象者		
選抜方法 及び 出願書類		
出願期間		
選考日程		
合格発表		
備考		
入試要項		
問合せ先		

【記入例】

〇〇大学 <国際バカロレア（IB）を活用した入試概要>

※2025 年度中に実施済み、または実施予定の入学選抜についてご記入ください。

※掲載内容はあくまでもポイントをまとめたものになります。出願前には必ず募集要項を御確認ください。

※一般入試および帰国生や留学生のみを対象とした入試は対象外とします。本調査では、IB 生が受験しやすい「総合型選抜」「推薦入試」のみを対象としています。

※複数の入学選抜についてご回答いただく場合は、1 つの選抜方式につき 1 つの記載欄をご使用ください。選抜方式が複数ある場合は、以下の記載欄をコピーし、それぞれに 1 つの選抜方式のみをご記入ください。

入試名称：		
大学の入試のアピールポイント（入試課記入）：		
	4 月入学	1 0 月入学
学部名	国際関係学部	国際関係学部
募集人員	1～2 名	若干名
出願資格 ※IB スコア 基準を含む	IB ディプロマ資格を取得見込みの者。 ディプロマ・プログラムの最終試験の成績が○ 点以上の者。	IB ディプロマ資格を取得している者。 ディプロマ・プログラムの最終試験の成績が○ 点以上の者。
対象者	IB ディプロマ資格取得者 IB ディプロマ資格取得見込者	IB ディプロマ資格取得者
選抜方法 及び 出願書類	書類審査及び面接	面接のみ
出願期間	9 月上旬	1 月上旬
選考日程	10 月上旬	2 月上旬
合格発表	11 月上旬	3 月上旬

備考		
入試要項	〇〇大学入学試験要項（募集要項の URL 等記載等）	
問合せ先	〇〇大学学務部入試課 Tel: Fax: E-mail:	

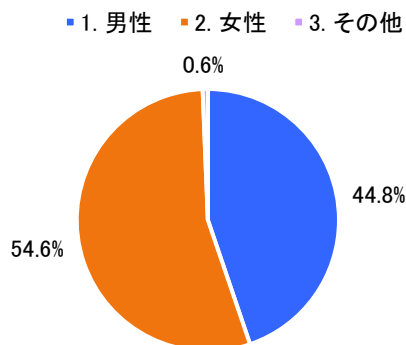
AY2024高校3年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID : 全体集計	回答者数	1,760
----	-------------	------	-------

質問1. あなた自身のことをうかがいます。

(3) 性別

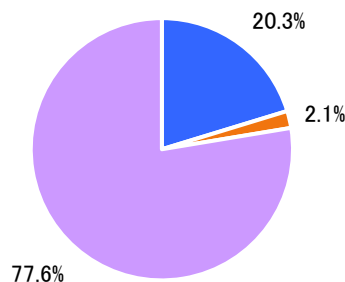
選択肢	件数	割合
1. 男性	773	44.8%
2. 女性	942	54.6%
3. その他	11	0.6%
合計	1,726	100.0%



(4) あなたは現在、ディプロマプログラム (DP) を履修していますか。

選択肢	件数	割合
1. 履修している (フル・ディプロマの取得を目指す)	357	20.3%
2. 履修している (科目履修生 / サートIFICATEの取得を目指す)	37	2.1%
3. 履修していない	1,366	77.6%
合計	1,760	100.0%

- 1. 履修している (フル・ディプロマの取得を目指す)
- 2. 履修している (科目履修生 / サートIFICATEの取得を目指す)
- 3. 履修していない



(5) 以下の項目の中で、あなたが経験した学校や教育プログラムはありますか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

選択肢	件数	割合	0%	10%	20%	30%	40%	50%	60%	70%
1. インターナショナル・スクール (日本)	107	6.1%	6.1							
2. インターナショナル・スクール (海外)	65	3.7%	3.7							
3. 海外の現地校	229	13.0%	13.0							
4. 海外の日本人学校	112	6.4%	6.4							
5. 国際バカロレア初等教育プログラム (PYP)	36	2.0%	2.0							
6. 国際バカロレア中等教育プログラム (MYP)	396	22.5%	22.5							
7. あてはまるものはない	1,020	58.0%	58.0							
回答者数	1,760	-								

AY2024高校3年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID : 全体集計	回答者数	1,760
----	-------------	------	-------

質問2. あなたは以下の態度や状況にどのくらいあてはまると思いますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

項目	平均	(5肯定回答率)	(1否定回答率)	選択肢	5・とてもあてはまる	4・ややあてはまる	3・どちらともいえない	2・あまりあてはまらない	1・まったくあてはまらない	合計	
(1) 知らないことがあると、よく質問をしたり調べたりする	4.08	83.0%	6.1%	件数	569	890	191	90	18	1,758	32.4
				割合	32.4%	50.6%	10.9%	5.1%	1.0%	100.0%	50.6
(2) 自分はどのような人間かを考えることがよくある	3.99	75.5%	11.1%	件数	649	678	235	150	45	1,757	36.9
				割合	36.9%	38.6%	13.4%	8.5%	2.6%	100.0%	38.6
(3) 社会のことをよく勉強している	3.33	48.2%	24.7%	件数	249	598	476	344	89	1,756	14.2
				割合	14.2%	34.1%	27.1%	19.6%	5.1%	100.0%	34.1
(4) 自然や環境のことをよく勉強している	3.17	42.4%	30.5%	件数	219	524	474	409	126	1,752	12.5
				割合	12.5%	29.9%	27.1%	23.3%	7.2%	100.0%	29.9
(5) 学校とは関係なく自分から勉強する習慣ができています	3.32	50.6%	27.0%	件数	297	589	392	330	143	1,751	17.0
				割合	17.0%	33.6%	22.4%	18.8%	8.2%	100.0%	33.6
(6) 問題が起きたときにはその理由を理解しようとする	4.03	78.6%	5.9%	件数	560	822	274	80	23	1,759	31.8
				割合	31.8%	46.7%	15.6%	4.5%	1.3%	100.0%	46.7
(7) 問題を解決するために自分ができることを考える	4.06	80.0%	4.7%	件数	563	842	269	65	18	1,757	32.0
				割合	32.0%	47.9%	15.3%	3.7%	1.0%	100.0%	47.9
(8) 課題があれば自分で解決しようとする	3.94	73.8%	7.0%	件数	494	800	337	99	23	1,753	28.2
				割合	28.2%	45.6%	19.2%	5.6%	1.3%	100.0%	45.6
(9) 他の人の気持ちや考えを十分に理解することができている	3.88	70.8%	8.9%	件数	499	743	356	117	40	1,755	28.4
				割合	28.4%	42.3%	20.3%	6.7%	2.3%	100.0%	42.3
(10) 自分の気持ちや考えを十分に表現することができている	3.67	62.0%	15.1%	件数	392	698	402	229	36	1,757	22.3
				割合	22.3%	39.7%	22.9%	13.0%	2.0%	100.0%	39.7
(11) 何かをするときに周囲の人を誘うことがよくある	3.73	66.2%	17.4%	件数	483	651	282	238	60	1,714	28.2
				割合	28.2%	38.0%	16.5%	13.9%	3.5%	100.0%	38.0
(12) 他の人たちと協力してチームで行動することができる	4.10	79.5%	6.7%	件数	673	686	237	85	29	1,710	39.4
				割合	39.4%	40.1%	13.9%	5.0%	1.7%	100.0%	40.1
(13) チームの中で自分の果たすべき役割を率先して行っている	3.97	74.6%	7.6%	件数	535	737	305	104	25	1,706	31.4
				割合	31.4%	43.2%	17.9%	6.1%	1.5%	100.0%	43.2
(14) 自ら目標を設定し、その達成のために行動することができている	3.77	66.2%	11.0%	件数	408	724	391	157	31	1,711	23.8
				割合	23.8%	42.3%	22.9%	9.2%	1.8%	100.0%	42.3
(15) グループの目的を示し、グループの人たちを効果的に行動させることができる	3.47	53.2%	19.4%	件数	302	607	470	251	80	1,710	17.7
				割合	17.7%	35.5%	27.5%	14.7%	4.7%	100.0%	35.5
(16) 学校や社会の規則を守っている	4.25	83.1%	4.3%	件数	805	613	215	56	17	1,706	47.2
				割合	47.2%	35.9%	12.6%	3.3%	1.0%	100.0%	35.9
(17) 自分の良心や従うべきルールを持ち、それに基づいて行動している	4.32	86.1%	3.0%	件数	840	635	187	41	10	1,713	49.0
				割合	49.0%	37.1%	10.9%	2.4%	0.6%	100.0%	37.1
(18) 自分の行動に責任をとることができる	4.03	77.0%	5.8%	件数	575	743	293	77	23	1,711	33.6
				割合	33.6%	43.4%	17.1%	4.5%	1.3%	100.0%	43.4

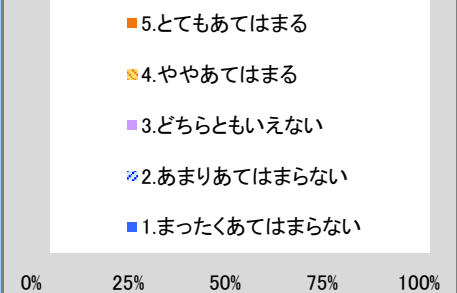
平均点:「5.とてもあてはまる」を5点、「4.ややあてはまる」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりあてはまらない」を2点、「1.まったくあてはまらない」を1点として加重平均

AY2024高校3年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID : 全体集計	回答者数	1,760
----	-------------	------	-------

質問2. あなたは以下の態度や状況にどのくらいあてはまると思いますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

項目	平均	(⑤ + ④) 肯定回答率	(① + ②) 否定回答率	選択肢	5 : とてもあてはまる	4 : ややあてはまる	3 : どちらともいえない	2 : あまりあてはまらない	1 : まったくあてはまらない	合計	
(19) 他の人は自分と違う意見を持っていることを理解している	4.47	89.9%	2.0%	件数	1,016	523	137	23	12	1,711	
				割合	59.4%	30.6%	8.0%	1.3%	0.7%	100.0%	
(20) 世の中には色々な価値観や文化があることを理解している	4.57	92.5%	1.5%	件数	1,137	444	104	14	11	1,710	
				割合	66.5%	26.0%	6.1%	0.8%	0.6%	100.0%	
(21) 困っている人を助けることがよくある	3.83	68.3%	8.5%	件数	432	734	396	119	27	1,708	
				割合	25.3%	43.0%	23.2%	7.0%	1.6%	100.0%	
(22) いつも新しいことに挑戦している	3.45	49.5%	20.1%	件数	322	525	520	285	58	1,710	
				割合	18.8%	30.7%	30.4%	16.7%	3.4%	100.0%	
(23) いつも何か新しいことを生み出そうとしている	3.23	41.8%	28.6%	件数	279	436	507	371	118	1,711	
				割合	16.3%	25.5%	29.6%	21.7%	6.9%	100.0%	
(24) 自分の能力を有効に使うことができる	3.62	57.6%	12.4%	件数	328	658	514	168	45	1,713	
				割合	19.1%	38.4%	30.0%	9.8%	2.6%	100.0%	
(25) 健康的な生活に注意している	3.61	59.3%	19.7%	件数	456	558	360	250	87	1,711	
				割合	26.7%	32.6%	21.0%	14.6%	5.1%	100.0%	
(26) 体力・身体づくりをしている	3.18	43.1%	35.5%	件数	367	371	366	411	197	1,712	
				割合	21.4%	21.7%	21.4%	24.0%	11.5%	100.0%	
(27) 自分で計画を立て、それに従って物事を進めることができる	3.23	45.6%	29.6%	件数	255	525	425	367	140	1,712	
				割合	14.9%	30.7%	24.8%	21.4%	8.2%	100.0%	
(28) 社会や学校の一員としての義務と権利を認識している	3.80	66.2%	8.4%	件数	401	732	434	115	29	1,711	
				割合	23.4%	42.8%	25.4%	6.7%	1.7%	100.0%	
(29) 社会、学校などの周囲をよくするために積極的に関わっている	3.43	49.5%	19.0%	件数	303	543	539	241	84	1,710	
				割合	17.7%	31.8%	31.5%	14.1%	4.9%	100.0%	
(30) 自分の周りに変化が起きてもうまく適応できている	3.73	64.7%	11.9%	件数	398	706	400	154	49	1,707	
				割合	23.3%	41.4%	23.4%	9.0%	2.9%	100.0%	
(31) ストレスを感じる事があってもリラックスして前向きにとらえることができる	3.35	49.7%	26.7%	件数	338	513	405	328	129	1,713	
				割合	19.7%	29.9%	23.6%	19.1%	7.5%	100.0%	
(32) 自分の態度や行動の正しさを確認することがよくある	3.94	73.7%	7.1%	件数	501	760	327	95	27	1,710	
				割合	29.3%	44.4%	19.1%	5.6%	1.6%	100.0%	
(33) 自分の態度や行動をよりよいものになろうと努力している	4.03	77.1%	5.3%	件数	560	760	302	65	26	1,713	
				割合	32.7%	44.4%	17.6%	3.8%	1.5%	100.0%	



平均点: 「5.とてもあてはまる」を5点、「4.ややあてはまる」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりあてはまらない」を2点、「1.まったくあてはまらない」を1点として加重平均

AY2024高校3年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID : 全体集計	回答者数	1,760
----	-------------	------	-------

質問3. これまでに受けた高校の授業の中で、あなたは次のような活動をした経験がありますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

項目	平均	(5肯定回答率+4肯定回答率+3肯定回答率)	(1否定回答率+2否定回答率)	選択肢	5.いつも	4.よくある	3.ときどき	2.あまりない	1.まったくない	合計	0%	25%	50%	75%	100%
(1) 先生の話から知識を得る	3.97	94.9%	5.1%	件数	508	751	367	65	22	1,713	29.7	43.8	21.4	3.8	1.3
				割合	29.7%	43.8%	21.4%	3.8%	1.3%	100.0%					
(2) 教科書を中心に学ぶ	3.41	79.1%	20.9%	件数	276	582	495	285	72	1,710	16.1	34.0	28.9	16.7	4.2
				割合	16.1%	34.0%	28.9%	16.7%	4.2%	100.0%					
(3) 探究したい課題について問いを立てる	3.55	83.0%	17.0%	件数	388	516	515	231	59	1,709	22.7	30.2	30.1	13.5	3.5
				割合	22.7%	30.2%	30.1%	13.5%	3.5%	100.0%					
(4) プロジェクト(探究・調査・実験・発表会)の計画を立てる	3.43	78.2%	21.8%	件数	339	532	465	269	103	1,708	19.8	31.1	27.2	15.7	6.0
				割合	19.8%	31.1%	27.2%	15.7%	6.0%	100.0%					
(5) 図書室を利用して資料や文献を探す	2.79	54.1%	45.9%	件数	222	304	398	454	330	1,708	13.0	17.8	23.3	26.6	19.3
				割合	13.0%	17.8%	23.3%	26.6%	19.3%	100.0%					
(6) 情報を得るとき、情報源の信頼性を確認する	3.89	89.7%	10.3%	件数	576	592	366	136	41	1,711	33.7	34.6	21.4	7.9	2.4
				割合	33.7%	34.6%	21.4%	7.9%	2.4%	100.0%					
(7) 英語で書かれた情報を収集する	3.06	63.6%	36.4%	件数	303	377	407	359	263	1,709	17.7	22.1	23.8	21.0	15.4
				割合	17.7%	22.1%	23.8%	21.0%	15.4%	100.0%					
(8) 自分と異なる立場や見方をもつ人の意見を聞く	4.03	94.0%	6.0%	件数	612	660	333	74	29	1,708	35.8	38.6	19.5	4.8	1.7
				割合	35.8%	38.6%	19.5%	4.3%	1.7%	100.0%					
(9) 本を一冊読む	3.06	62.6%	37.4%	件数	364	320	385	343	297	1,709	21.3	18.7	22.5	20.1	17.4
				割合	21.3%	18.7%	22.5%	20.1%	17.4%	100.0%					
(10) グループで協力して活動する	4.00	92.7%	7.3%	件数	621	631	336	92	33	1,713	36.3	36.8	19.6	5.4	1.9
				割合	36.3%	36.8%	19.6%	5.4%	1.9%	100.0%					
(11) 海外で起こった出来事や課題について考える	3.45	78.6%	21.4%	件数	367	527	448	246	120	1,708	21.5	30.9	26.2	14.4	7.0
				割合	21.5%	30.9%	26.2%	14.4%	7.0%	100.0%					
(12) あるテーマについて論述文(作文・エッセイ)を書く	3.41	76.4%	23.6%	件数	403	475	430	225	178	1,711	23.6	27.8	25.1	13.2	10.4
				割合	23.6%	27.8%	25.1%	13.2%	10.4%	100.0%					
(13) 学習の中で多様なメディア(新聞・映像・音楽など)に触れる	3.75	85.7%	14.3%	件数	523	550	393	180	65	1,711	30.6	32.1	23.0	10.5	3.8
				割合	30.6%	32.1%	23.0%	10.5%	3.8%	100.0%					
(14) 学習の成果を社会に発信する	2.76	55.6%	44.4%	件数	185	288	477	444	315	1,709	10.8	16.9	27.9	26.0	18.4
				割合	10.8%	16.9%	27.9%	26.0%	18.4%	100.0%					
(15) 自分が取り組んだプロジェクト(探究・調査・実験・発表会)のよかった点や課題を整理する	3.37	76.3%	23.7%	件数	352	473	480	267	139	1,711	20.6	27.6	28.1	15.6	8.1
				割合	20.6%	27.6%	28.1%	15.6%	8.1%	100.0%					
(16) 一問一答の問題を解く	3.38	74.7%	25.3%	件数	369	482	427	296	137	1,711	21.6	28.2	25.0	17.3	8.0
				割合	21.6%	28.2%	25.0%	17.3%	8.0%	100.0%					
(17) 用語や出来事を暗記する	3.70	84.8%	15.2%	件数	475	568	406	192	68	1,709	27.8	33.2	23.8	11.2	4.0
				割合	27.8%	33.2%	23.8%	11.2%	4.0%	100.0%					
(18) 作文・エッセイ・発表などへのフィードバックを受ける	3.53	80.8%	19.2%	件数	414	536	432	190	138	1,710	24.2	31.3	25.3	11.1	8.1
				割合	24.2%	31.3%	25.3%	11.1%	8.1%	100.0%					

平均点:「5.いつも」を5点、「4.よくある」を4点、「3.ときどき」を3点、「2.あまりない」を2点、「1.まったくない」を1点として加重平均

AY2024高校3年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID : 全体集計	回答者数	1,760
----	-------------	------	-------

質問4. 高校生活の中で、あなたはどの程度意欲的に次のような活動に参加していますか(参加していましたか)。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

項目	平均	(⑤+④)肯定回答率	(①+②)否定回答率	選択肢	5	4	3	2	1	合計	5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない				
					・とてもあてはまる	・ややあてはまる	・どちらともいえない	・あまりあてはまらない	・まったくあてはまらない						
(1) 生徒会・委員会活動への参加	3.02	43.7%	40.0%	件数	332	415	280	318	366	1,711	19.4	24.3	16.4	18.6	21.4
				割合	19.4%	24.3%	16.4%	18.6%	21.4%	100.0%					
(2) 部活動・クラブ活動への参加	3.64	63.3%	25.4%	件数	718	365	193	160	274	1,710	42.0	21.3	11.3	9.4	16.0
				割合	42.0%	21.3%	11.3%	9.4%	16.0%	100.0%					
(3) 学校行事(体育祭・文化祭等)への参加	4.24	81.9%	6.2%	件数	850	550	204	76	30	1,710	49.7	32.2	11.9	4.4	1.8
				割合	49.7%	32.2%	11.9%	4.4%	1.8%	100.0%					
(4) 授業外でのプロジェクト・探究活動への参加	3.43	54.8%	27.2%	件数	483	454	308	239	225	1,709	28.3	26.6	18.0	14.0	13.2
				割合	28.3%	26.6%	18.0%	14.0%	13.2%	100.0%					
(5) ボランティア活動への参加	3.09	45.6%	38.2%	件数	390	389	277	293	361	1,710	22.8	22.7	16.2	17.1	21.1
				割合	22.8%	22.7%	16.2%	17.1%	21.1%	100.0%					
(6) 海外との交流活動への参加	2.64	34.4%	51.3%	件数	278	311	245	271	606	1,711	16.2	18.2	14.3	15.8	35.4
				割合	16.2%	18.2%	14.3%	15.8%	35.4%	100.0%					
(7) 留学(短期・長期・交換等)	1.97	19.7%	71.4%	件数	205	132	152	147	1,076	1,712	12.0	7.7	8.9	8.6	62.9
				割合	12.0%	7.7%	8.9%	8.6%	62.9%	100.0%					

平均点:「5.とてもあてはまる」を5点、「4.ややあてはまる」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりあてはまらない」を2点、「1.まったくあてはまらない」を1点として加重平均

AY2024高校3年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID : 全体集計	回答者数	1,760
----	-------------	------	-------

質問5. 学期中の平日(月曜～金曜)放課後の学習時間(＝1日あたりの平均)と学習内容を教えてください。

※時間は10分や30分の単位でおおまかに回答してください。

※時間あるいは分が0の場合は、空欄ではなく、例のように()内に0を記入してください。

例)「およそ(0)時間(40)分」、「およそ(2)時間(0)分」など。

(1) 1日あたりの放課後の学習時間: およそ()時間()分

回答区分	件数	割合	0%	10%	20%	30%	40%	50%
0分	97	5.6%	5.6					
1分以上30分以下	141	8.2%	8.2					
31分以上60分以下	181	10.5%	10.5					
61分以上90分以下	75	4.3%	4.3					
91分以上120分以下	228	13.2%	13.2					
121分以上150分以下	73	4.2%	4.2					
151分以上180分以下	218	12.6%	12.6					
181分以上	713	41.3%	41.3					
合計	1,726	100.0%						

(2) 1日あたりの放課後の学習時間のうち、①～⑤の時間配分を教えてください。

①高校の授業の予習、復習、課題(問題を解くなど)

回答区分	件数	割合	0%	5%	10%	15%	20%	25%	30%	35%
0分	470	29.0%	29.0							
1分以上30分以下	397	24.5%	24.5							
31分以上60分以下	415	25.6%	25.6							
61分以上90分以下	81	5.0%	5.0							
91分以上120分以下	128	7.9%	7.9							
121分以上150分以下	28	1.7%	1.7							
151分以上180分以下	40	2.5%	2.5							
181分以上	63	3.9%	3.9							
合計	1,622	100.0%								

AY2024高校3年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID : 全体集計	回答者数	1,760
----	-------------	------	-------

②塾・予備校の予習、復習、課題(問題を解くなど)

回答区分	件数	割合	0%	10%	20%	30%	40%	50%	60%	70%
0分	935	61.0%	61.0							
1分以上30分以下	112	7.3%	7.3							
31分以上60分以下	167	10.9%	10.9							
61分以上90分以下	55	3.6%	3.6							
91分以上120分以下	120	7.8%	7.8							
121分以上150分以下	26	1.7%	1.7							
151分以上180分以下	54	3.5%	3.5							
181分以上	65	4.2%	4.2							
合計	1,534	100.0%								

③調べ学習、探究・プロジェクト活動、課題論文

回答区分	件数	割合	0%	10%	20%	30%	40%	50%	60%	70%
0分	914	61.5%	61.5							
1分以上30分以下	265	17.8%	17.8							
31分以上60分以下	194	13.0%	13.0							
61分以上90分以下	26	1.7%	1.7							
91分以上120分以下	53	3.6%	3.6							
121分以上150分以下	3	0.2%	0.2							
151分以上180分以下	15	1.0%	1.0							
181分以上	17	1.1%	1.1							
合計	1,487	100.0%								

AY2024高校3年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID : 全体集計	回答者数	1,760
----	-------------	------	-------

④大学受験の準備(過去問を解く、小論文を書くなど)

回答区分	件数	割合	0%	5%	10%	15%	20%	25%	30%
0分	430	26.6%	26.6						
1分以上30分以下	201	12.4%	12.4						
31分以上60分以下	327	20.2%	20.2						
61分以上90分以下	80	4.9%	4.9						
91分以上120分以下	220	13.6%	13.6						
121分以上150分以下	39	2.4%	2.4						
151分以上180分以下	122	7.5%	7.5						
181分以上	200	12.4%	12.4						
合計	1,619	100.0%							

⑤資格試験に向けた勉強(英検、TOEIC、漢検など)

回答区分	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%
0分	1,023	68.9%	68.9				
1分以上30分以下	205	13.8%	13.8				
31分以上60分以下	172	11.6%	11.6				
61分以上90分以下	19	1.3%	1.3				
91分以上120分以下	45	3.0%	3.0				
121分以上150分以下	4	0.3%	0.3				
151分以上180分以下	8	0.5%	0.5				
181分以上	8	0.5%	0.5				
合計	1,484	100.0%					

AY2024高校3年生対象 高校での学習・経験に関する調査

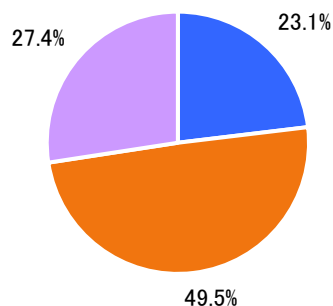
区分	学校ID : 全体集計	回答者数	1,760
----	-------------	------	-------

質問6. あなたの高校の成績と英語運用能力に関する資格について教えてください。

(1) あなたの現在の成績は、学年でどのくらいですか。

選択肢	件数	割合
1. 下のほう	400	23.1%
2. まんなか	857	49.5%
3. 上のほう	475	27.4%
合計	1,732	100.0%

■ 1. 下のほう ■ 2. まんなか ■ 3. 上のほう



(2) あなたが現在取得している英語運用能力に関する資格を教えてください。あてはまる番号に○をつけ、級やスコア等を記入してください。

選択肢	件数	割合	0%	10%	20%	30%	40%	50%	60%	70%
1. 英検(実用英語技能検定)	1,371	63.9%	63.9							
2. TOEFL	136	6.3%	6.3							
3. TOEIC	82	3.8%	3.8							
4. IELTSアカデミック・モジュール	205	9.6%	9.6							
5. その他	131	6.1%	6.1							
6. 資格は取得していない	220	10.3%	10.3							
合計	2,145	100.0%								

AY2024高校3年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID : 全体集計	回答者数	1,760
----	-------------	------	-------

質問7. あなたは現時点で、以下のことが、どのくらい身についていると思いますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

項目	平均	(⑤ 肯定 回答 率)	(① 否定 回答 率)	選 択 肢	5 ・ 身 に つ い て い る	4 ・ やや 身 に つ い て い る	3 ・ ど ち ら と も い え な い	2 ・ あ ま り 身 に つ い て い な い	1 ・ 身 に つ い て い な い	合 計	
(1) 興味のある対象について深く学習し、理解する姿勢	4.18	82.9%	4.6%	件数	720	729	219	61	19	1,748	
				割合	41.2%	41.7%	12.5%	3.5%	1.1%	100.0%	41.2 41.7 12.5 3.5 1.1
(2) 人文・社会・自然科学を横断する幅広い知識	3.48	53.1%	17.9%	件数	293	636	506	238	75	1,748	16.8 36.4 28.9 13.6 4.3
				割合	16.8%	36.4%	28.9%	13.6%	4.3%	100.0%	
(3) 困難な課題に取り組む力	3.73	64.1%	11.7%	件数	405	716	422	157	48	1,748	23.2 41.0 24.1 9.0 2.7
				割合	23.2%	41.0%	24.1%	9.0%	2.7%	100.0%	
(4) 他者と意思疎通をはかり人間関係を構築する能力	3.98	74.6%	9.7%	件数	620	683	273	124	46	1,746	35.5 39.1 15.6 7.2 2.6
				割合	35.5%	39.1%	15.6%	7.1%	2.6%	100.0%	
(5) 自分の良心や社会の規範に沿って行動する力	4.14	80.9%	3.9%	件数	672	738	265	49	19	1,743	38.6 42.3 15.2 2.1 1.1
				割合	38.6%	42.3%	15.2%	2.8%	1.1%	100.0%	
(6) 人や社会によって違った考えや文化があることへの理解	4.35	86.0%	2.6%	件数	914	588	199	32	13	1,746	52.3 33.7 11.4 0.7 0.7
				割合	52.3%	33.7%	11.4%	1.8%	0.7%	100.0%	
(7) 他者を尊重し、ともに行動する力	4.23	82.6%	3.4%	件数	779	666	244	43	17	1,749	44.5 38.1 14.0 2.5 1.0
				割合	44.5%	38.1%	14.0%	2.5%	1.0%	100.0%	
(8) 予測不可能な事態に直面しても挑戦する姿勢	3.78	67.2%	10.5%	件数	403	771	389	146	38	1,747	23.1 44.1 22.3 8.4 2.2
				割合	23.1%	44.1%	22.3%	8.4%	2.2%	100.0%	
(9) 自分の生活と自然や社会とのつながりの理解	3.70	62.6%	11.6%	件数	378	716	452	155	47	1,748	21.6 41.0 25.9 8.9 2.7
				割合	21.6%	41.0%	25.9%	8.9%	2.7%	100.0%	
(10) 自分の行動を評価し、次に生かす力	3.84	68.7%	8.5%	件数	446	751	398	115	33	1,743	25.6 43.1 22.8 6.6 1.9
				割合	25.6%	43.1%	22.8%	6.6%	1.9%	100.0%	
(11) 問題が起きたときに解決する力	3.90	73.6%	7.1%	件数	436	849	338	99	25	1,747	25.0 48.6 19.3 5.7 1.4
				割合	25.0%	48.6%	19.3%	5.7%	1.4%	100.0%	
(12) 自ら率先して行動する力	3.71	62.5%	14.2%	件数	458	631	407	187	60	1,743	26.3 36.2 23.4 10.7 3.4
				割合	26.3%	36.2%	23.4%	10.7%	3.4%	100.0%	
(13) 自分自身で計画立て、それに基づいて実行する力	3.47	54.2%	21.1%	件数	350	593	430	262	106	1,741	20.1 34.1 24.7 15.0 6.1
				割合	20.1%	34.1%	24.7%	15.0%	6.1%	100.0%	
(14) 情報を処理し、活用する力	3.79	67.2%	9.8%	件数	415	756	402	131	39	1,743	23.8 43.4 23.1 7.5 2.2
				割合	23.8%	43.4%	23.1%	7.5%	2.2%	100.0%	
(15) 地域社会の一員としての自覚	3.42	50.0%	21.0%	件数	323	550	507	265	101	1,746	18.5 31.5 29.0 15.2 5.8
				割合	18.5%	31.5%	29.0%	15.2%	5.8%	100.0%	

平均点:「5.身についている」を5点、「4.やや身についている」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまり身についていない」を2点、「1.身についていない」を1点として加重平均

AY2024高校3年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID : 全体集計	回答者数	1,760
----	-------------	------	-------

質問7. あなたは現時点で、以下のことが、どのくらい身についていると思いますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

項目	平均	肯定回答率 (⑤+④)	否定回答率 (①+②)	選択肢	5・身についている	4・やや身についている	3・どちらともいえない	2・あまり身についていない	1・身についていない	合計	
											5.身についている 4.やや身についている 3.どちらともいえない 2.あまり身についていない 1.身についていない
(16) 日本社会の一員としての自覚	3.49	53.7%	19.2%	件数	354	584	474	237	98	1,747	20.3 33.4 27.1 13.6 5.6
				割合	20.3%	33.4%	27.1%	13.6%	5.6%	100.0%	
(17) グローバルな社会の一員としての自覚	3.50	54.0%	19.6%	件数	387	555	462	236	106	1,746	22.2 31.8 26.5 13.5 6.1
				割合	22.2%	31.8%	26.5%	13.5%	6.1%	100.0%	
(18) チームで協力して行動する力	4.04	76.4%	6.8%	件数	636	698	292	87	32	1,745	36.4 40.0 16.7 5.0 1.8
				割合	36.4%	40.0%	16.7%	5.0%	1.8%	100.0%	
(19) リーダーシップの能力	3.43	53.3%	22.3%	件数	342	588	426	261	129	1,746	19.6 33.7 24.4 14.9 7.4
				割合	19.6%	33.7%	24.4%	14.9%	7.4%	100.0%	
(20) 「国語(現代文、古典等)」に関する能力	3.32	50.1%	24.2%	件数	238	636	448	301	122	1,745	13.6 36.4 25.7 17.2 7.0
				割合	13.6%	36.4%	25.7%	17.2%	7.0%	100.0%	
(21) 「社会科(歴史、地理、公民等)」に関する能力	3.39	51.6%	21.9%	件数	272	628	463	280	102	1,745	15.6 36.0 26.5 16.0 5.8
				割合	15.6%	36.0%	26.5%	16.0%	5.8%	100.0%	
(22) 「数学」に関する能力	3.14	43.3%	29.6%	件数	212	543	473	313	204	1,745	12.1 31.1 27.1 17.9 11.7
				割合	12.1%	31.1%	27.1%	17.9%	11.7%	100.0%	
(23) 「理科(物理、化学、生物、地学等)」に関する能力	3.15	43.9%	30.5%	件数	222	543	446	339	192	1,742	12.7 31.2 25.6 19.5 11.0
				割合	12.7%	31.2%	25.6%	19.5%	11.0%	100.0%	
(24) 「外国語(英語等)」に関する能力	3.79	66.0%	11.6%	件数	489	662	391	137	66	1,745	28.0 37.9 22.4 7.8 3.8
				割合	28.0%	37.9%	22.4%	7.9%	3.8%	100.0%	
(25) その他の教科(芸術、体育、専門等)に関する能力	3.75	64.6%	11.6%	件数	448	676	415	138	63	1,740	25.7 38.9 23.9 7.9 3.6
				割合	25.7%	38.9%	23.9%	7.9%	3.6%	100.0%	

平均点: 「5.身についている」を5点、「4.やや身についている」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまり身についていない」を2点、「1.身についていない」を1点として加重平均

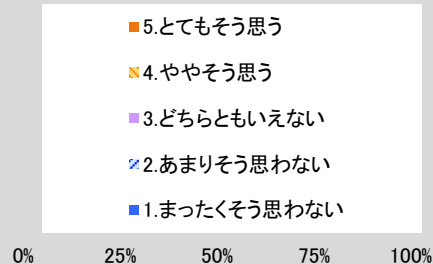
AY2024高校3年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID : 全体集計	回答者数	1,760
----	-------------	------	-------

質問8. あなたは、あなたの現在や将来についてどのように考えていますか。

(1) 学校生活について

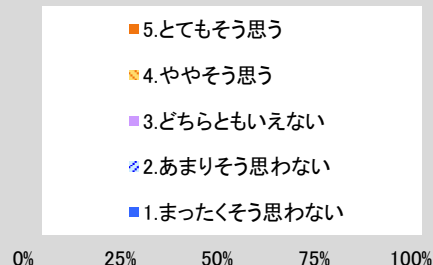
項目	平均	(肯定回答率) (⑤+④)	(否定回答率) (①+②)	選択肢	5 : とてもそう思う	4 : ややそう思う	3 : どちらともいえない	2 : あまりそう思わない	1 : まったくそう思わない	合計	
① 学校の授業などを通じた今の自分の学習に満足している	3.39	52.7%	23.6%	件数	281	640	413	311	101	1,746	
				割合	16.1%	36.7%	23.7%	17.8%	5.8%	100.0%	
② これまでの学校での学習やさまざまな経験で得られた今の自分の能力に満足している	3.34	50.1%	26.0%	件数	307	568	418	315	139	1,747	
				割合	17.6%	32.5%	23.9%	18.0%	8.0%	100.0%	
③ 高校生活全体に満足している	3.86	69.2%	11.0%	件数	549	658	345	132	60	1,744	
				割合	31.5%	37.7%	19.8%	7.6%	3.4%	100.0%	



平均点:「5.とてもそう思う」を5点、「4.ややそう思う」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりそう思わない」を2点、「1.まったくそう思わない」を1点として加重平均

(2) 将来について

項目	平均	(肯定回答率) (⑤+④)	(否定回答率) (①+②)	選択肢	5 : とてもそう思う	4 : ややそう思う	3 : どちらともいえない	2 : あまりそう思わない	1 : まったくそう思わない	合計	
① 将来、学びたい分野について考えている	4.48	89.6%	4.0%	件数	1,122	442	113	41	28	1,746	
				割合	64.3%	25.3%	6.5%	2.3%	1.6%	100.0%	
② 将来、行きたい大学について考えている	4.53	89.7%	3.2%	件数	1,190	373	125	25	30	1,743	
				割合	68.3%	21.4%	7.2%	1.4%	1.7%	100.0%	
③ 将来、やりたい仕事について考えている	4.21	78.4%	8.9%	件数	947	421	222	109	47	1,746	
				割合	54.2%	24.1%	12.7%	6.2%	2.7%	100.0%	



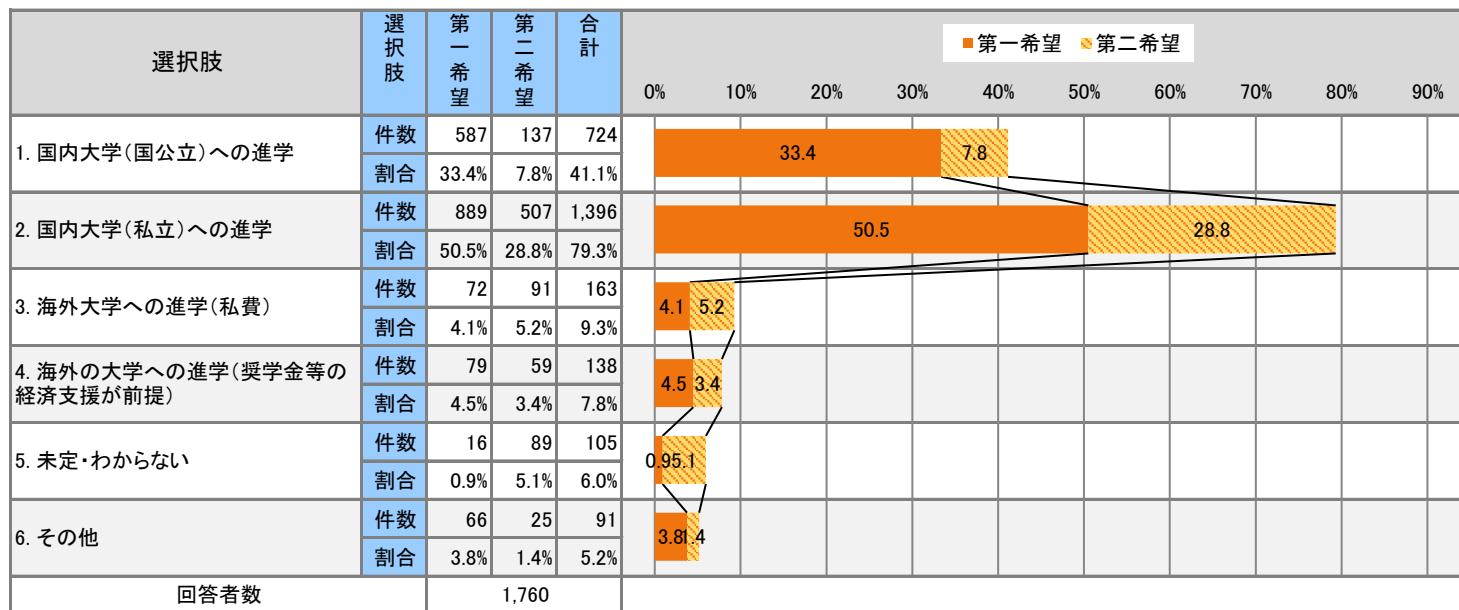
平均点:「5.とてもそう思う」を5点、「4.ややそう思う」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりそう思わない」を2点、「1.まったくそう思わない」を1点として加重平均

AY2024高校3年生対象 高校での学習・経験に関する調査

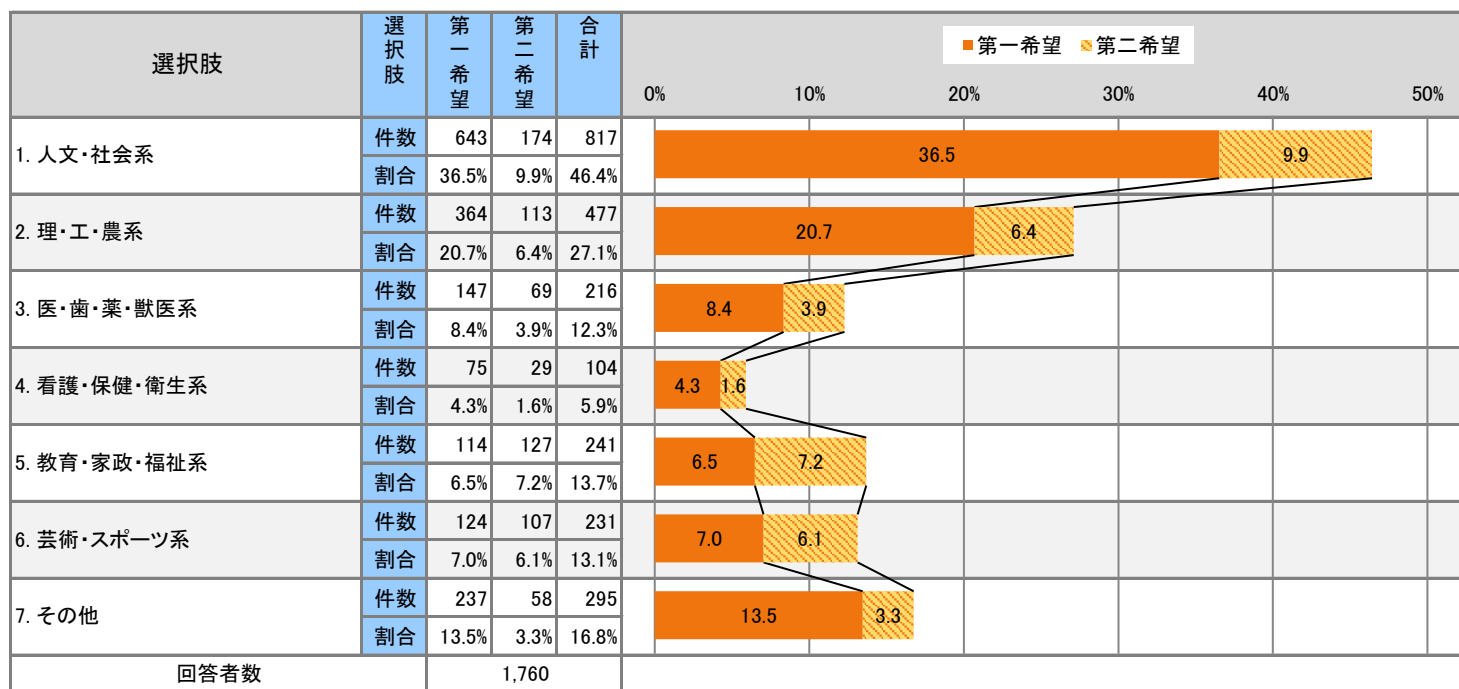
区分	学校ID : 全体集計	回答者数	1,760
----	-------------	------	-------

質問9. あなたの進路と将来の展望について教えてください。

(1) あなたは高校を卒業後、どのような進路を希望していますか。もっとも当てはまるものから番号を選択してください(第一希望だけでも可)。



(2) あなたはどの専門分野に進みたいですか。もっとも当てはまるものから番号を選択してください(第一希望だけでも可)。



AY2024高校3年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID : 全体集計	回答者数	1,760
----	-------------	------	-------

(3) 質問9(1) で「1. 国内大学(国公立)への進学」「2. 国内大学(私立)への進学」と回答した方にうかがいます。あなたが現段階でもっとも希望する大学等に進学するとき、どのような区分の入試を受けるつもりですか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

選択肢	件数	割合	0%	10%	20%	30%	40%	50%	60%	70%
1. 大学入学共通テスト	645	42.3%	42.3							
2. 一般選抜(前期課程・後期課程)	707	46.4%	46.4							
3. 特別入試(学校推薦型選抜(指定校・公募)・総合型選抜など)	935	61.3%	61.3							
4. 特別入試(国際バカロレア(IB)特別入試など)	162	10.6%	10.6							
5. その他	44	2.9%	2.9							
6. まだ決めていない	15	1.0%	1.0							
回答者数	1,525	-								

(4) あなたは、大学入試対策として以下の取り組みをどの程度行っていますか。

項目	平均	肯定回答率 (⑤+④)	否定回答率 (①+②)	選択肢	5 ・ いつも	4 ・ よくある	3 ・ ときどき	2 ・ あまりない	1 ・ まったくない	合計	0%	25%	50%	75%	100%
① 大学入学共通テストや一般選抜のための勉強をしている	3.12	48.1%	40.0%	件数	573	235	200	162	511	1,681	5.いつも 4.よくある 3.ときどき 2.あまりない 1.まったくない				
				割合	34.1%	14.0%	11.9%	9.6%	30.4%	100.0%					
② 英語運用能力等の資格試験に向けて勉強している	2.69	32.1%	45.4%	件数	230	310	377	241	522	1,680					
				割合	13.7%	18.5%	22.4%	14.3%	31.1%	100.0%					
③ 筆記試験(小論文やエッセイ)のための準備を行っている	2.70	35.9%	46.8%	件数	290	315	291	182	605	1,683					
				割合	17.2%	18.7%	17.3%	10.8%	35.9%	100.0%					
④ 口述試験(面接)のための準備を行っている	2.88	41.7%	41.3%	件数	337	368	287	143	555	1,690					
				割合	19.9%	21.8%	17.0%	8.5%	32.8%	100.0%					

平均点:「5.いつも」を5点、「4.よくある」を4点、「3.ときどき」を3点、「2.あまりない」を2点、「1.まったくない」を1点として加重平均

AY2024高校3年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID : 全体集計	回答者数	1,760
----	-------------	------	-------

質問10. あなたの周囲の環境についておたずねします。

項目	平均	肯定回答率 (⑤+④) 回答率	否定回答率 (①+②) 回答率	選択肢	5 とてもあてはまる	4 ややあてはまる	3 どちらともいえない	2 あまりあてはまらない	1 まったくあてはまらない	合計	
(1) 本やインターネット環境など家で学ぶ環境が十分にある	4.57	92.3%	1.8%	件数	1,148	431	102	21	9	1,711	5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない
				割合	67.1%	25.2%	6.0%	1.2%	0.5%	100.0%	
(2) 親や兄弟などの家族は普段からよく勉強を教えてくれる	2.56	29.7%	52.2%	件数	213	296	311	317	577	1,714	5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない
				割合	12.4%	17.3%	18.1%	18.5%	33.7%	100.0%	
(3) 普段から家族が本や新聞を読んでいるのをよく見る	3.06	44.6%	39.6%	件数	354	408	270	342	336	1,710	5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない
				割合	20.7%	23.9%	15.8%	20.0%	19.6%	100.0%	
(4) 親や保護者は自分の勉強のために必要なものを買ってくれる	4.52	89.0%	2.6%	件数	1,137	386	144	25	20	1,712	5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない
				割合	66.4%	22.5%	8.4%	1.5%	1.2%	100.0%	
(5) 勉強のためであれば親や保護者は積極的に援助してくれる	4.53	89.4%	2.9%	件数	1,152	378	132	30	20	1,712	5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない
				割合	67.3%	22.1%	7.7%	1.8%	1.2%	100.0%	
(6) 普段の生活の中でお金に困っていると感じることがある	2.33	22.2%	60.7%	件数	143	237	293	402	636	1,711	5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない
				割合	8.4%	13.9%	17.1%	23.5%	37.2%	100.0%	
(7) 親や保護者はあなたのやりたいことを応援してくれる	4.52	88.8%	2.7%	件数	1,138	383	144	31	16	1,712	5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない
				割合	66.5%	22.4%	8.4%	1.8%	0.9%	100.0%	
(8) 親や保護者は学校生活について相談に乗ってくれる	4.17	76.5%	6.8%	件数	864	445	286	65	52	1,712	5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない
				割合	50.5%	26.0%	16.7%	3.8%	3.0%	100.0%	
(9) 周りの同級生は授業に熱心に取り組んでいる	3.96	70.7%	9.8%	件数	647	563	333	128	40	1,711	5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない
				割合	37.8%	32.9%	19.5%	7.5%	2.3%	100.0%	
(10) 周りの同級生は普段からよく勉強を教えてくれる	3.77	63.5%	14.5%	件数	560	524	376	164	84	1,708	5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない
				割合	32.8%	30.7%	22.0%	9.6%	4.9%	100.0%	
(11) 家族とよく海外の経験や国際的な時事問題を話したりする	3.21	48.0%	32.6%	件数	393	427	332	256	301	1,709	5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない
				割合	23.0%	25.0%	19.4%	15.0%	17.6%	100.0%	
(12) 親や保護者が仕事などで英語などの外国語を使っている	2.22	25.6%	65.1%	件数	261	176	159	196	917	1,709	5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない
				割合	15.3%	10.3%	9.3%	11.5%	53.7%	100.0%	
(13) 友達とよく海外の話題(SNS、音楽など)を話したりする	3.38	53.4%	29.0%	件数	481	432	302	247	249	1,711	5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない
				割合	28.1%	25.2%	17.7%	14.4%	14.6%	100.0%	

平均点:「5.とてもあてはまる」を5点、「4.ややあてはまる」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりあてはまらない」を2点、「1.まったくあてはまらない」を1点として加重平均

AY2024高校3年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分

学校ID 1.DPコース履修 : 全体集計

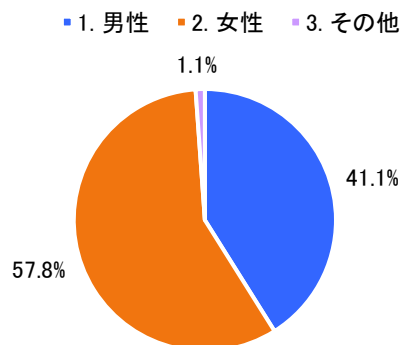
回答者数

357

質問1. あなた自身のことをうかがいます。

(3) 性別

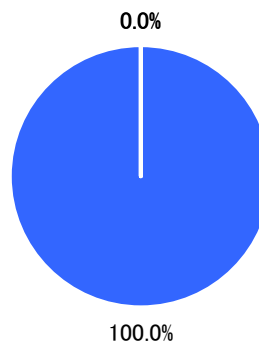
選択肢	件数	割合
1. 男性	145	41.1%
2. 女性	204	57.8%
3. その他	4	1.1%
合計	353	100.0%



(4) あなたは現在、ディプロマプログラム(DP)を履修していますか。

選択肢	件数	割合
1. 履修している(フル・ディプロマの取得を目指す)	357	100.0%
2. 履修している(科目履修生／サーティフィケートの取得を目指す)	0	0.0%
3. 履修していない	0	0.0%
合計	357	100.0%

- 1. 履修している(フル・ディプロマの取得を目指す)
- 2. 履修している(科目履修生／サーティフィケートの取得を目指す)
- 3. 履修していない



(5) 以下の項目の中で、あなたが経験した学校や教育プログラムはありますか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

選択肢	件数	割合	0%	10%	20%	30%	40%	50%	60%
1. インターナショナル・スクール(日本)	38	10.6%	10.6						
2. インターナショナル・スクール(海外)	33	9.2%	9.2						
3. 海外の現地校	66	18.5%	18.5						
4. 海外の日本人学校	46	12.9%	12.9						
5. 国際バカロレア初等教育プログラム(PYP)	20	5.6%	5.6						
6. 国際バカロレア中等教育プログラム(MYP)	190	53.2%	53.2						
7. あてはまるものはない	94	26.3%	26.3						
回答者数	357	-							

AY2024高校3年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 1.DPコース履修 : 全体集計	回答者数	357
----	-----------------------	------	-----

質問2. あなたは以下の態度や状況にどのくらいあてはまると思いますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

項目	平均	(5肯定回答率)	(1否定回答率)	選択肢	5・とてもあてはまる	4・ややあてはまる	3・どちらともいえない	2・あまりあてはまらない	1・まったくあてはまらない	合計	
(1) 知らないことがあると、よく質問をしたり調べたりする	4.29	88.8%	2.5%	件数 割合	152 42.6%	165 46.2%	31 8.7%	8 2.2%	1 0.3%	357 100.0%	5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない
(2) 自分はどういう人間かを考えることがよくある	4.20	82.9%	6.7%	件数 割合	167 46.8%	129 36.1%	37 10.4%	15 4.2%	9 2.5%	357 100.0%	
(3) 社会のことをよく勉強している	3.62	59.0%	12.9%	件数 割合	62 17.4%	148 41.6%	100 28.1%	39 11.0%	7 2.0%	356 100.0%	
(4) 自然や環境のことをよく勉強している	3.47	51.5%	19.6%	件数 割合	64 17.9%	120 33.6%	103 28.9%	61 17.1%	9 2.5%	357 100.0%	
(5) 学校とは関係なく自分から勉強する習慣ができています	3.50	57.4%	20.2%	件数 割合	61 17.1%	144 40.3%	80 22.4%	58 16.2%	14 3.9%	357 100.0%	
(6) 問題が起きたときにはその理由を理解しようとする	4.24	86.3%	2.5%	件数 割合	145 40.6%	163 45.7%	40 11.2%	8 2.2%	1 0.3%	357 100.0%	
(7) 問題を解決するために自分ができることを考える	4.22	86.6%	2.0%	件数 割合	135 37.8%	174 48.7%	41 11.5%	6 1.7%	1 0.3%	357 100.0%	
(8) 課題があれば自分で解決しようとする	4.03	78.7%	5.0%	件数 割合	106 29.7%	175 49.0%	58 16.2%	17 4.8%	1 0.3%	357 100.0%	
(9) 他の人の気持ちや考えを十分に理解することができている	3.87	71.4%	8.7%	件数 割合	92 25.8%	163 45.7%	71 19.9%	26 7.3%	5 1.4%	357 100.0%	
(10) 自分の気持ちや考えを十分に表現することができている	3.81	69.2%	11.2%	件数 割合	88 24.6%	159 44.5%	70 19.6%	35 9.8%	5 1.4%	357 100.0%	
(11) 何かをするときに周囲の人を誘うことがよくある	3.73	65.9%	16.5%	件数 割合	92 26.6%	136 39.3%	61 17.6%	48 13.9%	9 2.6%	346 100.0%	
(12) 他の人たちと協力してチームで行動することができる	4.17	82.7%	6.1%	件数 割合	147 42.5%	139 40.2%	39 11.3%	15 4.3%	6 1.7%	346 100.0%	
(13) チームの中で自分の果たすべき役割を率先して行っている	4.17	83.8%	4.6%	件数 割合	135 39.1%	154 44.6%	40 11.6%	12 3.5%	4 1.2%	345 100.0%	
(14) 自ら目標を設定し、その達成のために行動することができている	3.90	69.9%	7.2%	件数 割合	99 28.7%	142 41.2%	79 22.9%	20 5.8%	5 1.4%	345 100.0%	
(15) グループの目的を示し、グループの人たちを効果的に行動させることができる	3.66	63.2%	13.9%	件数 割合	65 18.8%	153 44.3%	79 22.9%	39 11.3%	9 2.6%	345 100.0%	
(16) 学校や社会の規則を守っている	4.28	85.5%	3.5%	件数 割合	162 47.0%	133 38.6%	38 11.0%	8 2.3%	4 1.2%	345 100.0%	
(17) 自分の良心や従うべきルールを持ち、それに基づいて行動している	4.39	91.0%	2.3%	件数 割合	177 51.2%	138 39.9%	23 6.6%	6 1.7%	2 0.6%	346 100.0%	
(18) 自分の行動に責任をとることができる	4.11	81.5%	4.6%	件数 割合	122 35.3%	160 46.2%	48 13.9%	11 3.2%	5 1.4%	346 100.0%	

平均点:「5.とてもあてはまる」を5点、「4.ややあてはまる」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりあてはまらない」を2点、「1.まったくあてはまらない」を1点として加重平均

AY2024高校3年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 1.DPコース履修 : 全体集計	回答者数	357
----	-----------------------	------	-----

質問2. あなたは以下の態度や状況にどのくらいあてはまると思いますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

項目	平均	(⑤ + ④) 肯定回答率	(① + ②) 否定回答率	選択肢	5 : とてもあてはまる	4 : ややあてはまる	3 : どちらともいえない	2 : あまりあてはまらない	1 : まったくあてはまらない	合計	
(19) 他の人は自分と違う意見を持っていることを理解している	4.63	93.0%	0.0%	件数	240	81	24	0	0	345	
				割合	69.6%	23.5%	7.0%	0.0%	0.0%	100.0%	69.6 23.5 7.0
(20) 世の中には色々な価値観や文化があることを理解している	4.70	95.9%	0.9%	件数	261	70	11	2	1	345	
				割合	75.7%	20.3%	3.2%	0.6%	0.3%	100.0%	75.7 20.3 3.2 0.6 0.3
(21) 困っている人を助けることがよくある	4.00	76.5%	5.5%	件数	103	160	62	16	3	344	
				割合	29.9%	46.5%	18.0%	4.7%	0.9%	100.0%	29.9 46.5 18.0 4.7 0.9
(22) いつも新しいことに挑戦している	3.70	59.1%	10.7%	件数	82	122	104	30	7	345	
				割合	23.8%	35.4%	30.1%	8.7%	2.0%	100.0%	23.8 35.4 30.1 8.7 2.0
(23) いつも何か新しいことを生み出そうとしている	3.43	50.4%	21.7%	件数	68	106	96	56	19	345	
				割合	19.7%	30.7%	27.8%	16.2%	5.5%	100.0%	19.7 30.7 27.8 16.2 5.5
(24) 自分の能力を有効に使うことができる	3.78	65.9%	8.1%	件数	75	153	90	23	5	346	
				割合	21.7%	44.2%	26.0%	6.6%	1.4%	100.0%	21.7 44.2 26.0 6.6 1.4
(25) 健康的な生活に注意している	3.58	56.2%	19.1%	件数	93	101	85	46	20	345	
				割合	27.0%	29.3%	24.6%	13.3%	5.8%	100.0%	27.0 29.3 24.6 13.3 5.8
(26) 体力・身体づくりをしている	3.30	47.7%	32.4%	件数	85	80	69	78	34	346	
				割合	24.6%	23.1%	19.9%	22.5%	9.8%	100.0%	24.6 23.1 19.9 22.5 9.8
(27) 自分で計画を立て、それに従って物事を進めることができる	3.33	48.1%	27.2%	件数	60	106	85	75	19	345	
				割合	17.4%	30.7%	24.6%	21.7%	5.5%	100.0%	17.4 30.7 24.6 21.7 5.5
(28) 社会や学校の一員としての義務と権利を認識している	3.95	75.4%	5.2%	件数	91	169	67	14	4	345	
				割合	26.4%	49.0%	19.4%	4.1%	1.2%	100.0%	26.4 49.0 19.4 4.1 1.2
(29) 社会、学校などの周囲をよくするために積極的に関わっている	3.64	59.7%	13.6%	件数	69	137	92	39	8	345	
				割合	20.0%	39.7%	26.7%	11.3%	2.3%	100.0%	20.0 39.7 26.7 11.3 2.3
(30) 自分の周りに変化が起きてもうまく適応できている	3.91	71.9%	8.1%	件数	105	143	69	18	10	345	
				割合	30.4%	41.4%	20.0%	5.2%	2.9%	100.0%	30.4 41.4 20.0 5.2 2.9
(31) ストレスを感じる事があってもリラックスして前向きにとらえることができる	3.47	54.9%	24.6%	件数	82	108	71	61	24	346	
				割合	23.7%	31.2%	20.5%	17.6%	6.9%	100.0%	23.7 31.2 20.5 17.6 6.9
(32) 自分の態度や行動の正しさを確認することがよくある	4.07	78.3%	5.2%	件数	121	149	57	13	5	345	
				割合	35.1%	43.2%	16.5%	3.8%	1.4%	100.0%	35.1 43.2 16.5 3.8 1.4
(33) 自分の態度や行動をよりよいものになろうと努力している	4.19	82.1%	2.3%	件数	140	144	54	5	3	346	
				割合	40.5%	41.6%	15.6%	1.4%	0.9%	100.0%	40.5 41.6 15.6 1.4 0.9

平均点:「5.とてもあてはまる」を5点、「4.ややあてはまる」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりあてはまらない」を2点、「1.まったくあてはまらない」を1点として加重平均

AY2024高校3年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 1.DPコース履修 : 全体集計	回答者数	357
----	-----------------------	------	-----

質問3. これまでに受けた高校の授業の中で、あなたは次のような活動をした経験がありますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

項目	平均	(5肯定回答率 + 4肯定回答率 + 3肯定回答率)	(1否定回答率 + 2否定回答率)	選択肢	5.いつも	4.よくある	3.ときどき	2.あまりない	1.まったくない	合計	0%	25%	50%	75%	100%
(1) 先生の話から知識を得る	4.23	98.3%	1.7%	件数 割合	134 38.7%	165 47.7%	41 11.8%	6 1.7%	0 0.0%	346 100.0%	38.7	47.7	11.8	1.7	0
(2) 教科書を中心に学ぶ	3.25	75.1%	24.9%	件数 割合	38 11.0%	108 31.3%	113 32.8%	75 21.7%	11 3.2%	345 100.0%	11.0	31.3	32.8	21.7	3.2
(3) 探究したい課題について問いを立てる	4.09	95.1%	4.9%	件数 割合	125 36.1%	143 41.3%	61 17.6%	17 4.9%	0 0.0%	346 100.0%	36.1	41.3	17.6	4.9	0
(4) プロジェクト(探究・調査・実験・発表会)の計画を立てる	3.96	93.0%	7.0%	件数 割合	107 31.3%	146 42.7%	65 19.0%	17 5.0%	7 2.0%	342 100.0%	31.3	42.7	19.0	5.0	2.0
(5) 図書室を利用して資料や文献を探す	3.29	69.9%	30.1%	件数 割合	82 23.8%	80 23.2%	79 22.9%	65 18.8%	39 11.3%	345 100.0%	23.8	23.2	22.9	18.8	11.3
(6) 情報を得るとき、情報源の信頼性を確認する	4.30	95.7%	4.3%	件数 割合	180 52.2%	107 31.0%	43 12.5%	13 3.8%	2 0.6%	345 100.0%	52.2	31.0	12.5	3.8	0.6
(7) 英語で書かれた情報を収集する	4.06	92.2%	7.8%	件数 割合	144 41.9%	108 31.4%	65 18.9%	21 6.1%	6 1.7%	344 100.0%	41.9	31.4	18.9	6.1	1.7
(8) 自分と異なる立場や見方をもつ人の意見を聞く	4.36	97.7%	2.3%	件数 割合	172 49.9%	134 38.8%	31 9.0%	6 1.7%	2 0.6%	345 100.0%	49.9	38.8	9.0	1.7	0.6
(9) 本を一冊読む	3.79	83.2%	16.8%	件数 割合	136 39.4%	78 22.6%	73 21.2%	38 11.0%	20 5.8%	345 100.0%	39.4	22.6	21.2	11.0	5.8
(10) グループで協力して活動する	4.25	96.2%	3.8%	件数 割合	162 46.8%	126 36.4%	45 13.0%	10 2.9%	3 0.9%	346 100.0%	46.8	36.4	13.0	2.9	0.9
(11) 海外で起こった出来事や課題について考える	4.08	96.2%	3.8%	件数 割合	123 35.5%	142 41.0%	68 19.7%	11 3.2%	2 0.6%	346 100.0%	35.5	41.0	19.7	3.2	0.6
(12) あるテーマについて論述文(作文・エッセイ)を書く	4.25	96.5%	3.5%	件数 割合	163 47.2%	118 34.2%	52 15.1%	11 3.2%	1 0.3%	345 100.0%	47.2	34.2	15.1	3.2	0.3
(13) 学習の中で多様なメディア(新聞・映像・音楽など)に触れる	4.21	94.5%	5.5%	件数 割合	162 46.8%	116 33.5%	49 14.2%	16 4.6%	3 0.9%	346 100.0%	46.8	33.5	14.2	4.6	0.9
(14) 学習の成果を社会に発信する	3.09	66.7%	33.3%	件数 割合	56 16.2%	62 18.0%	112 32.5%	87 25.2%	28 8.1%	345 100.0%	16.2	18.0	32.5	25.2	8.1
(15) 自分が取り組んだプロジェクト(探究・調査・実験・発表会)のよかった点や課題を整理する	3.88	91.0%	9.0%	件数 割合	106 30.6%	125 36.1%	84 24.3%	28 8.1%	3 0.9%	346 100.0%	30.6	36.1	24.3	8.1	0.9
(16) 一問一答の問題を解く	3.12	68.1%	31.9%	件数 割合	52 15.1%	74 21.4%	109 31.6%	82 23.8%	28 8.1%	345 100.0%	15.1	21.4	31.6	23.8	8.1
(17) 用語や出来事を暗記する	3.50	82.3%	17.7%	件数 割合	72 20.9%	102 29.6%	110 31.9%	49 14.2%	12 3.5%	345 100.0%	20.9	29.6	31.9	14.2	3.5
(18) 作文・エッセイ・発表などへのフィードバックを受ける	4.24	96.5%	3.5%	件数 割合	154 44.5%	134 38.7%	46 13.3%	10 2.9%	2 0.6%	346 100.0%	44.5	38.7	13.3	2.9	0.6

平均点:「5.いつも」を5点、「4.よくある」を4点、「3.ときどき」を3点、「2.あまりない」を2点、「1.まったくない」を1点として加重平均

AY2024高校3年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 1.DPコース履修 : 全体集計	回答者数	357
----	-----------------------	------	-----

質問4. 高校生活の中で、あなたはどの程度意欲的に次のような活動に参加していますか(参加していましたか)。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

項目	平均	肯定回答率 (⑤+④)	否定回答率 (①+②)	選択肢	5 とてもあてはまる	4 ややあてはまる	3 どちらともいえない	2 あまりあてはまらない	1 まったくあてはまらない	合計	
											5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない
(1) 生徒会・委員会活動への参加	3.00	42.5%	40.8%	件数	60	87	58	75	66	346	17.3 25.1 16.8 21.7 19.1
				割合	17.3%	25.1%	16.8%	21.7%	19.1%	100.0%	
(2) 部活動・クラブ活動への参加	3.65	63.9%	23.7%	件数	129	92	43	38	44	346	37.3 26.6 12.4 11.0 12.7
				割合	37.3%	26.6%	12.4%	11.0%	12.7%	100.0%	
(3) 学校行事(体育祭・文化祭等)への参加	4.21	81.5%	5.5%	件数	165	117	45	11	8	346	47.7 33.8 13.0 3.2 2.3
				割合	47.7%	33.8%	13.0%	3.2%	2.3%	100.0%	
(4) 授業外でのプロジェクト・探究活動への参加	4.04	76.9%	9.5%	件数	139	127	47	21	12	346	40.2 36.7 13.6 6.1 3.5
				割合	40.2%	36.7%	13.6%	6.1%	3.5%	100.0%	
(5) ボランティア活動への参加	3.93	70.2%	14.2%	件数	138	105	54	38	11	346	39.9 30.3 15.6 11.0 3.2
				割合	39.9%	30.3%	15.6%	11.0%	3.2%	100.0%	
(6) 海外との交流活動への参加	3.38	52.3%	28.6%	件数	95	86	66	55	44	346	27.5 24.9 19.1 15.9 12.7
				割合	27.5%	24.9%	19.1%	15.9%	12.7%	100.0%	
(7) 留学(短期・長期・交換等)	2.20	24.6%	63.0%	件数	39	46	43	36	182	346	11.3 13.3 12.4 10.4 52.6
				割合	11.3%	13.3%	12.4%	10.4%	52.6%	100.0%	

平均点:「5.とてもあてはまる」を5点、「4.ややあてはまる」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりあてはまらない」を2点、「1.まったくあてはまらない」を1点として加重平均

AY2024高校3年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分

学校ID 1.DPコース履修 : 全体集計

回答者数

357

質問5. 学期中の平日(月曜～金曜)放課後の学習時間(=1日あたりの平均)と学習内容を教えてください。

※時間は10分や30分の単位でおおまかに回答してください。

※時間あるいは分が0の場合は、空欄ではなく、例のように()内に0を記入してください。

例)「およそ(0)時間(40)分」、「およそ(2)時間(0)分」など。

(1) 1日あたりの放課後の学習時間: およそ()時間()分

回答区分	件数	割合	0%	10%	20%	30%	40%	50%
0分	2	0.6%	0.6					
1分以上30分以下	10	2.9%	2.9					
31分以上60分以下	25	7.2%	7.2					
61分以上90分以下	21	6.1%	6.1					
91分以上120分以下	54	15.6%	15.6					
121分以上150分以下	28	8.1%	8.1					
151分以上180分以下	57	16.4%	16.4					
181分以上	150	43.2%	43.2					
合計	347	100.0%						

(2) 1日あたりの放課後の学習時間のうち、①～⑤の時間配分を教えてください。

①高校の授業の予習、復習、課題(問題を解くなど)

回答区分	件数	割合	0%	5%	10%	15%	20%	25%	30%
0分	43	12.8%	12.8						
1分以上30分以下	58	17.2%	17.2						
31分以上60分以下	91	27.0%	27.0						
61分以上90分以下	21	6.2%	6.2						
91分以上120分以下	54	16.0%	16.0						
121分以上150分以下	16	4.7%	4.7						
151分以上180分以下	22	6.5%	6.5						
181分以上	32	9.5%	9.5						
合計	337	100.0%							

AY2024高校3年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 1.DPコース履修 : 全体集計	回答者数	357
----	-----------------------	------	-----

②塾・予備校の予習、復習、課題(問題を解くなど)

回答区分	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
0分	245	80.6%	80.6					
1分以上30分以下	20	6.6%	6.6					
31分以上60分以下	25	8.2%	8.2					
61分以上90分以下	4	1.3%	1.3					
91分以上120分以下	5	1.6%	1.6					
121分以上150分以下	1	0.3%	0.3					
151分以上180分以下	2	0.7%	0.7					
181分以上	2	0.7%	0.7					
合計	304	100.0%						

③調べ学習、探究・プロジェクト活動、課題論文

回答区分	件数	割合	0%	5%	10%	15%	20%	25%	30%
0分	84	26.1%	26.1						
1分以上30分以下	77	23.9%	23.9						
31分以上60分以下	92	28.6%	28.6						
61分以上90分以下	20	6.2%	6.2						
91分以上120分以下	30	9.3%	9.3						
121分以上150分以下	2	0.6%	0.6						
151分以上180分以下	10	3.1%	3.1						
181分以上	7	2.2%	2.2						
合計	322	100.0%							

AY2024高校3年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 1.DPコース履修 : 全体集計	回答者数	357
----	-----------------------	------	-----

④大学受験の準備(過去問を解く、小論文を書くなど)

回答区分	件数	割合	0%	5%	10%	15%	20%	25%	30%
0分	79	24.3%	24.3						
1分以上30分以下	82	25.2%	25.2						
31分以上60分以下	89	27.4%	27.4						
61分以上90分以下	19	5.8%	5.8						
91分以上120分以下	26	8.0%	8.0						
121分以上150分以下	2	0.6%	0.6						
151分以上180分以下	16	4.9%	4.9						
181分以上	12	3.7%	3.7						
合計	325	100.0%							

⑤資格試験に向けた勉強(英検、TOEIC、漢検など)

回答区分	件数	割合	0%	10%	20%	30%	40%	50%	60%
0分	157	50.0%	50.0						
1分以上30分以下	80	25.5%	25.5						
31分以上60分以下	63	20.1%	20.1						
61分以上90分以下	9	2.9%	2.9						
91分以上120分以下	2	0.6%	0.6						
121分以上150分以下	1	0.3%	0.3						
151分以上180分以下	2	0.6%	0.6						
181分以上	0	0.0%							
合計	314	100.0%							

AY2024高校3年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分

学校ID 1.DPコース履修 : 全体集計

回答者数

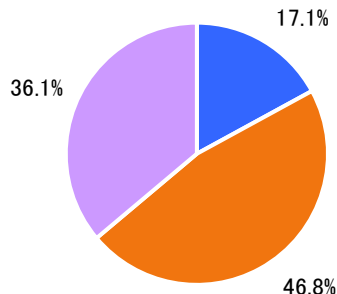
357

質問6. あなたの高校の成績と英語運用能力に関する資格について教えてください。

(1) あなたの現在の成績は、学年でどのくらいですか。

選択肢	件数	割合
1. 下のほう	59	17.1%
2. まんなか	162	46.8%
3. 上のほう	125	36.1%
合計	346	100.0%

■ 1. 下のほう ■ 2. まんなか ■ 3. 上のほう



(2) あなたが現在取得している英語運用能力に関する資格を教えてください。あてはまる番号に○をつけ、級やスコア等を記入してください。

選択肢	件数	割合	0%	10%	20%	30%	40%	50%	60%
1. 英検(実用英語技能検定)	291	48.0%	48.0						
2. TOEFL	92	15.2%	15.2						
3. TOEIC	19	3.1%	3.1						
4. IELTSアカデミック・モジュール	161	26.6%	26.6						
5. その他	32	5.3%	5.3						
6. 資格は取得していない	11	1.8%	1.8						
合計	606	100.0%							

AY2024高校3年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 1.DPコース履修 : 全体集計	回答者数	357
----	-----------------------	------	-----

質問7. あなたは現時点で、以下のことが、どのくらい身についていると思いますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

項目	平均	(5肯定回答率)	(1否定回答率)	選択肢	5・身についている	4・やや身についている	3・どちらともいえない	2・あまり身についていない	1・身についていない	合計	
											5.身についている 4.やや身についている 3.どちらともいえない 2.あまり身についていない 1.身についていない
(1) 興味のある対象について深く学習し、理解する姿勢	4.37	90.1%	2.8%	件数 割合	178 50.4%	140 39.7%	25 7.1%	9 2.5%	1 0.3%	353 100.0%	50.4 39.7 7.1 2.5 0.3
(2) 人文・社会・自然科学を横断する幅広い知識	3.89	71.7%	9.3%	件数 割合	98 27.8%	155 43.9%	67 19.0%	28 7.9%	5 1.4%	353 100.0%	27.8 43.9 19.0 7.9 1.4
(3) 困難な課題に取り組む力	4.07	79.9%	4.0%	件数 割合	113 32.0%	169 47.9%	57 16.1%	12 3.4%	2 0.6%	353 100.0%	32.0 47.9 16.1 3.4 0.6
(4) 他者と意思疎通をはかり人間関係を構築する能力	4.18	82.4%	5.4%	件数 割合	151 42.8%	140 39.7%	43 12.2%	13 3.7%	6 1.7%	353 100.0%	42.8 39.7 12.2 3.7 1.7
(5) 自分の良心や社会の規範に沿って行動する力	4.23	84.1%	2.3%	件数 割合	146 41.5%	150 42.6%	48 13.6%	6 1.7%	2 0.6%	352 100.0%	41.5 42.6 13.6 1.7 0.6
(6) 人や社会によって違った考えや文化があることへの理解	4.58	92.6%	1.1%	件数 割合	233 66.0%	94 26.6%	22 6.2%	4 1.1%	0 0.0%	353 100.0%	66.0 26.6 6.2 1.1 0.0
(7) 他者を尊重し、ともに行動する力	4.35	88.4%	2.3%	件数 割合	174 49.3%	138 39.1%	33 9.3%	8 2.3%	0 0.0%	353 100.0%	49.3 39.1 9.3 2.3 0.0
(8) 予測不可能な事態に直面しても挑戦する姿勢	4.06	80.2%	4.5%	件数 割合	110 31.2%	173 49.0%	54 15.3%	12 3.4%	4 1.1%	353 100.0%	31.2 49.0 15.3 3.4 1.1
(9) 自分の生活と自然や社会とのつながりの理解	3.96	74.5%	6.8%	件数 割合	101 28.6%	162 45.9%	66 18.7%	22 6.2%	2 0.6%	353 100.0%	28.6 45.9 18.7 6.2 0.6
(10) 自分の行動を評価し、次に生かす力	4.12	81.9%	3.7%	件数 割合	122 34.6%	167 47.3%	51 14.4%	11 3.1%	2 0.6%	353 100.0%	34.6 47.3 14.4 3.1 0.6
(11) 問題が起きたときに解決する力	4.16	85.6%	3.4%	件数 割合	122 34.6%	180 51.0%	39 11.0%	11 3.1%	1 0.3%	353 100.0%	34.6 51.0 11.0 3.1 0.3
(12) 自ら率先して行動する力	3.99	73.4%	7.4%	件数 割合	121 34.3%	138 39.1%	68 19.3%	22 6.2%	4 1.1%	353 100.0%	34.3 39.1 19.3 6.2 1.1
(13) 自分自身で計画立て、それに基づいて実行する力	3.66	60.4%	15.4%	件数 割合	82 23.4%	130 37.0%	85 24.2%	45 12.8%	9 2.6%	351 100.0%	23.4 37.0 24.2 12.8 2.6
(14) 情報を処理し、活用する力	4.05	78.9%	5.4%	件数 割合	115 32.8%	162 46.2%	55 15.7%	16 4.6%	3 0.9%	351 100.0%	32.8 46.2 15.7 4.6 0.9
(15) 地域社会の一員としての自覚	3.67	61.2%	12.2%	件数 割合	77 21.8%	139 39.4%	94 26.6%	31 8.8%	12 3.4%	353 100.0%	21.8 39.4 26.6 8.8 3.4

平均点:「5.身についている」を5点、「4.やや身についている」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまり身についていない」を2点、「1.身についていない」を1点として加重平均

AY2024高校3年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 1.DPコース履修 : 全体集計	回答者数	357
----	-----------------------	------	-----

質問7. あなたは現時点で、以下のことが、どのくらい身についていると思いますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

項目	平均	(5肯定回答率)	(1否定回答率)	選択肢	5・身についている	4・やや身についている	3・どちらともいえない	2・あまり身についていない	1・身についていない	合計	
(16) 日本社会の一員としての自覚	3.71	63.1%	12.8%	件数	85	137	85	34	11	352	5.身についている 4.やや身についている 3.どちらともいえない 2.あまり身についていない 1.身についていない
				割合	24.1%	38.9%	24.1%	9.7%	3.1%	100.0%	
(17) グローバルな社会の一員としての自覚	3.97	73.7%	9.3%	件数	122	138	60	25	8	353	5.身についている 4.やや身についている 3.どちらともいえない 2.あまり身についていない 1.身についていない
				割合	34.6%	39.1%	17.0%	7.1%	2.3%	100.0%	
(18) チームで協力して行動する力	4.28	86.6%	2.6%	件数	157	148	38	8	1	352	5.身についている 4.やや身についている 3.どちらともいえない 2.あまり身についていない 1.身についていない
				割合	44.6%	42.0%	10.8%	2.3%	0.3%	100.0%	
(19) リーダーシップの能力	3.86	69.7%	10.8%	件数	103	143	69	29	9	353	5.身についている 4.やや身についている 3.どちらともいえない 2.あまり身についていない 1.身についていない
				割合	29.2%	40.5%	19.5%	8.2%	2.5%	100.0%	
(20) 「国語(現代文、古典等)」に関する能力	3.16	44.5%	33.1%	件数	45	112	79	87	30	353	5.身についている 4.やや身についている 3.どちらともいえない 2.あまり身についていない 1.身についていない
				割合	12.7%	31.7%	22.4%	24.6%	8.5%	100.0%	
(21) 「社会科(歴史、地理、公民等)」に関する能力	3.58	58.6%	16.1%	件数	70	137	89	42	15	353	5.身についている 4.やや身についている 3.どちらともいえない 2.あまり身についていない 1.身についていない
				割合	19.8%	38.8%	25.2%	11.9%	4.2%	100.0%	
(22) 「数学」に関する能力	3.48	53.8%	17.0%	件数	58	132	103	41	19	353	5.身についている 4.やや身についている 3.どちらともいえない 2.あまり身についていない 1.身についていない
				割合	16.4%	37.4%	29.2%	11.6%	5.4%	100.0%	
(23) 「理科(物理、化学、生物、地学等)」に関する能力	3.54	56.9%	16.4%	件数	65	136	94	42	16	353	5.身についている 4.やや身についている 3.どちらともいえない 2.あまり身についていない 1.身についていない
				割合	18.4%	38.5%	26.6%	11.9%	4.5%	100.0%	
(24) 「外国語(英語等)」に関する能力	4.25	83.0%	3.4%	件数	167	126	48	5	7	353	5.身についている 4.やや身についている 3.どちらともいえない 2.あまり身についていない 1.身についていない
				割合	47.3%	35.7%	13.6%	1.4%	2.0%	100.0%	
(25) その他の教科(芸術、体育、専門等)に関する能力	3.88	71.7%	10.2%	件数	103	150	64	26	10	353	5.身についている 4.やや身についている 3.どちらともいえない 2.あまり身についていない 1.身についていない
				割合	29.2%	42.5%	18.1%	7.4%	2.8%	100.0%	

平均点: 「5.身についている」を5点、「4.やや身についている」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまり身についていない」を2点、「1.身についていない」を1点として加重平均

AY2024高校3年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 1.DPコース履修 : 全体集計	回答者数	357
----	-----------------------	------	-----

質問8. あなたは、あなたの現在や将来についてどのように考えていますか。

(1) 学校生活について

項目	平均	(肯定回答率) (⑤+④)	(否定回答率) (①+②)	選択肢	5 とても 思う	4 やや 思う	3 どちら とも いえない	2 あまり そう 思わない	1 まったく そう 思わない	合計	
① 学校の授業などを通じた今の自分の学習に満足している	3.70	66.6%	16.1%	件数	80	155	61	46	11	353	
				割合	22.7%	43.9%	17.3%	13.0%	3.1%	100.0%	
② これまでの学校での学習やさまざまな経験で得られた今の自分の能力に満足している	3.56	59.2%	20.4%	件数	80	129	72	53	19	353	
				割合	22.7%	36.5%	20.4%	15.0%	5.4%	100.0%	
③ 高校生活全体に満足している	3.96	73.0%	9.7%	件数	122	135	61	27	7	352	
				割合	34.7%	38.4%	17.3%	7.7%	2.0%	100.0%	

平均点:「5.とても思う」を5点、「4.やや思う」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりそう思わない」を2点、「1.まったくそう思わない」を1点として加重平均

(2) 将来について

項目	平均	(肯定回答率) (⑤+④)	(否定回答率) (①+②)	選択肢	5 とても 思う	4 やや 思う	3 どちら とも いえない	2 あまり そう 思わない	1 まったく そう 思わない	合計	
① 将来、学びたい分野について考えている	4.60	93.2%	2.3%	件数	246	83	16	5	3	353	
				割合	69.7%	23.5%	4.5%	1.4%	0.8%	100.0%	
② 将来、行きたい大学について考えている	4.65	94.3%	1.4%	件数	256	76	15	3	2	352	
				割合	72.7%	21.6%	4.3%	0.9%	0.6%	100.0%	
③ 将来、やりたい仕事について考えている	4.29	79.9%	6.2%	件数	200	82	49	17	5	353	
				割合	56.7%	23.2%	13.9%	4.8%	1.4%	100.0%	

平均点:「5.とても思う」を5点、「4.やや思う」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりそう思わない」を2点、「1.まったくそう思わない」を1点として加重平均

AY2024高校3年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分

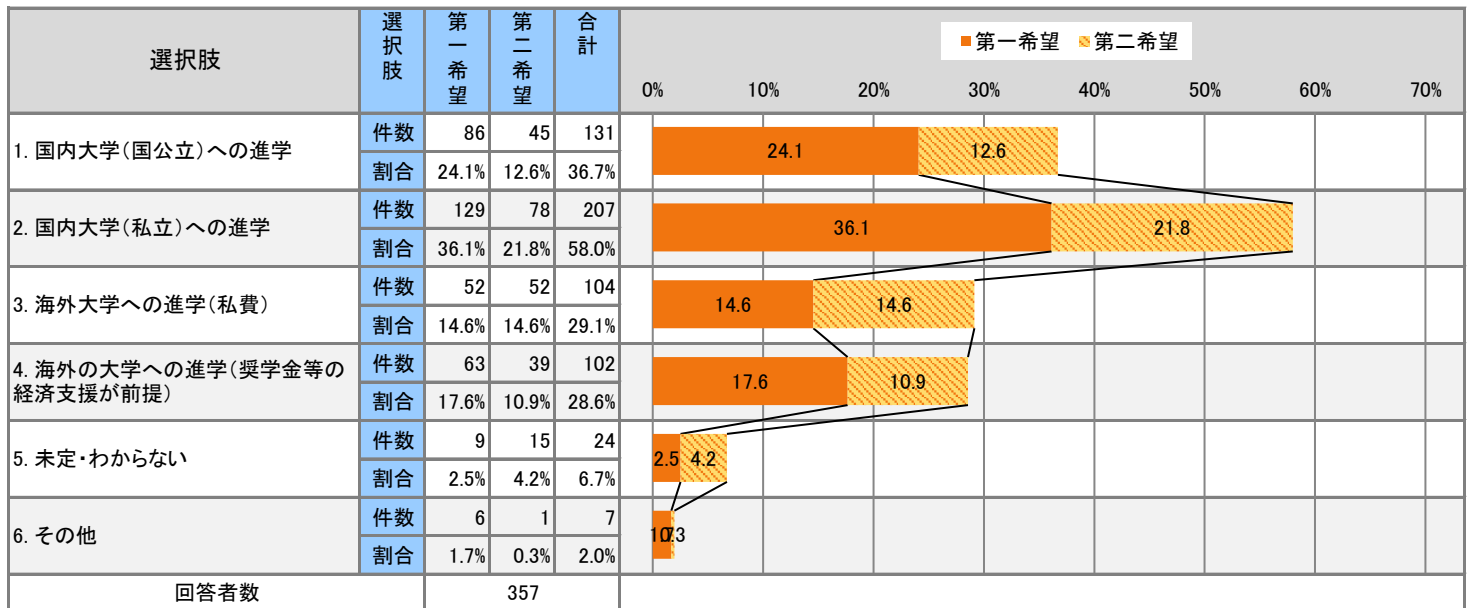
学校ID 1.DPコース履修 : 全体集計

回答者数

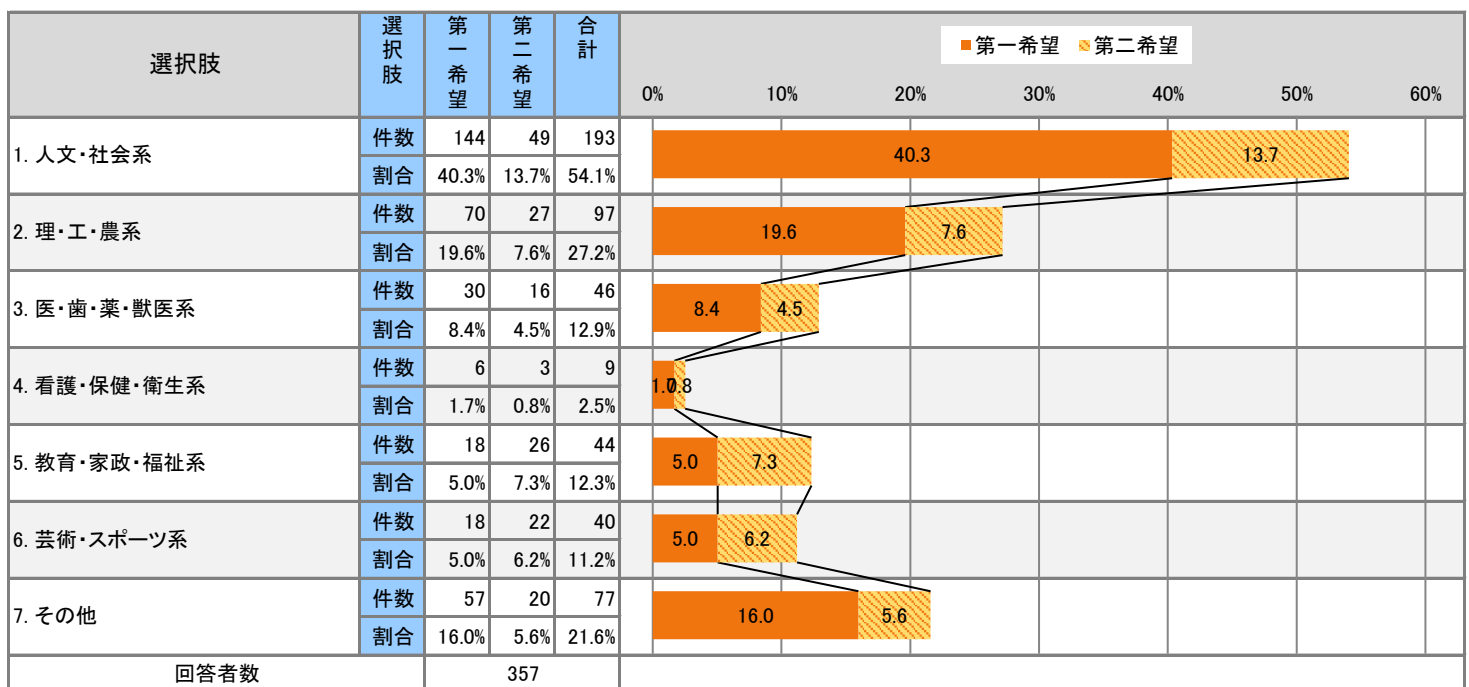
357

質問9. あなたの進路と将来の展望について教えてください。

(1) あなたは高校を卒業後、どのような進路を希望していますか。もっとも当てはまるものから番号を選択してください(第一希望だけでも可)。



(2) あなたはどの専門分野に進みたいですか。もっとも当てはまるものから番号を選択してください(第一希望だけでも可)。



AY2024高校3年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 1.DPコース履修 : 全体集計	回答者数	357
----	-----------------------	------	-----

(3) 質問9(1) で「1. 国内大学(国公立)への進学」「2. 国内大学(私立)への進学」と回答した方にうかがいます。あなたが現段階でもっとも希望する大学等に進学するとき、どのような区分の入試を受けるつもりですか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

選択肢	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%
1. 大学入学共通テスト	30	12.0%	12.0				
2. 一般選抜(前期課程・後期課程)	34	13.5%	13.5				
3. 特別入試(学校推薦型選抜(指定校・公募)・総合型選抜など)	179	71.3%	71.3				
4. 特別入試(国際バカロレア(IB)特別入試など)	160	63.7%	63.7				
5. その他	4	1.6%	1.6				
6. まだ決めていない	0	0.0%					
回答者数	251	-					

(4) あなたは、大学入試対策として以下の取り組みをどの程度行っていますか。

項目	平均	肯定回答率 (⑤+④)	否定回答率 (①+②)	選択肢	5.いつも	4.よくある	3.ときどき	2.あまりない	1.まったくない	合計	
① 大学入学共通テストや一般選抜のための勉強をしている	1.87	15.4%	73.4%	件数	20	32	38	42	206	338	5.9 9.5 11.2 12.4 60.9
				割合	5.9%	9.5%	11.2%	12.4%	60.9%	100.0%	
② 英語運用能力等の資格試験に向けて勉強している	3.32	51.2%	24.9%	件数	72	103	82	34	51	342	21.1 30.1 24.0 9.9 14.9
				割合	21.1%	30.1%	24.0%	9.9%	14.9%	100.0%	
③ 筆記試験(小論文やエッセイ)のための準備を行っている	3.34	54.3%	27.4%	件数	85	99	62	31	62	339	25.1 29.2 18.3 9.1 18.3
				割合	25.1%	29.2%	18.3%	9.1%	18.3%	100.0%	
④ 口述試験(面接)のための準備を行っている	3.29	52.8%	29.5%	件数	90	89	60	31	69	339	26.5 26.3 17.7 9.1 20.4
				割合	26.5%	26.3%	17.7%	9.1%	20.4%	100.0%	

平均点:「5.いつも」を5点、「4.よくある」を4点、「3.ときどき」を3点、「2.あまりない」を2点、「1.まったくない」を1点として加重平均

AY2024高校3年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 1.DPコース履修 : 全体集計	回答者数	357
----	-----------------------	------	-----

質問10. あなたの周囲の環境についておたずねします。

項目	平均	肯定回答率 (⑤+④) 回答率	否定回答率 (①+②) 回答率	選択肢	5.とてもあてはまる	4.ややあてはまる	3.どちらともいえない	2.あまりあてはまらない	1.まったくあてはまらない	合計	
(1) 本やインターネット環境など家で学ぶ環境が十分にある	4.71	96.8%	1.2%	件数 割合	261 75.4%	74 21.4%	7 2.0%	3 0.9%	1 0.3%	346 100.0%	
(2) 親や兄弟などの家族は普段からよく勉強を教えてくれる	2.58	30.9%	53.8%	件数 割合	46 13.3%	61 17.6%	53 15.3%	75 21.7%	111 32.1%	346 100.0%	
(3) 普段から家族が本や新聞を読んでいるのをよく見る	3.22	49.6%	37.1%	件数 割合	87 25.2%	84 24.3%	46 13.3%	73 21.2%	55 15.9%	345 100.0%	
(4) 親や保護者は自分の勉強のために必要なものを買ってくれる	4.65	94.2%	1.7%	件数 割合	251 72.8%	74 21.4%	14 4.1%	4 1.2%	2 0.6%	345 100.0%	
(5) 勉強のためであれば親や保護者は積極的に援助してくれる	4.64	92.8%	2.3%	件数 割合	261 75.4%	60 17.3%	17 4.9%	3 0.9%	5 1.4%	346 100.0%	
(6) 普段の生活の中でお金に困っていると感じることがある	2.29	22.0%	63.9%	件数 割合	33 9.5%	43 12.4%	49 14.2%	87 25.1%	134 38.7%	346 100.0%	
(7) 親や保護者はあなたのやりたいことを応援してくれる	4.61	91.3%	1.4%	件数 割合	248 71.7%	68 19.7%	25 7.2%	4 1.2%	1 0.3%	346 100.0%	
(8) 親や保護者は学校生活について相談に乗ってくれる	4.25	79.8%	4.6%	件数 割合	178 51.4%	98 28.3%	54 15.6%	11 3.2%	5 1.4%	346 100.0%	
(9) 周りの同級生は授業に熱心に取り組んでいる	4.21	79.8%	5.2%	件数 割合	162 46.8%	114 32.9%	52 15.0%	15 4.3%	3 0.9%	346 100.0%	
(10) 周りの同級生は普段からよく勉強を教えてくれる	4.01	71.1%	9.6%	件数 割合	149 43.4%	95 27.7%	66 19.2%	19 5.5%	14 4.1%	343 100.0%	
(11) 家族とよく海外の経験や国際的な時事問題を話したりする	3.68	63.6%	19.1%	件数 割合	113 32.7%	107 30.9%	60 17.3%	36 10.4%	30 8.7%	346 100.0%	
(12) 親や保護者が仕事などで英語などの外国語を使っている	2.75	39.3%	53.5%	件数 割合	99 28.6%	37 10.7%	25 7.2%	47 13.6%	138 39.9%	346 100.0%	
(13) 友達とよく海外の話題(SNS、音楽など)を話したりする	3.83	68.8%	16.8%	件数 割合	130 37.6%	108 31.2%	50 14.5%	35 10.1%	23 6.6%	346 100.0%	

平均点:「5.とてもあてはまる」を5点、「4.ややあてはまる」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりあてはまらない」を2点、「1.まったくあてはまらない」を1点として加重平均

AY2024高校3年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分

学校ID 2.DPコース以外 : 全体集計

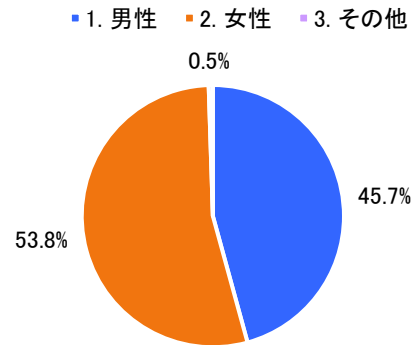
回答者数

1,403

質問1. あなた自身のことをうかがいます。

(3) 性別

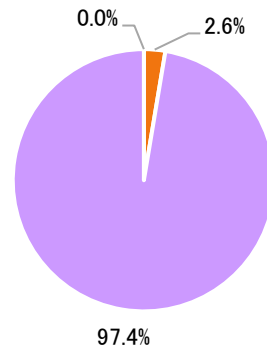
選択肢	件数	割合
1. 男性	628	45.7%
2. 女性	738	53.8%
3. その他	7	0.5%
合計	1,373	100.0%



(4) あなたは現在、ディプロマプログラム(DP)を履修していますか。

選択肢	件数	割合
1. 履修している(フル・ディプロマの取得を目指す)	0	0.0%
2. 履修している(科目履修生／サーティフィケートの取得を目指す)	37	2.6%
3. 履修していない	1,366	97.4%
合計	1,403	100.0%

- 1. 履修している(フル・ディプロマの取得を目指す)
- 2. 履修している(科目履修生／サーティフィケートの取得を目指す)
- 3. 履修していない



(5) 以下の項目の中で、あなたが経験した学校や教育プログラムはありますか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

選択肢	件数	割合	0%	10%	20%	30%	40%	50%	60%	70%
1. インターナショナル・スクール(日本)	69	4.9%	4.9							
2. インターナショナル・スクール(海外)	32	2.3%	2.3							
3. 海外の現地校	163	11.6%	11.6							
4. 海外の日本人学校	66	4.7%	4.7							
5. 国際バカロレア初等教育プログラム(PYP)	16	1.1%	1.1							
6. 国際バカロレア中等教育プログラム(MYP)	206	14.7%	14.7							
7. あてはまるものはない	926	66.0%	66.0							
回答者数	1,403	-								

AY2024高校3年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 2.DPコース以外 : 全体集計	回答者数	1,403
----	-----------------------	------	-------

質問2. あなたは以下の態度や状況にどのくらいあてはまると思いますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

項目	平均	(5肯定回答率)	(1否定回答率)	選択肢	5・とてもあてはまる	4・ややあてはまる	3・どちらともいえない	2・あまりあてはまらない	1・まったくあてはまらない	合計	
											5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない
(1) 知らないことがあると、よく質問をしたり調べたりする	4.03	81.5%	7.1%	件数 割合	417 29.8%	725 51.7%	160 11.4%	82 5.9%	17 1.2%	1,401 100.0%	29.8 51.7 11.4 5.9 1.2
(2) 自分はどのような人間かを考えることがよくある	3.93	73.6%	12.2%	件数 割合	482 34.4%	549 39.2%	198 14.1%	135 9.6%	36 2.6%	1,400 100.0%	34.4 39.2 14.1 9.6 2.6
(3) 社会のことをよく勉強している	3.25	45.5%	27.6%	件数 割合	187 13.4%	450 32.1%	376 26.9%	305 21.8%	82 5.9%	1,400 100.0%	13.4 32.1 26.9 21.8 5.9
(4) 自然や環境のことをよく勉強している	3.09	40.1%	33.3%	件数 割合	155 11.1%	404 29.0%	371 26.6%	348 24.9%	117 8.4%	1,395 100.0%	11.1 29.0 26.6 24.9 8.4
(5) 学校とは関係なく自分から勉強する習慣ができています	3.28	48.9%	28.8%	件数 割合	236 16.9%	445 31.9%	312 22.4%	272 19.5%	129 9.3%	1,394 100.0%	16.9 31.9 22.4 19.5 9.3
(6) 問題が起きたときにはその理由を理解しようとする	3.98	76.6%	6.7%	件数 割合	415 29.6%	659 47.0%	234 16.7%	72 5.1%	22 1.6%	1,402 100.0%	29.6 47.0 16.7 5.1 1.6
(7) 問題を解決するために自分ができることを考える	4.02	78.3%	5.4%	件数 割合	428 30.6%	668 47.7%	228 16.3%	59 4.2%	17 1.2%	1,400 100.0%	30.6 47.7 16.3 4.2 1.2
(8) 課題があれば自分で解決しようとする	3.91	72.6%	7.4%	件数 割合	388 27.8%	625 44.8%	279 20.0%	82 5.9%	22 1.6%	1,396 100.0%	27.8 44.8 20.0 5.9 1.6
(9) 他の人の気持ちや考えを十分に理解することができています	3.88	70.6%	9.0%	件数 割合	407 29.1%	580 41.5%	285 20.4%	91 6.5%	35 2.5%	1,398 100.0%	29.1 41.5 20.4 6.5 2.5
(10) 自分の気持ちや考えを十分に表現することができています	3.64	60.2%	16.1%	件数 割合	304 21.7%	539 38.5%	332 23.7%	194 13.9%	31 2.2%	1,400 100.0%	21.7 38.5 23.7 13.9 2.2
(11) 何かをするときに周囲の人を誘うことがよくある	3.73	66.2%	17.6%	件数 割合	391 28.6%	515 37.6%	221 16.2%	190 13.9%	51 3.7%	1,368 100.0%	28.6 37.6 16.2 13.9 3.7
(12) 他の人たちと協力してチームで行動することができる	4.09	78.7%	6.8%	件数 割合	526 38.6%	547 40.1%	198 14.5%	70 5.1%	23 1.7%	1,364 100.0%	38.6 40.1 14.5 5.1 1.7
(13) チームの中で自分の果たすべき役割を率先して行っている	3.92	72.2%	8.3%	件数 割合	400 29.4%	583 42.8%	265 19.5%	92 6.8%	21 1.5%	1,361 100.0%	29.4 42.8 19.5 6.8 1.5
(14) 自ら目標を設定し、その達成のために行動することができています	3.74	65.2%	11.9%	件数 割合	309 22.6%	582 42.6%	312 22.8%	137 10.0%	26 1.9%	1,366 100.0%	22.6 42.6 22.8 10.0 1.9
(15) グループの目的を示し、グループの人たちを効果的に行動させることができる	3.42	50.6%	20.7%	件数 割合	237 17.4%	454 33.3%	391 28.6%	212 15.5%	71 5.2%	1,365 100.0%	17.4 33.3 28.6 15.5 5.2
(16) 学校や社会の規則を守っている	4.24	82.5%	4.5%	件数 割合	643 47.2%	480 35.3%	177 13.0%	48 3.5%	13 1.0%	1,361 100.0%	47.2 35.3 13.0 3.5 1.0
(17) 自分の良心や従うべきルールを持ち、それに基づいて行動している	4.30	84.9%	3.1%	件数 割合	663 48.5%	497 36.4%	164 12.0%	35 2.6%	8 0.6%	1,367 100.0%	48.5 36.4 12.0 2.6 0.6
(18) 自分の行動に責任をとることができる	4.02	75.9%	6.2%	件数 割合	453 33.2%	583 42.7%	245 17.9%	66 4.8%	18 1.3%	1,365 100.0%	33.2 42.7 17.9 4.8 1.3

平均点:「5.とてもあてはまる」を5点、「4.ややあてはまる」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりあてはまらない」を2点、「1.まったくあてはまらない」を1点として加重平均

AY2024高校3年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 2.DPコース以外 : 全体集計	回答者数	1,403
----	-----------------------	------	-------

質問2. あなたは以下の態度や状況にどのくらいあてはまると思いますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

項目	平均	(⑤ + ④) 肯定回答率	(① + ②) 否定回答率	選択肢	5 : とてもあてはまる	4 : ややあてはまる	3 : どちらともいえない	2 : あまりあてはまらない	1 : まったくあてはまらない	合計	
(19) 他の人は自分と違う意見を持っていることを理解している	4.43	89.2%	2.6%	件数	776	442	113	23	12	1,366	
				割合	56.8%	32.4%	8.3%	1.7%	0.9%	100.0%	
(20) 世の中には色々な価値観や文化があることを理解している	4.53	91.6%	1.6%	件数	876	374	93	12	10	1,365	
				割合	64.2%	27.4%	6.8%	0.9%	0.7%	100.0%	
(21) 困っている人を助けることがよくある	3.79	66.2%	9.3%	件数	329	574	334	103	24	1,364	
				割合	24.1%	42.1%	24.5%	7.6%	1.8%	100.0%	
(22) いつも新しいことに挑戦している	3.39	47.1%	22.4%	件数	240	403	416	255	51	1,365	
				割合	17.6%	29.5%	30.5%	18.7%	3.7%	100.0%	
(23) いつも何か新しいことを生み出そうとしている	3.17	39.6%	30.3%	件数	211	330	411	315	99	1,366	
				割合	15.4%	24.2%	30.1%	23.1%	7.2%	100.0%	
(24) 自分の能力を有効に使うことができる	3.57	55.4%	13.5%	件数	253	505	424	145	40	1,367	
				割合	18.5%	36.9%	31.0%	10.6%	2.9%	100.0%	
(25) 健康的な生活に注意している	3.62	60.0%	19.8%	件数	363	457	275	204	67	1,366	
				割合	26.6%	33.5%	20.1%	14.9%	4.9%	100.0%	
(26) 体力・身体づくりをしている	3.14	41.9%	36.3%	件数	282	291	297	333	163	1,366	
				割合	20.6%	21.3%	21.7%	24.4%	11.9%	100.0%	
(27) 自分で計画を立て、それに従って物事を進めることができる	3.20	44.9%	30.2%	件数	195	419	340	292	121	1,367	
				割合	14.3%	30.7%	24.9%	21.4%	8.9%	100.0%	
(28) 社会や学校の一員としての義務と権利を認識している	3.76	63.9%	9.2%	件数	310	563	367	101	25	1,366	
				割合	22.7%	41.2%	26.9%	7.4%	1.8%	100.0%	
(29) 社会、学校などの周囲をよくするために積極的に関わっている	3.38	46.9%	20.4%	件数	234	406	447	202	76	1,365	
				割合	17.1%	29.7%	32.7%	14.8%	5.6%	100.0%	
(30) 自分の周りに変化が起きてもうまく適応できている	3.69	62.8%	12.8%	件数	293	563	331	136	39	1,362	
				割合	21.5%	41.3%	24.3%	10.0%	2.9%	100.0%	
(31) ストレスを感じる事があってもリラックスして前向きにとらえることができる	3.32	48.4%	27.2%	件数	256	405	334	267	105	1,367	
				割合	18.7%	29.6%	24.4%	19.5%	7.7%	100.0%	
(32) 自分の態度や行動の正しさを確認することがよくある	3.91	72.6%	7.6%	件数	380	611	270	82	22	1,365	
				割合	27.8%	44.8%	19.8%	6.0%	1.6%	100.0%	
(33) 自分の態度や行動をよりよいものになろうと努力している	3.99	75.8%	6.1%	件数	420	616	248	60	23	1,367	
				割合	30.7%	45.1%	18.1%	4.4%	1.7%	100.0%	

平均点:「5.とてもあてはまる」を5点、「4.ややあてはまる」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりあてはまらない」を2点、「1.まったくあてはまらない」を1点として加重平均

AY2024高校3年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 2.DPコース以外 : 全体集計	回答者数	1,403
----	-----------------------	------	-------

質問3. これまでに受けた高校の授業の中で、あなたは次のような活動をした経験がありますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

項目	平均	(5肯定回答率 + 4 + 3)	(1否定回答率 + 2)	選択肢	5 いつも	4 よくある	3 ときどき	2 あまりない	1 まったくない	合計	
											5.いつも 4.よくある 3.ときどき 2.あまりない 1.まったくない
(1) 先生の話から知識を得る	3.90	94.1%	5.9%	件数	374	586	326	59	22	1,367	27.4 42.9 23.8 4.3 2.3
				割合	27.4%	42.9%	23.8%	4.3%	1.6%	100.0%	
(2) 教科書を中心に学ぶ	3.45	80.1%	19.9%	件数	238	474	382	210	61	1,365	17.4 34.7 28.0 15.4 4.5
				割合	17.4%	34.7%	28.0%	15.4%	4.5%	100.0%	
(3) 探究したい課題について問いを立てる	3.42	80.0%	20.0%	件数	263	373	454	214	59	1,363	19.3 27.4 33.3 15.7 4.3
				割合	19.3%	27.4%	33.3%	15.7%	4.3%	100.0%	
(4) プロジェクト(探究・調査・実験・発表会)の計画を立てる	3.30	74.5%	25.5%	件数	232	386	400	252	96	1,366	17.0 28.3 29.3 18.4 7.0
				割合	17.0%	28.3%	29.3%	18.4%	7.0%	100.0%	
(5) 図書室を利用して資料や文献を探す	2.66	50.1%	49.9%	件数	140	224	319	389	291	1,363	10.3 16.4 23.4 28.5 21.3
				割合	10.3%	16.4%	23.4%	28.5%	21.3%	100.0%	
(6) 情報を得るとき、情報源の信頼性を確認する	3.79	88.1%	11.9%	件数	396	485	323	123	39	1,366	29.0 35.5 23.6 9.0 2.9
				割合	29.0%	35.5%	23.6%	9.0%	2.9%	100.0%	
(7) 英語で書かれた情報を収集する	2.81	56.4%	43.6%	件数	159	269	342	338	257	1,365	11.6 19.7 25.1 24.8 18.8
				割合	11.6%	19.7%	25.1%	24.8%	18.8%	100.0%	
(8) 自分と異なる立場や見方をもつ人の意見を聞く	3.94	93.0%	7.0%	件数	440	526	302	68	27	1,363	32.3 38.6 22.2 5.0 2.0
				割合	32.3%	38.6%	22.2%	5.0%	2.0%	100.0%	
(9) 本を一冊読む	2.88	57.3%	42.7%	件数	228	242	312	305	277	1,364	16.7 17.7 22.9 22.4 20.3
				割合	16.7%	17.7%	22.9%	22.4%	20.3%	100.0%	
(10) グループで協力して活動する	3.94	91.8%	8.2%	件数	459	505	291	82	30	1,367	33.6 36.9 21.3 6.0 2.2
				割合	33.6%	36.9%	21.3%	6.0%	2.2%	100.0%	
(11) 海外で起こった出来事や課題について考える	3.30	74.1%	25.9%	件数	244	385	380	235	118	1,362	17.9 28.3 27.9 17.3 8.7
				割合	17.9%	28.3%	27.9%	17.3%	8.7%	100.0%	
(12) あるテーマについて論述文(作文・エッセイ)を書く	3.20	71.4%	28.6%	件数	240	357	378	214	177	1,366	17.6 26.1 27.7 15.7 13.0
				割合	17.6%	26.1%	27.7%	15.7%	13.0%	100.0%	
(13) 学習の中で多様なメディア(新聞・映像・音楽など)に触れる	3.64	83.4%	16.6%	件数	361	434	344	164	62	1,365	26.4 31.8 25.2 12.0 4.5
				割合	26.4%	31.8%	25.2%	12.0%	4.5%	100.0%	
(14) 学習の成果を社会に発信する	2.67	52.8%	47.2%	件数	129	226	365	357	287	1,364	9.5 16.6 26.8 26.2 21.0
				割合	9.5%	16.6%	26.8%	26.2%	21.0%	100.0%	
(15) 自分が取り組んだプロジェクト(探究・調査・実験・発表会)のよかった点や課題を整理する	3.24	72.5%	27.5%	件数	246	348	396	239	136	1,365	18.0 25.5 29.0 17.5 10.0
				割合	18.0%	25.5%	29.0%	17.5%	10.0%	100.0%	
(16) 一問一答の問題を解く	3.45	76.4%	23.6%	件数	317	408	318	214	109	1,366	23.2 29.9 23.3 15.7 8.0
				割合	23.2%	29.9%	23.3%	15.7%	8.0%	100.0%	
(17) 用語や出来事を暗記する	3.75	85.4%	14.6%	件数	403	466	296	143	56	1,364	29.5 34.2 21.7 10.5 4.1
				割合	29.5%	34.2%	21.7%	10.5%	4.1%	100.0%	
(18) 作文・エッセイ・発表などへのフィードバックを受ける	3.34	76.8%	23.2%	件数	260	402	386	180	136	1,364	19.1 29.5 28.3 13.2 10.0
				割合	19.1%	29.5%	28.3%	13.2%	10.0%	100.0%	

平均点:「5.いつも」を5点、「4.よくある」を4点、「3.ときどき」を3点、「2.あまりない」を2点、「1.まったくない」を1点として加重平均

AY2024高校3年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 2.DPコース以外 : 全体集計	回答者数	1,403
----	-----------------------	------	-------

質問4. 高校生活の中で、あなたはどの程度意欲的に次のような活動に参加していますか(参加していましたか)。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

項目	平均	肯定回答率 (⑤+④)	否定回答率 (①+②)	選択肢	5 とてもあてはまる	4 ややあてはまる	3 どちらともいえない	2 あまりあてはまらない	1 まったくあてはまらない	合計	
											5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない
(1) 生徒会・委員会活動への参加	3.02	44.0%	39.8%	件数	272	328	222	243	300	1,365	
				割合	19.9%	24.0%	16.3%	17.8%	22.0%	100.0%	
(2) 部活動・クラブ活動への参加	3.64	63.2%	25.8%	件数	589	273	150	122	230	1,364	
				割合	43.2%	20.0%	11.0%	8.9%	16.9%	100.0%	
(3) 学校行事(体育祭・文化祭等)への参加	4.24	82.0%	6.4%	件数	685	433	159	65	22	1,364	
				割合	50.2%	31.7%	11.7%	4.8%	1.6%	100.0%	
(4) 授業外でのプロジェクト・探究活動への参加	3.27	49.2%	31.6%	件数	344	327	261	218	213	1,363	
				割合	25.2%	24.0%	19.1%	16.0%	15.6%	100.0%	
(5) ボランティア活動への参加	2.88	39.3%	44.4%	件数	252	284	223	255	350	1,364	
				割合	18.5%	20.8%	16.3%	18.7%	25.7%	100.0%	
(6) 海外との交流活動への参加	2.45	29.9%	57.0%	件数	183	225	179	216	562	1,365	
				割合	13.4%	16.5%	13.1%	15.8%	41.2%	100.0%	
(7) 留学(短期・長期・交換等)	1.92	18.4%	73.6%	件数	166	86	109	111	894	1,366	
				割合	12.2%	6.3%	8.0%	8.1%	65.4%	100.0%	

平均点:「5.とてもあてはまる」を5点、「4.ややあてはまる」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりあてはまらない」を2点、「1.まったくあてはまらない」を1点として加重平均

AY2024高校3年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分

学校ID 2.DPコース以外 : 全体集計

回答者数

1,403

質問5. 学期中の平日(月曜～金曜)放課後の学習時間(=1日あたりの平均)と学習内容を教えてください。

※時間は10分や30分の単位でおおまかに回答してください。

※時間あるいは分が0の場合は、空欄ではなく、例のように()内に0を記入してください。

例)「およそ(0)時間(40)分」、「およそ(2)時間(0)分」など。

(1) 1日あたりの放課後の学習時間: およそ()時間()分

回答区分	件数	割合	0%	10%	20%	30%	40%	50%
0分	95	6.9%	6.9					
1分以上30分以下	131	9.5%	9.5					
31分以上60分以下	156	11.3%	11.3					
61分以上90分以下	54	3.9%	3.9					
91分以上120分以下	174	12.6%	12.6					
121分以上150分以下	45	3.3%	3.3					
151分以上180分以下	161	11.7%	11.7					
181分以上	563	40.8%	40.8					
合計	1,379	100.0%						

(2) 1日あたりの放課後の学習時間のうち、①～⑤の時間配分を教えてください。

①高校の授業の予習、復習、課題(問題を解くなど)

回答区分	件数	割合	0%	5%	10%	15%	20%	25%	30%	35%
0分	427	33.2%	33.2							
1分以上30分以下	339	26.4%	26.4							
31分以上60分以下	324	25.2%	25.2							
61分以上90分以下	60	4.7%	4.7							
91分以上120分以下	74	5.8%	5.8							
121分以上150分以下	12	0.9%	0.9							
151分以上180分以下	18	1.4%	1.4							
181分以上	31	2.4%	2.4							
合計	1,285	100.0%								

AY2024高校3年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 2.DPコース以外 : 全体集計	回答者数	1,403
----	-----------------------	------	-------

②塾・予備校の予習、復習、課題(問題を解くなど)

回答区分	件数	割合	0%	10%	20%	30%	40%	50%	60%
0分	690	56.1%	56.1						
1分以上30分以下	92	7.5%	7.5						
31分以上60分以下	142	11.5%	11.5						
61分以上90分以下	51	4.1%	4.1						
91分以上120分以下	115	9.3%	9.3						
121分以上150分以下	25	2.0%	2.0						
151分以上180分以下	52	4.2%	4.2						
181分以上	63	5.1%	5.1						
合計	1,230	100.0%							

③調べ学習、探究・プロジェクト活動、課題論文

回答区分	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%
0分	830	71.2%	71.2				
1分以上30分以下	188	16.1%	16.1				
31分以上60分以下	102	8.8%	8.8				
61分以上90分以下	6	0.5%	0.5				
91分以上120分以下	23	2.0%	2.0				
121分以上150分以下	1	0.1%	0.1				
151分以上180分以下	5	0.4%	0.4				
181分以上	10	0.9%	0.9				
合計	1,165	100.0%					

AY2024高校3年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 2.DPコース以外 : 全体集計	回答者数	1,403
----	-----------------------	------	-------

④大学受験の準備(過去問を解く、小論文を書くなど)

回答区分	件数	割合	0%	5%	10%	15%	20%	25%	30%
0分	351	27.1%	27.1						
1分以上30分以下	119	9.2%	9.2						
31分以上60分以下	238	18.4%	18.4						
61分以上90分以下	61	4.7%	4.7						
91分以上120分以下	194	15.0%	15.0						
121分以上150分以下	37	2.9%	2.9						
151分以上180分以下	106	8.2%	8.2						
181分以上	188	14.5%	14.5						
合計	1,294	100.0%							

⑤資格試験に向けた勉強(英検、TOEIC、漢検など)

回答区分	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%
0分	866	74.0%	74.0				
1分以上30分以下	125	10.7%	10.7				
31分以上60分以下	109	9.3%	9.3				
61分以上90分以下	10	0.9%	0.9				
91分以上120分以下	43	3.7%	3.7				
121分以上150分以下	3	0.3%	0.3				
151分以上180分以下	6	0.5%	0.5				
181分以上	8	0.7%	0.7				
合計	1,170	100.0%					

AY2024高校3年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分

学校ID 2.DPコース以外 : 全体集計

回答者数

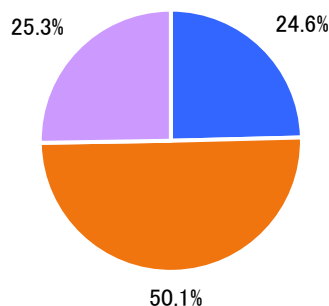
1,403

質問6. あなたの高校の成績と英語運用能力に関する資格について教えてください。

(1) あなたの現在の成績は、学年でどのくらいですか。

選択肢	件数	割合
1. 下のほう	341	24.6%
2. まんなか	695	50.1%
3. 上のほう	350	25.3%
合計	1,386	100.0%

■ 1. 下のほう ■ 2. まんなか ■ 3. 上のほう



(2) あなたが現在取得している英語運用能力に関する資格を教えてください。あてはまる番号に○をつけ、級やスコア等を記入してください。

選択肢	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%
1. 英検(実用英語技能検定)	1,080	70.2%	70.2				
2. TOEFL	44	2.9%	2.9				
3. TOEIC	63	4.1%	4.1				
4. IELTSアカデミック・モジュール	44	2.9%	2.9				
5. その他	99	6.4%	6.4				
6. 資格は取得していない	209	13.6%	13.6				
合計	1,539	100.0%					

AY2024高校3年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 2.DPコース以外 : 全体集計	回答者数	1,403
----	-----------------------	------	-------

質問7. あなたは現時点で、以下のことが、どのくらい身についていると思いますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

項目	平均	(⑤ + ④) 肯定回答率	(① + ②) 否定回答率	選択肢	5. 身についている	4. やや身についている	3. どちらともいえない	2. あまり身についていない	1. 身についていない	合計	
											5.身についている 4.やや身についている 3.どちらともいえない 2.あまり身についていない 1.身についていない 0% 25% 50% 75% 100%
(1) 興味のある対象について深く学習し、理解する姿勢	4.14	81.1%	5.0%	件数 542 589 194 52 18 1,395 割合 38.9% 42.2% 13.9% 3.7% 1.3% 100.0%	38.9	42.2	13.9	3.7	1.3	1,395	
(2) 人文・社会・自然科学を横断する幅広い知識	3.37	48.5%	20.1%	件数 195 481 439 210 70 1,395 割合 14.0% 34.5% 31.5% 15.1% 5.0% 100.0%	14.0	34.5	31.5	15.1	5.0	1,395	
(3) 困難な課題に取り組む力	3.64	60.1%	13.7%	件数 292 547 365 145 46 1,395 割合 20.9% 39.2% 26.2% 10.4% 3.3% 100.0%	20.9	39.2	26.2	10.4	3.3	1,395	
(4) 他者と意思疎通をはかり人間関係を構築する能力	3.93	72.6%	10.8%	件数 469 543 230 111 40 1,393 割合 33.7% 39.0% 16.5% 8.0% 2.9% 100.0%	33.7	39.0	16.5	8.0	2.9	1,393	
(5) 自分の良心や社会の規範に沿って行動する力	4.12	80.1%	4.3%	件数 526 588 217 43 17 1,391 割合 37.8% 42.3% 15.6% 3.1% 1.2% 100.0%	37.8	42.3	15.6	3.1	1.2	1,391	
(6) 人や社会によって違った考えや文化があることへの理解	4.29	84.4%	2.9%	件数 681 494 177 28 13 1,393 割合 48.9% 35.5% 12.7% 2.0% 0.9% 100.0%	48.9	35.5	12.7	2.0	0.9	1,393	
(7) 他者を尊重し、ともに行動する力	4.20	81.2%	3.7%	件数 605 528 211 35 17 1,396 割合 43.3% 37.8% 15.1% 2.5% 1.2% 100.0%	43.3	37.8	15.1	2.5	1.2	1,396	
(8) 予測不可能な事態に直面しても挑戦する姿勢	3.70	63.9%	12.1%	件数 293 598 335 134 34 1,394 割合 21.0% 42.9% 24.0% 9.6% 2.4% 100.0%	21.0	42.9	24.0	9.6	2.4	1,394	
(9) 自分の生活と自然や社会とのつながりの理解	3.63	59.6%	12.8%	件数 277 554 386 133 45 1,395 割合 19.9% 39.7% 27.7% 9.5% 3.2% 100.0%	19.9	39.7	27.7	9.5	3.2	1,395	
(10) 自分の行動を評価し、次に生かす力	3.77	65.3%	9.7%	件数 324 584 347 104 31 1,390 割合 23.3% 42.0% 25.0% 7.5% 2.2% 100.0%	23.3	42.0	25.0	7.5	2.2	1,390	
(11) 問題が起きたときに解決する力	3.83	70.5%	8.0%	件数 314 669 299 88 24 1,394 割合 22.5% 48.0% 21.4% 6.3% 1.7% 100.0%	22.5	48.0	21.4	6.3	1.7	1,394	
(12) 自ら率先して行動する力	3.64	59.7%	15.9%	件数 337 493 339 165 56 1,390 割合 24.2% 35.5% 24.4% 11.9% 4.0% 100.0%	24.2	35.5	24.4	11.9	4.0	1,390	
(13) 自分自身で計画立て、それに基づいて実行する力	3.42	52.6%	22.6%	件数 268 463 345 217 97 1,390 割合 19.3% 33.3% 24.8% 15.6% 7.0% 100.0%	19.3	33.3	24.8	15.6	7.0	1,390	
(14) 情報を処理し、活用する力	3.72	64.2%	10.8%	件数 300 594 347 115 36 1,392 割合 21.6% 42.7% 24.9% 8.3% 2.6% 100.0%	21.6	42.7	24.9	8.3	2.6	1,392	
(15) 地域社会の一員としての自覚	3.35	47.2%	23.2%	件数 246 411 413 234 89 1,393 割合 17.7% 29.5% 29.6% 16.8% 6.4% 100.0%	17.7	29.5	29.6	16.8	6.4	1,393	

平均点:「5.身についている」を5点、「4.やや身についている」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまり身についていない」を2点、「1.身についていない」を1点として加重平均

AY2024高校3年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 2.DPコース以外 : 全体集計	回答者数	1,403
----	-----------------------	------	-------

質問7. あなたは現時点で、以下のことが、どのくらい身についていると思いますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

項目	平均	肯定回答率 (⑤+④)	否定回答率 (①+②)	選択肢	5 ・ 身についている	4 ・ やや身についている	3 ・ どちらともいえない	2 ・ あまり身についていない	1 ・ 身についていない	合計	
											■ 5.身についている ■ 4.やや身についている ■ 3.どちらともいえない ■ 2.あまり身についていない ■ 1.身についていない
(16) 日本社会の一員としての自覚	3.44	51.3%	20.8%	件数	269	447	389	203	87	1,395	19.3 32.0 27.9 14.6 6.2
				割合	19.3%	32.0%	27.9%	14.6%	6.2%	100.0%	
(17) グローバルな社会の一員としての自覚	3.39	49.0%	22.2%	件数	265	417	402	211	98	1,393	19.0 29.9 28.9 15.1 7.0
				割合	19.0%	29.9%	28.9%	15.1%	7.0%	100.0%	
(18) チームで協力して行動する力	3.98	73.9%	7.9%	件数	479	550	254	79	31	1,393	34.4 39.5 18.2 5.2 2.2
				割合	34.4%	39.5%	18.2%	5.7%	2.2%	100.0%	
(19) リーダーシップの能力	3.32	49.1%	25.3%	件数	239	445	357	232	120	1,393	17.2 31.9 25.6 16.7 8.6
				割合	17.2%	31.9%	25.6%	16.7%	8.6%	100.0%	
(20) 「国語(現代文、古典等)」に関する能力	3.37	51.5%	22.0%	件数	193	524	369	214	92	1,392	13.9 37.6 26.5 15.4 6.6
				割合	13.9%	37.6%	26.5%	15.4%	6.6%	100.0%	
(21) 「社会科(歴史、地理、公民等)」に関する能力	3.35	49.8%	23.3%	件数	202	491	374	238	87	1,392	14.5 35.3 26.9 17.1 6.3
				割合	14.5%	35.3%	26.9%	17.1%	6.3%	100.0%	
(22) 「数学」に関する能力	3.06	40.6%	32.8%	件数	154	411	370	272	185	1,392	11.1 29.5 26.6 19.5 13.3
				割合	11.1%	29.5%	26.6%	19.5%	13.3%	100.0%	
(23) 「理科(物理、化学、生物、地学等)」に関する能力	3.05	40.6%	34.1%	件数	157	407	352	297	176	1,389	11.3 29.3 25.3 21.4 12.7
				割合	11.3%	29.3%	25.3%	21.4%	12.7%	100.0%	
(24) 「外国語(英語等)」に関する能力	3.67	61.6%	13.7%	件数	322	536	343	132	59	1,392	23.1 38.5 24.6 9.5 4.2
				割合	23.1%	38.5%	24.6%	9.5%	4.2%	100.0%	
(25) その他の教科(芸術、体育、専門等)に関する能力	3.72	62.8%	11.9%	件数	345	526	351	112	53	1,387	24.9 37.9 25.3 8.1 3.8
				割合	24.9%	37.9%	25.3%	8.1%	3.8%	100.0%	

平均点: 「5.身についている」を5点、「4.やや身についている」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまり身についていない」を2点、「1.身についていない」を1点として加重平均

AY2024高校3年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 2.DPコース以外 : 全体集計	回答者数	1,403
----	-----------------------	------	-------

質問8. あなたは、あなたの現在や将来についてどのように考えていますか。

(1) 学校生活について

項目	平均	(肯定回答率) (⑤+④)	(否定回答率) (①+②)	選択肢	5 とても 思う	4 やや 思う	3 どちら とも いえない	2 あまり そう 思わない	1 まったく そう 思わない	合計	
① 学校の授業などを通じた今の自分の学習に満足している	3.32	49.2%	25.5%	件数	201	485	352	265	90	1,393	
				割合	14.4%	34.8%	25.3%	19.0%	6.5%	100.0%	14.4 34.8 25.3 19.0 6.5
② これまでの学校での学習やさまざまな経験で得られた今の自分の能力に満足している	3.28	47.8%	27.4%	件数	227	439	346	262	120	1,394	
				割合	16.3%	31.5%	24.8%	18.8%	8.6%	100.0%	16.3 31.5 24.8 18.8 8.6
③ 高校生活全体に満足している	3.84	68.2%	11.4%	件数	427	523	284	105	53	1,392	
				割合	30.7%	37.6%	20.4%	7.5%	3.8%	100.0%	30.7 37.6 20.4 7.5 3.8

平均点:「5.とても思う」を5点、「4.やや思う」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりそう思わない」を2点、「1.まったくそう思わない」を1点として加重平均

(2) 将来について

項目	平均	(肯定回答率) (⑤+④)	(否定回答率) (①+②)	選択肢	5 とても 思う	4 やや 思う	3 どちら とも いえない	2 あまり そう 思わない	1 まったく そう 思わない	合計	
① 将来、学びたい分野について考えている	4.45	88.7%	4.4%	件数	876	359	97	36	25	1,393	
				割合	62.9%	25.8%	7.0%	2.6%	1.8%	100.0%	62.9 25.8 7.0 2.6 1.8
② 将来、行きたい大学について考えている	4.50	88.5%	3.6%	件数	934	297	110	22	28	1,391	
				割合	67.1%	21.4%	7.9%	1.6%	2.0%	100.0%	67.1 21.4 7.9 1.6 2.0
③ 将来、やりたい仕事について考えている	4.19	78.0%	9.6%	件数	747	339	173	92	42	1,393	
				割合	53.6%	24.3%	12.4%	6.6%	3.0%	100.0%	53.6 24.3 12.4 6.6 3.0

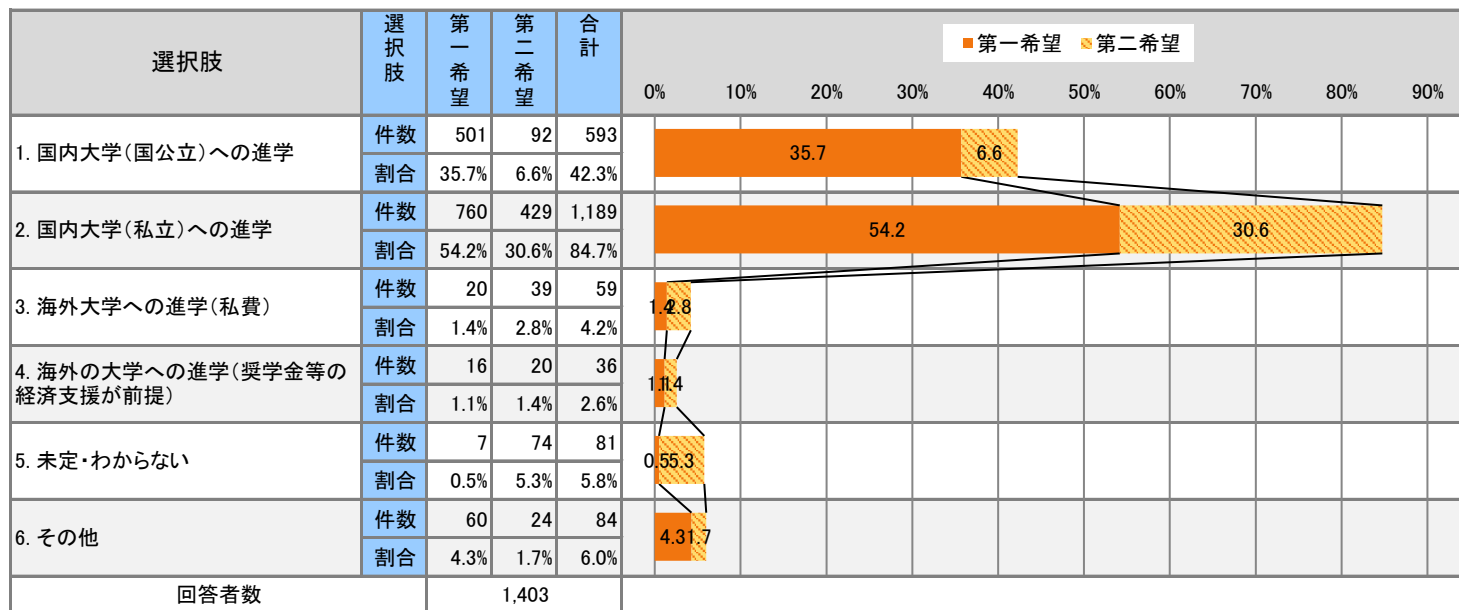
平均点:「5.とても思う」を5点、「4.やや思う」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりそう思わない」を2点、「1.まったくそう思わない」を1点として加重平均

AY2024高校3年生対象 高校での学習・経験に関する調査

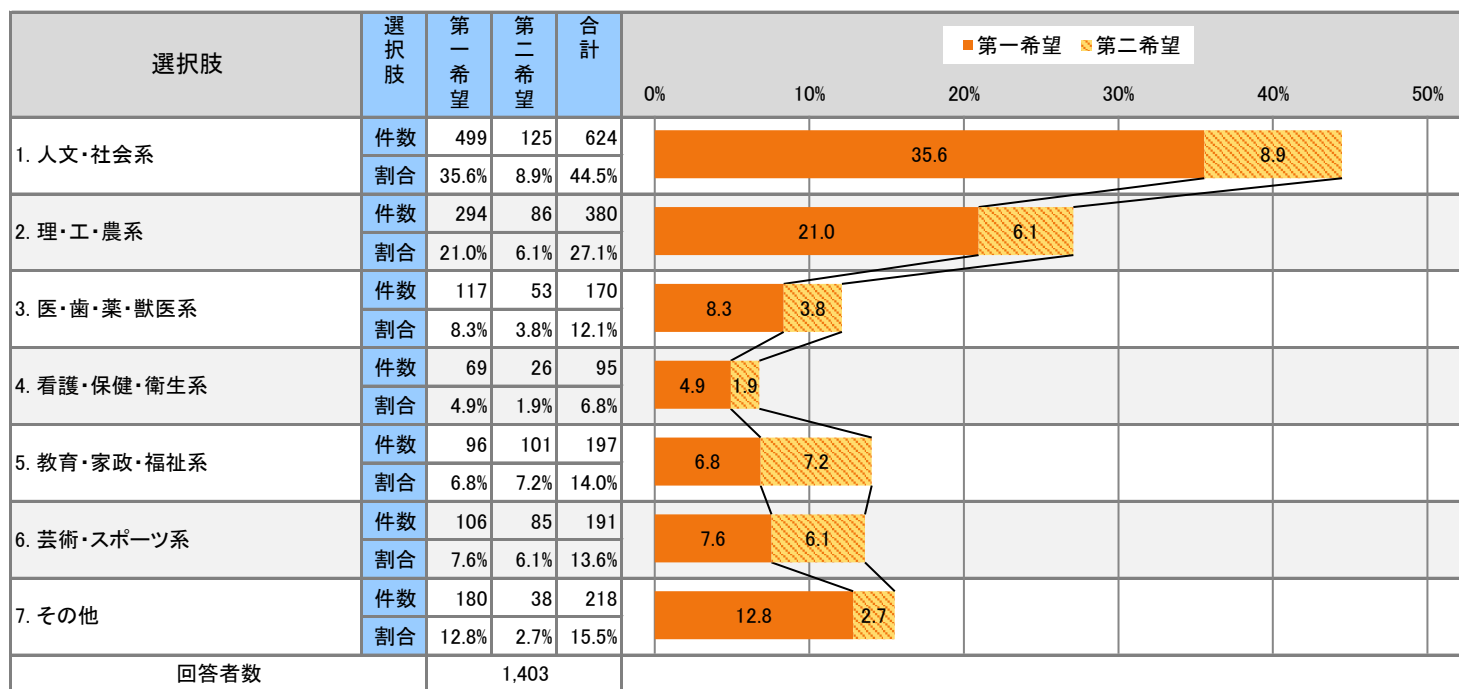
区分	学校ID 2.DPコース以外 : 全体集計	回答者数	1,403
----	-----------------------	------	-------

質問9. あなたの進路と将来の展望について教えてください。

(1) あなたは高校を卒業後、どのような進路を希望していますか。もっとも当てはまるものから番号を選択してください(第一希望だけでも可)。



(2) あなたはどの専門分野に進みたいですか。もっとも当てはまるものから番号を選択してください(第一希望だけでも可)。



AY2024高校3年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 2.DPコース以外 : 全体集計	回答者数	1,403
----	-----------------------	------	-------

(3) 質問9(1) で「1. 国内大学(国公立)への進学」「2. 国内大学(私立)への進学」と回答した方にうかがいます。あなたが現段階でもっとも希望する大学等に進学するとき、どのような区分の入試を受けるつもりですか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

選択肢	件数	割合	0%	10%	20%	30%	40%	50%	60%	70%
1. 大学入学共通テスト	615	48.3%	48.3							
2. 一般選抜(前期課程・後期課程)	673	52.8%	52.8							
3. 特別入試(学校推薦型選抜(指定校・公募)・総合型選抜など)	756	59.3%	59.3							
4. 特別入試(国際バカロレア(IB)特別入試など)	2	0.2%	0.2							
5. その他	40	3.1%	3.1							
6. まだ決めていない	15	1.2%	1.2							
回答者数	1,274	-								

(4) あなたは、大学入試対策として以下の取り組みをどの程度行っていますか。

項目	平均	(⑤+④)肯定回答率	(①+②)否定回答率	選択肢	5.いつも	4.よくある	3.ときどき	2.あまりない	1.まったくない	合計	0%	25%	50%	75%	100%
① 大学入学共通テストや一般選抜のための勉強をしている	3.43	56.3%	31.6%	件数	553	203	162	120	305	1,343	5.いつも 4.よくある 3.ときどき 2.あまりない 1.まったくない				
				割合	41.2%	15.1%	12.1%	8.9%	22.7%	100.0%					
② 英語運用能力等の資格試験に向けて勉強している	2.53	27.3%	50.7%	件数	158	207	295	207	471	1,338					
				割合	11.8%	15.5%	22.0%	15.5%	35.2%	100.0%					
③ 筆記試験(小論文やエッセイ)のための準備を行っている	2.55	31.3%	51.6%	件数	205	216	229	151	543	1,344					
				割合	15.3%	16.1%	17.0%	11.2%	40.4%	100.0%					
④ 口述試験(面接)のための準備を行っている	2.77	38.9%	44.3%	件数	247	279	227	112	486	1,351					
				割合	18.3%	20.7%	16.8%	8.3%	36.0%	100.0%					

平均点:「5.いつも」を5点、「4.よくある」を4点、「3.ときどき」を3点、「2.あまりない」を2点、「1.まったくない」を1点として加重平均

AY2024高校3年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 2.DPコース以外 : 全体集計	回答者数	1,403
----	-----------------------	------	-------

質問10. あなたの周囲の環境についておたずねします。

項目	平均	肯定回答率 (⑤+④) (%)	否定回答率 (①+②) (%)	選択肢	5 とてもあてはまる	4 ややあてはまる	3 どちらともいえない	2 あまりあてはまらない	1 まったくあてはまらない	合計	
(1) 本やインターネット環境など家で学ぶ環境が十分にある	4.54	91.1%	1.9%	件数 割合	887 65.0%	357 26.2%	95 7.0%	18 1.3%	8 0.6%	1,365 100.0%	5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない
(2) 親や兄弟などの家族は普段からよく勉強を教えてくれる	2.56	29.4%	51.8%	件数 割合	167 12.2%	235 17.2%	258 18.9%	242 17.7%	466 34.1%	1,368 100.0%	5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない
(3) 普段から家族が本や新聞を読んでいるのをよく見る	3.02	43.3%	40.3%	件数 割合	267 19.6%	324 23.7%	224 16.4%	269 19.7%	281 20.6%	1,365 100.0%	5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない
(4) 親や保護者は自分の勉強のために必要なものを買ってくれる	4.48	87.6%	2.9%	件数 割合	886 64.8%	312 22.8%	130 9.5%	21 1.5%	18 1.3%	1,367 100.0%	5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない
(5) 勉強のためであれば親や保護者は積極的に援助してくれる	4.50	88.5%	3.1%	件数 割合	891 65.2%	318 23.3%	115 8.4%	27 2.0%	15 1.1%	1,366 100.0%	5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない
(6) 普段の生活の中でお金に困っていると感じることがある	2.34	22.3%	59.9%	件数 割合	110 8.1%	194 14.2%	244 17.9%	315 23.1%	502 36.8%	1,365 100.0%	5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない
(7) 親や保護者はあなたのやりたいことを応援してくれる	4.49	88.2%	3.1%	件数 割合	890 65.2%	315 23.1%	119 8.7%	27 2.0%	15 1.1%	1,366 100.0%	5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない
(8) 親や保護者は学校生活について相談に乗ってくれる	4.15	75.6%	7.4%	件数 割合	686 50.2%	347 25.4%	232 17.0%	54 4.0%	47 3.4%	1,366 100.0%	5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない
(9) 周りの同級生は授業に熱心に取り組んでいる	3.90	68.4%	11.0%	件数 割合	485 35.5%	449 32.9%	281 20.6%	113 8.3%	37 2.7%	1,365 100.0%	5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない
(10) 周りの同級生は普段からよく勉強を教えてくれる	3.71	61.5%	15.8%	件数 割合	411 30.1%	429 31.4%	310 22.7%	145 10.6%	70 5.1%	1,365 100.0%	5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない
(11) 家族とよく海外の経験や国際的な時事問題を話したりする	3.09	44.0%	36.0%	件数 割合	280 20.5%	320 23.5%	272 20.0%	220 16.1%	271 19.9%	1,363 100.0%	5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない
(12) 親や保護者が仕事などで英語などの外国語を使っている	2.09	22.1%	68.1%	件数 割合	162 11.9%	139 10.2%	134 9.8%	149 10.9%	779 57.2%	1,363 100.0%	5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない
(13) 友達とよく海外の話題(SNS、音楽など)を話したりする	3.27	49.5%	32.1%	件数 割合	351 25.7%	324 23.7%	252 18.5%	212 15.5%	226 16.6%	1,365 100.0%	5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない

平均点:「5.とてもあてはまる」を5点、「4.ややあてはまる」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりあてはまらない」を2点、「1.まったくあてはまらない」を1点として加重平均

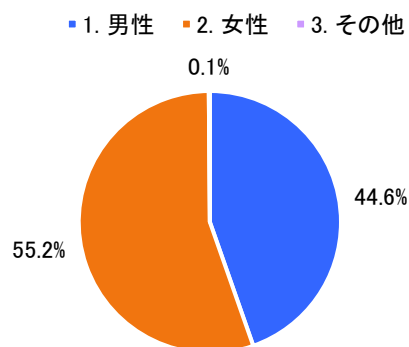
AY2025高校2年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID : 全体集計	回答者数	2,321
----	-------------	------	-------

質問1. あなた自身のことをうかがいます。

(3) 性別

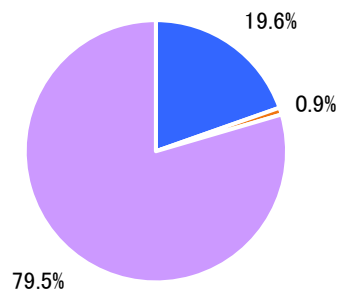
選択肢	件数	割合
1. 男性	1,026	44.6%
2. 女性	1,270	55.2%
3. その他	3	0.1%
合計	2,299	100.0%



(4) あなたは現在、ディプロマプログラム (DP) を履修していますか。

選択肢	件数	割合
1. 履修している (フル・ディプロマの取得を目指す)	455	19.6%
2. 履修している (科目履修生 / サートIFICATEの取得を目指す)	20	0.9%
3. 履修していない	1,846	79.5%
合計	2,321	100.0%

- 1. 履修している (フル・ディプロマの取得を目指す)
- 2. 履修している (科目履修生 / サートIFICATEの取得を目指す)
- 3. 履修していない



(5) 以下の項目の中で、あなたが経験した学校や教育プログラムはありますか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

選択肢	件数	割合	0%	10%	20%	30%	40%	50%	60%	70%
1. インターナショナル・スクール (日本)	168	7.2%	7.2							
2. インターナショナル・スクール (海外)	122	5.3%	5.3							
3. 海外の現地校	309	13.3%	13.3							
4. 海外の日本人学校	114	4.9%	4.9							
5. 国際バカロレア初等教育プログラム (PYP)	71	3.1%	3.1							
6. 国際バカロレア中等教育プログラム (MYP)	549	23.7%	23.7							
7. あてはまるものはない	1,332	57.4%	57.4							
回答者数	2,321	-								

AY2025高校2年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID : 全体集計	回答者数	2,321
----	-------------	------	-------

質問2. あなたは以下の態度や状況にどのくらいあてはまると思いますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

項目	平均	(肯定回答率 (⑤+④))	(否定回答率 (①+②))	選択肢	5 とてもあてはまる	4 ややあてはまる	3 どちらともいえない	2 あまりあてはまらない	1 まったくあてはまらない	合計	5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない				
											0%	25%	50%	75%	100%
(1) 知らないことがあると、よく質問をしたり調べたりする	4.03	81.7%	7.4%	件数	673	1,217	253	154	17	2,314	29.1	52.6	10.9	6.0	2.7
				割合	29.1%	52.6%	10.9%	6.7%	0.7%	100.0%					
(2) 自分はどのような人間かを考えることがよくある	3.97	74.9%	10.7%	件数	802	931	333	200	48	2,314	34.7	40.2	14.4	8.6	2.1
				割合	34.7%	40.2%	14.4%	8.6%	2.1%	100.0%					
(3) 社会のことをよく勉強している	3.13	37.8%	29.8%	件数	216	658	748	595	95	2,312	9.3	28.5	32.4	25.7	4.1
				割合	9.3%	28.5%	32.4%	25.7%	4.1%	100.0%					
(4) 自然や環境のことをよく勉強している	3.01	34.7%	36.4%	件数	220	582	667	691	149	2,309	9.5	25.2	28.9	29.9	6.5
				割合	9.5%	25.2%	28.9%	29.9%	6.5%	100.0%					
(5) 学校とは関係なく自分から勉強する習慣ができている	3.05	38.7%	36.9%	件数	295	599	565	639	215	2,313	12.8	25.9	24.4	27.6	9.3
				割合	12.8%	25.9%	24.4%	27.6%	9.3%	100.0%					
(6) 問題が起きたときにはその理由を理解しようとする	4.00	79.0%	5.8%	件数	628	1,198	350	117	18	2,311	27.2	51.8	15.1	5.0	0.8
				割合	27.2%	51.8%	15.1%	5.1%	0.8%	100.0%					
(7) 問題を解決するために自分ができることを考える	4.04	80.2%	4.8%	件数	675	1,179	345	94	18	2,311	29.2	51.0	14.9	4.0	0.8
				割合	29.2%	51.0%	14.9%	4.1%	0.8%	100.0%					
(8) 課題があれば自分で解決しようとする	3.95	76.2%	6.1%	件数	602	1,157	409	120	21	2,309	26.1	50.1	17.7	5.0	0.9
				割合	26.1%	50.1%	17.7%	5.2%	0.9%	100.0%					
(9) 自分の気持ちや考えを十分に表現することができる	3.71	64.2%	14.4%	件数	519	966	496	294	39	2,314	22.4	41.7	21.4	12.7	1.7
				割合	22.4%	41.7%	21.4%	12.7%	1.7%	100.0%					
(10) 他の人の気持ちや考えを十分に理解することができる	3.83	69.5%	8.8%	件数	542	1,068	502	171	32	2,315	23.4	46.1	21.7	7.4	1.4
				割合	23.4%	46.1%	21.7%	7.4%	1.4%	100.0%					
(11) 他の人の異なる意見を受け入れて価値を認めることができる	4.16	85.3%	3.6%	件数	793	1,171	255	73	11	2,303	34.4	50.8	11.1	3.2	0.5
				割合	34.4%	50.8%	11.1%	3.2%	0.5%	100.0%					
(12) 異なる考え方や意見を調整して物事を進めることがよくある	3.96	76.7%	5.8%	件数	602	1,163	403	117	16	2,301	26.2	50.5	17.5	5.0	0.7
				割合	26.2%	50.5%	17.5%	5.1%	0.7%	100.0%					
(13) 何かをするときに周囲の人を誘うことがよくある	3.86	69.8%	14.3%	件数	756	848	366	271	57	2,298	32.9	36.9	15.9	11.2	5.5
				割合	32.9%	36.9%	15.9%	11.8%	2.5%	100.0%					
(14) 他の人たちと協力してチームで行動することができる	4.13	82.0%	6.0%	件数	867	1,016	274	117	21	2,295	37.8	44.3	11.9	5.0	0.9
				割合	37.8%	44.3%	11.9%	5.1%	0.9%	100.0%					
(15) チームの中で自分の果たすべき役割を率先して行っている	3.97	75.0%	6.6%	件数	672	1,049	424	126	25	2,296	29.3	45.7	18.5	5.6	1.1
				割合	29.3%	45.7%	18.5%	5.5%	1.1%	100.0%					
(16) 自ら目標を設定し、その達成のために行動することができる	3.69	63.9%	13.9%	件数	500	966	512	264	54	2,296	21.8	42.1	22.3	11.2	2.4
				割合	21.8%	42.1%	22.3%	11.5%	2.4%	100.0%					
(17) グループの目的を示し、グループの人たちを効果的に行動させることができる	3.44	50.8%	20.2%	件数	374	794	667	390	75	2,300	16.3	34.5	29.0	17.0	3.3
				割合	16.3%	34.5%	29.0%	17.0%	3.3%	100.0%					
(18) 学校や社会の規則を守っている	4.21	83.3%	4.0%	件数	986	933	292	72	20	2,303	42.8	40.5	12.7	3.0	0.9
				割合	42.8%	40.5%	12.7%	3.1%	0.9%	100.0%					
(19) 自分の良心や従うべきルールを持ち、それに基づいて行動している	4.26	86.3%	2.9%	件数	996	991	250	56	10	2,303	43.2	43.0	10.9	2.4	0.4
				割合	43.2%	43.0%	10.9%	2.4%	0.4%	100.0%					

平均点:「5.とてもあてはまる」を5点、「4.ややあてはまる」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりあてはまらない」を2点、「1.まったくあてはまらない」を1点として加重平均

AY2025高校2年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID : 全体集計	回答者数	2,321
----	-------------	------	-------

質問2. あなたは以下の態度や状況にどのくらいあてはまると思いますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

項目	平均	(5肯定回答率)	(1否定回答率)	選択肢	5・とてもあてはまる	4・ややあてはまる	3・どちらともいえない	2・あまりあてはまらない	1・まったくあてはまらない	合計	
(20) 自分の行動に責任をとることができる	4.01	77.0%	5.9%	件数 割合	719 31.3%	1,050 45.7%	393 17.1%	111 4.8%	25 1.1%	2,298 100.0%	5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない
(21) 自分の態度や行動の正しさを確認することがよくある	4.06	78.1%	5.9%	件数 割合	798 34.7%	1,001 43.5%	367 15.9%	113 4.9%	24 1.0%	2,303 100.0%	
(22) 自分の態度や行動をよりよいものになしようと努力している	4.16	81.4%	4.0%	件数 割合	904 39.3%	971 42.2%	335 14.5%	77 3.3%	16 0.7%	2,303 100.0%	
(23) 他の人は自分と違う意見を持っていることを理解している	4.46	91.5%	1.5%	件数 割合	1,285 55.9%	819 35.6%	161 7.0%	26 1.1%	8 0.3%	2,299 100.0%	
(24) 世の中には色々な価値観や文化があることを理解している	4.55	93.6%	1.5%	件数 割合	1,458 63.5%	693 30.2%	112 4.9%	22 1.0%	12 0.5%	2,297 100.0%	
(25) 他の国の人々の生活習慣や考え方の違いを調べることがよくある	3.43	51.1%	26.8%	件数 割合	535 23.3%	640 27.9%	506 22.0%	515 22.4%	102 4.4%	2,298 100.0%	
(26) 困っている人を助けることがよくある	3.76	65.1%	8.6%	件数 割合	480 20.9%	1,015 44.2%	605 26.3%	163 7.1%	35 1.5%	2,298 100.0%	
(27) いつも新しいことに挑戦している	3.37	47.3%	23.9%	件数 割合	390 17.0%	698 30.3%	663 28.8%	460 20.0%	89 3.9%	2,300 100.0%	
(28) いつも何か新しいことを生み出そうとしている	3.18	39.4%	31.2%	件数 割合	359 15.6%	548 23.8%	676 29.4%	578 25.1%	141 6.1%	2,302 100.0%	
(29) 自分の能力を有効に使うことができる	3.48	51.5%	15.8%	件数 割合	376 16.4%	807 35.1%	750 32.7%	282 12.3%	82 3.6%	2,297 100.0%	
(30) 健康的な生活に注意している	3.57	58.2%	21.9%	件数 割合	579 25.2%	761 33.1%	459 19.9%	400 17.4%	103 4.5%	2,302 100.0%	
(31) 体力・身体づくりをしている	3.45	55.6%	28.4%	件数 割合	631 27.5%	647 28.2%	367 16.0%	430 18.7%	223 9.7%	2,298 100.0%	
(32) 自分で計画を立て、それに従って物事を進めることができる	3.18	44.3%	32.4%	件数 割合	326 14.2%	692 30.1%	536 23.3%	554 24.1%	191 8.3%	2,299 100.0%	
(33) 社会や学校の一員としての義務と権利を認識している	3.78	67.3%	9.9%	件数 割合	500 21.7%	1,049 45.6%	525 22.8%	196 8.5%	31 1.3%	2,301 100.0%	
(34) 社会や学校において、自分が行うべき役割を果たしている	3.77	66.5%	8.7%	件数 割合	475 20.7%	1,053 45.8%	570 24.8%	160 7.0%	41 1.8%	2,299 100.0%	
(35) 社会や学校などの周囲をよくするために積極的に関わっている	3.54	55.0%	17.1%	件数 割合	437 19.0%	827 36.0%	640 27.9%	324 14.1%	70 3.0%	2,298 100.0%	
(36) 社会や学校において、周囲の人を助けたり協力することがよくある	3.84	69.9%	8.3%	件数 割合	534 23.3%	1,070 46.6%	499 21.8%	162 7.1%	29 1.3%	2,294 100.0%	
(37) 自分の周りに変化が起きてもうまく適応できている	3.73	65.7%	13.1%	件数 割合	543 23.6%	968 42.1%	488 21.2%	238 10.3%	63 2.7%	2,300 100.0%	
(38) ストレスを感じるがあってもリラックスして前向きにとらえることができる	3.28	47.9%	29.8%	件数 割合	448 19.5%	654 28.4%	511 22.2%	474 20.6%	212 9.2%	2,299 100.0%	

平均点:「5.とてもあてはまる」を5点、「4.ややあてはまる」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりあてはまらない」を2点、「1.まったくあてはまらない」を1点として加重平均

AY2025高校2年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID : 全体集計	回答者数	2,321
----	-------------	------	-------

質問3. これまでに受けた高校の授業の中で、あなたは次のような活動をした経験がありますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

項目	平均	(5肯定回答率 + 4 + 3)	(1否定回答率 + 2)	選択肢	5 いつも	4 よくある	3 ときどき	2 あまりない	1 まったくない	合計	0%	25%	50%	75%	100%
(1) 先生の話から知識を得る	4.09	96.7%	3.3%	件数	769	1,056	402	60	16	2,303	5.いつも 4.よくある 3.ときどき 2.あまりない 1.まったくない				
				割合	33.4%	45.9%	17.5%	2.6%	0.7%	100.0%					
(2) 教科書を中心に学ぶ	3.64	84.2%	15.8%	件数	480	928	529	308	55	2,300	5.いつも 4.よくある 3.ときどき 2.あまりない 1.まったくない				
				割合	20.9%	40.3%	23.0%	13.4%	2.4%	100.0%					
(3) 探究したい課題について問いを立てる	3.50	82.5%	17.5%	件数	421	771	705	332	71	2,300	5.いつも 4.よくある 3.ときどき 2.あまりない 1.まったくない				
				割合	18.3%	33.5%	30.7%	14.4%	3.1%	100.0%					
(4) プロジェクト(探究・調査・実験・発表会)の計画を立てる	3.45	80.0%	20.0%	件数	416	759	663	363	97	2,298	5.いつも 4.よくある 3.ときどき 2.あまりない 1.まったくない				
				割合	18.1%	33.0%	28.9%	15.8%	4.2%	100.0%					
(5) 図書室を利用して資料や文献を探す	2.51	44.7%	55.3%	件数	191	317	520	709	563	2,300	5.いつも 4.よくある 3.ときどき 2.あまりない 1.まったくない				
				割合	8.3%	13.8%	22.6%	30.8%	24.5%	100.0%					
(6) 情報を得るとき、情報源の信頼性を確認する	3.77	87.0%	13.0%	件数	645	857	500	222	78	2,302	5.いつも 4.よくある 3.ときどき 2.あまりない 1.まったくない				
				割合	28.0%	37.2%	21.7%	9.6%	3.4%	100.0%					
(7) 英語で書かれた情報を収集する	2.87	55.6%	44.4%	件数	341	436	502	616	405	2,300	5.いつも 4.よくある 3.ときどき 2.あまりない 1.まったくない				
				割合	14.8%	19.0%	21.8%	26.8%	17.6%	100.0%					
(8) 自分と異なる立場や見方をもつ人の意見を聞く	3.97	93.3%	6.7%	件数	713	975	453	120	33	2,294	5.いつも 4.よくある 3.ときどき 2.あまりない 1.まったくない				
				割合	31.1%	42.5%	19.7%	5.2%	1.4%	100.0%					
(9) 本を一冊読む	2.88	54.8%	45.2%	件数	408	387	465	606	435	2,301	5.いつも 4.よくある 3.ときどき 2.あまりない 1.まったくない				
				割合	17.7%	16.8%	20.2%	26.3%	18.9%	100.0%					
(10) グループで協力して活動する	4.13	94.7%	5.3%	件数	892	971	313	93	29	2,298	5.いつも 4.よくある 3.ときどき 2.あまりない 1.まったくない				
				割合	38.8%	42.3%	13.6%	4.0%	1.3%	100.0%					
(11) 海外で起こった出来事や課題について考える	3.20	69.2%	30.8%	件数	400	567	625	500	209	2,301	5.いつも 4.よくある 3.ときどき 2.あまりない 1.まったくない				
				割合	17.4%	24.6%	27.2%	21.7%	9.1%	100.0%					
(12) あるテーマについて論述文(作文・エッセイ)を書く	3.18	67.5%	32.5%	件数	431	576	544	470	278	2,299	5.いつも 4.よくある 3.ときどき 2.あまりない 1.まったくない				
				割合	18.7%	25.1%	23.7%	20.4%	12.1%	100.0%					
(13) 学習の中で多様なメディア(新聞・映像・音楽など)に触れる	3.56	82.5%	17.5%	件数	532	721	641	307	94	2,295	5.いつも 4.よくある 3.ときどき 2.あまりない 1.まったくない				
				割合	23.2%	31.4%	27.9%	13.4%	4.1%	100.0%					
(14) 学習の成果を社会に発信する	2.64	49.1%	50.9%	件数	199	351	577	754	416	2,297	5.いつも 4.よくある 3.ときどき 2.あまりない 1.まったくない				
				割合	8.7%	15.3%	25.1%	32.8%	18.1%	100.0%					
(15) 自分が取り組んだプロジェクト(探究・調査・実験・発表会)のよかった点や課題を整理する	3.31	75.5%	24.5%	件数	379	696	662	395	168	2,300	5.いつも 4.よくある 3.ときどき 2.あまりない 1.まったくない				
				割合	16.5%	30.3%	28.8%	17.2%	7.3%	100.0%					
(16) 一問一答の問題を解く	3.56	80.6%	19.4%	件数	548	732	574	346	101	2,301	5.いつも 4.よくある 3.ときどき 2.あまりない 1.まったくない				
				割合	23.8%	31.8%	24.9%	15.0%	4.4%	100.0%					
(17) 用語や出来事を暗記する	3.80	87.8%	12.2%	件数	676	830	509	224	57	2,296	5.いつも 4.よくある 3.ときどき 2.あまりない 1.まったくない				
				割合	29.4%	36.1%	22.2%	9.8%	2.5%	100.0%					
(18) 作文・エッセイ・発表などへのフィードバックを受ける	3.40	76.2%	23.8%	件数	495	631	627	384	164	2,301	5.いつも 4.よくある 3.ときどき 2.あまりない 1.まったくない				
				割合	21.5%	27.4%	27.2%	16.7%	7.1%	100.0%					

平均点:「5.いつも」を5点、「4.よくある」を4点、「3.ときどき」を3点、「2.あまりない」を2点、「1.まったくない」を1点として加重平均

AY2025高校2年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID : 全体集計	回答者数	2,321
----	-------------	------	-------

質問5. 高校生活の中で、あなたはどの程度意欲的に次のような活動に参加していますか(参加していましたか)。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

項目	平均	(5肯定回答率 + 4)	(1否定回答率 + 2)	選択肢	5	4	3	2	1	合計	5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない				
					・とてもあてはまる	・ややあてはまる	・どちらともいえない	・あまりあてはまらない	・まったくあてはまらない						
(1) 生徒会・委員会活動への参加	2.98	43.9%	41.4%	件数	439	575	338	414	542	2,308	19.0	24.9	14.6	17.9	23.5
				割合	19.0%	24.9%	14.6%	17.9%	23.5%	100.0%					
(2) 部活動・クラブ活動への参加	3.88	72.0%	19.4%	件数	1,090	570	200	168	279	2,307	47.2	24.7	8.7	7.3	12.1
				割合	47.2%	24.7%	8.7%	7.3%	12.1%	100.0%					
(3) 学校行事(体育祭・文化祭等)への参加	4.35	86.6%	4.3%	件数	1,241	757	211	69	30	2,308	53.8	32.8	9.1	3.0	1.3
				割合	53.8%	32.8%	9.1%	3.0%	1.3%	100.0%					
(4) 授業外でのプロジェクト・探究活動への参加	3.31	50.8%	30.5%	件数	534	638	431	421	284	2,308	23.1	27.6	18.7	18.2	12.3
				割合	23.1%	27.6%	18.7%	18.2%	12.3%	100.0%					
(5) ボランティア活動への参加	2.90	38.2%	43.3%	件数	394	484	425	494	503	2,300	17.1	21.0	18.5	21.5	21.9
				割合	17.1%	21.0%	18.5%	21.5%	21.9%	100.0%					
(6) 海外との交流活動への参加	2.55	30.5%	54.6%	件数	333	369	344	446	811	2,303	14.5	16.0	14.9	19.4	35.2
				割合	14.5%	16.0%	14.9%	19.4%	35.2%	100.0%					
(7) 留学(短期・長期・交換等)	2.02	20.5%	70.4%	件数	264	210	209	251	1,376	2,310	11.4	9.1	9.0	10.9	59.6
				割合	11.4%	9.1%	9.0%	10.9%	59.6%	100.0%					

平均点:「5.とてもあてはまる」を5点、「4.ややあてはまる」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりあてはまらない」を2点、「1.まったくあてはまらない」を1点として加重平均

AY2025高校2年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID : 全体集計	回答者数	2,321
----	-------------	------	-------

質問6. 学期中の平日(月曜～金曜)放課後の学習時間(＝1日あたりの平均)と学習内容を教えてください。

※時間は10分や30分の単位でおおまかに回答してください。

※時間あるいは分が0の場合は、空欄ではなく、例のように()内に0を記入してください。

例)「およそ(0)時間(40)分」、「およそ(2)時間(0)分」など。

(1) 1日あたりの放課後の学習時間: およそ()時間()分

回答区分	件数	割合	0%	5%	10%	15%	20%	25%
0分	150	6.6%	6.6					
1分以上30分以下	330	14.4%	14.4					
31分以上60分以下	427	18.7%	18.7					
61分以上90分以下	278	12.2%	12.2					
91分以上120分以下	473	20.7%	20.7					
121分以上150分以下	172	7.5%	7.5					
151分以上180分以下	247	10.8%	10.8					
181分以上	210	9.2%	9.2					
合計	2,287	100.0%						

(2) 1日あたりの放課後の学習時間のうち、①～⑤の時間配分を教えてください。

①高校の授業の予習、復習、課題(問題を解くなど)

回答区分	件数	割合	0%	5%	10%	15%	20%	25%	30%	35%
0分	318	14.2%	14.2							
1分以上30分以下	595	26.6%	26.6							
31分以上60分以下	649	29.0%	29.0							
61分以上90分以下	223	10.0%	10.0							
91分以上120分以下	271	12.1%	12.1							
121分以上150分以下	64	2.9%	2.9							
151分以上180分以下	87	3.9%	3.9							
181分以上	34	1.5%	1.5							
合計	2,241	100.0%								

AY2025高校2年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID : 全体集計	回答者数	2,321
----	-------------	------	-------

②塾・予備校の予習、復習、課題(問題を解くなど)

回答区分	件数	割合	0%	10%	20%	30%	40%	50%	60%	70%
0分	1,310	61.9%	61.9							
1分以上30分以下	248	11.7%	11.7							
31分以上60分以下	231	10.9%	10.9							
61分以上90分以下	121	5.7%	5.7							
91分以上120分以下	136	6.4%	6.4							
121分以上150分以下	16	0.8%	0.8							
151分以上180分以下	34	1.6%	1.6							
181分以上	19	0.9%	0.9							
合計	2,115	100.0%								

③調べ学習、探究・プロジェクト活動、課題論文

回答区分	件数	割合	0%	10%	20%	30%	40%	50%	60%	70%
0分	1,339	65.5%	65.5							
1分以上30分以下	395	19.3%	19.3							
31分以上60分以下	210	10.3%	10.3							
61分以上90分以下	30	1.5%	1.5							
91分以上120分以下	34	1.7%	1.7							
121分以上150分以下	11	0.5%	0.5							
151分以上180分以下	13	0.6%	0.6							
181分以上	11	0.5%	0.5							
合計	2,043	100.0%								

AY2025高校2年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID : 全体集計	回答者数	2,321
----	-------------	------	-------

④大学受験の準備(過去問を解く、小論文を書くなど)

回答区分	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
0分	1,651	82.7%	82.7					
1分以上30分以下	176	8.8%	8.8					
31分以上60分以下	85	4.3%	4.3					
61分以上90分以下	20	1.0%	1.0					
91分以上120分以下	40	2.0%	2.0					
121分以上150分以下	7	0.4%	0.4					
151分以上180分以下	10	0.5%	0.5					
181分以上	8	0.4%	0.4					
合計	1,997	100.0%						

⑤資格試験に向けた勉強(英検、TOEIC、漢検など)

回答区分	件数	割合	0%	10%	20%	30%	40%	50%	60%	70%
0分	1,299	63.1%	63.1							
1分以上30分以下	514	25.0%	25.0							
31分以上60分以下	172	8.3%	8.3							
61分以上90分以下	26	1.3%	1.3							
91分以上120分以下	30	1.5%	1.5							
121分以上150分以下	3	0.1%	0.1							
151分以上180分以下	7	0.3%	0.3							
181分以上	9	0.4%	0.4							
合計	2,060	100.0%								

AY2025高校2年生対象 高校での学習・経験に関する調査

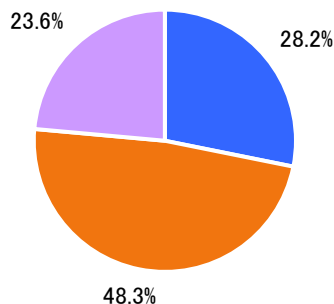
区分	学校ID : 全体集計	回答者数	2,321
----	-------------	------	-------

質問7. あなたの高校の成績と英語運用能力に関する資格について教えてください。

(1) あなたの現在の成績は、学年でどのくらいですか。

選択肢	件数	割合
1. 下のほう	643	28.2%
2. まんなか	1,102	48.3%
3. 上のほう	538	23.6%
合計	2,283	100.0%

■ 1. 下のほう ■ 2. まんなか ■ 3. 上のほう



(2) あなたが現在取得している英語運用能力に関する資格を教えてください。あてはまる番号に○をつけ、級やスコア等を記入してください。

選択肢	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%
1. 英検(実用英語技能検定)	1,712	73.8%	73.8				
2. TOEFL	93	4.0%	4.0				
3. TOEIC	78	3.4%	3.4				
4. IELTSアカデミック・モジュール	100	4.3%	4.3				
5. その他	98	4.2%	4.2				
6. 資格は取得していない	426	18.4%	18.4				
回答者数	2,321	-					

AY2025高校2年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID : 全体集計	回答者数	2,321
----	-------------	------	-------

その他(種類)

選択肢	件数	割合	0%	2%	4%	6%	8%	10%	12%	14%
1.Cambridge English Exam	13	13.3%	13.3							
2.IGCSE	0	0.0%								
3.TOEFL(ITP)	4	4.1%	4.1							
4.TOEFL(Junior)	6	6.1%	6.1							
5.Oxford Online Placement Test	0	0.0%								
6.GTEC	13	13.3%	13.3							
7.TOEIC Bridge	4	4.1%	4.1							
8.TOEFL Essential	0	0.0%								
9.Language Cert	0	0.0%								
10.CASEC	0	0.0%								
回答者数	98	-								

AY2025高校2年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID : 全体集計	回答者数	2,321
----	-------------	------	-------

質問8. あなたは現時点で、以下のことが、どのくらい身についていると思いますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

項目	平均	肯定回答率 (⑤+④) (%)	否定回答率 (①+②) (%)	選択肢	5 身についている	4 やや身についている	3 どちらともいえない	2 あまり身についていない	1 身についていない	合計	
											5.身についている 4.やや身についている 3.どちらともいえない 2.あまり身についていない 1.身についていない 0% 25% 50% 75% 100%
(1) 興味のある対象について深く学習し、理解する姿勢	4.05	80.2%	6.8%	件数	764	1,086	300	131	26	2,307	
				割合	33.1%	47.1%	13.0%	5.7%	1.1%	100.0%	
(2) 人文・社会・自然科学を横断する幅広い知識	3.27	44.4%	24.7%	件数	284	742	712	448	123	2,309	
				割合	12.3%	32.1%	30.8%	19.4%	5.3%	100.0%	
(3) 困難な課題に取り組む力	3.61	60.7%	15.5%	件数	440	961	550	275	83	2,309	
				割合	19.1%	41.6%	23.8%	11.9%	3.6%	100.0%	
(4) 他者と意思疎通をはかり人間関係を構築する能力	3.93	73.5%	9.2%	件数	703	993	398	164	49	2,307	
				割合	30.5%	43.0%	17.3%	7.1%	2.1%	100.0%	
(5) 自分の良心や社会の規範に沿って行動する力	4.05	78.9%	4.3%	件数	719	1,098	386	74	26	2,303	
				割合	31.2%	47.7%	16.8%	3.2%	1.1%	100.0%	
(6) 人や社会によって違った考えや文化があることへの理解	4.25	85.5%	3.2%	件数	997	977	261	55	18	2,308	
				割合	43.2%	42.3%	11.3%	2.4%	0.8%	100.0%	
(7) 他者を尊重し、ともに行動する力	4.19	83.9%	3.5%	件数	912	1,025	290	60	21	2,308	
				割合	39.5%	44.4%	12.6%	2.6%	0.9%	100.0%	
(8) 予測不可能な事態に直面しても挑戦する姿勢	3.77	67.1%	10.9%	件数	525	1,021	506	210	42	2,304	
				割合	22.8%	44.3%	22.0%	9.1%	1.8%	100.0%	
(9) 自分の生活と自然や社会とのつながりの理解	3.62	58.7%	13.2%	件数	431	921	647	250	54	2,303	
				割合	18.7%	40.0%	28.1%	10.9%	2.3%	100.0%	
(10) 自分の行動を評価し、次に生かす力	3.79	67.1%	10.3%	件数	552	993	522	199	38	2,304	
				割合	24.0%	43.1%	22.7%	8.6%	1.6%	100.0%	
(11) 問題が起きたときに解決する力	3.87	72.5%	8.0%	件数	541	1,130	451	152	32	2,306	
				割合	23.5%	49.0%	19.6%	6.6%	1.4%	100.0%	
(12) 自ら率先して行動する力	3.67	61.3%	15.4%	件数	541	872	539	297	57	2,306	
				割合	23.5%	37.8%	23.4%	12.9%	2.5%	100.0%	
(13) 自分自身で計画を立て、それに基づいて実行する力	3.40	51.8%	24.9%	件数	439	755	538	425	148	2,305	
				割合	19.0%	32.8%	23.3%	18.4%	6.4%	100.0%	
(14) 情報を処理し、活用する力	3.74	65.0%	10.3%	件数	479	1,018	569	197	40	2,303	
				割合	20.8%	44.2%	24.7%	8.6%	1.7%	100.0%	
(15) 国際的な事からを理解し、あつかう力	3.43	50.7%	23.0%	件数	452	714	605	421	108	2,300	
				割合	19.7%	31.0%	26.3%	18.3%	4.7%	100.0%	

平均点:「5.身についている」を5点、「4.やや身についている」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまり身についていない」を2点、「1.身についていない」を1点として加重平均

AY2025高校2年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID : 全体集計	回答者数	2,321
----	-------------	------	-------

質問8. あなたは現時点で、以下のことが、どのくらい身についていると思いますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

項目	平均	(5肯定回答率)	(1否定回答率)	選択肢	5・身についている	4・やや身についている	3・どちらともいえない	2・あまり身についていない	1・身についていない	合計	
											5.身についている 4.やや身についている 3.どちらともいえない 2.あまり身についていない 1.身についていない 0% 25% 50% 75% 100%
(16) チームで協力して行動する力	4.04	78.8%	7.2%	件数	782	1,033	321	120	46	2,302	
				割合	34.0%	44.9%	13.9%	5.2%	2.0%	100.0%	
(17) リーダーシップの能力	3.31	47.4%	26.0%	件数	392	699	610	438	161	2,300	
				割合	17.0%	30.4%	26.5%	19.0%	7.0%	100.0%	
(18) 地域社会の一員としての自覚	3.36	48.7%	22.3%	件数	363	759	668	378	137	2,305	
				割合	15.7%	32.9%	29.0%	16.4%	5.9%	100.0%	
(19) 日本社会の一員としての自覚	3.38	49.0%	20.9%	件数	369	760	694	353	129	2,305	
				割合	16.0%	33.0%	30.1%	15.3%	5.6%	100.0%	
(20) グローバルな社会の一員としての自覚	3.36	47.1%	22.9%	件数	404	674	685	382	143	2,288	
				割合	17.7%	29.5%	29.9%	16.7%	6.3%	100.0%	
(21) 「国語(現代文、古典等)」に関する能力	3.25	46.0%	26.5%	件数	282	779	634	465	146	2,306	
				割合	12.2%	33.8%	27.5%	20.2%	6.3%	100.0%	
(22) 「社会科(歴史、地理、公民等)」に関する能力	3.38	50.4%	21.3%	件数	320	842	652	385	107	2,306	
				割合	13.9%	36.5%	28.3%	16.7%	4.6%	100.0%	
(23) 「数学」に関する能力	3.32	49.5%	24.7%	件数	333	807	594	411	158	2,303	
				割合	14.5%	35.0%	25.8%	17.8%	6.9%	100.0%	
(24) 「理科(物理、化学、生物、地学等)」に関する能力	3.37	50.7%	22.3%	件数	335	834	621	384	130	2,304	
				割合	14.5%	36.2%	27.0%	16.7%	5.6%	100.0%	
(25) 「外国語(英語等)」に関する能力	3.58	58.6%	17.8%	件数	481	869	542	313	97	2,302	
				割合	20.9%	37.7%	23.5%	13.6%	4.2%	100.0%	
(26) その他の教科(芸術、体育、専門等)に関する能力	3.68	61.1%	12.1%	件数	507	899	619	212	66	2,303	
				割合	22.0%	39.0%	26.9%	9.2%	2.9%	100.0%	

平均点:「5.身についている」を5点、「4.やや身についている」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまり身についていない」を2点、「1.身についていない」を1点として加重平均

AY2025高校2年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID : 全体集計	回答者数	2,321
----	-------------	------	-------

質問9. あなたは、あなたの現在や将来についてどのように考えていますか。

(1) 学校生活について

項目	平均	(肯定回答率) (⑤+④)	(否定回答率) (①+②)	選択肢	5:とてもそう思う	4:ややそう思う	3:どちらともいえない	2:あまりそう思わない	1:まったくそう思わない	合計	
① 学校の授業などを通じた今の自分の学習に満足している	2.98	37.7%	40.0%	件数	262	606	511	676	245	2,300	
				割合	11.4%	26.3%	22.2%	29.4%	10.7%	100.0%	11.4 26.3 22.2 29.4 10.7
② これまでの学校での学習やさまざまな経験で得られた今の自分の能力に満足している	2.90	34.2%	43.1%	件数	232	555	521	725	266	2,299	
				割合	10.1%	24.1%	22.7%	31.5%	11.6%	100.0%	10.1 24.1 22.7 31.5 11.6
③ 高校生活全体に満足している	3.71	63.8%	13.8%	件数	576	889	517	233	83	2,298	
				割合	25.1%	38.7%	22.5%	10.1%	3.6%	100.0%	25.1 38.7 22.5 10.1 3.6

平均点:「5.とてもそう思う」を5点、「4.ややそう思う」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりそう思わない」を2点、「1.まったくそう思わない」を1点として加重平均

(2) 将来について

項目	平均	(肯定回答率) (⑤+④)	(否定回答率) (①+②)	選択肢	5:とてもそう思う	4:ややそう思う	3:どちらともいえない	2:あまりそう思わない	1:まったくそう思わない	合計	
① 将来、学びたい分野について考えている	4.15	80.7%	8.0%	件数	1,040	814	260	124	59	2,297	
				割合	45.3%	35.4%	11.3%	5.4%	2.6%	100.0%	45.3 35.4 11.3 5.4 2.6
② 将来、行きたい大学について考えている	4.11	80.1%	8.1%	件数	967	876	271	125	61	2,300	
				割合	42.0%	38.1%	11.8%	5.4%	2.7%	100.0%	42.0 38.1 11.8 5.4 2.7
③ 将来、やりたい仕事について考えている	3.93	71.4%	13.7%	件数	915	724	343	213	102	2,297	
				割合	39.8%	31.5%	14.9%	9.3%	4.4%	100.0%	39.8 31.5 14.9 9.3 4.4

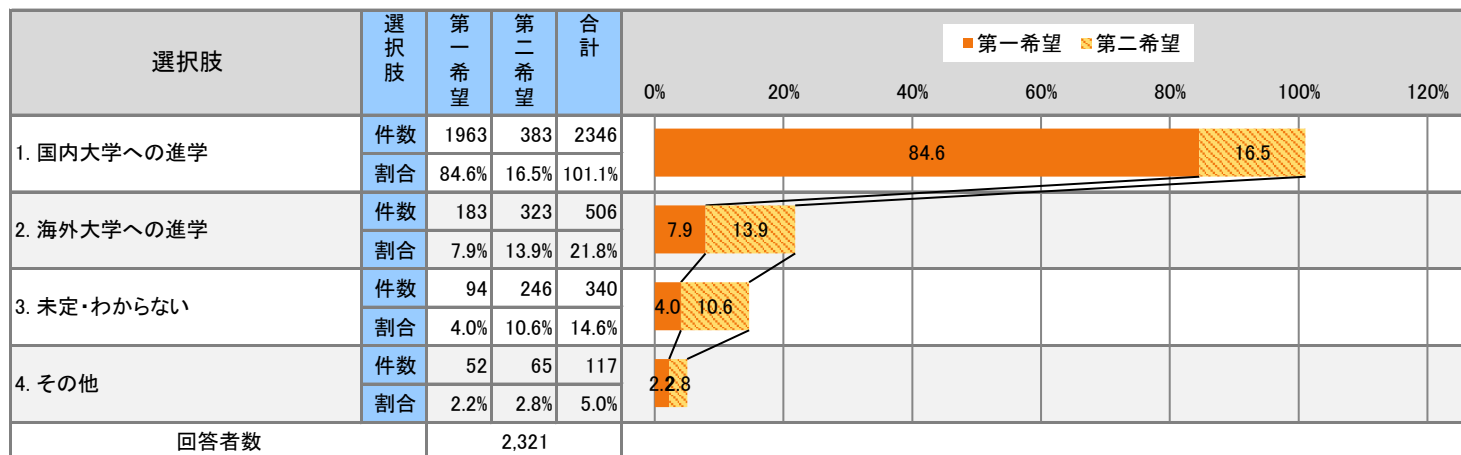
平均点:「5.とてもそう思う」を5点、「4.ややそう思う」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりそう思わない」を2点、「1.まったくそう思わない」を1点として加重平均

AY2025高校2年生対象 高校での学習・経験に関する調査

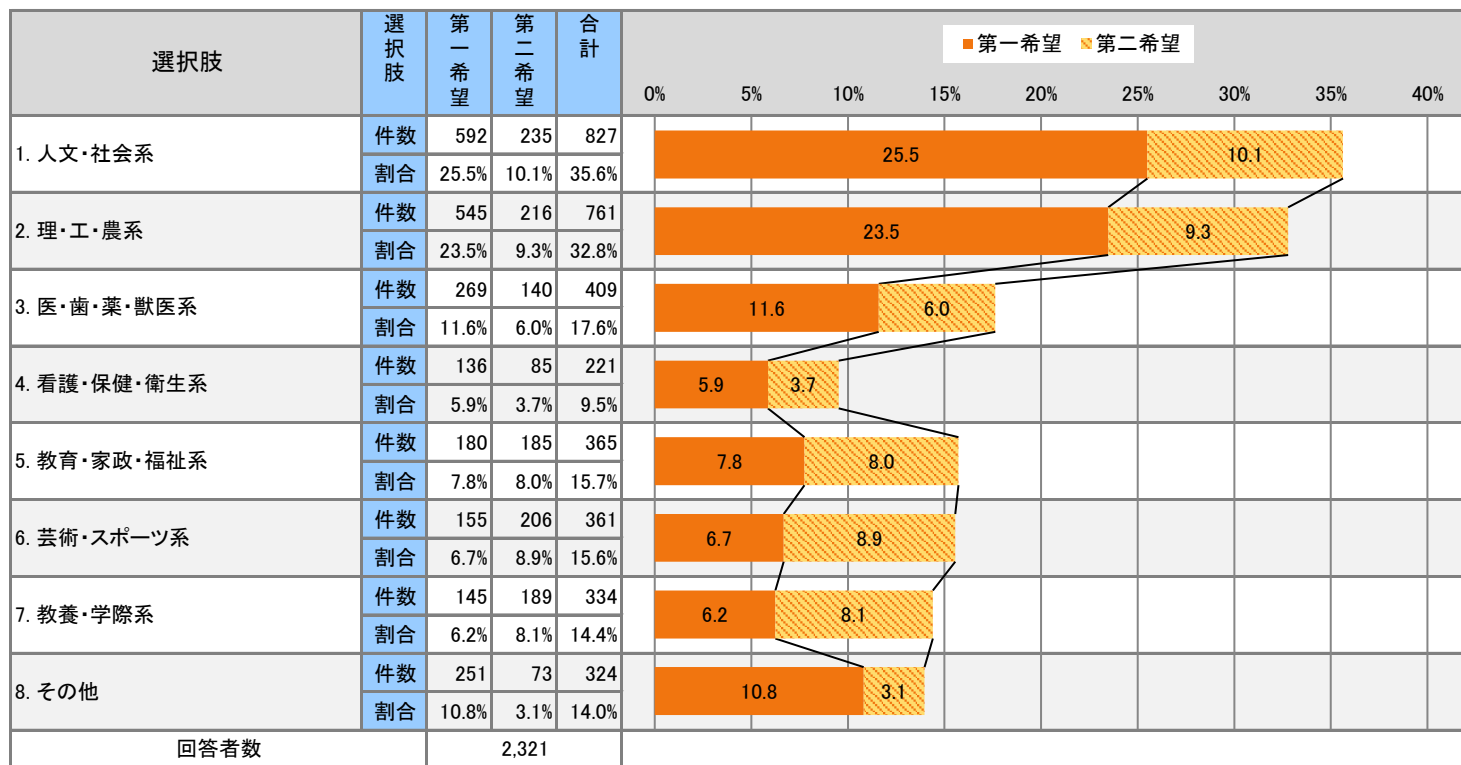
区分	学校ID : 全体集計	回答者数	2,321
----	-------------	------	-------

質問10. あなたの進路と将来の展望について教えてください。

(1) あなたは高校を卒業後、どのような進路を希望していますか。もっとも当てはまるものから番号を選択してください(第一希望だけでも可)。



(2) あなたはどの専門分野に進みたいですか。もっとも当てはまるものから番号を選択してください(第一希望だけでも可)。



AY2025高校2年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID : 全体集計	回答者数	2,321
----	-------------	------	-------

質問11. あなたの周囲の環境についておたずねします。

項目	平均	肯定回答率 (⑤+④) %	否定回答率 (①+②) %	選択肢	5 とてもあてはまる	4 ややあてはまる	3 どちらともいえない	2 あまりあてはまらない	1 まったくあてはまらない	合計	
(1) 本やインターネット環境など家で学ぶ環境が十分にある	4.47	91.4%	2.1%	件数	1,349	748	150	34	14	2,295	5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない
				割合	58.8%	32.6%	6.5%	1.5%	0.6%	100.0%	
(2) 親や兄弟などの家族は普段からよく勉強を教えてくれる	2.66	32.2%	51.0%	件数	290	449	386	536	636	2,297	5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない
				割合	12.6%	19.5%	16.8%	23.3%	27.7%	100.0%	
(3) 普段から家族が本や新聞を読んでいるのをよく見る	3.02	42.7%	40.5%	件数	422	556	387	500	428	2,293	5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない
				割合	18.4%	24.2%	16.9%	21.8%	18.7%	100.0%	
(4) 親や保護者は自分の勉強のために必要なものを買ってくれる	4.52	90.9%	2.2%	件数	1,463	627	159	35	15	2,299	5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない
				割合	63.6%	27.3%	6.9%	1.5%	0.7%	100.0%	
(5) 勉強のためであれば親や保護者は積極的に援助してくれる	4.49	90.0%	2.7%	件数	1,441	627	168	42	19	2,297	5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない
				割合	62.7%	27.3%	7.3%	1.8%	0.8%	100.0%	
(6) 普段の生活の中でお金に困っていると感じることがある	2.24	19.1%	65.2%	件数	172	267	360	634	863	2,296	5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない
				割合	7.5%	11.6%	15.7%	27.6%	37.6%	100.0%	
(7) 親や保護者はあなたのやりたいことを応援してくれる	4.42	86.6%	2.8%	件数	1,369	619	243	44	21	2,296	5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない
				割合	59.6%	27.0%	10.6%	1.9%	0.9%	100.0%	
(8) 親や保護者は学校生活について相談に乗ってくれる	4.13	76.4%	7.8%	件数	1,090	661	362	111	68	2,292	5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない
				割合	47.6%	28.8%	15.8%	4.8%	3.0%	100.0%	
(9) 周りの同級生は授業に熱心に取り組んでいる	3.99	73.0%	7.2%	件数	788	889	454	128	37	2,296	5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない
				割合	34.3%	38.7%	19.8%	5.6%	1.6%	100.0%	
(10) 周りの同級生は普段からよく勉強を教えてくれる	3.95	72.9%	9.5%	件数	788	885	404	147	72	2,296	5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない
				割合	34.3%	38.5%	17.6%	6.4%	3.1%	100.0%	
(11) 家族とよく海外の経験や国際的な時事問題を話したりする	3.09	44.0%	37.3%	件数	451	559	430	459	396	2,295	5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない
				割合	19.7%	24.4%	18.7%	20.0%	17.3%	100.0%	
(12) 親や保護者が仕事などで英語などの外国語を使っている	2.31	27.6%	63.6%	件数	364	269	203	346	1,115	2,297	5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない
				割合	15.8%	11.7%	8.8%	15.1%	48.5%	100.0%	
(13) 友達とよく海外の話題(SNS、音楽など)を話したりする	3.37	53.6%	29.3%	件数	622	610	391	340	334	2,297	5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない
				割合	27.1%	26.6%	17.0%	14.8%	14.5%	100.0%	

平均点:「5.とてもあてはまる」を5点、「4.ややあてはまる」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりあてはまらない」を2点、「1.まったくあてはまらない」を1点として加重平均

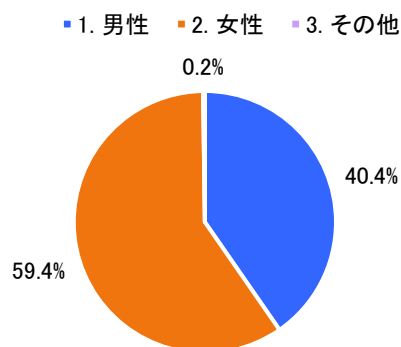
AY2025高校2年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 1.DPコース履修 : 全体集計	回答者数	455
----	-----------------------	------	-----

質問1. あなた自身のことをうかがいます。

(3) 性別

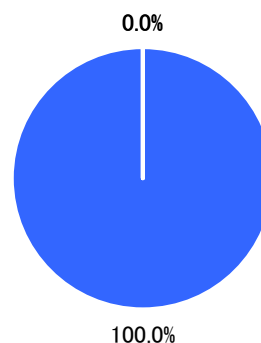
選択肢	件数	割合
1. 男性	182	40.4%
2. 女性	268	59.4%
3. その他	1	0.2%
合計	451	100.0%



(4) あなたは現在、ディプロマプログラム(DP)を履修していますか。

選択肢	件数	割合
1. 履修している(フル・ディプロマの取得を目指す)	455	100.0%
2. 履修している(科目履修生／サーティフィケートの取得を目指す)	0	0.0%
3. 履修していない	0	0.0%
合計	455	100.0%

- 1. 履修している(フル・ディプロマの取得を目指す)
- 2. 履修している(科目履修生／サーティフィケートの取得を目指す)
- 3. 履修していない



(5) 以下の項目の中で、あなたが経験した学校や教育プログラムはありますか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

選択肢	件数	割合	0%	10%	20%	30%	40%	50%
1. インターナショナル・スクール(日本)	60	13.2%	13.2					
2. インターナショナル・スクール(海外)	57	12.5%	12.5					
3. 海外の現地校	114	25.1%	25.1					
4. 海外の日本人学校	36	7.9%	7.9					
5. 国際バカロレア初等教育プログラム(PYP)	27	5.9%	5.9					
6. 国際バカロレア中等教育プログラム(MYP)	200	44.0%	44.0					
7. あてはまるものはない	115	25.3%	25.3					
回答者数	455	-						

AY2025高校2年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 1.DPコース履修 : 全体集計	回答者数	455
----	-----------------------	------	-----

質問2. あなたは以下の態度や状況にどのくらいあてはまると思いますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

項目	平均	肯定回答率 (⑤+④)	否定回答率 (①+②)	選択肢	5 とてもあてはまる	4 ややあてはまる	3 どちらともいえない	2 あまりあてはまらない	1 まったくあてはまらない	合計	
											5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない
(1) 知らないことがあると、よく質問をしたり調べたりする	4.24	88.1%	2.6%	件数 割合	178 39.3%	221 48.8%	42 9.3%	8 1.8%	4 0.9%	453 100.0%	39.3 48.8 9.3 1.8 0.9
(2) 自分はどのような人間かを考えることがよくある	4.18	79.3%	6.6%	件数 割合	214 47.1%	146 32.2%	64 14.1%	21 4.6%	9 2.0%	454 100.0%	47.1 32.2 14.1 4.6 2.0
(3) 社会のことをよく勉強している	3.52	53.1%	14.4%	件数 割合	69 15.3%	171 37.8%	147 32.5%	56 12.4%	9 2.0%	452 100.0%	15.3 37.8 32.5 12.4 2.0
(4) 自然や環境のことをよく勉強している	3.32	44.6%	23.3%	件数 割合	71 15.7%	130 28.8%	145 32.2%	83 18.4%	22 4.9%	451 100.0%	15.7 28.8 32.2 18.4 4.9
(5) 学校とは関係なく自分から勉強する習慣ができている	3.50	53.7%	22.0%	件数 割合	101 22.2%	143 31.5%	110 24.2%	84 18.5%	16 3.5%	454 100.0%	22.2 31.5 24.2 18.5 3.5
(6) 問題が起きたときにはその理由を理解しようとする	4.17	84.8%	3.8%	件数 割合	168 37.1%	216 47.7%	52 11.5%	11 2.4%	6 1.3%	453 100.0%	37.1 47.7 11.5 2.4 1.3
(7) 問題を解決するために自分ができることを考える	4.20	85.0%	2.6%	件数 割合	172 38.0%	213 47.0%	56 12.4%	9 2.0%	3 0.7%	453 100.0%	38.0 47.0 12.4 2.0 0.7
(8) 課題があれば自分で解決しようとする	4.10	79.0%	2.6%	件数 割合	155 34.2%	203 44.8%	83 18.3%	9 2.0%	3 0.7%	453 100.0%	34.2 44.8 18.3 2.0 0.7
(9) 自分の気持ちや考えを十分に表現することができる	3.83	67.4%	11.0%	件数 割合	125 27.5%	181 39.9%	98 21.6%	45 9.9%	5 1.1%	454 100.0%	27.5 39.9 21.6 9.9 1.1
(10) 他の人の気持ちや考えを十分に理解することができる	3.87	68.9%	9.5%	件数 割合	129 28.4%	184 40.5%	98 21.6%	38 8.4%	5 1.1%	454 100.0%	28.4 40.5 21.6 8.4 1.1
(11) 他の人の異なる意見を受け入れて価値を認めることができる	4.26	86.1%	2.9%	件数 割合	195 43.0%	196 43.2%	50 11.0%	10 2.2%	3 0.7%	454 100.0%	43.0 43.2 11.0 2.2 0.7
(12) 異なる考え方や意見を調整して物事を進めることがよくある	4.11	81.3%	4.2%	件数 割合	156 34.4%	213 46.9%	66 14.5%	15 3.3%	4 0.9%	454 100.0%	34.4 46.9 14.5 3.3 0.9
(13) 何かをするときに周囲の人を誘うことがよくある	3.85	66.4%	13.9%	件数 割合	154 34.1%	146 32.3%	89 19.7%	54 11.9%	9 2.0%	452 100.0%	34.1 32.3 19.7 11.9 2.0
(14) 他の人たちと協力してチームで行動することができる	4.21	82.6%	4.9%	件数 割合	197 43.9%	174 38.8%	56 12.5%	18 4.0%	4 0.9%	449 100.0%	43.9 38.8 12.5 4.0 0.9
(15) チームの中で自分の果たすべき役割を率先して行っている	4.12	79.9%	4.9%	件数 割合	169 37.4%	192 42.5%	69 15.3%	18 4.0%	4 0.9%	452 100.0%	37.4 42.5 15.3 4.0 0.9
(16) 自ら目標を設定し、その達成のために行動することができる	3.87	67.9%	7.1%	件数 割合	128 28.3%	179 39.6%	113 25.0%	24 5.3%	8 1.8%	452 100.0%	28.3 39.6 25.0 5.3 1.8
(17) グループの目的を示し、グループの人たちを効果的に行動させることができる	3.65	58.3%	11.3%	件数 割合	88 19.4%	176 38.9%	138 30.5%	45 9.9%	6 1.3%	453 100.0%	19.4 38.9 30.5 9.9 1.3
(18) 学校や社会の規則を守っている	4.17	77.3%	5.3%	件数 割合	207 45.6%	144 31.7%	79 17.4%	20 4.4%	4 0.9%	454 100.0%	45.6 31.7 17.4 4.4 0.9
(19) 自分の良心や従うべきルールを持ち、それに基づいて行動している	4.32	85.5%	2.2%	件数 割合	223 49.1%	165 36.3%	56 12.3%	9 2.0%	1 0.2%	454 100.0%	49.1 36.3 12.3 2.0 0.2

平均点:「5.とてもあてはまる」を5点、「4.ややあてはまる」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりあてはまらない」を2点、「1.まったくあてはまらない」を1点として加重平均

AY2025高校2年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 1.DPコース履修 : 全体集計	回答者数	455
----	-----------------------	------	-----

質問2. あなたは以下の態度や状況にどのくらいあてはまると思いますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

項目	平均	肯定回答率 (⑤+④)	否定回答率 (①+②)	選択肢	5 とてもあてはまる	4 ややあてはまる	3 どちらともいえない	2 あまりあてはまらない	1 まったくあてはまらない	合計					
											0%	25%	50%	75%	100%
(20) 自分の行動に責任をとることができる	4.11	80.1%	4.4%	件数	160	203	70	18	2	453	35.3	44.8	15.5	4.0	0.4
				割合	35.3%	44.8%	15.5%	4.0%	0.4%	100.0%					
(21) 自分の態度や行動の正しさを確認することがよくある	4.16	79.5%	4.6%	件数	189	171	72	18	3	453	41.7	37.7	15.9	4.0	0.7
				割合	41.7%	37.7%	15.9%	4.0%	0.7%	100.0%					
(22) 自分の態度や行動をよりよいものにしようと努力している	4.28	85.9%	2.2%	件数	205	185	54	8	2	454	45.2	40.7	11.9	3.0	0.4
				割合	45.2%	40.7%	11.9%	1.8%	0.4%	100.0%					
(23) 他の人は自分と違う意見を持っていることを理解している	4.55	91.6%	1.1%	件数	294	121	33	3	2	453	64.9	26.7	7.0	1.1	0.4
				割合	64.9%	26.7%	7.3%	0.7%	0.4%	100.0%					
(24) 世の中には色々な価値観や文化があることを理解している	4.67	94.2%	0.9%	件数	332	93	22	2	2	451	73.6	20.6	4.9	0.4	0.4
				割合	73.6%	20.6%	4.9%	0.4%	0.4%	100.0%					
(25) 他の国の人々の生活習慣や考え方の違いを調べることがよくある	3.78	61.2%	13.7%	件数	151	125	113	51	11	451	33.5	27.7	25.1	11.3	2.4
				割合	33.5%	27.7%	25.1%	11.3%	2.4%	100.0%					
(26) 困っている人を助けることがよくある	3.94	72.3%	6.2%	件数	133	194	97	23	5	452	29.4	42.9	21.5	5.1	1.1
				割合	29.4%	42.9%	21.5%	5.1%	1.1%	100.0%					
(27) いつも新しいことに挑戦している	3.70	59.3%	13.0%	件数	115	154	126	50	9	454	25.3	33.9	27.8	11.0	2.0
				割合	25.3%	33.9%	27.8%	11.0%	2.0%	100.0%					
(28) いつも何か新しいことを生み出そうとしている	3.51	49.2%	19.0%	件数	104	119	144	74	12	453	23.0	26.3	31.8	16.3	2.6
				割合	23.0%	26.3%	31.8%	16.3%	2.6%	100.0%					
(29) 自分の能力を有効に使うことができる	3.72	61.3%	8.6%	件数	96	181	136	30	9	452	21.2	40.0	30.1	6.6	2.0
				割合	21.2%	40.0%	30.1%	6.6%	2.0%	100.0%					
(30) 健康的な生活に注意している	3.55	54.5%	21.9%	件数	122	125	107	78	21	453	26.9	27.6	23.6	17.2	4.6
				割合	26.9%	27.6%	23.6%	17.2%	4.6%	100.0%					
(31) 体力・身体づくりをしている	3.47	54.1%	25.4%	件数	114	131	93	85	30	453	25.2	28.9	20.5	18.8	6.6
				割合	25.2%	28.9%	20.5%	18.8%	6.6%	100.0%					
(32) 自分で計画を立て、それに従って物事を進めることができる	3.39	50.7%	24.2%	件数	81	149	114	84	26	454	17.8	32.8	25.1	18.5	5.7
				割合	17.8%	32.8%	25.1%	18.5%	5.7%	100.0%					
(33) 社会や学校の一員としての義務と権利を認識している	3.90	69.1%	7.1%	件数	126	187	108	31	1	453	27.8	41.3	23.8	6.8	0.2
				割合	27.8%	41.3%	23.8%	6.8%	0.2%	100.0%					
(34) 社会や学校において、自分が行うべき役割を果たしている	3.85	66.4%	6.6%	件数	120	181	122	26	4	453	26.5	40.0	26.9	5.0	0.9
				割合	26.5%	40.0%	26.9%	5.7%	0.9%	100.0%					
(35) 社会や学校などの周囲をよくするために積極的に関わっている	3.73	60.8%	11.5%	件数	117	159	126	44	8	454	25.8	35.0	27.8	9.7	1.8
				割合	25.8%	35.0%	27.8%	9.7%	1.8%	100.0%					
(36) 社会や学校において、周囲の人を助けたり協力することがよくある	3.96	72.8%	6.6%	件数	135	195	93	28	2	453	29.8	43.0	20.5	6.2	0.4
				割合	29.8%	43.0%	20.5%	6.2%	0.4%	100.0%					
(37) 自分の周りに変化が起きてうまく適応できている	3.86	69.2%	10.1%	件数	130	184	94	40	6	454	28.6	40.5	20.7	8.8	1.3
				割合	28.6%	40.5%	20.7%	8.8%	1.3%	100.0%					
(38) ストレスを感じる事があってもリラックスして前向きにとらえることができる	3.36	48.2%	27.1%	件数	102	117	112	90	33	454	22.5	25.8	24.7	19.8	7.3
				割合	22.5%	25.8%	24.7%	19.8%	7.3%	100.0%					

平均点:「5.とてもあてはまる」を5点、「4.ややあてはまる」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりあてはまらない」を2点、「1.まったくあてはまらない」を1点として加重平均

AY2025高校2年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 1.DPコース履修 : 全体集計	回答者数	455
----	-----------------------	------	-----

質問3. これまでに受けた高校の授業の中で、あなたは次のような活動をした経験がありますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

項目	平均	(5肯定回答率)	(1否定回答率)	選択肢	5.いつも	4.よくある	3.ときどき	2.あまりない	1.まったくない	合計	0%	25%	50%	75%	100%
(1) 先生の話から知識を得る	4.26	97.4%	2.6%	件数	197	193	52	10	2	454					
				割合	43.4%	42.5%	11.5%	2.2%	0.4%	100.0%					
(2) 教科書を中心に学ぶ	3.27	74.0%	26.0%	件数	67	129	139	97	21	453					
				割合	14.8%	28.5%	30.7%	21.4%	4.6%	100.0%					
(3) 探究したい課題について問いを立てる	3.91	91.8%	8.2%	件数	144	168	104	30	7	453					
				割合	31.8%	37.1%	23.0%	6.6%	1.5%	100.0%					
(4) プロジェクト(探究・調査・実験・発表会)の計画を立てる	3.88	90.5%	9.5%	件数	136	177	98	36	7	454					
				割合	30.0%	39.0%	21.6%	7.9%	1.5%	100.0%					
(5) 図書室を利用して資料や文献を探す	2.91	57.3%	42.7%	件数	74	87	99	113	81	454					
				割合	16.3%	19.2%	21.8%	24.9%	17.8%	100.0%					
(6) 情報を得るとき、情報源の信頼性を確認する	4.16	94.0%	6.0%	件数	200	159	67	20	7	453					
				割合	44.2%	35.1%	14.8%	4.4%	1.5%	100.0%					
(7) 英語で書かれた情報を収集する	3.94	91.6%	8.4%	件数	169	136	110	30	8	453					
				割合	37.3%	30.0%	24.3%	6.6%	1.8%	100.0%					
(8) 自分と異なる立場や見方をもつ人の意見を聞く	4.27	96.9%	3.1%	件数	212	169	58	11	3	453					
				割合	46.8%	37.3%	12.8%	2.4%	0.7%	100.0%					
(9) 本を一冊読む	3.74	83.4%	16.6%	件数	153	120	105	58	17	453					
				割合	33.8%	26.5%	23.2%	12.8%	3.8%	100.0%					
(10) グループで協力して活動する	4.34	96.3%	3.7%	件数	239	155	43	11	6	454					
				割合	52.6%	34.1%	9.5%	2.4%	1.3%	100.0%					
(11) 海外で起こった出来事や課題について考える	3.94	91.2%	8.8%	件数	161	151	101	34	6	453					
				割合	35.5%	33.3%	22.3%	7.5%	1.3%	100.0%					
(12) あるテーマについて論述文(作文・エッセイ)を書く	4.15	94.1%	5.9%	件数	201	153	73	23	4	454					
				割合	44.3%	33.7%	16.1%	5.1%	0.9%	100.0%					
(13) 学習の中で多様なメディア(新聞・映像・音楽など)に触れる	4.09	96.0%	4.0%	件数	177	163	96	15	3	454					
				割合	39.0%	35.9%	21.1%	3.3%	0.7%	100.0%					
(14) 学習の成果を社会に発信する	3.15	66.7%	33.3%	件数	74	111	118	112	39	454					
				割合	16.3%	24.4%	26.0%	24.7%	8.6%	100.0%					
(15) 自分が取り組んだプロジェクト(探究・調査・実験・発表会)のよかった点や課題を整理する	3.81	89.4%	10.6%	件数	131	160	114	43	5	453					
				割合	28.9%	35.3%	25.2%	9.5%	1.1%	100.0%					
(16) 一問一答の問題を解く	3.39	74.0%	26.0%	件数	101	119	116	92	26	454					
				割合	22.2%	26.2%	25.6%	20.3%	5.7%	100.0%					
(17) 用語や出来事を暗記する	3.49	80.1%	19.9%	件数	100	126	136	77	13	452					
				割合	22.1%	27.9%	30.1%	17.0%	2.9%	100.0%					
(18) 作文・エッセイ・発表などへのフィードバックを受ける	4.26	97.6%	2.4%	件数	213	159	71	10	1	454					
				割合	46.9%	35.0%	15.6%	2.2%	0.2%	100.0%					

平均点:「5.いつも」を5点、「4.よくある」を4点、「3.ときどき」を3点、「2.あまりない」を2点、「1.まったくない」を1点として加重平均

AY2025高校2年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 1.DPコース履修 : 全体集計	回答者数	455
----	-----------------------	------	-----

質問5. 高校生活の中で、あなたはどの程度意欲的に次のような活動に参加していますか(参加していましたか)。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

項目	平均	(5肯定回答率)	(1否定回答率)	選択肢	5・とてもあてはまる	4・ややあてはまる	3・どちらともいえない	2・あまりあてはまらない	1・まったくあてはまらない	合計	
											5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない
(1) 生徒会・委員会活動への参加	3.07	47.5%	38.6%	件数	103	111	63	64	110	451	
				割合	22.8%	24.6%	14.0%	14.2%	24.4%	100.0%	22.8 24.6 14.0 14.2 24.4
(2) 部活動・クラブ活動への参加	3.48	58.9%	27.3%	件数	162	103	62	37	86	450	
				割合	36.0%	22.9%	13.8%	8.2%	19.1%	100.0%	36.0 22.9 13.8 8.2 19.1
(3) 学校行事(体育祭・文化祭等)への参加	4.32	84.7%	4.2%	件数	240	143	50	11	8	452	
				割合	53.1%	31.6%	11.1%	2.4%	1.8%	100.0%	53.1 31.6 11.1 2.4 1.8
(4) 授業外でのプロジェクト・探究活動への参加	4.07	74.8%	8.8%	件数	200	139	74	26	14	453	
				割合	44.2%	30.7%	16.3%	5.7%	3.1%	100.0%	44.2 30.7 16.3 5.7 3.1
(5) ボランティア活動への参加	3.86	66.4%	14.5%	件数	174	124	86	43	22	449	
				割合	38.8%	27.6%	19.2%	9.6%	4.9%	100.0%	38.8 27.6 19.2 9.6 4.9
(6) 海外との交流活動への参加	3.51	55.7%	24.7%	件数	143	107	88	58	53	449	
				割合	31.8%	23.8%	19.6%	12.9%	11.8%	100.0%	31.8 23.8 19.6 12.9 11.8
(7) 留学(短期・長期・交換等)	2.89	41.2%	44.2%	件数	116	70	66	49	151	452	
				割合	25.7%	15.5%	14.6%	10.8%	33.4%	100.0%	25.7 15.5 14.6 10.8 33.4

平均点:「5.とてもあてはまる」を5点、「4.ややあてはまる」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりあてはまらない」を2点、「1.まったくあてはまらない」を1点として加重平均

AY2025高校2年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 1.DPコース履修 : 全体集計	回答者数	455
----	-----------------------	------	-----

質問6. 学期中の平日(月曜～金曜)放課後の学習時間(＝1日あたりの平均)と学習内容を教えてください。

※時間は10分や30分の単位でおおまかに回答してください。

※時間あるいは分が0の場合は、空欄ではなく、例のように()内に0を記入してください。

例)「およそ(0)時間(40)分」、「およそ(2)時間(0)分」など。

(1) 1日あたりの放課後の学習時間: およそ()時間()分

回答区分	件数	割合	0%	5%	10%	15%	20%	25%
0分	13	2.9%	2.9					
1分以上30分以下	26	5.8%	5.8					
31分以上60分以下	37	8.3%	8.3					
61分以上90分以下	45	10.1%	10.1					
91分以上120分以下	106	23.8%	23.8					
121分以上150分以下	50	11.2%	11.2					
151分以上180分以下	77	17.3%	17.3					
181分以上	92	20.6%	20.6					
合計	446	100.0%						

(2) 1日あたりの放課後の学習時間のうち、①～⑤の時間配分を教えてください。

①高校の授業の予習、復習、課題(問題を解くなど)

回答区分	件数	割合	0%	5%	10%	15%	20%	25%	30%
0分	32	7.2%	7.2						
1分以上30分以下	82	18.6%	18.6						
31分以上60分以下	118	26.7%	26.7						
61分以上90分以下	53	12.0%	12.0						
91分以上120分以下	85	19.2%	19.2						
121分以上150分以下	17	3.8%	3.8						
151分以上180分以下	39	8.8%	8.8						
181分以上	16	3.6%	3.6						
合計	442	100.0%							

AY2025高校2年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 1.DPコース履修 : 全体集計	回答者数	455
----	-----------------------	------	-----

②塾・予備校の予習、復習、課題(問題を解くなど)

回答区分	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
0分	302	76.8%	76.8					
1分以上30分以下	32	8.1%	8.1					
31分以上60分以下	20	5.1%	5.1					
61分以上90分以下	18	4.6%	4.6					
91分以上120分以下	9	2.3%	2.3					
121分以上150分以下	0	0.0%						
151分以上180分以下	7	1.8%	1.8					
181分以上	5	1.3%	1.3					
合計	393	100.0%						

③調べ学習、探究・プロジェクト活動、課題論文

回答区分	件数	割合	0%	5%	10%	15%	20%	25%	30%	35%
0分	105	25.4%	25.4							
1分以上30分以下	127	30.7%	30.7							
31分以上60分以下	116	28.0%	28.0							
61分以上90分以下	22	5.3%	5.3							
91分以上120分以下	23	5.6%	5.6							
121分以上150分以下	8	1.9%	1.9							
151分以上180分以下	6	1.4%	1.4							
181分以上	7	1.7%	1.7							
合計	414	100.0%								

AY2025高校2年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 1.DPコース履修 : 全体集計	回答者数	455
----	-----------------------	------	-----

④大学受験の準備(過去問を解く、小論文を書くなど)

回答区分	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
0分	322	84.5%	84.5					
1分以上30分以下	34	8.9%	8.9					
31分以上60分以下	12	3.1%	3.1					
61分以上90分以下	3	0.8%	0.8					
91分以上120分以下	7	1.8%	1.8					
121分以上150分以下	1	0.3%	0.3					
151分以上180分以下	1	0.3%	0.3					
181分以上	1	0.3%	0.3					
合計	381	100.0%						

⑤資格試験に向けた勉強(英検、TOEIC、漢検など)

回答区分	件数	割合	0%	10%	20%	30%	40%	50%
0分	182	44.6%	44.6					
1分以上30分以下	141	34.6%	34.6					
31分以上60分以下	57	14.0%	14.0					
61分以上90分以下	7	1.7%	1.7					
91分以上120分以下	13	3.2%	3.2					
121分以上150分以下	1	0.2%	0.2					
151分以上180分以下	3	0.7%	0.7					
181分以上	4	1.0%	1.0					
合計	408	100.0%						

AY2025高校2年生対象 高校での学習・経験に関する調査

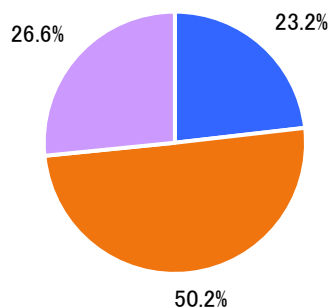
区分	学校ID 1.DPコース履修 : 全体集計	回答者数	455
----	-----------------------	------	-----

質問7. あなたの高校の成績と英語運用能力に関する資格について教えてください。

(1) あなたの現在の成績は、学年でどのくらいですか。

選択肢	件数	割合
1. 下のほう	102	23.2%
2. まんなか	221	50.2%
3. 上のほう	117	26.6%
合計	440	100.0%

■ 1. 下のほう ■ 2. まんなか ■ 3. 上のほう



(2) あなたが現在取得している英語運用能力に関する資格を教えてください。あてはまる番号に○をつけ、級やスコア等を記入してください。

選択肢	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
1. 英検(実用英語技能検定)	361	79.3%	79.3					
2. TOEFL	49	10.8%	10.8					
3. TOEIC	38	8.4%	8.4					
4. IELTSアカデミック・モジュール	81	17.8%	17.8					
5. その他	49	10.8%	10.8					
6. 資格は取得していない	23	5.1%	5.1					
回答者数	455	-						

AY2025高校2年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 1.DPコース履修 : 全体集計	回答者数	455
----	-----------------------	------	-----

その他(種類)

選択肢	件数	割合	0%	5%	10%	15%	20%	25%	30%
1.Cambridge English Exam	12	24.5%	24.5						
2.IGCSE	0	0.0%							
3.TOEFL(ITP)	2	4.1%	4.1						
4.TOEFL(Junior)	4	8.2%	8.2						
5.Oxford Online Placement Test	0	0.0%							
6.GTEC	4	8.2%	8.2						
7.TOEIC Bridge	1	2.0%	2.0						
8.TOEFL Essential	0	0.0%							
9.Language Cert	0	0.0%							
10.CASEC	0	0.0%							
回答者数	49	-							

AY2025高校2年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 1.DPコース履修 : 全体集計	回答者数	455
----	-----------------------	------	-----

質問8. あなたは現時点で、以下のことが、どのくらい身についていると思いますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

項目	平均	肯定回答率 (⑤+④)	否定回答率 (①+②)	選択肢	5・身についている	4・やや身についている	3・どちらともいえない	2・あまり身についていない	1・身についていない	合計	
											5.身についている 4.やや身についている 3.どちらともいえない 2.あまり身についていない 1.身についていない
(1) 興味のある対象について深く学習し、理解する姿勢	4.26	84.7%	2.7%	件数 割合	199 44.0%	184 40.7%	57 12.6%	10 2.2%	2 0.4%	452 100.0%	44.0 40.7 12.6 2.2 0.4
(2) 人文・社会・自然科学を横断する幅広い知識	3.64	59.2%	11.7%	件数 割合	83 18.3%	185 40.8%	132 29.1%	43 9.5%	10 2.2%	453 100.0%	18.3 40.8 29.1 9.5 2.2
(3) 困難な課題に取り組む力	3.94	73.0%	7.1%	件数 割合	135 29.9%	195 43.1%	90 19.9%	25 5.5%	7 1.5%	452 100.0%	29.9 43.1 19.9 5.5 1.5
(4) 他者と意思疎通をはかり人間関係を構築する能力	4.05	76.9%	6.4%	件数 割合	163 36.1%	184 40.8%	75 16.6%	21 4.7%	8 1.8%	451 100.0%	36.1 40.8 16.6 4.7 1.8
(5) 自分の良心や社会の規範に沿って行動する力	4.08	77.2%	4.2%	件数 割合	165 36.6%	183 40.6%	84 18.6%	12 2.7%	7 1.6%	451 100.0%	36.6 40.6 18.6 2.7 1.6
(6) 人や社会によって違った考えや文化があることへの理解	4.40	87.0%	1.5%	件数 割合	248 54.7%	146 32.2%	52 11.5%	4 0.9%	3 0.7%	453 100.0%	54.7 32.2 11.5 0.9 0.7
(7) 他者を尊重し、ともに行動する力	4.29	85.6%	2.9%	件数 割合	213 47.2%	173 38.4%	52 11.5%	10 2.2%	3 0.7%	451 100.0%	47.2 38.4 11.5 2.2 0.7
(8) 予測不可能な事態に直面しても挑戦する姿勢	3.96	73.5%	5.3%	件数 割合	131 29.0%	201 44.5%	96 21.2%	18 4.0%	6 1.3%	452 100.0%	29.0 44.5 21.2 4.0 1.3
(9) 自分の生活と自然や社会とのつながりの理解	3.84	65.6%	7.1%	件数 割合	124 27.5%	172 38.1%	123 27.3%	24 5.3%	8 1.8%	451 100.0%	27.5 38.1 27.3 5.3 1.8
(10) 自分の行動を評価し、次に生かす力	3.99	72.2%	5.3%	件数 割合	147 32.5%	180 39.7%	102 22.5%	21 4.6%	3 0.7%	453 100.0%	32.5 39.7 22.5 4.6 0.7
(11) 問題が起きたときに解決する力	4.01	77.2%	4.2%	件数 割合	133 29.4%	216 47.8%	84 18.6%	14 3.1%	5 1.1%	452 100.0%	29.4 47.8 18.6 3.1 1.1
(12) 自ら率先して行動する力	3.94	71.2%	7.3%	件数 割合	144 31.9%	177 39.2%	97 21.5%	26 5.8%	7 1.6%	451 100.0%	31.9 39.2 21.5 5.8 1.6
(13) 自分自身で計画を立て、それに基づいて実行する力	3.68	61.1%	15.5%	件数 割合	122 27.0%	154 34.1%	106 23.5%	50 11.1%	20 4.4%	452 100.0%	27.0 34.1 23.5 11.1 4.4
(14) 情報を処理し、活用する力	3.94	71.5%	5.3%	件数 割合	132 29.2%	191 42.3%	105 23.2%	20 4.4%	4 0.9%	452 100.0%	29.2 42.3 23.2 4.4 0.9
(15) 国際的な事からを理解し、あつかう力	3.98	71.4%	7.3%	件数 割合	156 34.6%	166 36.8%	96 21.3%	28 6.2%	5 1.1%	451 100.0%	34.6 36.8 21.3 6.2 1.1

平均点:「5.身についている」を5点、「4.やや身についている」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまり身についていない」を2点、「1.身についていない」を1点として加重平均

AY2025高校2年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 1.DPコース履修 : 全体集計	回答者数	455
----	-----------------------	------	-----

質問8. あなたは現時点で、以下のことが、どのくらい身についていると思いますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

項目	平均	(5肯定回答率)	(1否定回答率)	選択肢	5・身についている	4・やや身についている	3・どちらともいえない	2・あまり身についていない	1・身についていない	合計	
											5.身についている 4.やや身についている 3.どちらともいえない 2.あまり身についていない 1.身についていない
(16) チームで協力して行動する力	4.23	82.3%	4.0%	件数	206	165	62	14	4	451	45.7
				割合	45.7%	36.6%	13.7%	3.1%	0.9%	100.0%	36.6
(17) リーダーシップの能力	3.67	58.3%	13.7%	件数	110	154	127	55	7	453	24.3
				割合	24.3%	34.0%	28.0%	12.1%	1.5%	100.0%	34.0
(18) 地域社会の一員としての自覚	3.58	55.1%	15.8%	件数	106	142	131	50	21	450	23.6
				割合	23.6%	31.6%	29.1%	11.1%	4.7%	100.0%	31.6
(19) 日本社会の一員としての自覚	3.57	55.2%	16.6%	件数	108	141	127	52	23	451	23.9
				割合	23.9%	31.3%	28.2%	11.5%	5.1%	100.0%	31.3
(20) グローバルな社会の一員としての自覚	3.88	65.8%	9.3%	件数	156	140	112	30	12	450	34.7
				割合	34.7%	31.1%	24.9%	6.7%	2.7%	100.0%	31.1
(21) 「国語(現代文、古典等)」に関する能力	3.33	48.0%	23.7%	件数	71	146	128	73	34	452	15.7
				割合	15.7%	32.3%	28.3%	16.2%	7.5%	100.0%	32.3
(22) 「社会科(歴史、地理、公民等)」に関する能力	3.49	54.4%	17.9%	件数	75	171	125	61	20	452	16.6
				割合	16.6%	37.8%	27.7%	13.5%	4.4%	100.0%	37.8
(23) 「数学」に関する能力	3.51	55.2%	17.4%	件数	79	171	124	61	18	453	17.4
				割合	17.4%	37.7%	27.4%	13.5%	4.0%	100.0%	37.7
(24) 「理科(物理、化学、生物、地学等)」に関する能力	3.53	57.2%	19.3%	件数	91	167	106	66	21	451	20.2
				割合	20.2%	37.0%	23.5%	14.6%	4.7%	100.0%	37.0
(25) 「外国語(英語等)」に関する能力	4.05	74.3%	6.9%	件数	171	165	85	28	3	452	37.8
				割合	37.8%	36.5%	18.8%	6.2%	0.7%	100.0%	36.5
(26) その他の教科(芸術、体育、専門等)に関する能力	3.81	64.2%	9.3%	件数	129	162	120	31	11	453	28.5
				割合	28.5%	35.8%	26.5%	6.8%	2.4%	100.0%	35.8

平均点:「5.身についている」を5点、「4.やや身についている」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまり身についていない」を2点、「1.身についていない」を1点として加重平均

AY2025高校2年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 1.DPコース履修 : 全体集計	回答者数	455
----	-----------------------	------	-----

質問9. あなたは、あなたの現在や将来についてどのように考えていますか。

(1) 学校生活について

項目	平均	(⑤ + ④) 肯定回答率	(① + ②) 否定回答率	選択肢	5 : とてもそう思う	4 : ややそう思う	3 : どちらともいえない	2 : あまりそう思わない	1 : まったくそう思わない	合計	
① 学校の授業などを通じた今の自分の学習に満足している	3.36	49.9%	26.5%	件数	84	142	107	91	29	453	
				割合	18.5%	31.3%	23.6%	20.1%	6.4%	100.0%	
② これまでの学校での学習やさまざまな経験で得られた今の自分の能力に満足している	3.09	41.5%	36.4%	件数	65	123	100	120	45	453	
				割合	14.3%	27.2%	22.1%	26.5%	9.9%	100.0%	
③ 高校生活全体に満足している	3.70	61.8%	14.3%	件数	120	160	108	47	18	453	
				割合	26.5%	35.3%	23.8%	10.4%	4.0%	100.0%	

平均点:「5.とてもそう思う」を5点、「4.ややそう思う」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりそう思わない」を2点、「1.まったくそう思わない」を1点として加重平均

(2) 将来について

項目	平均	(⑤ + ④) 肯定回答率	(① + ②) 否定回答率	選択肢	5 : とてもそう思う	4 : ややそう思う	3 : どちらともいえない	2 : あまりそう思わない	1 : まったくそう思わない	合計	
① 将来、学びたい分野について考えている	4.38	86.5%	4.9%	件数	258	134	39	17	5	453	
				割合	57.0%	29.6%	8.6%	3.8%	1.1%	100.0%	
② 将来、行きたい大学について考えている	4.25	83.2%	4.9%	件数	220	157	54	15	7	453	
				割合	48.6%	34.7%	11.9%	3.3%	1.5%	100.0%	
③ 将来、やりたい仕事について考えている	4.10	74.0%	10.4%	件数	224	111	71	34	13	453	
				割合	49.4%	24.5%	15.7%	7.5%	2.9%	100.0%	

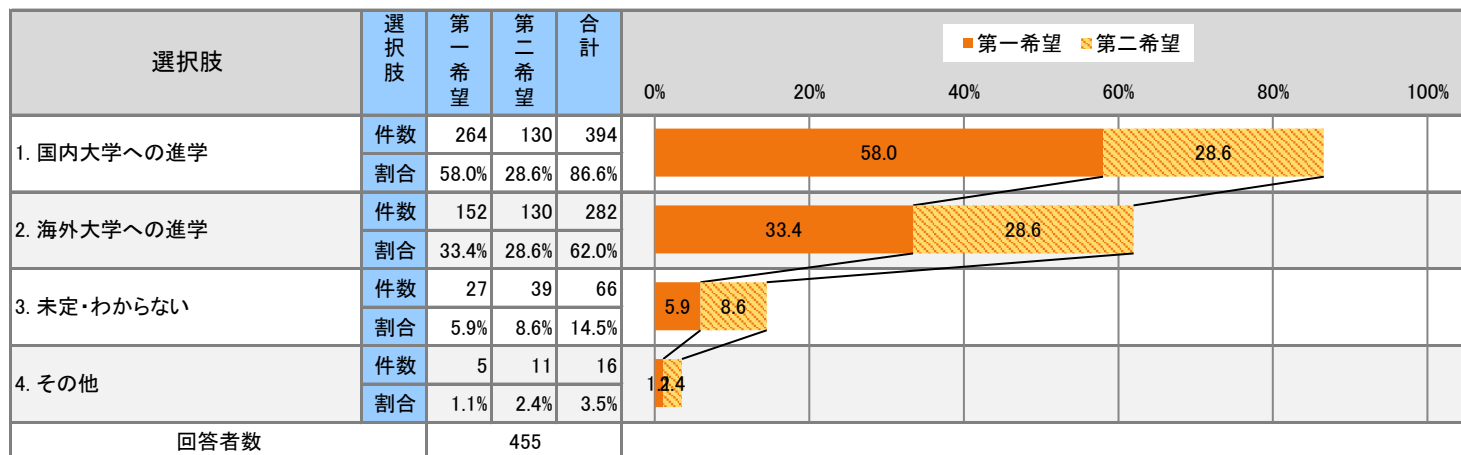
平均点:「5.とてもそう思う」を5点、「4.ややそう思う」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりそう思わない」を2点、「1.まったくそう思わない」を1点として加重平均

AY2025高校2年生対象 高校での学習・経験に関する調査

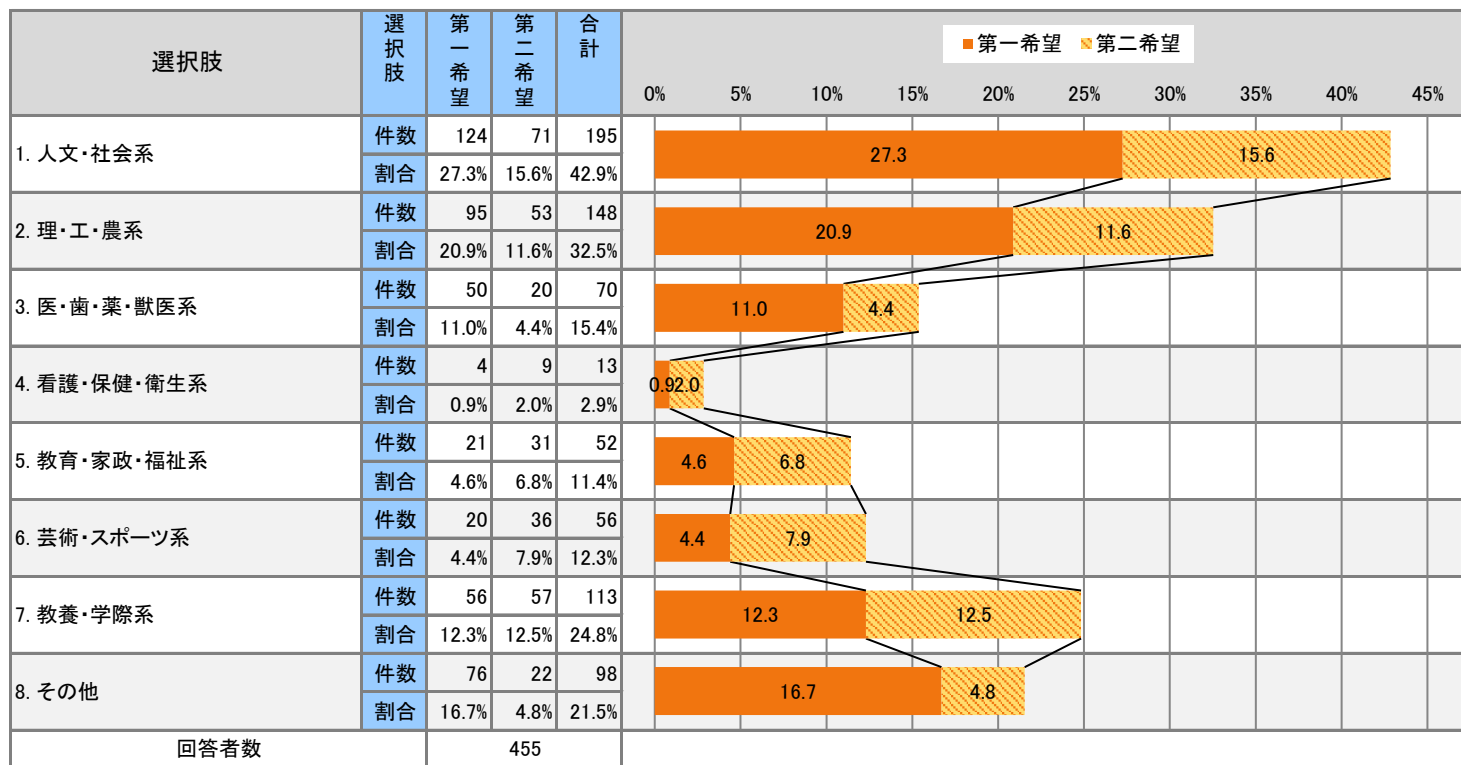
区分	学校ID 1.DPコース履修 : 全体集計	回答者数	455
----	-----------------------	------	-----

質問10. あなたの進路と将来の展望について教えてください。

(1) あなたは高校を卒業後、どのような進路を希望していますか。もっとも当てはまるものから番号を選択してください(第一希望だけでも可)。



(2) あなたはどの専門分野に進みたいですか。もっとも当てはまるものから番号を選択してください(第一希望だけでも可)。



AY2025高校2年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 1.DPコース履修 : 全体集計	回答者数	455
----	-----------------------	------	-----

質問11. あなたの周囲の環境についておたずねします。

項目	平均	肯定回答率 (⑤+④) %	否定回答率 (①+②) %	選択肢	5.とてもあてはまる	4.ややあてはまる	3.どちらともいえない	2.あまりあてはまらない	1.まったくあてはまらない	合計	
(1) 本やインターネット環境など家で学ぶ環境が十分にある	4.59	93.3%	1.8%	件数	309	111	22	4	4	450	
				割合	68.7%	24.7%	4.9%	0.9%	0.9%	100.0%	
(2) 親や兄弟などの家族は普段からよく勉強を教えてくれる	2.78	34.6%	46.3%	件数	68	88	86	93	116	451	
				割合	15.1%	19.5%	19.1%	20.6%	25.7%	100.0%	
(3) 普段から家族が本や新聞を読んでいるのをよく見る	3.17	46.4%	35.6%	件数	100	109	81	88	72	450	
				割合	22.2%	24.2%	18.0%	19.6%	16.0%	100.0%	
(4) 親や保護者は自分の勉強のために必要なものを買ってくれる	4.53	87.8%	3.3%	件数	313	84	40	11	4	452	
				割合	69.2%	18.6%	8.8%	2.4%	0.9%	100.0%	
(5) 勉強のためであれば親や保護者は積極的に援助してくれる	4.47	87.2%	4.9%	件数	300	94	36	15	7	452	
				割合	66.4%	20.8%	8.0%	3.3%	1.5%	100.0%	
(6) 普段の生活の中でお金に困っていると感じることがある	2.28	21.2%	64.4%	件数	41	55	65	118	173	452	
				割合	9.1%	12.2%	14.4%	26.1%	38.3%	100.0%	
(7) 親や保護者はあなたのやりたいことを応援してくれる	4.41	83.6%	4.0%	件数	284	94	56	13	5	452	
				割合	62.8%	20.8%	12.4%	2.9%	1.1%	100.0%	
(8) 親や保護者は学校生活について相談に乗ってくれる	4.14	75.8%	8.9%	件数	231	110	69	23	17	450	
				割合	51.3%	24.4%	15.3%	5.1%	3.8%	100.0%	
(9) 周りの同級生は授業に熱心に取り組んでいる	4.18	79.4%	5.3%	件数	206	153	69	18	6	452	
				割合	45.6%	33.8%	15.3%	4.0%	1.3%	100.0%	
(10) 周りの同級生は普段からよく勉強を教えてくれる	4.01	74.0%	8.4%	件数	174	159	79	24	14	450	
				割合	38.7%	35.3%	17.6%	5.3%	3.1%	100.0%	
(11) 家族とよく海外の経験や国際的な時事問題を話したりする	3.67	61.9%	21.2%	件数	154	126	76	63	33	452	
				割合	34.1%	27.9%	16.8%	13.9%	7.3%	100.0%	
(12) 親や保護者が仕事などで英語などの外国語を使っている	2.98	46.0%	45.4%	件数	138	70	39	53	152	452	
				割合	30.5%	15.5%	8.6%	11.7%	33.6%	100.0%	
(13) 友達とよく海外の話題(SNS、音楽など)を話したりする	3.92	70.4%	14.2%	件数	184	134	70	43	21	452	
				割合	40.7%	29.6%	15.5%	9.5%	4.6%	100.0%	

平均点:「5.とてもあてはまる」を5点、「4.ややあてはまる」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりあてはまらない」を2点、「1.まったくあてはまらない」を1点として加重平均

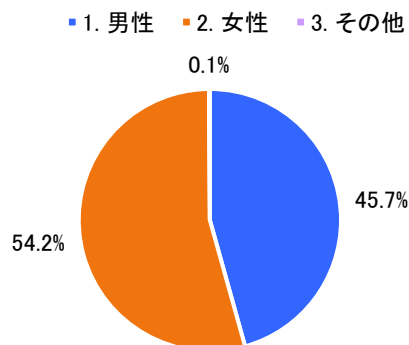
AY2025高校2年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 2.DPコース以外 : 全体集計	回答者数	1,866
----	-----------------------	------	-------

質問1. あなた自身のことをうかがいます。

(3) 性別

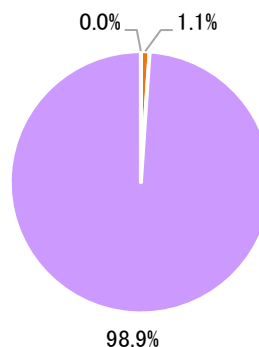
選択肢	件数	割合
1. 男性	844	45.7%
2. 女性	1,002	54.2%
3. その他	2	0.1%
合計	1,848	100.0%



(4) あなたは現在、ディプロマプログラム(DP)を履修していますか。

選択肢	件数	割合
1. 履修している(フル・ディプロマの取得を目指す)	0	0.0%
2. 履修している(科目履修生／サーティフィケートの取得を目指す)	20	1.1%
3. 履修していない	1,846	98.9%
合計	1,866	100.0%

- 1. 履修している(フル・ディプロマの取得を目指す)
- 2. 履修している(科目履修生／サーティフィケートの取得を目指す)
- 3. 履修していない



(5) 以下の項目の中で、あなたが経験した学校や教育プログラムはありますか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

選択肢	件数	割合	0%	10%	20%	30%	40%	50%	60%	70%
1. インターナショナル・スクール(日本)	108	5.8%	5.8							
2. インターナショナル・スクール(海外)	65	3.5%	3.5							
3. 海外の現地校	195	10.5%	10.5							
4. 海外の日本人学校	78	4.2%	4.2							
5. 国際バカロレア初等教育プログラム(PYP)	44	2.4%	2.4							
6. 国際バカロレア中等教育プログラム(MYP)	349	18.7%	18.7							
7. あてはまるものはない	1,217	65.2%	65.2							
回答者数	1,866	-								

AY2025高校2年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 2.DPコース以外 : 全体集計	回答者数	1,866
----	-----------------------	------	-------

質問2. あなたは以下の態度や状況にどのくらいあてはまると思いますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

項目	平均	肯定回答率 (⑤+④)	否定回答率 (①+②)	選択肢	5 とてもあてはまる	4 ややあてはまる	3 どちらともいえない	2 あまりあてはまらない	1 まったくあてはまらない	合計	
											5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない
(1) 知らないことがあると、よく質問をしたり調べたりする	3.97	80.1%	8.5%	件数 割合	495 26.6%	996 53.5%	211 11.3%	146 7.8%	13 0.7%	1,861 100.0%	26.6 53.5 11.3 7.8 0.7
(2) 自分はどのような人間かを考えることがよくある	3.92	73.8%	11.7%	件数 割合	588 31.6%	785 42.2%	269 14.5%	179 9.6%	39 2.1%	1,860 100.0%	31.6 42.2 14.5 9.6 2.1
(3) 社会のことをよく勉強している	3.04	34.1%	33.6%	件数 割合	147 7.9%	487 26.2%	601 32.3%	539 29.0%	86 4.6%	1,860 100.0%	7.9 26.2 32.3 29.0 4.6
(4) 自然や環境のことをよく勉強している	2.94	32.3%	39.6%	件数 割合	149 8.0%	452 24.3%	522 28.1%	608 32.7%	127 6.8%	1,858 100.0%	8.0 24.3 28.1 32.7 6.8
(5) 学校とは関係なく自分から勉強する習慣ができている	2.94	35.0%	40.6%	件数 割合	194 10.4%	456 24.5%	455 24.5%	555 29.9%	199 10.7%	1,859 100.0%	10.4 24.5 24.5 29.9 10.7
(6) 問題が起きたときにはその理由を理解しようとする	3.95	77.6%	6.4%	件数 割合	460 24.8%	982 52.9%	298 16.0%	106 5.7%	12 0.6%	1,858 100.0%	24.8 52.9 16.0 5.7 0.6
(7) 問題を解決するために自分ができることを考える	4.00	79.1%	5.4%	件数 割合	503 27.1%	966 52.0%	289 15.6%	85 4.6%	15 0.8%	1,858 100.0%	27.1 52.0 15.6 4.6 0.8
(8) 課題があれば自分で解決しようとする	3.92	75.5%	7.0%	件数 割合	447 24.1%	954 51.4%	326 17.6%	111 6.0%	18 1.0%	1,856 100.0%	24.1 51.4 17.6 6.0 1.0
(9) 自分の気持ちや考えを十分に表現することができる	3.68	63.4%	15.2%	件数 割合	394 21.2%	785 42.2%	398 21.4%	249 13.4%	34 1.8%	1,860 100.0%	21.2 42.2 21.4 13.4 1.8
(10) 他の人の気持ちや考えを十分に理解することができる	3.82	69.7%	8.6%	件数 割合	413 22.2%	884 47.5%	404 21.7%	133 7.1%	27 1.5%	1,861 100.0%	22.2 47.5 21.7 7.1 1.5
(11) 他の人の異なる意見を受け入れて価値を認めることができる	4.13	85.1%	3.8%	件数 割合	598 32.3%	975 52.7%	205 11.1%	63 3.4%	8 0.4%	1,849 100.0%	32.3 52.7 11.1 3.4 0.4
(12) 異なる考え方や意見を調整して物事を進めることがよくある	3.93	75.6%	6.2%	件数 割合	446 24.1%	950 51.4%	337 18.2%	102 5.5%	12 0.6%	1,847 100.0%	24.1 51.4 18.2 5.5 0.6
(13) 何かをするときに周囲の人を誘うことがよくある	3.86	70.6%	14.4%	件数 割合	602 32.6%	702 38.0%	277 15.0%	217 11.8%	48 2.6%	1,846 100.0%	32.6 38.0 15.0 11.8 2.6
(14) 他の人たちと協力してチームで行動することができる	4.11	81.9%	6.3%	件数 割合	670 36.3%	842 45.6%	218 11.8%	99 5.4%	17 0.9%	1,846 100.0%	36.3 45.6 11.8 5.4 0.9
(15) チームの中で自分の果たすべき役割を率先して行っている	3.93	73.8%	7.0%	件数 割合	503 27.3%	857 46.5%	355 19.3%	108 5.9%	21 1.1%	1,844 100.0%	27.3 46.5 19.3 5.9 1.1
(16) 自ら目標を設定し、その達成のために行動することができる	3.65	62.9%	15.5%	件数 割合	372 20.2%	787 42.7%	399 21.6%	240 13.0%	46 2.5%	1,844 100.0%	20.2 42.7 21.6 13.0 2.5
(17) グループの目的を示し、グループの人たちを効果的に行動させることができる	3.38	48.9%	22.4%	件数 割合	286 15.5%	618 33.5%	529 28.6%	345 18.7%	69 3.7%	1,847 100.0%	15.5 33.5 28.6 18.7 3.7
(18) 学校や社会の規則を守っている	4.22	84.8%	3.7%	件数 割合	779 42.1%	789 42.7%	213 11.5%	52 2.8%	16 0.9%	1,849 100.0%	42.1 42.7 11.5 2.8 0.9
(19) 自分の良心や従うべきルールを持ち、それに基づいて行動している	4.25	86.5%	3.0%	件数 割合	773 41.8%	826 44.7%	194 10.5%	47 2.5%	9 0.5%	1,849 100.0%	41.8 44.7 10.5 2.5 0.5

平均点:「5.とてもあてはまる」を5点、「4.ややあてはまる」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりあてはまらない」を2点、「1.まったくあてはまらない」を1点として加重平均

AY2025高校2年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 2.DPコース以外 : 全体集計	回答者数	1,866
----	-----------------------	------	-------

質問2. あなたは以下の態度や状況にどのくらいあてはまると思いますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

項目	平均	(5肯定回答率)	(1否定回答率)	選択肢	5・とてもあてはまる	4・ややあてはまる	3・どちらともいえない	2・あまりあてはまらない	1・まったくあてはまらない	合計	
(20) 自分の行動に責任をとることができる	3.99	76.2%	6.3%	件数	559	847	323	93	23	1,845	30.3
				割合	30.3%	45.9%	17.5%	5.0%	1.2%	100.0%	45.9
(21) 自分の態度や行動の正しさを確認することがよくある	4.03	77.8%	6.3%	件数	609	830	295	95	21	1,850	32.9
				割合	32.9%	44.9%	15.9%	5.1%	1.1%	100.0%	44.9
(22) 自分の態度や行動をよりよいものにしようと努力している	4.13	80.3%	4.5%	件数	699	786	281	69	14	1,849	37.8
				割合	37.8%	42.5%	15.2%	3.7%	0.8%	100.0%	42.5
(23) 他の人は自分と違う意見を持っていることを理解している	4.43	91.5%	1.6%	件数	991	698	128	23	6	1,846	53.7
				割合	53.7%	37.8%	6.9%	1.2%	0.3%	100.0%	37.8
(24) 世の中には色々な価値観や文化があることを理解している	4.52	93.5%	1.6%	件数	1,126	600	90	20	10	1,846	61.0
				割合	61.0%	32.5%	4.9%	1.1%	0.5%	100.0%	32.5
(25) 他の国の人々の生活習慣や考え方の違いを調べることがよくある	3.34	48.7%	30.0%	件数	384	515	393	464	91	1,847	20.8
				割合	20.8%	27.9%	21.3%	25.1%	4.9%	100.0%	27.9
(26) 困っている人を助けることがよくある	3.71	63.3%	9.2%	件数	347	821	508	140	30	1,846	18.8
				割合	18.8%	44.5%	27.5%	7.6%	1.6%	100.0%	44.5
(27) いつも新しいことに挑戦している	3.28	44.4%	26.5%	件数	275	544	537	410	80	1,846	14.9
				割合	14.9%	29.5%	29.1%	22.2%	4.3%	100.0%	29.5
(28) いつも何か新しいことを生み出そうとしている	3.10	37.0%	34.2%	件数	255	429	532	504	129	1,849	13.8
				割合	13.8%	23.2%	28.8%	27.3%	7.0%	100.0%	23.2
(29) 自分の能力を有効に使うことができる	3.43	49.1%	17.6%	件数	280	626	614	252	73	1,845	15.2
				割合	15.2%	33.9%	33.3%	13.7%	4.0%	100.0%	33.9
(30) 健康的な生活に注意している	3.58	59.1%	21.8%	件数	457	636	352	322	82	1,849	24.7
				割合	24.7%	34.4%	19.0%	17.4%	4.4%	100.0%	34.4
(31) 体力・身体づくりをしている	3.44	56.0%	29.2%	件数	517	516	274	345	193	1,845	28.0
				割合	28.0%	28.0%	14.9%	18.7%	10.5%	100.0%	28.0
(32) 自分で計画を立て、それに従って物事を進めることができる	3.13	42.7%	34.4%	件数	245	543	422	470	165	1,845	13.3
				割合	13.3%	29.4%	22.9%	25.5%	8.9%	100.0%	29.4
(33) 社会や学校の一員としての義務と権利を認識している	3.75	66.9%	10.6%	件数	374	862	417	165	30	1,848	20.2
				割合	20.2%	46.6%	22.6%	8.9%	1.6%	100.0%	46.6
(34) 社会や学校において、自分が行うべき役割を果たしている	3.74	66.5%	9.3%	件数	355	872	448	134	37	1,846	19.2
				割合	19.2%	47.2%	24.3%	7.3%	2.0%	100.0%	47.2
(35) 社会や学校などの周囲をよくするために積極的に関わっている	3.49	53.6%	18.5%	件数	320	668	514	280	62	1,844	17.4
				割合	17.4%	36.2%	27.9%	15.2%	3.4%	100.0%	36.2
(36) 社会や学校において、周囲の人を助けたり協力することがよくある	3.81	69.2%	8.7%	件数	399	875	406	134	27	1,841	21.7
				割合	21.7%	47.5%	22.1%	7.3%	1.5%	100.0%	47.5
(37) 自分の周りに変化が起きてもうまく適応できている	3.70	64.8%	13.8%	件数	413	784	394	198	57	1,846	22.4
				割合	22.4%	42.5%	21.3%	10.7%	3.1%	100.0%	42.5
(38) ストレスを感じる事があってもリラックスして前向きにとらえることができる	3.26	47.9%	30.5%	件数	346	537	399	384	179	1,845	18.8
				割合	18.8%	29.1%	21.6%	20.8%	9.7%	100.0%	29.1

平均点:「5.とてもあてはまる」を5点、「4.ややあてはまる」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりあてはまらない」を2点、「1.まったくあてはまらない」を1点として加重平均

AY2025高校2年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 2.DPコース以外 : 全体集計	回答者数	1,866
----	-----------------------	------	-------

質問3. これまでに受けた高校の授業の中で、あなたは次のような活動をした経験がありますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

項目	平均	(5肯定回答率 + 4 + 3)	(1否定回答率 + 2)	選択肢	5 いつも	4 よくある	3 ときどき	2 あまりない	1 まったくない	合計	0%	25%	50%	75%	100%
(1) 先生の話から知識を得る	4.04	96.5%	3.5%	件数	572	863	350	50	14	1,849	30.9	46.7	18.9	2.7	0.8
				割合	30.9%	46.7%	18.9%	2.7%	0.8%	100.0%					
(2) 教科書を中心に学ぶ	3.73	86.7%	13.3%	件数	413	799	390	211	34	1,847	22.4	43.3	21.1	11.4	1.8
				割合	22.4%	43.3%	21.1%	11.4%	1.8%	100.0%					
(3) 探究したい課題について問いを立てる	3.39	80.2%	19.8%	件数	277	603	601	302	64	1,847	15.0	32.6	32.5	16.4	3.5
				割合	15.0%	32.6%	32.5%	16.4%	3.5%	100.0%					
(4) プロジェクト(探究・調査・実験・発表会)の計画を立てる	3.34	77.4%	22.6%	件数	280	582	565	327	90	1,844	15.2	31.6	30.6	17.7	4.9
				割合	15.2%	31.6%	30.6%	17.7%	4.9%	100.0%					
(5) 図書室を利用して資料や文献を探す	2.41	41.6%	58.4%	件数	117	230	421	596	482	1,846	6.3	12.5	22.8	32.3	26.1
				割合	6.3%	12.5%	22.8%	32.3%	26.1%	100.0%					
(6) 情報を得るとき、情報源の信頼性を確認する	3.67	85.2%	14.8%	件数	445	698	433	202	71	1,849	24.1	37.8	23.4	10.9	3.8
				割合	24.1%	37.8%	23.4%	10.9%	3.8%	100.0%					
(7) 英語で書かれた情報を収集する	2.60	46.8%	53.2%	件数	172	300	392	586	397	1,847	9.3	16.2	21.2	31.7	21.5
				割合	9.3%	16.2%	21.2%	31.7%	21.5%	100.0%					
(8) 自分と異なる立場や見方をもつ人の意見を聞く	3.89	92.4%	7.6%	件数	501	806	395	109	30	1,841	27.2	43.8	21.5	5.9	1.6
				割合	27.2%	43.8%	21.5%	5.9%	1.6%	100.0%					
(9) 本を一冊読む	2.67	47.7%	52.3%	件数	255	267	360	548	418	1,848	13.8	14.4	19.5	29.7	22.6
				割合	13.8%	14.4%	19.5%	29.7%	22.6%	100.0%					
(10) グループで協力して活動する	4.08	94.3%	5.7%	件数	653	816	270	82	23	1,844	35.4	44.3	14.6	4.4	1.2
				割合	35.4%	44.3%	14.6%	4.4%	1.2%	100.0%					
(11) 海外で起こった出来事や課題について考える	3.01	63.8%	36.2%	件数	239	416	524	466	203	1,848	12.9	22.5	28.4	25.2	11.0
				割合	12.9%	22.5%	28.4%	25.2%	11.0%	100.0%					
(12) あるテーマについて論述文(作文・エッセイ)を書く	2.94	60.9%	39.1%	件数	230	423	471	447	274	1,845	12.5	22.9	25.5	24.2	14.9
				割合	12.5%	22.9%	25.5%	24.2%	14.9%	100.0%					
(13) 学習の中で多様なメディア(新聞・映像・音楽など)に触れる	3.43	79.2%	20.8%	件数	355	558	545	292	91	1,841	19.3	30.3	29.6	15.9	4.9
				割合	19.3%	30.3%	29.6%	15.9%	4.9%	100.0%					
(14) 学習の成果を社会に発信する	2.51	44.7%	55.3%	件数	125	240	459	642	377	1,843	6.8	13.0	24.9	34.8	20.5
				割合	6.8%	13.0%	24.9%	34.8%	20.5%	100.0%					
(15) 自分が取り組んだプロジェクト(探究・調査・実験・発表会)のよかった点や課題を整理する	3.19	72.1%	27.9%	件数	248	536	548	352	163	1,847	13.4	29.0	29.7	19.1	8.8
				割合	13.4%	29.0%	29.7%	19.1%	8.8%	100.0%					
(16) 一問一答の問題を解く	3.60	82.2%	17.8%	件数	447	613	458	254	75	1,847	24.2	33.2	24.8	13.8	4.1
				割合	24.2%	33.2%	24.8%	13.8%	4.1%	100.0%					
(17) 用語や出来事を暗記する	3.88	89.6%	10.4%	件数	576	704	373	147	44	1,844	31.2	38.2	20.2	8.0	2.4
				割合	31.2%	38.2%	20.2%	8.0%	2.4%	100.0%					
(18) 作文・エッセイ・発表などへのフィードバックを受ける	3.18	70.9%	29.1%	件数	282	472	556	374	163	1,847	15.3	25.6	30.1	20.2	8.8
				割合	15.3%	25.6%	30.1%	20.2%	8.8%	100.0%					

平均点:「5.いつも」を5点、「4.よくある」を4点、「3.ときどき」を3点、「2.あまりない」を2点、「1.まったくない」を1点として加重平均

AY2025高校2年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 2.DPコース以外 : 全体集計	回答者数	1,866
----	-----------------------	------	-------

質問5. 高校生活の中で、あなたはどの程度意欲的に次のような活動に参加していますか(参加していましたか)。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

項目	平均	肯定回答率 (⑤+④)	否定回答率 (①+②)	選択肢	5 とてもあてはまる	4 ややあてはまる	3 どちらともいえない	2 あまりあてはまらない	1 まったくあてはまらない	合計	
(1) 生徒会・委員会活動への参加	2.96	43.1%	42.1%	件数	336	464	275	350	432	1,857	18.1 25.0 14.8 18.8 23.3
				割合	18.1%	25.0%	14.8%	18.8%	23.3%	100.0%	
(2) 部活動・クラブ活動への参加	3.97	75.1%	17.4%	件数	928	467	138	131	193	1,857	50.0 25.1 7.4 7.1 10.4
				割合	50.0%	25.1%	7.4%	7.1%	10.4%	100.0%	
(3) 学校行事(体育祭・文化祭等)への参加	4.35	87.0%	4.3%	件数	1,001	614	161	58	22	1,856	53.9 33.1 8.7 3.1 1.2
				割合	53.9%	33.1%	8.7%	3.1%	1.2%	100.0%	
(4) 授業外でのプロジェクト・探究活動への参加	3.13	44.9%	35.8%	件数	334	499	357	395	270	1,855	18.0 26.9 19.2 21.3 14.6
				割合	18.0%	26.9%	19.2%	21.3%	14.6%	100.0%	
(5) ボランティア活動への参加	2.67	31.3%	50.4%	件数	220	360	339	451	481	1,851	11.9 19.4 18.3 24.4 26.0
				割合	11.9%	19.4%	18.3%	24.4%	26.0%	100.0%	
(6) 海外との交流活動への参加	2.32	24.4%	61.8%	件数	190	262	256	388	758	1,854	10.2 14.1 13.8 20.9 40.9
				割合	10.2%	14.1%	13.8%	20.9%	40.9%	100.0%	
(7) 留学(短期・長期・交換等)	1.81	15.5%	76.8%	件数	148	140	143	202	1,225	1,858	8.0 7.5 7.7 10.9 65.9
				割合	8.0%	7.5%	7.7%	10.9%	65.9%	100.0%	

平均点:「5.とてもあてはまる」を5点、「4.ややあてはまる」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりあてはまらない」を2点、「1.まったくあてはまらない」を1点として加重平均

AY2025高校2年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 2.DPコース以外 : 全体集計	回答者数	1,866
----	-----------------------	------	-------

質問6. 学期中の平日(月曜～金曜)放課後の学習時間(＝1日あたりの平均)と学習内容を教えてください。

※時間は10分や30分の単位でおおまかに回答してください。

※時間あるいは分が0の場合は、空欄ではなく、例のように()内に0を記入してください。

例)「およそ(0)時間(40)分」、「およそ(2)時間(0)分」など。

(1) 1日あたりの放課後の学習時間: およそ()時間()分

回答区分	件数	割合	0%	5%	10%	15%	20%	25%
0分	137	7.4%	7.4					
1分以上30分以下	304	16.5%	16.5					
31分以上60分以下	390	21.2%	21.2					
61分以上90分以下	233	12.7%	12.7					
91分以上120分以下	367	19.9%	19.9					
121分以上150分以下	122	6.6%	6.6					
151分以上180分以下	170	9.2%	9.2					
181分以上	118	6.4%	6.4					
合計	1,841	100.0%						

(2) 1日あたりの放課後の学習時間のうち、①～⑤の時間配分を教えてください。

①高校の授業の予習、復習、課題(問題を解くなど)

回答区分	件数	割合	0%	5%	10%	15%	20%	25%	30%	35%
0分	286	15.9%	15.9							
1分以上30分以下	513	28.5%	28.5							
31分以上60分以下	531	29.5%	29.5							
61分以上90分以下	170	9.4%	9.4							
91分以上120分以下	186	10.3%	10.3							
121分以上150分以下	47	2.6%	2.6							
151分以上180分以下	48	2.7%	2.7							
181分以上	18	1.0%	1.0							
合計	1,799	100.0%								

AY2025高校2年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 2.DPコース以外 : 全体集計	回答者数	1,866
----	-----------------------	------	-------

②塾・予備校の予習、復習、課題(問題を解くなど)

回答区分	件数	割合	0%	10%	20%	30%	40%	50%	60%	70%
0分	1,008	58.5%	58.5							
1分以上30分以下	216	12.5%	12.5							
31分以上60分以下	211	12.3%	12.3							
61分以上90分以下	103	6.0%	6.0							
91分以上120分以下	127	7.4%	7.4							
121分以上150分以下	16	0.9%	0.9							
151分以上180分以下	27	1.6%	1.6							
181分以上	14	0.8%	0.8							
合計	1,722	100.0%								

③調べ学習、探究・プロジェクト活動、課題論文

回答区分	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%
0分	1,234	75.8%	75.8				
1分以上30分以下	268	16.5%	16.5				
31分以上60分以下	94	5.8%	5.8				
61分以上90分以下	8	0.5%	0.5				
91分以上120分以下	11	0.7%	0.7				
121分以上150分以下	3	0.2%	0.2				
151分以上180分以下	7	0.4%	0.4				
181分以上	4	0.2%	0.2				
合計	1,629	100.0%					

AY2025高校2年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 2.DPコース以外 : 全体集計	回答者数	1,866
----	-----------------------	------	-------

④大学受験の準備(過去問を解く、小論文を書くなど)

回答区分	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
0分	1,329	82.2%	82.2					
1分以上30分以下	142	8.8%	8.8					
31分以上60分以下	73	4.5%	4.5					
61分以上90分以下	17	1.1%	1.1					
91分以上120分以下	33	2.0%	2.0					
121分以上150分以下	6	0.4%	0.4					
151分以上180分以下	9	0.6%	0.6					
181分以上	7	0.4%	0.4					
合計	1,616	100.0%						

⑤資格試験に向けた勉強(英検、TOEIC、漢検など)

回答区分	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%
0分	1,117	67.6%	67.6				
1分以上30分以下	373	22.6%	22.6				
31分以上60分以下	115	7.0%	7.0				
61分以上90分以下	19	1.2%	1.2				
91分以上120分以下	17	1.0%	1.0				
121分以上150分以下	2	0.1%	0.1				
151分以上180分以下	4	0.2%	0.2				
181分以上	5	0.3%	0.3				
合計	1,652	100.0%					

AY2025高校2年生対象 高校での学習・経験に関する調査

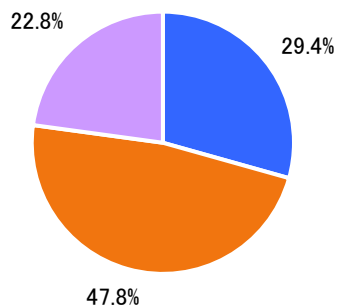
区分	学校ID 2.DPコース以外 : 全体集計	回答者数	1,866
----	-----------------------	------	-------

質問7. あなたの高校の成績と英語運用能力に関する資格について教えてください。

(1) あなたの現在の成績は、学年でどのくらいですか。

選択肢	件数	割合
1. 下のほう	541	29.4%
2. まんなか	881	47.8%
3. 上のほう	421	22.8%
合計	1,843	100.0%

■ 1. 下のほう ■ 2. まんなか ■ 3. 上のほう



(2) あなたが現在取得している英語運用能力に関する資格を教えてください。あてはまる番号に○をつけ、級やスコア等を記入してください。

選択肢	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%
1. 英検(実用英語技能検定)	1,351	72.4%	72.4				
2. TOEFL	44	2.4%	2.4				
3. TOEIC	40	2.1%	2.1				
4. IELTSアカデミック・モジュール	19	1.0%	1.0				
5. その他	49	2.6%	2.6				
6. 資格は取得していない	403	21.6%	21.6				
回答者数	1,866	-					

AY2025高校2年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 2.DPコース以外 : 全体集計	回答者数	1,866
----	-----------------------	------	-------

その他(種類)

選択肢	件数	割合	0%	5%	10%	15%	20%
1.Cambridge English Exam	1	2.0%	2.0				
2.IGCSE	0	0.0%					
3.TOEFL(ITP)	2	4.1%	4.1				
4.TOEFL(Junior)	2	4.1%	4.1				
5.Oxford Online Placement Test	0	0.0%					
6.GTEC	9	18.4%	18.4				
7.TOEIC Bridge	3	6.1%	6.1				
8.TOEFL Essential	0	0.0%					
9.Languae Cert	0	0.0%					
10.CASEC	0	0.0%					
回答者数	49	-					

AY2025高校2年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 2.DPコース以外 : 全体集計	回答者数	1,866
----	-----------------------	------	-------

質問8. あなたは現時点で、以下のことが、どのくらい身についていると思いますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

項目	平均	(⑤ 肯定回答率 + ④)	(① 否定回答率 + ②)	選択肢	5 ・ 身についている	4 ・ やや身についている	3 ・ どちらともいえない	2 ・ あまり身についていない	1 ・ 身についていない	合計	
											5.身についている 4.やや身についている 3.どちらともいえない 2.あまり身についていない 1.身についていない 0% 25% 50% 75% 100%
(1) 興味のある対象について深く学習し、理解する姿勢	4.00	79.1%	7.8%	件数 割合	565 30.5%	902 48.6%	243 13.1%	121 6.5%	24 1.3%	1,855 100.0%	30.5 48.6 13.1 6.5 1.3
(2) 人文・社会・自然科学を横断する幅広い知識	3.18	40.8%	27.9%	件数 割合	201 10.8%	557 30.0%	580 31.3%	405 21.8%	113 6.1%	1,856 100.0%	10.8 30.0 31.3 21.8 6.1
(3) 困難な課題に取り組む力	3.52	57.7%	17.6%	件数 割合	305 16.4%	766 41.2%	460 24.8%	250 13.5%	76 4.1%	1,857 100.0%	16.4 41.2 24.8 13.5 4.1
(4) 他者と意思疎通をはかり人間関係を構築する能力	3.90	72.7%	9.9%	件数 割合	540 29.1%	809 43.6%	323 17.4%	143 7.7%	41 2.2%	1,856 100.0%	29.1 43.6 17.4 7.7 2.2
(5) 自分の良心や社会の規範に沿って行動する力	4.04	79.3%	4.4%	件数 割合	554 29.9%	915 49.4%	302 16.3%	62 3.3%	19 1.0%	1,852 100.0%	29.9 49.4 16.3 3.3 1.0
(6) 人や社会によって違った考えや文化があることへの理解	4.21	85.2%	3.6%	件数 割合	749 40.4%	831 44.8%	209 11.3%	51 2.7%	15 0.8%	1,855 100.0%	40.4 44.8 11.3 2.7 0.8
(7) 他者を尊重し、ともに行動する力	4.17	83.5%	3.7%	件数 割合	699 37.6%	852 45.9%	238 12.8%	50 2.7%	18 1.0%	1,857 100.0%	37.6 45.9 12.8 2.7 1.0
(8) 予測不可能な事態に直面しても挑戦する姿勢	3.73	65.6%	12.3%	件数 割合	394 21.3%	820 44.3%	410 22.1%	192 10.4%	36 1.9%	1,852 100.0%	21.3 44.3 22.1 10.4 1.9
(9) 自分の生活と自然や社会とのつながりの理解	3.56	57.0%	14.7%	件数 割合	307 16.6%	749 40.4%	524 28.3%	226 12.2%	46 2.5%	1,852 100.0%	16.6 40.4 28.3 12.2 2.5
(10) 自分の行動を評価し、次に生かす力	3.74	65.8%	11.5%	件数 割合	405 21.9%	813 43.9%	420 22.7%	178 9.6%	35 1.9%	1,851 100.0%	21.9 43.9 22.7 9.6 1.9
(11) 問題が起きたときに解決する力	3.83	71.3%	8.9%	件数 割合	408 22.0%	914 49.3%	367 19.8%	138 7.4%	27 1.5%	1,854 100.0%	22.0 49.3 19.8 7.4 1.5
(12) 自ら率先して行動する力	3.60	58.9%	17.3%	件数 割合	397 21.4%	695 37.5%	442 23.8%	271 14.6%	50 2.7%	1,855 100.0%	21.4 37.5 23.8 14.6 2.7
(13) 自分自身で計画を立て、それに基づいて実行する力	3.33	49.5%	27.1%	件数 割合	317 17.1%	601 32.4%	432 23.3%	375 20.2%	128 6.9%	1,853 100.0%	17.1 32.4 23.3 20.2 6.9
(14) 情報を処理し、活用する力	3.69	63.4%	11.5%	件数 割合	347 18.7%	827 44.7%	464 25.1%	177 9.6%	36 1.9%	1,851 100.0%	18.7 44.7 25.1 9.6 1.9
(15) 国際的な事からを理解し、あつかう力	3.29	45.6%	26.8%	件数 割合	296 16.0%	548 29.6%	509 27.5%	393 21.3%	103 5.6%	1,849 100.0%	16.0 29.6 27.5 21.3 5.6

平均点:「5.身についている」を5点、「4.やや身についている」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまり身についていない」を2点、「1.身についていない」を1点として加重平均

AY2025高校2年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 2.DPコース以外 : 全体集計	回答者数	1,866
----	-----------------------	------	-------

質問8. あなたは現時点で、以下のことが、どのくらい身についていると思いますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

項目	平均	肯定回答率 (⑤+④)	否定回答率 (①+②)	選択肢	5 身についている	4 やや身についている	3 どちらともいえない	2 あまり身についていない	1 身についていない	合計	5.身についている 4.やや身についている 3.どちらともいえない 2.あまり身についていない 1.身についていない				
											0%	25%	50%	75%	100%
(16) チームで協力して行動する力	3.99	78.0%	8.0%	件数	576	868	259	106	42	1,851					
				割合	31.1%	46.9%	14.0%	5.7%	2.3%	100.0%					
(17) リーダーシップの能力	3.23	44.8%	29.1%	件数	282	545	483	383	154	1,847					
				割合	15.3%	29.5%	26.2%	20.7%	8.3%	100.0%					
(18) 地域社会の一員としての自覚	3.31	47.1%	23.9%	件数	257	617	537	328	116	1,855					
				割合	13.9%	33.3%	28.9%	17.7%	6.3%	100.0%					
(19) 日本社会の一員としての自覚	3.34	47.5%	22.0%	件数	261	619	567	301	106	1,854					
				割合	14.1%	33.4%	30.6%	16.2%	5.7%	100.0%					
(20) グローバルな社会の一員としての自覚	3.23	42.5%	26.3%	件数	248	534	573	352	131	1,838					
				割合	13.5%	29.1%	31.2%	19.2%	7.1%	100.0%					
(21) 「国語(現代文、古典等)」に関する能力	3.24	45.5%	27.2%	件数	211	633	506	392	112	1,854					
				割合	11.4%	34.1%	27.3%	21.1%	6.0%	100.0%					
(22) 「社会科(歴史、地理、公民等)」に関する能力	3.36	49.4%	22.2%	件数	245	671	527	324	87	1,854					
				割合	13.2%	36.2%	28.4%	17.5%	4.7%	100.0%					
(23) 「数学」に関する能力	3.28	48.1%	26.5%	件数	254	636	470	350	140	1,850					
				割合	13.7%	34.4%	25.4%	18.9%	7.6%	100.0%					
(24) 「理科(物理、化学、生物、地学等)」に関する能力	3.33	49.2%	23.0%	件数	244	667	515	318	109	1,853					
				割合	13.2%	36.0%	27.8%	17.2%	5.9%	100.0%					
(25) 「外国語(英語等)」に関する能力	3.46	54.8%	20.5%	件数	310	704	457	285	94	1,850					
				割合	16.8%	38.1%	24.7%	15.4%	5.1%	100.0%					
(26) その他の教科(芸術、体育、専門等)に関する能力	3.65	60.3%	12.8%	件数	378	737	499	181	55	1,850					
				割合	20.4%	39.8%	27.0%	9.8%	3.0%	100.0%					

平均点:「5.身についている」を5点、「4.やや身についている」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまり身についていない」を2点、「1.身についていない」を1点として加重平均

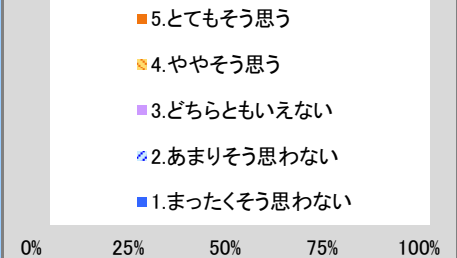
AY2025高校2年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 2.DPコース以外 : 全体集計	回答者数	1,866
----	-----------------------	------	-------

質問9. あなたは、あなたの現在や将来についてどのように考えていますか。

(1) 学校生活について

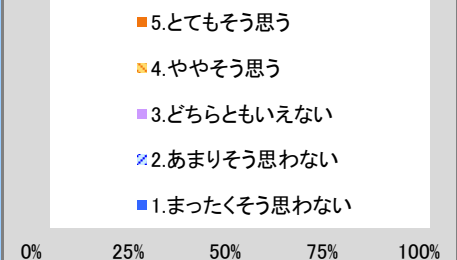
項目	平均	(肯定回答率) (⑤+④)	(否定回答率) (①+②)	選択肢	5 とても 思う	4 やや 思う	3 どちら とも いえない	2 あまり そう 思わない	1 まったく そう 思わない	合計	
① 学校の授業などを通じた今の自分の学習に満足している	2.89	34.8%	43.4%	件数	178	464	404	585	216	1,847	
				割合	9.6%	25.1%	21.9%	31.7%	11.7%	100.0%	
② これまでの学校での学習やさまざまな経験で得られた今の自分の能力に満足している	2.85	32.4%	44.7%	件数	167	432	421	605	221	1,846	
				割合	9.0%	23.4%	22.8%	32.8%	12.0%	100.0%	
③ 高校生活全体に満足している	3.72	64.2%	13.6%	件数	456	729	409	186	65	1,845	
				割合	24.7%	39.5%	22.2%	10.1%	3.5%	100.0%	



平均点:「5.とても思う」を5点、「4.やや思う」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりそう思わない」を2点、「1.まったくそう思わない」を1点として加重平均

(2) 将来について

項目	平均	(肯定回答率) (⑤+④)	(否定回答率) (①+②)	選択肢	5 とても 思う	4 やや 思う	3 どちら とも いえない	2 あまり そう 思わない	1 まったく そう 思わない	合計	
① 将来、学びたい分野について考えている	4.10	79.3%	8.7%	件数	782	680	221	107	54	1,844	
				割合	42.4%	36.9%	12.0%	5.8%	2.9%	100.0%	
② 将来、行きたい大学について考えている	4.08	79.4%	8.9%	件数	747	719	217	110	54	1,847	
				割合	40.4%	38.9%	11.7%	6.0%	2.9%	100.0%	
③ 将来、やりたい仕事について考えている	3.89	70.7%	14.5%	件数	691	613	272	179	89	1,844	
				割合	37.5%	33.2%	14.8%	9.7%	4.8%	100.0%	



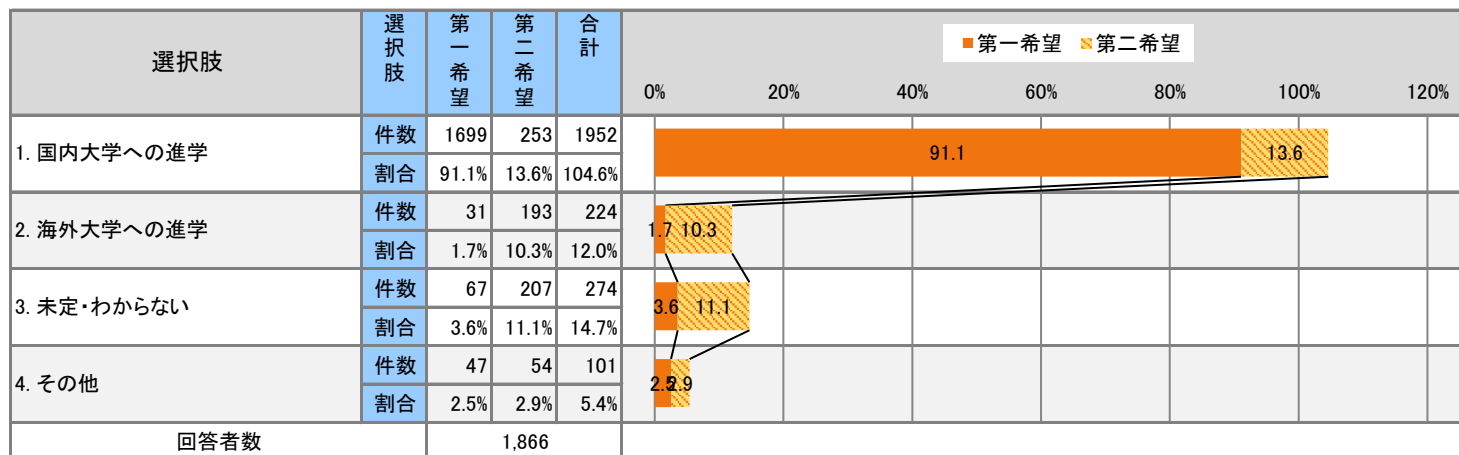
平均点:「5.とても思う」を5点、「4.やや思う」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりそう思わない」を2点、「1.まったくそう思わない」を1点として加重平均

AY2025高校2年生対象 高校での学習・経験に関する調査

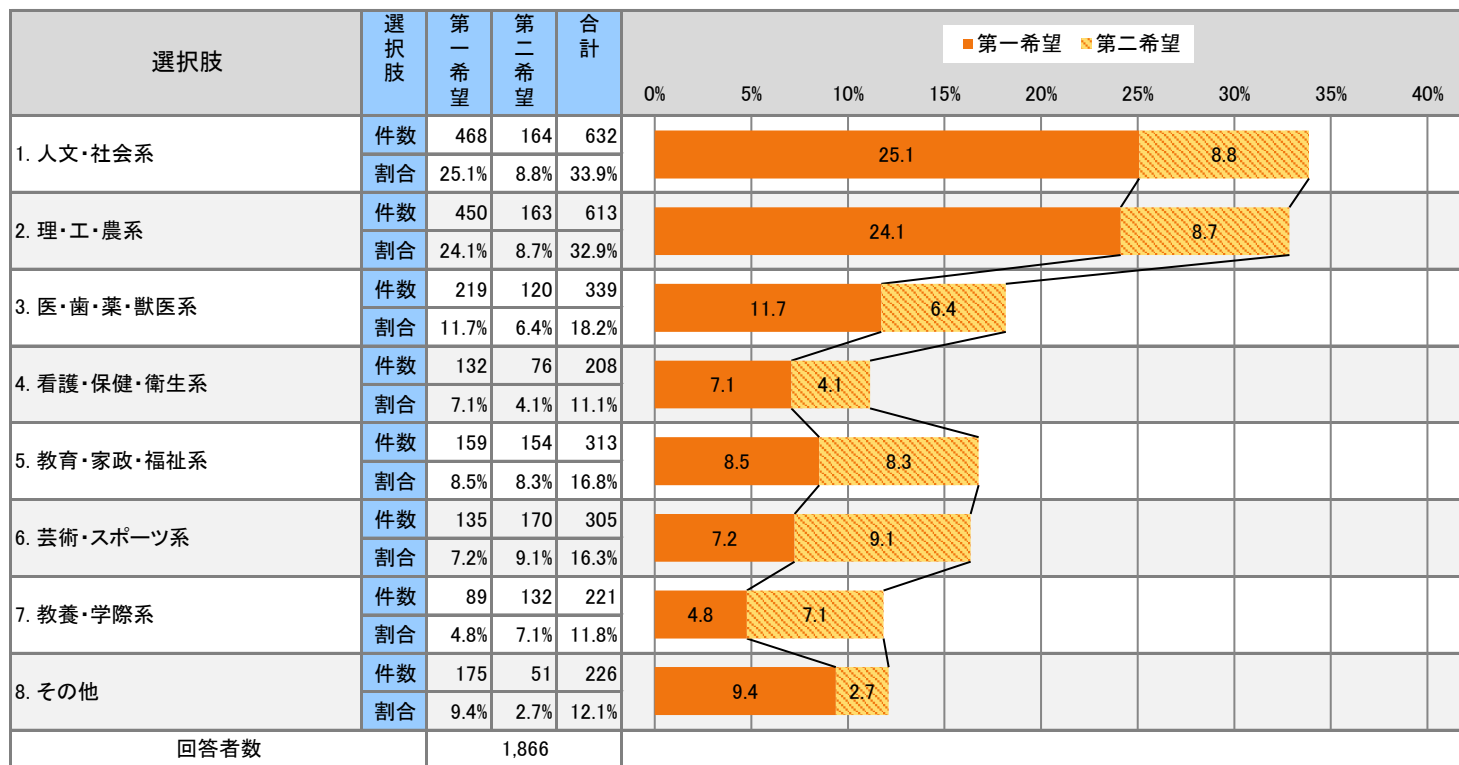
区分	学校ID 2.DPコース以外 : 全体集計	回答者数	1,866
----	-----------------------	------	-------

質問10. あなたの進路と将来の展望について教えてください。

(1) あなたは高校を卒業後、どのような進路を希望していますか。もっとも当てはまるものから番号を選択してください(第一希望だけでも可)。



(2) あなたはどの専門分野に進みたいですか。もっとも当てはまるものから番号を選択してください(第一希望だけでも可)。



AY2025高校2年生対象 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 2.DPコース以外 : 全体集計	回答者数	1,866
----	-----------------------	------	-------

質問11. あなたの周囲の環境についておたずねします。

項目	平均	肯定回答率 (⑤+④) (%)	否定回答率 (①+②) (%)	選択肢	5 とてもあてはまる	4 ややあてはまる	3 どちらともいえない	2 あまりあてはまらない	1 まったくあてはまらない	合計	
											5.とてもあてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない 0% 25% 50% 75% 100%
(1) 本やインターネット環境など家で学ぶ環境が十分にある	4.45	90.9%	2.2%	件数	1,040	637	128	30	10	1,845	56.4 34.5 6.9 1.6 0.5
				割合	56.4%	34.5%	6.9%	1.6%	0.5%	100.0%	
(2) 親や兄弟などの家族は普段からよく勉強を教えてくれる	2.63	31.6%	52.2%	件数	222	361	300	443	520	1,846	12.0 19.6 16.3 24.0 28.2
				割合	12.0%	19.6%	16.3%	24.0%	28.2%	100.0%	
(3) 普段から家族が本や新聞を読んでいるのをよく見る	2.98	41.7%	41.7%	件数	322	447	306	412	356	1,843	17.5 24.3 16.6 22.4 19.3
				割合	17.5%	24.3%	16.6%	22.4%	19.3%	100.0%	
(4) 親や保護者は自分の勉強のために必要なものを買ってくれる	4.51	91.7%	1.9%	件数	1,150	543	119	24	11	1,847	62.3 29.4 6.4 1.3 0.6
				割合	62.3%	29.4%	6.4%	1.3%	0.6%	100.0%	
(5) 勉強のためであれば親や保護者は積極的に援助してくれる	4.50	90.7%	2.1%	件数	1,141	533	132	27	12	1,845	61.8 28.9 7.2 1.5 0.7
				割合	61.8%	28.9%	7.2%	1.5%	0.7%	100.0%	
(6) 普段の生活の中でお金に困っていると感じることがある	2.23	18.6%	65.4%	件数	131	212	295	516	690	1,844	7.1 11.5 16.0 28.0 37.4
				割合	7.1%	11.5%	16.0%	28.0%	37.4%	100.0%	
(7) 親や保護者はあなたのやりたいことを応援してくれる	4.43	87.3%	2.5%	件数	1,085	525	187	31	16	1,844	58.8 28.5 10.1 1.7 0.9
				割合	58.8%	28.5%	10.1%	1.7%	0.9%	100.0%	
(8) 親や保護者は学校生活について相談に乗ってくれる	4.13	76.5%	7.5%	件数	859	551	293	88	51	1,842	46.6 29.9 15.9 4.8 2.8
				割合	46.6%	29.9%	15.9%	4.8%	2.8%	100.0%	
(9) 周りの同級生は授業に熱心に取り組んでいる	3.94	71.5%	7.6%	件数	582	736	385	110	31	1,844	31.6 39.9 20.9 6.0 1.7
				割合	31.6%	39.9%	20.9%	6.0%	1.7%	100.0%	
(10) 周りの同級生は普段からよく勉強を教えてくれる	3.93	72.6%	9.8%	件数	614	726	325	123	58	1,846	33.3 39.3 17.6 6.7 3.1
				割合	33.3%	39.3%	17.6%	6.7%	3.1%	100.0%	
(11) 家族とよく海外の経験や国際的な時事問題を話したりする	2.95	39.6%	41.2%	件数	297	433	354	396	363	1,843	16.1 23.5 19.2 21.5 19.7
				割合	16.1%	23.5%	19.2%	21.5%	19.7%	100.0%	
(12) 親や保護者が仕事などで英語などの外国語を使っている	2.15	23.0%	68.1%	件数	226	199	164	293	963	1,845	12.2 10.8 8.9 15.9 52.2
				割合	12.2%	10.8%	8.9%	15.9%	52.2%	100.0%	
(13) 友達とよく海外の話題(SNS、音楽など)を話したりする	3.23	49.5%	33.1%	件数	438	476	321	297	313	1,845	23.7 25.8 17.4 16.1 17.0
				割合	23.7%	25.8%	17.4%	16.1%	17.0%	100.0%	

平均点:「5.とてもあてはまる」を5点、「4.ややあてはまる」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりあてはまらない」を2点、「1.まったくあてはまらない」を1点として加重平均